連載専門誌

対人援助学マガジン

vol. 10 No. 4

第40号

March 2020

対人援助学会

NO. 40　MOKUJI

目次		002-003
ハチドリの器	見野　大介	004
執筆者@短信	執筆者全員	005-016
知的障害者の労働現場（40）	千葉　晃央	017-020
臨床社会学の方法（28）	中村　正	021-029
人を育てる会社の社長が、今考えていること	団　遊	030-032
カウンセリングのお作法（22）	中島　弘美	033-038
エア絵本-ビジュアル系子ども・家族の理解と支援（7）-	岡田　隆介	039-048
「続・家族理解入門」（10）	団　士郎	049-059
社会的養護の新展開　9	浦田　雅夫	060-061
幼稚園の現場から　40	鶴谷　主一	062-067
福祉系対人援助職養成の現場から40	西川　友理	068-075
境界あれこれ（15）	河岸　由里子	076-080
生殖医療と家族援助	荒木　晃子	081-083
高齢者とのドラマセラピー（9）	尾上　明代	084-091
きもちは言葉をさがしている（39）	水野　スウ	092-101
ノーサイド（33）	中村　周平	102-104
死について	竹中　尚文	105-107
周旋家日記	乾　明紀	108-112
男は痛い！（34）	國友　万裕	113-120
ひとこまマンガ	三嶋あゆみ	121
役場の対人援助論（32）	岡崎　正明	122-125
臨床のきれはし（7）	浅田　英輔	126-128
新版K式発達検査をめぐって　その30	大谷　多加志	129-131
講演会＆ライブな日々	古川　秀明	132-134
家族と家族幻想（1）	坂口　伊都	135-139
周辺からの記憶　―東日本大震災家族応援プロジェクト―（26）	村本　邦子	140-156
病児保育奮闘記	大石　仁美	157-158
対人支援　点描（21）	小林　茂	159-161
「あ！萌え」の構造　（11）	斎藤　清二	162-165
精神科医の思うこと（16）	松村　奈奈子	166-169
馬渡の眼	馬渡　徳子	170-171
東成区の昭和　やぶにらみ日記	柳　たかを	172-178
町家合宿 in 京都　（13）	山下　桂永子	179-182

先人の知恵から （27）	河岸　由里子	183-187
私の出会った人々	関谷　啓子	188-189
うたとかたりの対人援助学 （13）	鵜野　祐介	190-194
あぁ結婚 （13）	黒田　長宏	195-196
PBLの風と土（12）	山口　洋典	197-202
接骨院に心理学を入れてみた（11）	寺田　弘志	203-209
現代社会を『関係性』という観点から考える（11）	三浦　恵子	210-214
マイクロアグレッションと私たち（10）	朴　希沙	215-218
保育と社会福祉を漫画で学ぶ（9）	迫　共	219-221
「余地」―相談業務を楽しむ方法－（9）	杉江　太朗	222-225
統合失調症を患う母とともに生きる子ども（9）	松岡　園子	226-236
生体肝移植ドナーをめぐる物語（8）	一宮　茂子	237-251
「盲ろう者」として、自分らしく生きる（6）	中條　與子	252-254
こころ日記「ぼちぼち」 partⅡ	脇野　千惠	255-257
MSW という仕事～バイステックの 7 原則から再考する～（3）	高名　祐美	258-261
新連載　原田牧場 Note (1)	原田　希	262-263
新連載　みちくさ言語療法（1）	工藤　芳幸	264-268
トピックス 「対人援助学マガジン　執筆者の集い」	参加者	269-280
そうだ、猫に聞いてみよう（17）	小池　英梨子	281-287
編集後記	編集長＆編集員	288-289

ハチドリの器 23

見野 大介

Mino Daisuke

左上：蒼天釉平盃
左下：蒼天釉菓子鉢
右上：糧（花器）
右下：樫灰釉小どんぶり

第 40 号
執筆者
@短信

新型コロナまみれ号

原田　希　新連載

牛さんは暑いより寒い方が得意。牧草地（畑）の手入れなどがお休みの 2 月は、朝晩の搾乳と分娩の面倒をみるくらい。

時々の吹雪をやり過ごせば、いちばんのんびりしている季節です。酪農作業は誰でもできる仕事ですが、牛さんと足並みを合わせてライフワークとして休みなく永続的に続けるのが酪農家。

このマガジンの連載も酪農家と同じスタンスでやれたらな、と思っています。

原田牧場Note
p262～

工藤　芳幸　新連載

今号から執筆させてもらいます。大阪に転居してきて 8 年目。宮城県出身です。上京して大学を卒業後、「琵琶湖がある」ことぐらいしか知らなかった滋賀県で福祉施設に就職。その後、母校の大学院で学び、言語聴覚士（ST）として障害がある子どもの療育や医療の現場で働きました。現在は大学の教員として ST を目指す学生たちと関わりつつ、児童発達支援施設の非常勤 ST をしています。

この冬、仕事の合間でどうにか人生 2 本目の修士論文を書き上げました。苦戦しました。思うようには書けません。博士後期課程で引き続き研究を継続するつもりです。よろしくお願いいたします。

みちくさ言語療法（１）
ｐ２６４～

高名祐美

第 40 号が発刊される頃、私は 60 歳の誕生日を迎えています。還暦です。定年退職の節目でもあります。送別会にいくつか招待を受けていましたが、新型コロナウィルスの感染拡大にてすべて中止となりました。家族で計画していた還暦お祝いの宴も延期です。自分の人生の節目に、想像もしなかった事態がおきています。

また、昨年 12 月、夫の従弟が大阪市で孤独死していました。市営住宅で、親亡き後独居生活を送っていたのですが、新聞がたまっているということから発見につながったそうです。叔母を通じて、従弟の孤独死を知った夫は、そのお骨を引き取りに大阪へ向かいました。区役所の福祉課に問い合わせても要領をえず、その際親身になって対応してくれたのは、遺品処理の会社の担当者だったそうです。叔母に連絡があったのもその遺品処理の会社からでした。住居を整理するのに、遺品処理の許可をほしいとの連絡だったそうです。叔母は自分だけで判断できず、夫に相談してきたことで従弟の死がわかりました。孤独死が、自分の身近で起こるとはこれまた思いもしませんでした。

想像もしなかった事態が起きている中、3回目の原稿を書きました。重篤な不治の病にかかることも、想像もしなかった事態です。「こんな病気になるとは思わなかった。なぜ自分が・・・」。想像もしていなかったことに出会い、日々の暮らしに影響を受ける。その思いを受けとめることが、ソーシャルワーク援助にどんな意味をもつのか。バイステックの 7 原則「受容」を考えてみました。なかなか筆はすすみません。実践を振り返ることはやはり難しいと感じています。

MSWという仕事
P258～

大石仁美

朝ドラ、スカーレット
～やすらぎの刻～道へ

友人から陶器の美しい写真集を頂いた。開いて読み進むうちに 30 代の若さで夭折した女性陶芸家の生き様の記録集だった。大切に育ててきた自慢の娘を突然失ったご両親の嘆きはどんなだったろう。幼い頃から、陶芸家として独立するまでを、見守ってこられた年月を思うとき、言葉にならない悲しみを抱えてどうすればいいのか、せめて娘の作品を写真集として残し、多くの方に知ってもらうと同時に、自分たちもこの大切な宝物を胸に抱いて生きていくことで乗り越えたい、そう思ったに違いない。

折しも、今放送されている朝ドラは、女性陶芸家の話である。二つが重なって、素朴で温かい器の質感と色彩に思わず涙した。

話の中に、釉薬を作るのにストーブの灰を使うというくだりがある。それで遠い昔を思い出した。

今から 40 年近くも昔、奈良、三重、滋賀に囲まれた京都府唯一の村で保健師として働いていた時のこと。すぐ隣が信楽という集落に一人の老婆を訪ねた。各戸を訪ねての健康相談も私の仕事の一つだった。奥から出てきた老婆を見て驚いた。小柄な体に、にこやかな目が皺で埋もれてしまうほど、皺だらけの顔だった。深く分厚い皺。それは童話に出てくる魔法使いのようで、しばし見とれてしまったのを覚えている。どうも来客がみえていたようで、なにやら袋を受け取り、お金を置いて帰っていった。

婆さんが言うに、「隣の信楽からおくどさんの灰を買いに来るんや。焼き物に使うそうや」私はびっくりした。灰が売れる！８０％以上が森林のこの土地で、燃料の薪は山ほどある。けれど多くの家では近代化が進み、こんな山奥でも、台所で薪を使う家はほとんどなくなっていた。電気、ガスにお金を払う。婆さんはタダの薪を使い灰を売る。衝撃だった。心が震えた。帰り際に土間を見ると、立派なおくどさんがデーンと座っていた。それは黒光りして威厳が

あった。「やすらぎの刻～道」のドラマに一貫して流れている光景と同じだ。

私はこの二つのドラマの流れの中にしばし陶酔した。それは遠い世界、今やメルヘンだった。

病児保育奮闘記
p157～

岡田隆介

何かで読んだのだが、昭和の憧れは銀幕スターのような「手の届かなさ」、平成のそれは「会いに行ける身近さ」で、令和になって「自己肯定感・自分好き」系がそれにとってかわる勢いらしい。徐々に現実的になったのか、あるいは内向き傾向なのか。それはともかく、その記事から先日の研修会の最後に登壇した4人が思い浮かんだ。そのうち3人が口をそろえて「自分が大好き」と宣ったのだ。あの60代と70代の口の達者な年寄りは周回遅れか、それとも時代が追いついてきたか。ちなみに、その3人は東豊氏、団士郎氏、そして私だった・・。

＊

父娘のやりとり

私：今年も職場でバレンタイン・チョコもらってんけどな

娘：へぇ、けっこう大事にされとるんやね

私：そうかなとは思ったんやけど、ビニール袋に入ってて

娘：そりゃただのお土産やん。バレンタインは包装から凝るもん

私：ただな、きれいなメッセージカードが入ってて

娘：メッセージ付きはバレンタインやわ。ビニールの包装は照れ隠しやね

私：そう思ってんけどな、よう見たらブルボンやって

娘：そりゃバレンタインやないよ。ブルボンは三時のオヤツやし

私：でもな、ブルボンを溶かして手作りしてんで

娘：手作りときたらバレンタインやなぁ。手間は特別な人にしかかけへんもん

私：そやろ、感激してん。ただ、余った破片を寄せ集めた感があってな

娘：破片のバレンタインはきいたことないわ。そりゃ“棄てるのは惜しいチョコ”と違う？義理チョコ以下の、間違いないと思う

私：やっぱりそう思うか・・・

エア絵本 –ビジュアル系子ども・家族の理解と支援(4)–
p39～

一宮 茂子

【新型コロナウイルス感染症(COVID-19)】

中国湖北省武漢市が発生源とされている新型コロナウイルス感染症。2019 年 12 月ごろから次々感染して日本を含む 30 カ国に広がり、感染者 76,018 人、死亡者 2,245 人(2020.2.21 現在 内閣官房HP)。このため人が集まる場所では「正しい手の洗い方」「正しいマスクの着用」「咳エチケット」のチラシ掲示がなんと多いこと。アルコール消毒液があちこちに設置され、北野天満宮の鳥居の下にまで(こんなところで使う人いる？)。

ウイルス対策には遮断率試験(PFE)の基準をクリアしたマスクがよいのだとか。しかし今年の 1 月末には薬局やスーパーのマスクが売り切れ状態。フィギアスケートの羽生結弦選手は何年も前からマスク姿が多かったのですが、彼は感染予防のために特殊なマスクをしているのかしら？そういう私は光過敏症のため外出時にはPM2.5 対応の不織布マスクをしています。

生体肝移植ドナーをめぐる物語
P237～

松岡 園子

昨年の秋からジャズダンスとヒップホップを習っています。中学生の頃からダンスが大好きでしたが習いに行くことができず、家でテレビ番組を録画したビデオテープを何回も巻き戻しては、動きをまねて楽しんでいました。

今のダンス教室は練習が楽しくて、12 月には短い作品発表会にも出演しました。長年、ダンスをしてきた人たちのクラスのため、最初は体がついていきません。でも、次週にはできるようになっていたいとの思いから、家でも練習に熱が入ります。それを続けていると、先生から「練習の鬼」と言われるようになってしまいました。

現在、神戸で塾をしている教室の横に、ダンス用の部屋をつくる予定にしています。自分が楽しむためにダンスの先生に来ていただきたいなと思ったのがきっかけです。そうしていると、知人から健康体操の先生を紹介してもらうことになり、その部屋でシニア向けの筋力維持のための体操クラスを開講することになったりと、面白い流れになってくる予感……です。

統合失調症を患う母とともに生きる子ども
P226～

中條 與子

少し前、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)のニュースで騒がしくなる前、twitter でこんなツイートに気がつくことができた。ある市長が、就職氷河期世代を対象とした市の正規職員採用試験を実施するという内容だった。対象年齢を見ると、私も含まれている。われわれの世代を「就職氷河期世代」と呼ばれていることに、とても違和感があった。氷河期ってなんだ、就職氷河期世代ってなんだ、とひとりで怒った。

友人や知人に「就職氷河期世代」という言葉を知っているかとたずねると、知る人の方が多かった。むかし、「就職氷河期」という言葉があったと教えてくれた。記憶を遡ると、私が大学の頃、就職活動をしてもなかなか決まらないと周りに嘆くと「就職氷河期だから」という言葉が返ってきた。私もその言葉を理由に決まらないと言っていたことを思い出した。当事者だったのに、思い出すのに不思議と時間がかかった。

ネットで調べると、約一年前から「就職氷河期世代」を対象とした採用試験があること、労働局にも少ないけれど専用窓口があると知る。新聞にも時事記事として掲載されていた。有期雇用契約労働者の私としては、そんな情報を知らなかったことに焦りを感じた。契約期間の雇用満了が、そう遠くはないうちにくる。再びハローワー

クにお世話になる。

近くのハローワーク窓口に就職氷河期世代の求人の状況を知りたいと訊ねると、白杖を持つ私を見て、「障害者」と公表して働くかどうかを聞かれたので、公表する旨を伝えた。案内された障害者対象の専用窓口で、「就職氷河期世代」の求人についてお伺いした。そのハローワークは、来年度より、就職氷河期世代専門窓口が設けられるとのことだった。

来年度、「就職氷河期世代」専用窓口ができたとしても、「障害者」と両方の専用窓口を使うことはできず、一つしか選択できないようだ。私の場合は、障害者としての生きづらさを抱えているので、「障害者」専用窓口のほうが適していると助言をいただいた。専用窓口は、17 時 15 分で閉まる。土曜日も窓口が開いているので、土曜日も相談できるかどうか訊ねると、専用窓口に関しての相談は難しいとの事だった。働きながら相談するためには、仕事を休む必要がありそうだ。

幸いに、私の雇用期間満了は少し先なので、興味を持ってしまった「就職氷河期世代」の専用窓口にも、時間を見つけて足を運びたいと思う。「就職氷河期世代」と「障害者雇用」と併せた求人はあるのかどうかも気になるところだ。

「盲ろう者」として自分らしく生きる）
P252～

杉江　太朗

年末に、滋賀県高島市マキノ町に行った。対人援助学マガジンの合宿である。遠くから参加される方もいたが、私はまだ近いところに住んでいた方である。対人援助学マガジンは拝読したけれど、顔は知らないという方と出会い、繋がる良い体験になった。この仕事は人との繋がりが財産である。自身の力は些細ではあるが、それぞれの知恵が集まることで、大きな力となる。私自身、この仕事をして人と繋がることで、「わからないこと」を「わからないから教えて」と言えるようになった。これは自分には「わからないこと」がたくさんあり、それを知らないことが恥ずかしいことではないと認識するようになったからである。一方で、自分の専門の分野については、それなりに聞かれたことには答えられると自負しているし、答えられるように努力をしている。わからないことをわからないと言えるようになって生きやすくなった。世の中には知らないことがたくさん。それぞれの分野の専門家に触れることは本当に楽しい。対人援助学マガジンの利点である。

「余地」−相談業務を楽しむ方法−
P222～

迫　共

地元の保育園で園児さんが保育中に亡くなる事故がありました。かつて所属していた園長会で何度かお会いした、顔見知りの園長さんの園です。「ああ、あそこで…」としばし呆然としてしまいました。

保育をはじめ、対人援助の仕事には事故やトラブルがつきものです。ゼロにしたくても起こってしまうのが事故やトラブルです。そして、自分ではできないことが多い方を対象にしていると、小さなミスが生命の危機に直結してしまいます。

卒園・卒業の時期でもあります。大過なく巣立ちの時を迎える人たちを見るとき、心から安堵します。さらに次のステージでの無事を祈る心持ちになります。

保育と社会福祉を漫画で学ぶ
P219～

朴　希沙（Kisa　Paku）

今回も、また３ヶ月に１回の執筆がやってきました。それにしてもこの頻度は、私にとっては丁度いい。期間があきすぎもせず、またつまりすぎてもいないので、丁度いい緊張感を保つことができます。

締め切り近くになると、「今回は何を書こう？」と悩みますが、いざパソコンの前に座って唸っていると、最後にはきちんと文章が出てきます。今回は特に納得のいくものが書けました。やはりなんでもやっつけ仕事ではなく、丁寧に時間をかけてやることが大切ですね、改めて感じました。ぜひ読んでいただけると嬉しいです。

マイクロアグレッションと私たち
P215～

浅田　英輔

令和 2 年の冬は、雪が少ない。生活する分にはとても助かるのだが、結構よくない影響もあるようだ。

・除雪による稼ぎがない。土建屋さんは、冬季は除雪が稼ぎになる。大きいところでは億単位で収入が減っているとのこと。
・スキー場がヤバい。当然、収入にならない。
・ガソリンスタンドがヤバい。除雪車の燃費はハンパないらしい。
・ホームセンターがヤバい。冬に売れるはずの除雪道具が売れないらしい。
・物流がヤバい。そういう冬の道具を運ぶ仕事がないらしい。
・青森県民がヤバい。雪が降ると「もうやめでけーじゃー」と文句を言うくせに、「全然ないとさみしいな」とかほざいたりする。
・浅田のクルマがヤバい。雪が降った日は少ないのに、ピンポイントで滑って事故ったりする。初めて「バッテリーあがり」も体験する。なんで今年に限って？？

臨床のきれはし
P126～

三浦　恵子

この号が出る頃には9回目の3．11が巡ってくる。25年前の阪神淡路大震災の時は専門職となって1年目だった。甚大な被害を出した地域を担当していた。自分にもっとスキルや経験があればと何度思ったか知れない。

3．11当時は東京に単身赴任中だったが，家族の介護の関係で震災の週の最初から短期介護休暇を取得し，仙台で過ごしていた。ただ，年度末でもあり，家庭の状況がある程度落ち着いたのを見極めて，震災前日から新幹線通勤で職場復帰した。3月5日から導入された「はやぶさ」で東京～仙台間を90分で移動できるようになったことが背中を押した。

3．11当日，勤務先で配偶者の本家があるエリアを津波が飲み込んでいく映像を

茫然としながら見ていた自分がいた。
私も，仙台で同じ仕事をしている配偶者も，やるべき業務は山積していた。
阪神淡路大震災のような大都市直下型地震とは異なる
広域災害ではあったが，大規模災害発生時の初動の大切さは骨身に刻んでいた。
まずは自分が置かれている状況でなすべきことをすべきだと考えた。
多くのことがあったが，たくさんの方々に支えられて今があると感じている。

更生保護護官署職員

（認定社会福祉士・認定精神保健福祉士）

現代社会を『関係性』という観点から考える
P210～

山口洋典

新型肺炎の世界的な発症により、各地で多くの混乱が招かれた 2020 年の冬、2018 年 10 月にふとしたことで骨折したことで左足首に入れていた 4 本のスクリューを取り出す手術を経験しました。人生 2 度目の全身麻酔による手術でした。私が専門とする社会心理学でも規範や身体といった日常用語を専門用語として用いるために、時折会話が混乱することがあるものの、この 1 年あまり、整形外科医が用いてきた「壊死」という言葉が、私の抱いていた印象（最早、再生しないということ）とは異なるもの（血管を通じて繊維性の骨をつくっていき、徐々に層板骨へと置換されていく過程の初期状態）だと、今さらながら知った次第です。

転じて、木曜日の終業時間に近いところで内閣総理大臣がウィルスによる感染予防に関わる指示ならぬ要請を発表し、土曜日の夜の記者会見を行ってもなお市中から紙製品が消える状態が続くという、緊急時の言葉のすれ違いを現在進行形で体感している気がしています。

（写真、骨折から 1 年の際の CT スキャンの画像と抜いた 4 本のチタン製スクリュー）

PBLの風と土
P197～

関谷　啓子

着物が好きだ。新しい着物でなく古着屋の着物が良い。

仕事を辞めてしばらくは毎日着物で過ごした。古着なので当然サイズが合わない。丈直しなどを専門の方にお願いしたのではキリがないので今度は和裁を習いに行った。週に一回、一日中チクチクと針を動かす時間が楽しかった。驚いたのは若い女の人たちが（時々若い男の人も）プロを目指して修行をしていることであった。

ワンフロアーを区切って、それぞれが自分の縫い物に励んだが、修行中の人たちのコーナーからは物音一つせず時々コテを温めている匂いが立ってきた。私たち（ミセスグループと呼ばれていた）はひっきりなしに先生を呼ぶ声が絶えず、間には昨夜のおかずの話やら身体の不調の自慢話？が絶えなかった。

ある時、ふっと静かな時間があった。町家の二階の教室は暖かいけれどシーンとして気持ち良かった。

通りを歩く下駄の音が聞こえる。下駄を履いた男の人が近づいてくる。着物を着ているのかなあ。この季節ならばお付いの羽織を着ているのかな？それともトンビ？と思いつつ針を動かしていると教室も前を通り過ぎて行った。

単衣縫う町家の二階に下駄の音おとこの歩幅で近づきて去る

しばらくして、一人が「今、男の人が通らはったなあ。」と誰ともなしに呟いた。

そんなことがあったのを今朝、目覚めてフッと思い出した。

古い羽織をリフォームしようと解いていたら、襟の部分から綺麗に折り畳まれた昔のお金が出てきた事も。

記憶って不思議。昔の記憶が泡みたいに浮かんでくることがあるのだなあ。

私の出会った人々
P188～

黒田　長宏

5000円くらいのものだが、足湯器というのか、フットバスというのか、そういう代物を購入し、休日の午前中にちょっと浸かっている。

結婚できないストレスからか、低体温になってしまっていて、ショウガ入りの飴なども使用しているのだが、日向ぼっこや風呂だと上がるようだ。かなり体温計を使用している。例のフットバスだが、泡が出て、保温機能もあるが、それがなければバケツと同じ気もするが、保温機能が若干パワーが要るので、大きいほうの太陽光パネルから蓄電できるリチウムイオン電池で稼働させると蓄電池のメモリが急激に下がっていく。効果はどうあれ、気持ち良いことは気持ち良いので、勤務先は病院なので仕方ないが、インフルエンザや新型コロナウイルスなどの怖さもあり、なかなかスーパー銭湯もおっくうになり、足だけ自宅で温めるので充分に気持ちがなってきた。年齢のせいだろうか。なかなかパートナーが見つけられないからだろうか。ここ数年私は慢性疲労状態である。

松岡修造や織田裕二や江口洋介や沢村一樹や坂上忍は同い年なのに疲れているように見えないのが不思議だ。いまだに現役のサッカーの三浦カズなどは学年が一つ上だったりするが。坂上は若干加齢を言っていたのを聞いたことはあったか。同い年の著名人たちも変な人たちが多いなという気はする。

https://konnankyuujotai.jimdofree.com/

あぁ結婚
P195～

山下桂永子

教育現場（またはそれに近いところ）で働く身としては、この数日（2020 年 2 月末）は激動の日々です。今このタイミングで小中学校幼稚園が閉鎖になるというのは、どういうことなのか。

思えば 9 年前の 3 月末に、私は宮城県の小学校にいました。小学校は避難所になっていて、卒業式に出られなかった子や進学先の高校が津波で流されてしまった子など学校に通えなくなった子どもたちがたくさんいました。状況は全く違えど、地域の学校の機能が失われるということはどういうことなのか。驚くことばかりだったように思います。

この 3 月は、驚くことばかりの中、9 年前とたぶん同じように、今、対人援助職として自分にできることは何なのかということを問い続ける日々になりそうです。

内容とは直接関連しませんが、読んでいただければ幸いです。

町家合宿 in 京都
p179～

尾上明代

依存症サポート施設で、来月の大きなイベントのために、利用者さんたちと創作ドラマに取り組んで来た。AA で採用している「12のステップ」を皆の体験をもとにドラマ化し、200人以上の観客に見せるため、いつものセラピーセッションとは違うモードで練習をしていた。ところが、新型肺炎の影響で中止になったという連絡が来た。最近の状況では想定内であったが、やはり残念である。一生懸命に練習に励んできた方々には、決して無駄ではなかったことをスタッフから伝えてもらった。安心できるグループ内で演じることには、多くの効用があるが、そのドラマを多くの観客に舞台上で見せるための練習には、別の良い効果がたくさんあった。大きな声ではっきり伝わるように話す、繰り返し演じる中で12のステップの内容をかみしめる、自分たちの実体験をこれから挑戦する人たちに役立ててもらう思いを新たにする、などである。ここまで頑張ってくれた参加者とスタッフに感謝しつつ、状況が早く落ち着いてそのイベントが開催される日があるように願っている。

高齢者とのドラマセラピー
p84～

松村奈奈子

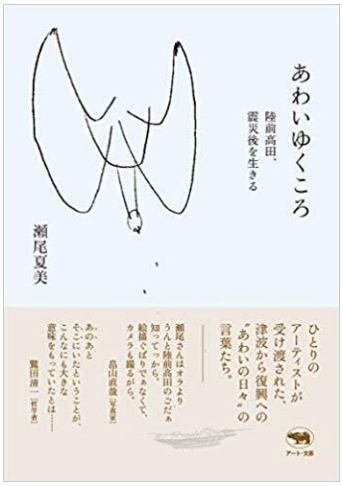
新型コロナウィルスの影響で、2月の京都の街は少し静か。先日乗ったタクシーの運転手さんは「観光バスが減って、5年前の京都やなー」なんて言います。確かに、渋滞は減って、急に乱立したホテルは空室だらけ。

そーんな中、旦那のたってのリクエストで乳頭温泉郷めぐりに。暖冬ですが、さすが豪雪地域、2月には2メートルをはるかに超す雪が積もっていました。雪を眺めながらの温泉。うーん、よかったです。名湯「鶴の湯」では混浴露天風呂にも挑戦しちゃいました。そんな秋田の秘境ではありますが、温泉は外国人も含めて人でいっぱい。ホテルの人は「平日を含めて満室が続いています」と言います。やるな一秘湯。観光地のあり方をしみじみ考えてしまいました。

精神科医の思うこと
P166～

鵜野祐介

今回は瀬尾さんの著書の紹介です。難しい言葉を使わないで奥深い内容を見事に表現した若きアーティストに脱帽です。ぜひ本書を手に取ってお読みください。



うたとかたりの対人援助学
P190～

柳　たかを

我が映画の楽しみ方

僕はヒトコママンガ家である。そもそも世の中の人はマンガ家はストーリーマンガ(コミック作家)を描く人という認識の人が多いのではないだろうか。

数年前まで私立の某芸大でマンガコースの教員を 10 年間ほど勤めたが、私を招聘してくれた教授に言われたのは、「学生にヒトコママンガを教える必要ない」だった。

日本のマンガ発展史を振り返ると、戦後手塚治虫(1989 年没)という大天才マンガ家が登場して以降、キャラクター重視の映画のような長編マンガがマンガ文化の主流になったが、手塚登場以前は、印刷機械のハード的な限界とコストの問題もあってせいぜい数ページの物語マンガに限定されていた。

そのころ社会的に認知されていたのは、朝日や読売など主流紙に掲載される風刺マンガ家でそれはヒトコママンガか 4 コママンガのようなコママンガを得意とする人たちだった。

僕がマンガに興味を持ったのは、父親が画家だったのと子供の時に近所に貸本マンガ屋があり、月刊誌の子供向けマンガが矢継ぎ早に創刊された時期だったことと無縁ではない。そうした洪水のように出版されるマンガ達の中でひときわ輝いていたのが手塚マンガだった。

手塚マンガの特長は、ヒゲオヤジやランプといった主人公とからむ個性的なキャラクターシステムを構築したことで、他の手塚作品にも有名映画スターのように繰り返し登場させたところだ。そんな映画のようなキャラクター重視のマンガに親しんだせいか、僕の映画観賞の比重は、作品の登場人物の気持ちに入りこめるかどうかが大事なポイントになっている。

最近のアカデミー賞受賞作「パラサイト・半地下生活の家族」、作品の後半で金持ち家族が休暇旅行を突然中止し帰宅する。車中から婦人が電話で「帰るまでに私のためにジャージャー麺を作っておいて」と命令する。観てる観客席の僕まで焦る場面だが、ニセ家政婦のパラサイト主婦は一言「わかりました、ところで奥様あと何分ぐらいで到着なさいますか？」

「うーん 8 分かな」

この時、「ジャージャー麺？ 名前は聞いたことあるけど食べた記憶がないなぁ」という疑問符が目の前に湧いた。映画を見終わったあともどんどんジャージャー麺が気になりだした。

帰宅後、レシピを参考にとりあえず“ような麺”を作成して試食、しかし映画で見て感じた“味・匂い“とはまったく違うと思った。

東成区の昭和　思い出ほろほろメモ
P172～

齋藤　清二

私事になりますが、今年の 3 月いっぱいをもって、立命館大学総合心理学部特別招聘教授を退職致します。といっても、大学側のご配慮をいただき、4 月以降も、客員教員として総合心理学部と人間科学研究科での講義を担当します。ちょうど 5

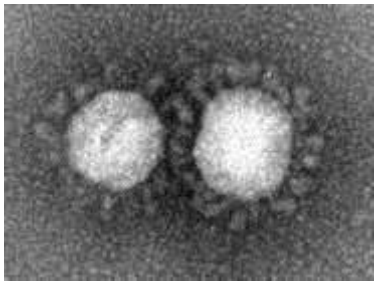
年前に応用人間科学研究科に赴任以来、総合心理学部の開講、人間科学研究科の創設にお付き合いすることができ、学部、大学院ともに第 1 期生の卒業を迎えることができて、ひとつの大きな節目だと感じています。残念ながら、新型コロナウイルス感染症の勃発で、卒業式も謝恩会も中止ということになりましたが、これからも人生は続いていくということで、前向きにとらえたいと思っています。

「あ！萌え」の構造
p162～

小林茂

前回のときは、締め切り日前後にインフルエンザにかかり期日に間に合わない事態となった。発熱と咳きで身動きが取れなかったこともあったが、熱が下がったあとも職場への出入りが禁止となり、強制的に原稿が仕上げられない状況になった。借りているマンションのなか「なんとかしたい」という気持ちでいっぱいであった。おまけに職場に復帰後は、1 週間分の休講の事後処理に追われしんどかった。締め切り日よりも早く仕上げて不測の事態にも対処できるようにしたい。しかし、時間の余裕がない。どうも、大学の教員といっても学科によって、こんなに時間に余裕がないのかと気づかされた。

新型コロナウイルスの話題、アメリカのインフルエンザの死者数の増大（こちらは例年のようであるが）の話題と、はやり病はなんとも恐ろしい。



＜温泉紹介＞

☆上砂川岳温泉パンケの湯（北海道空知郡上砂川町字西山 43 番 4）

建物から 2 ㎞奥へ進んだ山の中から流れ出る源泉は、豊かな自然の中で年月をかけて力を蓄え癒しと活力を与えてくれます。「美人の湯」と言われる自慢の湯だそうです。

料金：大人500円（中学生以上）

温泉質：ナトリウム－炭酸水素塩冷鉱泉（中性低張性冷鉱泉）

泉温　加温あり・加水なし

浴用適応症：神経痛、筋肉痛、関節痛、五十肩、運動麻痺、関節のこわばり、うちみ、くじき、冷え性、疲労回復、慢性消化器病痔疾、病後回復期、健康増進、きりきず、やけど、慢性皮膚病

営業：平日:午前 10 時～午後 10 時
（最終入館　午後 9 時 30 分）
土日祝日:午前 9 時～午後 10 時
（最終入館　午後 9 時 30 分）

対人支援　点描
P159～

中島弘美

阪神淡路大震災から25 年が経過しました。東日本大震災のことは知っていても、兵庫県で大きな地震があったことを知らない人が多くいます。時間の経過とともに、今後その数が増加すると感じると、いますぐ知ってほしいという思いが大きくなりました。

そこで「ご両親やおじいさんおばあさん、親戚の人などに地震があった 1 月 17 日、どうだった？」と、若い人たちから尋ねてほしい、そのとき生まれていなかったあなたたちのほうから話を聞かせてと声をかけてほしいと、話しました。

すると、後日、うちの家では･･･だった、両親は･･･と、学生さんたちから震災エピソードが届きました。

当日何があったのか、そのあとどうなったのか、「身の回りにある阪神淡路大震災ものがたり」は、家族が受け継いでいく大切な歴史のひとつだと思います。

カウンセリングのお作法
P33～

団遊

仕事で、とある家族が家を建てていく様子を追っている。土地探しから始めて、依頼する設計事務所や工務店を決め、打ち合わせを重ね、着工式、地鎮祭を経て 20 年 2 月に上棟式を行った。大きな家ではないが、その分ご主人と奥さんの想いやこだわりが、細かい箇所にまで反映された図面になった。ぼくも立ち会った上棟式。カットされたヒノキ材を、数多くの大工たちがまるでプラモデルかのように組み上げていく。建築の現場では、今も「いろはにほへと」で合番を振るのが通例。2 時間もすれば、何もなかった更地に骨組みだけだが、二階建ての家が建った。「これが大黒柱です」などと職人から説明を受けるご主人は、早くも満足そうであった。ぼくは今、賃貸住まいで、家を建てるつもりがない。それなりに考えがあってそうしているのだが、この家が建つ頃には、その信念が揺らいでいるのではないかと、ちょっと心配になるくらい、家づくりは興味深い。

人を育てる会社の社長が、
今考えていること
P30～

村本邦子

コロナウィルス騒動のなか、オーストラリアに来ている。カンタスに乗る際、2 週間以内の中国渡航やダイヤモンドプリンセスに乗っていなかったか確認され、パスポートの中もチェックされたが、その後は、まったくスムーズだった。こちらでも、新聞やテレビで報じられ、ホテルでも、コロナウィルスに関する最新情報や注意事項を書いた紙をもらった。街中でマスク姿の人は皆無だが、タクシー運転手とは多少話す。オーストラリアは早い時期に中国からの飛行機を止めたので、中国人観光客の姿がすっかりなくなり、経済的には大打撃だそうだ。ここにいると直接的な影響は薄いが、ネットを通じて日々入ってくるメールや SNS に気が重くなってくる。楽しみにしていた催しも中止、少人数だから決行するつもりでいた院生たちとの合宿も取りやめるようメールがきた。もちろん、みんなの健康あってのことなのでやむを得ない。人類の歴史において、災害同様、疫病も繰り返されてきたものだ。科学の進歩って何なんだろうと思ってしまうが、どうしたって人類は地球というひとつの船に乗っている運命共同体なのだ。いや、むしろ、科学技術の進歩とともに、その傾向は加速したと言える。経済優先の弱点も顕わになった。さまざまな背景を持つさまざまな国のさまざまな人々が思いやりいたわりあって生きていくことを考えるようシフトすべき時だろう。

周辺からの記憶　―東日本大震災

家族応援プロジェクトー
P140～

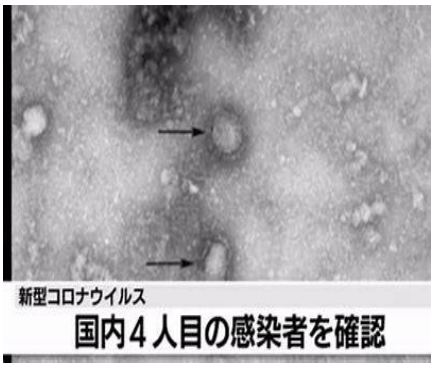
國友万裕

韓国映画『パラサイト　半地下の家族』がアカデミー賞作品賞を受賞しました。英語以外の映画では史上初の快挙だそうです。この受賞にケチをつけるわけではないのですが、史上初と言われてしまうと（？）と思ってしまいます。他にも傑作はたくさんありましたから。で、映画好きの友人にそのことを話したところ、今年のアカデミー賞は候補者が白人に偏り過ぎだったため、その調整の意味もあって韓国映画に作品賞がいったのだろうとのことでした。なるほど。この頃は多様性を重んじることが、ハリウッドでも大きなテーマとなってきていることがうかがえます。

日本でも、ここ数年で急速にＬＧＢＴへの理解は深まっているように思えますし、発達障害や学習障害の人への配慮もされるようになってきました。伝統的な規範に個人をはめ込むのではなく、多様な個々の個性を認めるという流れになってきたようには思います。しかし、そうは言っても、あまり世の中、居心地が良くなったと感じないのはなぜなのでしょうか。僕はまだ勉強不足で、社会や政治の上層部のことがわからないのですが、なんとなく理不尽な空気を感じます。

僕は、学歴マイノリティで、女性恐怖症で、男性ジェンダーへの違和感、少年時代に受けた虐待体験のトラウマを抱いて生きていますが、そういう人への理解はまだまだ足りない。せめて、援助職の人ぐらいは理解しておいてもらわないと困るのだけど、まだまだ理解できる人は少ない。対人援助学会はカウンセラーの人が多いから、こんなことを言うと失礼だけど、「誰でも理解できるような悩みだったらカウンセラーなんていらないんだよ！　もっと勉強しろ！」と言いたくなることがたびたびです。おそらく、規範に合わせることに困難を感じずに生きてきた人たちは、どうしても社会の枠に合わせられない人の苦悩がわかっていません。とりわけ、ジェンダーに関してはわからない人が大半です。真剣に悩んでいる人に対して、「そういうのが好きな人もいるじゃないですか」と返すのは一番してはいけないことです。不登校の子に対して、「学校が好きな子もいるじゃないの」と言ったら、余計にその子を追い詰める。蕎麦アレルギーの人に対して、「蕎麦が好物な人もいるじゃないですか」と言って、無理矢理食べさせたら大変なことになります。

この原稿がアップされる頃には 56 歳。僕の人生もあと20年から30年だと思うから、その間にこれまでの人生のわだか



まりに決着をつけたいですけどね。まだ今のところ悶々としています。

この 3 月、友人がこれまでの下宿を引き払って実家に帰るので、要らなくなった家具を全てくれることになりました。僕の部屋は大きく模様替えされることになります。それに応じて、心も模様替えしたいです！　春ですものね笑。

男は痛い！
P113～

古川秀明

オープンダイアローグは家族療法との親和性が高いので、とてもスムーズに実施できます。対話と歌は似た所がありますね。シンフォニーでもなく、ハーモニーでもなく、ポリフォニーがいいですね。

講演会＆ライブな日々
P132～

西川友理

京都西山短期大学で、保育士・幼稚園教諭の養成をしています。それから、支援者に向けた当事者研究会や勉強会を定期的に開催しています。

京都西山短期大学で保育士養成をしています。その他社会福祉士養成などにもちょっと携わらせていただいています。

この原稿の締め切りは 2 月 25 日。2 月中旬～3 月中頃までに、大小合わせて 5 つのイベントの事務局やら主催やらいっちょ噛みやらをしていて、ここしばらく、それらのイベントの新型コロナウィルス対策に奔走しています。

話し合いを通じて、色んな判断や確認、思い切りや勇気を出さないといけない経験をさせていただいている真っ最中です。その経験の中で、物事を判断する際に大事なのが、例えば「みんな中止してるから中止する」ではなくて、「中止する必要があるから中止する」「実施する必要があるから実施する」「どの部分を実施して、何をあきらめる」というのを、イベントの個別性や実施する内容の意味に照らし合わせてぎゅっと考え、そして関係者同士きちんと話し合いをする、という事だなぁと今まさに実感しています。当たり前の事なのですが。

福祉系対人援助職養成の現場から
p68～

坂口伊都

また春がやってきます。我が家の娘もお陰様で第一志望に合格できて、一人暮らしをします。娘は一人暮らしをする気満々なのですが、いざ自分の部屋が決まると帰りにはホームショック状態。早すぎるだろうと笑いながらも、同じような気持ちになる母の私でした。我が家には犬 2 匹と猫 2 匹がいるので、あまり寂しさを感じなくても済んでいるように思います。でも、猫は娘を母猫だと思っているので、部屋の家具も減って娘がいないと探しまくると思います。そうするとモノを下に落としたり、布団に粗相をしたりするだろうと思います。その対応にしばらく追われそうです。

周りからも寂しくなるねぇと言われますが、それよりもお金の方が頭痛いです。受験料に入学金、授業料、引っ越しと湯水のようにお金が消えていくとはこういう事を言うのですね。寂しさ通り越して恐ろしいです。

家族と家族幻想
P135～

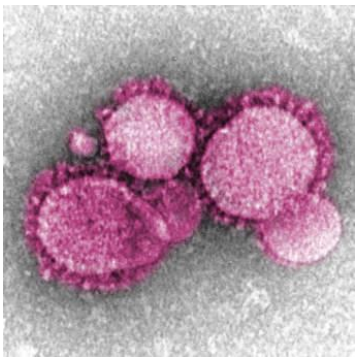
河岸由里子（臨床心理士）

北海道　かうんせりんぐるうむ　かかし　主宰

【あ～コロナウィルス】今年は東京オリンピック。日本全体が年明けとともに、オリンピックに向けてあれこれ盛り上がってきたところで、コロナウィルスの問題が。一人また一人と北海道内でも感染者が増え

てくる。いつもインフルエンザが流行るきっかけとなる札幌雪祭り。結局そこで感染した方がいた。ニュースでコロナウィルスの話ばかりされるので、不安障害のクライアントから電話の嵐。「今日チカホ（札幌の地下道のこと）に行ったら、中国人とすれ違った。感染したのでは？」とか「咳が出る、コロナか？」「マスクがなくてあちこち探しまくったらしんどくなった。感染したんだろうか？」等々。突っ込みどころ満載の電話だが本人はいたって真面目。研修会の講師を頼まれていたのも、急遽中止になった。2 月 3 月で頼まれている講演・研修の講師の仕事が 11 件あったがその一つ目が中止になった。これから幾つ中止になるやら。4 月初めに参加を予定して受講料も振り込み済みの研修も、海外の講師の先生が来日を中止されたため中止になった。計画している研修会をどうするか？悩みどころ。

巷では、電車の中ではどこに座ればよいとか、マスクの効果やアルコール消毒の効果とか、様々な情報が流れている。何が正しくて何が間違っているのか、正直わからない人が多いだろう。そんな中、中国人というだけでばい菌扱いといういじめも起こった。



そもそもどうして新型ウィルスが発生するのか？世界中にウィルスは三万種くらいあるとか。その内人間や哺乳類に感染するものが約 650 種。しかも一種に幾つものタイプがあるそうだ。650 種の中の一つとしてコロナウィルスがある。以前流行した SARS もコロナウィルスの一つという。なぜコロナなのかというと、球体の周りに太陽のコロナのような構造がくっついているからだそうだ。しかもコロナウィルスは変異しやすい。見えないウィルスと戦うのは難しい。予防と言っても見えないから予防できているのかもはっきりしない。一体いつまでこの騒ぎが続くのか？私自身は余り罹る気がしないが、一日も早く落ち着いてほしい。

境界あれこれ
P76～
先人の知恵から
P183～

岡崎正明

実は2月の終わりから入院することとなった。マガジンが出ている3月15日頃はまだ入院中である。別に大きな病気が見つかったとかではないが、長年の勤続疲労、経年劣化。時の流れのなせるワザで、徐々に体の無理がきかなくなってきているらしい。

私はあまり自分の体と対話するタイプではなく、風邪などでもギリギリまで不調に気付かずにバタン！と倒れるほうで、「子どもみたいだ」と叱られることがある。だが逆に少々のことは「気のせいだろ」「たまたまだろ」と気に病まずに済ませることができ、精神衛生上は悪くない利点もある気がしている（ただの負け惜しみ？）。

たださすがに40歳を過ぎ、「いい加減、おのれの体の声くらい聴きなさい」と言われた気がして、素直に「そうですね。私が聴かずに誰が聴くってことですよね」と思うようになった。これは進歩なのか、一時のことか。まだ結果は分からないが、本文で登場するAさんからは「この入院が岡崎さんの人生のターニングポイントになるよ！」と言われているため、不安はありつつも7：3くらいで楽しみが勝っている（我ながら単純だ）。

役場の対人援助論
P122～

大谷多加志

昨年末に「対人援助学マガジン　執筆者と読者の会」に参加しました。巻末にまとめを掲載したため、ここでは詳しいことは省きますが、さまざまな地域と分野で活躍する参加者との交流を通して、対人援助学という領域に、まだまだ面白いことが待っていると感じることができました。

そして、年末の段階では近い将来のこととして考えていたのですが、めぐり合わせによって今年度末に現職を退職することになりました。

生活の変化に対する不安を感じたり、現職での経験のありがたさを改めて感じたりと、さまざまな思いが去来しています。退職というのは、そう頻繁にある機会ではないかと思うので、ひとまず今は揺れ動く気持ちを“生きてる”証と思って、味わってみます。

新版K式発達検査をめぐって
P129～

馬渡徳子

今年も、今のところ、積雪が二度しかない北陸らしくない冬が終わり、春を迎えようとしている。

積雪がある年は、起床時間が平均一時間半は、早まる生活で、出勤しても先ずは雪かきから始まり、帰宅しても、先ずは雪かきという生活であった。

今年、我が家は2回目の町会長で、もしも豪雪だと、負荷がかかるので、正直びくびくしていた。しかしながら、我が町会は、台風による水害と何度かの豪雪経験より、防災士の計画的継承と、青壮年部、女性部、育成委員、民生委員、福祉推進員等の日常的な活動交流が奏功しており、お互い様の関係をつなげてきた歴史があるので、有事には、心強い。こうした有形無形の社会関係資本を、可視化して、共有し、自分の住まう地域を改めて見直す機会となっていることからか、移住定住者が増えている。

さて、暖冬であること、リハビリを継続していることで、姿勢や諸動作を変えたことが奏功したのか、なんと、今年は4年ぶりにギックリ腰を予防できている。

「ラジオ体操」の効能と諸動作のエピデンスを、リハビリの先生より学び、
面白いなと継続している。

一方で、このような地球環境の変化に対し、自分のできることを、一つ一つ行動していかないとなと、「雪のない北陸の晴天」を見上げながら思う。

馬渡の目
P170～

団士郎

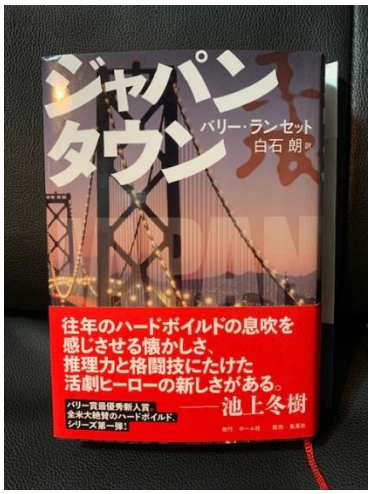
新型コロナウイルス騒動で、3月に予定されていたイベントやワークショップが次々中止になった。その結果、スケジュー

ル表は真っ白になってしまった。

その効果？はてきめんで、雑誌連載漫画の制作も、春のぼむ漫画展と2020年度の東日本家族応援プロジェクト用のパネル用カラー版制作も、この対人援助学マガジン編集作業も、実に順調に捗ってくれた。

日常がいかにタイトなスケジュールで作業しているかが分かった。でも、大仕事がどんどん片づいてしまうとすることがないと感じてしまうのはワーカホリックか。

そんなときに集中的に読書するので、これがまた楽しくすすんでしまう。いつもならためらうような500頁越えのハードボイルドに手を出したら、思いがけず面白かったりした。忍者もどきが登場するのだ。



「続・家族理解入門」
P49～

鶴谷　主一

3学期、僕の仕事に大きなウエイトを占めてくるのが画像処理と印刷業務です。毎月書いている園便りや業務に加えて増えてくるのです。働き方改革など知りません。

卒園、進級シーズンは、写真を撮って補正加工していろいろに使います。

・卒園文集の写真レイアウト
・卒園文集に貼る園児の顔写真シール
・卒園証書に貼る正装した個人写真の補正と発注
・文集に載せるいろんなページの作成（いろいろ 10 ページぐらい）
・進級写真の撮影と補正
・カードや製作物のパーツづくりやシール、カット

個人写真は昔より減って 50 人ちょいですが、1 枚 1 枚補正するとなかなか終わりません。

先生たちは、カードを作ったり、110ページ以上もある文集の原稿を準備したり毎日せっせと分担してやっています。

僕は、Photoshop と Illustrator という画像ソフトを長年使って、使えるようになってしまったために仕事が増えているのだと思いますが…喜ばしいことなんでしょうね。

原町幼稚園 http://www.haramachi-ki.jp
メール　office@haramachi-ki.jp
インスタ　haramachi.k
ツイッター　haramachikinder

幼稚園の現場から
P59～

水野スウ

今号は、金沢で 20 年続き、私自身も参加している市民アクション、ピースウォーク金沢の歴史を、はじまりの 2001 年からふりかえって綴ってみました。

あらためて強く感じたのは、このピースウォークが単なる恒例の年中行事で、当たり前に続いてきたのでは決してなくて、その一回一回が手づくりで、自主的に集まった実行委員メンバーがあーだこーだと多様な意見をもちより、その時々の社会状況と連動しながら、政治を反映させながら、意志を持って続けてきたのだなあ、ということ。ささやかな活動であっても、平和が大事、と言いたい人が言いたい時に言えるよう、この受け皿をなくしちゃいけない。そんな思いで続けてきたような気がします。

金沢のピースウォークは毎年3月 20 日前後なので、今年も数ヶ月前からその準備がはじまっています。でもいま現在、新型コロナウイルスの影響で、その時期に行えるかどうかまだ見通せません。

検査の必要な人が検査を受けられず、生活の手当対策も何も決まらない先に、首相による突然の臨時休校要請で、社会は大混乱。新型コロナウイルスは、憲法に緊急事態条項を入れるための大きな実験台の1つになる、と言った元文科大臣がいたけれど、緊急事態条項の憲法明記は、すべての権力が内閣総理大臣に集中することを意味します。首相の言葉が、今なら要請、要望ですむことが、政令となり、その政令に誰もが従わせられる可能性も出てくる。

だから、コロナ拡大を利用しての不安便乗型改憲なんて手口に安易に乗っちゃいけないよ、と声を大にして言いたい、今日の短信でした。

きもちは言葉をさがしている
P88～

荒木晃子

新居で迎えた初めてのお正月は、例年通り「手作りおせち」を客人に振る舞い賑やかに過ごした。

ところが、年末までに蓄積された疲れのためか、おせち作りに張り切りすぎたせいか（どちらも怪しい）、3が日が過ぎた頃から発熱し，仕事始めの前日、39度以上の高熱にて近くの病院を受診。即、インフルエンザの診断を受け外出禁止命令が出る。

1週間後の 1 月 12日には「セクシュアルマイノリティと医療・福祉・教育を考える全国大会2020（ドーンセンター大阪市）」実行委員会主催のシンポジウム https://queertaikai2020.wixsite.com/toppage/f2?fbclid=IwAR0lOimhfCNsiI6cR-3_sL8Dn0umkwLlRxS5Pq0e0r-xYcZYEdtbk1D94o8

で講演することが決まっているのに、である。インフルエンザの薬と解熱剤，抗生物質を服薬、食事が喉を通らないため代わりに栄養ドリンクで補給し、2匹の愛犬の世話を頼み，一週間はとにかく休んだ。

結果、当日は（医師の条件付きではあるが）皆さんの力を借り、なんとか無事に役目を果たせたと思う。その反動か、その日の夜に（予想通り）再び倒れ、翌日の研究会は欠席、大切な報告ができずじまいだった。年明け早々、自分の年齢＆体力を自覚しなければと肝に銘じる出来事に遭遇し、丁度いいのでそれを今年の目標とした。

また2月初旬、ヒアリング調査のため研究メンバーと出かけた台湾でも、5日間の最終日に再びダウン。調査打ち上げの美味しい台湾料理をいただけずじまいのていたらく。まったく懲りない自分にあきれるばかりである。あれやこれやで忙しくもワ

クワクする日々を送りつつ、この短信を書いてます。

生殖医療と家族援助
p81～

浦田　雅夫

昨年末に叔母が急逝した。母の看病など本当にお世話になった方で、これから恩返しというところであったが。親族の中でひとりだけクリスチャンである叔母はクリスマスの日の夜にセレモニーをしてもらった。いろんなことがあった人生だったろうが、最後がクリスマスだなんて、叔母にとっては幸せなことではないだろうか。

社会的養護の新展開
P60～

千葉晃央

フリーエージェント宣言！！

約 24 年間勤めた社会福祉法人京都国際社会福祉協力会を 2020 年 3 月末で退職します。京都市みぶ学園（就労継続支援B型）支援員、京都市横大路学園（就労継続支援B型）支援員、京都国際社会福祉センター（教務主任、研究員、講師他）、京都市みぶ身体障害者福祉会館　事務長、のぞみ相談支援センター（計画相談）管理者として、働きました。特に昨年度までは週 6 日以上勤務しましたので、実質は 25 年以上勤務で、体は丈夫です（笑）。

知的障害者福祉領域の京都市みぶ学園では、下請け作業をいただくための営業活動から、事業所の中心としての役割、大学生等の実習指導などを経験しました。

横大路学園では、廃プラスチック手選別作業を行い、環境問題に挑み、安全衛生委員会創設などをはじめとする職場づくり、新規事業立ち上げも経験いたしました。

京都国際社会福祉センターでは、スイス研修のコーディネイト、雑誌『国際社会福祉情報』の編集、発刊、執筆、取材、行政ケースワーカーの養成研修の企画、運営、講師なども、たくさんの講師の先生のご協力をいただき、担当しました。

社会福祉士養成課程では教務主任として、ソーシャルワーク系の科目を中心に、実習施設さんとのコーディネイト、開拓を含む実習指導、障害者福祉、児童福祉、地域福祉他の科目も担当しました。養成課程の施設見学企画、入試、同窓会、学生支援、学生相談など、あらゆる経験もさせてもらいました。

これらと同時に 1999 年以降は家族療法を学び、家族療法に関する研修のスタッフと実際の家族面接の相談員としても、ケースを担当してきました。

今年度は計画相談で、障害者の方々の地域生活を支える役割を管理者として経験しました。

今後は、個人事業主（フリーランス）として、これまでの経験をもとに、新しいチャレンジをしていきます。2020 年 4 月以降は自由に動くことができます。空いていますので、また、さまざまお声がけください。

え、それって何してるの？と思ったかたは、ぜひごはんでも、お茶でも誘ってください。すぐ行きます(笑)。どこでも大丈夫です。

家族をテーマにした事例検討会、対人援助学会、対人援助学マガジンの活動、家族面接相談スタッフ等は、引き続き、継続いたします。

これまでお世話になった皆さま、本当にありがとうございます。おかげさまで、今に至ることができました。お一方お一方にお伝え出来なかったこと、何卒お許しください。そして、これまで以上に、よろしくお願い申し上げます。

家族支援と対人援助　ちばっち

chibachi@f2.dion.ne.jp
090-9277-5049

知的障害者の労働現場
P17～

中村　周平

2 月下旬、またかといわれるかもしれませんが、引っ越しをしました。今度の新天地は上京区です。今回の引っ越しで、ようやく腰を据えて生活の基盤を整えられるのではと思っております。新天地での近況も、これからお伝えさせていただこうと思います。

ノーサイド
P102～

見野　大介

春が近づき、展示会・イベントの予定が迫ってきました。が、コロナウイルスの影響で開催自体が危ぶまれており、開催されても集客が例年通り見込めるかも怪しいという現状。

はてさて、この先どうなることやら。

ハチドリの器
P4

中村正

2 月最後の週、シドニーとブリスベンへ社会的養育の視察にでかけた。日本財団の助成で立命館大学の人間科学研究所が展開する「社会的養育プロジェクト」講座に参加する児童福祉の現職の方々も 8 名程一緒だった。後半はブリスベンでアボリジニ社会における社会的養育をテーマにした。Keyassets という世界的に社会的養育サービスを展開する団体にお世話になった。里子の原家族は何らかの課題を抱えている。その原家族との関係をよくしていくこともフォスターリングソーシャルワーカーの仕事になっている様子に感銘を受けた。さらに先住民であるアボリジニは歴史的なトラウマを抱えている。世代を超えて課題が山積している。メンタルヘルス、貧困と差別、民族のアイデンティティ、混血化の進展、伝統的生活の維持等が課題である。そこには DV や虐待という普遍的な課題も内包されている。こうしたアボリジニ社会でも存在している養育の課題は歴史的なトラウマとしての侵略と差別の結果でもある。これらを調整しながら誰を養育里親にするのか、原家族の問題をいかにして解決していのか、伝統といいつつも存在する暴力問題をどう解決していくのか等、フォスタリングソーシャルワーカー

の課題ではないものを抱えているが、社会的養育をとおしてみえてくることは多い。先住民族出身のワーカーに話を聞いた。文字をもたない口話文化のアボリジニはもちろん英語を読み書きできる人も多いが、やはり思考は文化に根ざしている。口話文化なので、とにかく話がうまい。流ちょうという意味ではない。ナラティブの本来のカタチをみたような印象を受けた。分かったような気になる書き言葉は疎外でもあるのではないかと思ったくらいの口話文化ナラティブのパワーだった。機会を改めてマガジンでも紹介していきたい。

臨床社会学の方法
P21～

三嶋あゆみ

10 年前、差別主義者たちが京都朝鮮第一初級学校（小学校）を襲撃する事件が起き、これを機にヘイトクライム・ヘイトスピーチが社会問題化しました。

この事件については、裁判所による司法判断が出たものの、日本政府・自治体による高校無償化排除、補助金カット、昨年 10 月からの幼保無償化排除と、朝鮮学校の民族教育に対する差別は拡大しています。

そんな中で、日本人も一緒に取り組んでいる保健室づくりや、障害をもつ生徒を中心にした学級づくりの努力は、学校の原点とは何かを問いかける力を持っています。関心のある方、ぜひ朝鮮学校に足を運んでください。

脇野　千恵

昨年 12 月末に、身近な人たちとキューバに旅しました。一度は行ってみたいと思っていた国です。日本から見ると随分遠くに感じますが、ヨーロッパやアフリカからは近いのだなという実感を持ちました。当たり前ですが…。

直行便はなくカナダでの乗換です。アメリカから色々な制裁を受けている国でもあるので、経済状況など、国としてはとても苦しい立場にあります。カリブ海にある共産主義の島国で、革命の国でもあります。教育費、医療費は無償。他にも行ってみてわかったことがたくさんありました。

カリブ海には、無数の島が点在し、今でもフランス領、オランダ領といった島国があります。キューバもちょっと昔までは、長いスペインの植民地時代が続いていました。その名残は街並みで見ることができます。ハマキ、砂糖の生産が盛んで、どこのレストランに行ってもサルサの音楽が流れています。

今、国は観光に力を入れていて、なるべくたくさんの外貨を得たいと努力しています。最近日本の旅行会社もキューバツアーを企画しているのをみかけますが、まだ日本人はほとんどいませんでした。

物不足が深刻なキューバですが、自国での頑張りを肌で感じる場面が色々ありました。

こころ日記「ぼちぼち」part Ⅱ
P255～

竹中　尚文

田舎暮らしの楽しみの一つに薫製作りがある。少しくらい煙をだしても近所迷惑になりそうもない。それに、薫製の工程の中に、風乾といって網に入れて風にさらすことをする。これは、空気のきれいな田舎で冬にするのがとてもいい。そんなわけで、今回はベーコンの作り方を紹介する。

今回の料理はベーコン

【準備するもの】

豚バラ肉　300～700 ｸﾞﾗﾑ、塩（豚バラ肉の 5%）、砂糖（豚バラ肉の 5%）、粗挽きコショウ（豚バラ肉の　5%）、ニンニク少量（無くても良い）、お好みのバーブ少量（無くても良い）、月桂樹の葉 1～2 枚（無くても良い）

【手順】

塩漬け（7～10 日）

① 大きな塊を購入した場合は、適量にカット。豚バラ肉を流水で洗う。キッチンペーパーで水分を拭き取る

② 豚バラ肉が入るようなビニール袋に、5%の塩・砂糖・胡椒を混ぜ合わせて入れる。ニンニク等も一緒に入れる。

③ そのビニール袋に豚バラ肉を入れて、塩・砂糖・胡椒が肉にまんべんなく絡むようにする。袋からできるだけ空気を抜いて口を縛る。

④ 袋に入れたバラ肉を冷蔵庫でねかせる。毎日、上下をひっくり返す。塩分等が片側によらないようにするため。

塩抜き（1 日）

⑤ 清潔な大きめの容器にたっぷりな水を入れる。バラ肉をビニール袋から取り出して、水に浸ける。たびたび水を替えながら、バラ肉の塩抜きをする。この作業は、バラ肉の表面に近い部分と中央部の塩分濃度を均一にするためである。塩分がどの程度抜けたかは、肉を部分的にカットしたものをラップに包んで電子レンジで加熱して味見をしてみる。感覚と想像力を使う作業である。

⑥ 塩抜きを終えた肉は、吸水シートで包んで、冷蔵庫で一晩ねかせる。吸水シートはいくつかの商品が販売されている。

風乾（3 時間程度）

⑦ 干物用のネットがホームセンター等で販売されているので、そのネットに肉を入れて、風通しの良い日陰で乾かす。気温と湿度の低い日がおすすめ。

燻製（2～3 時間）

⑧ スモーカーに肉をつるして、燻製をする。私の場合、ウッドを入れずに、80 度前後の温度で、約 1 時間。ウッドを入れて煙を上げて、70～80 度で、2 時間程、煙でいぶす。

⑨ スモーカーの火を止めて、燻製された豚肉を冷蔵庫で一晩ねかせたら、できあがり。

- スモーカーは、どのような物がいいかは一概にいえない。私は、1.2 メートル程の高さの物と 30 センチほどの高さの物を使う。作る物とその量によって使い分ける。スモーカーの大きさによって、ウッドを使ったり、チップを使ったりしている。

今回のバックミュージックは“エリック・クラプトン”の「ワンダフル・トゥナイト」

この曲を聴くと、というよりこのギターの音を聴くと、エリック・クラプトンは最高のギタリストの一人だと思う。彼と同じ時代に生

きてきたことを幸せだと思う。

告知

拙著『七日参りのお話　ー大切な人を送った人へー』を出版した自照社出版が、3 月末で廃業することになりました。このマガジンの連載をまとめて、団編集長に表紙を描いてもらい世に出た本でしたが、3 月末でなくなります。ある書店でこの本にポップを手書きしてくれていました。顔も知らない店員さんがこんなにしてくれていることに感動しました。本当にたくさんの人々のおかげでした。

『盆踊り漫遊』
P105～

乾　明紀

新型コロナウイルスで国中（もちろん中国や世界も）大変な状況ですね。
人間は未知のものに不安を感じやすく、「●●県で初の感染者」などのニュースを継続的に見せられれば、心理的不安は否応なしに高まります。

行事・イベントの自粛がドミノ式に広がり、トイレットペーパーの買い占めなどのパニック現象も起きました。そして、極めつけは、政府が学校を一斉休校にしました。

2019 年度のインフルエンザの患者数は 1000 万人以上ありますが、厚生労働省の HP の「新型インフルエンザに関する Q&A」には、「集会やスポーツ大会についての、一律の自粛要請は行われていません。

感染の広がりを考慮して開催を決定するとともに、病み上がりや体調不良気味、発熱症状のある方には参加や観戦を遠慮してもらうように徹底して呼びかける、人と人が近い距離で接触しないようにするなど、運営方法を検討してください」と書かれており、今回の対応がイレギュラーであることがわかります。

しかし、イベントをそこまで自粛する必要があるのか？　休校までする必要があるのか？とは言いだしにくい空気が国中を覆っている気がします。

こういう空気が社会にあるときこそ、より冷静に、より科学的に世の中を眺めてみたいものです。

周旋家日記
P108～

寺田　弘志

一番患者の多い病気をご存知ですか？積読（つんどく）になっていた中野信子「脳内麻薬」をやっと読み終えました。麻薬に縁が無くてとっつきにくかったのですが、依存症を理解するのに絶好の入門書です。

一番患者数が多い病気が依存症だそうです。国内で、喫煙依存症1300万人、アルコール依存症300万人。薬物、ギャンブル、ゲーム、恋愛、セックス、ポルノ、過食や拒食・・・他にもいろんな依存症があるので、恐ろしい数になります。依存症のメカニズムを知っておくと、対人援助の仕事をする際に役に立つこと間違いなしと思えました。

さて、本文にも書きましたが、この本によると、脳にある神経細胞は1000億個。しかも1個の神経細胞は1万個の神経細胞とシナプスでつながることができます。さらに、シナプスで放出・受容される神経伝達物質は100種類以上あるそうです。脳はどれだけ複雑な活動をしているのでしょう。想像もつきません。

以前、心理療法の仕事に就いていたとき、「人の心がよくわかるんでしょ？」ときかれました。「心理学をやればやるほど、人の心はわからない、理屈どおりにはいかないということがわかりました」と答えていました。

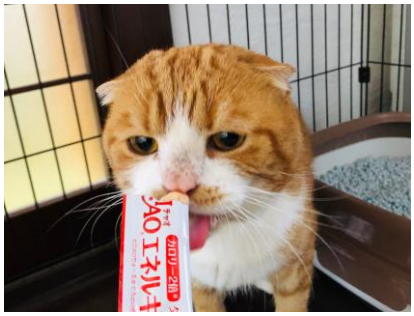
こんなに複雑な脳のことを、単純に理解したり、説明したりできるわけがありません。心に比べて、身体運動器官のパーツの数の少ないこと。骨・筋肉・関節など、それぞれ数百しかありません。

それでも体をいためるパターンは、ほとんど無限にあるといっても間違いではありませんし、まだまだ未解明のことがたくさんあります。構造も機能も良くわからないのに、人は脳を使い、体を使っています。脳も身体もブラックボックスです。今回の本文は、ブラックボックスをテーマに書きました。

接骨院に心理学を入れてみた
P203～

小池英梨子

私の住んでいる町内のノラ猫に餌をあげてくれているおばちゃんの隣の人が引っ越した。引っ越しから 15 日ほど経ってから大家さんが室内に入ると、1匹の猫が1枚の布団とともに置き去りにされていた。推定8歳くらいのオス猫。半月の間、どんな気持ちで家に1匹居続けたのだろうか。飼い主はどんな事情があって、長年連れ添った猫を置いて行ったのか。胸が引き裂かれる思いであってほしい。



保護した彼はすっかり元気になりました。とっても人懐っこいものの、たまに本気で噛んできます。そんな彼の里親に名乗りを上げてくれる猛者がいたら、連絡ください。

そうだ、猫に聞いてみよう
P281～

1 工程@1 円～知的障害者の労働現場

40：　障害者福祉は何を失ったのか？

千葉　晃央

フェリーという密室

前回、京都のオーバーツーリズムの中で、営まれる知的障害者の労働現場について書いた。新型コロナウィルス性肺炎が流行り、京都の景色が劇的に変わる前夜だった。

学生時代、当時の豪華客船ふじ丸に乗って「ABC カルチャーシップ　少年少女の船」のリーダーとして一週間かけてグァムサイパンに行った。小学生のグループ担当で、子どもたちと一緒に寝起きした。その時、欠かせなかったのが消臭スプレー。とにかく臭いがこもる。子どもたちでも、足やら何やらで船室がにおう。窓が開く部屋は一部で他は密室。空調があっても、あくまで人工的なもので、威力は知れている。客船乗客の転落、行方不明の数が結構多いというデータも見た。窓が開かないのも納得。このふじ丸は阪神淡路大震災、東日本大震災でも現地に寄港し、避難所機能を提供した。現在は現役を引退し、中国に船があるそうだ。今回のダイヤモンドプリンセス号の件。客船の逆機能をみているのが歯がゆかった。

京都から外国人の姿が消え、キャリーケースを転がす風景を見る機会が減った。おかげで交通機関がスムーズに利用できるようになった。その一方で観光にシフトしていた地域経済は大打撃。そしてクルマ産業だけでなく、メイド・イン・チャイナのものが止まりつつある。知的障害者の現場では下請け作業として取り組んでいるものに、当然中国製のものがあり、供給のストップが見えてきた。今後の工賃（知的障害者の方が持ち帰る給料）の落ち込みは現実のものになるだろう。

報告をためらうような制度の欠陥

インフルエンザでも、障害者事業所で一定数以上の発症があると行政に届ける義務を課されている。先日の大阪の病院からの内部告発的話題があったように、疑わしい人も含めて報告するとその病院は閉鎖になり、経済的打撃をうけ、病院経営を圧迫する。そのため、報告しないという判断が生まれる。現在の病院にまつわる制度の負の側面が露呈した。つまり、結果として報告しない。当然これでは正確な事態がわからない。感染経路の把握は無理になる。

同じような仕組みになっているのは障害者の現場でも同じである。利用者一人が施

設を利用して、はじめて国から福祉施設はお金がもらえる。以前のような月単位で在籍者が幾人だから、これだけで運営しなさいとお金がつくという仕組みではない。つまり、いくら昼食や仕事を準備していても、欠席になれば、その労力は一切カウントされない。そこで経費はなかったかのような扱いである。この仕組みの弊害は、このような病気の蔓延のときにもよくない動きを誘発する。先の病院の例と同様、病気の蔓延を報告すると事業所閉鎖に追い込まれるので、報告しないという選択がちらつくのである。実際そんな声が聞こえてくる。これは制度の問題であり、福祉機能という公が持つべき余裕の部分がやせ細っている結果である。社会や国民がどこに、どれだけのお金を使うかについての判断の結果である。それが目の当たりになっっているのである。

医療、福祉、環境産業にもマスクがない

障害者が働くリサイクルにまつわる現場からは、マスクの不足が課題となっている。衛生面からマスクは欠かすことができない。医療、福祉の現場の次ぐらいに必要な現場といえるのではないか。リサイクルの現場では粉塵がつきものである。環境行政にかかわった職員がその後何十年か後に肺気腫になる例は裁判になるぐらい問題になっている。震災後の被災地支援でもアスベストの飛散と、作業者のマスクの使用による健康被害対策は課題になってきた。障害者が働く現場は現在、こうした危機にも直面しつつある。

学校休校の要請に始まり、いよいよデイサービスの利用中止の報道があった。これでは利用実績がなくなると事業者が破産に向かう可能性すらある。

福祉業界の危機

知的障害者の現場では、利用者がとても不安を感じている。感じていても、うまく伝えられないことも多いのがこの領域である。でもテレビをみても、街をみても、いつもと違うのはわかる。そんな中で、「マスクをして欲しい」、「手洗いをして欲しい」、「うがいをして欲しい」と求められる行動が増えている。論理的に納得してするならば、まだよい。しかし、この領域ではそううまくいかないこともある。イライラしてしまう、声が出てしまうなど、そういったかたちで不安を表現されていることもよく見かけるのが現在である。今回のような未知の事態。世の中全体が知らないが故の不安を抱えている。利用者の方々にとっての不安は、その何倍にも上ることもあるだろう。

肺炎のことがなくても、この年度末は福祉の収縮を感じざるを得ない状況があった。現場からは「福祉崩壊」という声が先日は聴こえてきた。スタッフがいないのである。必要なはずの事業では運営ができない制度の仕組みになっているのである。

いよいよ、この局面をどう打開するかが問われる。何かを捨てて、より大きなことを得る。これが求められている。まずは捨てられるかである。ここがポイントになるだろう。手にたくさんのものを持っていれ

ば、それ以上は持てないし、なおさら今以上の大きなものは持てない。一旦手を離すことができるかである。

そんなところまで来たのが現在の知的障害者の労働現場のように思う。1996 年～2020 年まで 24 年間、その現場にいた。これからは、少し距離を置くことになりそうである。この連載も、ここで一旦区切る。また書くこともあるだろうと思う。

対人援助学マガジン創刊以来、継続してきたが 40 号の区切りがいい機会となった。次号からは別の連載にチャレンジである。これも手放す勇気の一つであろう。

BACK ISSUES

暮らしやすい地域になったのか？39
2019 年 12 月

利用者さんの呼び方は、これでいいのか？38
2019 年 9 月

カメラ 37　2019 年 6 月

窓を救え！36　2019 年 3 月

別れ 35　2018 年 12 月

人生をかける意味があるか？34　2018 年 9 月

業務の適正化はできるのか？33　2018 年 6 月

安全衛生委員会 32　2018 年 3 月

施設というコミュニティ 31　2017 年 12 月

職場づくり 30　2017 年 9 月

健康管理 29　2017 年 6 月

音 28　2017 年 3 月

救世主になりたい援助職 27　2016 年 12 月

事件について 26　2016 年 9 月

クルマ社会と福祉政策 25　2016 年 6 月

施設が求める「障害者像」はあるのか？　24
2016 年 3 月

連絡帳 23　2015 年 12 月

におい 22　2015 年 9 月

作業着 21　2015 年 6 月

食べる 20　2015 年 3 月

通勤 19　2014 年 12 月

クスリの作用、人の作用 18　2014 年 9 月

倫理観でかたづけられる暴力 17　2014 年 6 月

触れる 16　2014 年 3 月

対談企画　「教育と福祉の連携を模索する」2014 年 3 月

情報の格差 15　2013 年 12 月

20 年前のノートから 14　2013 年 9 月

そうじのねらい 13　2013 年 6 月

個別化の暗部 12　2013 年 3 月

グループワークの視点 11　2012 年 12 月

実習生がやってきた！10　2012 年 9 月

月曜日のせいやな 9　2012 年 6 月

所得を決める福祉職？82012 年 3 月

世界とつながる社会福祉現場 7　2011 年 12 月

この現場へのたどり着き方 6　2011 年 9 月

障害を持つ友達と過ごすとは？巻末座談会
2011 年 9 月

旅行がない！5　2011 年 6 月

職員の脳内回路 4　2011 年 3 月

たかがガムテープ、されどガムテープ 3
2010 年 12 月

利用者が仕事上の戦友 2　2010 年 9 月

障害者自立支援法で不景気に！？1　2010 年 6 月

臨床社会学の方法

（28）男性同士の関係性
–男どうしの親密さと脱暴力–

中村 正（立命館大学）

1．ホモソシアルなもの

男性同士の関係性はホモソシアルなものとして把握されている。同性同士の関係を把握するための概念であるが、男性同士に用いられることが多い。DV や虐待をはじめとして暴力は、男性から女性や子どもへの暴力を念頭において論じられることが多いが、家庭以外の暴力も含めると男性同士の暴力の被害と加害が多いこともホモソシアルなもの論から導くことができる。もちろん暴力を誘発する背景になるというだけではなく「男どうしの絆」という意味で用いられることが一般的である。暴力と絆は男性性において相性良く結びつく。ブラザーフッドという言葉もあり、男性同士の社会関係を把握する社会学的な概念である。義兄弟のような言い方で用いられると「組織構成員」という感覚もある言葉だ。

ホモソシアルなものは、ホモセクシャル、ホモエロス、ホモフォビアと同じような領域にある言葉。それらは同じように男性だけではなく女性同士にも用いられるが、ジェンダー研究では女性と男性の非対称があり、他の現象と同様に男性同士と女性同士では異なる様相を呈する。ホモエロスはセクシャルな様相を呈しつつも、同性への魅力や憧憬、同一化、尊敬や敬意、目標等の根源となる欲望対象や心象を構成する。モデルとライバル関係ともでいうべきか。ホモフォビアは同性愛嫌悪という心的な社会現象を意味する。男性同性愛には厳しい抑制として作用する。

さらに、ホモソシアルなものは組織的な社会制度に埋め込まれており、男性同士の人間関係を規定する。

また、文化表象にも多様に表現されている。たとえば夏目漱石の作品はホモソシアルな視点での解釈されてきた。さらに漫画の世界ではボーイズラブ（BL）全盛であるがこれも同じである。作者は女性で読み手も女性であり、描かれているのは男性同士の性である。しかし男性の読者もいて、腐女子に対して腐男子という言葉もあるくらいに大きな領域を成している。読み手のたち位置で BL の意味づけは異なる。

また男性性のもつ能動性を受動性へと置換させて男性性をひっくりかえそうとする作品もある。たとえば BL の『性の劇薬』という作品がある（水田ゆき、BL 電子コミッ

ク・ボーイズファン、2019 年。2020 年に実写版として映画化された)。自殺をしようとしていた青年が助けた男性に生をあずける。助けた青年は、受動的な性の快楽を与えて生を回復させようとする。かたちは「調教」である。青年は性の快楽とともに生の喜びを得て、生き続ける方向へと導かれていく。BL の一方の男性は受身である。この点を強調して活かした作品である。ここでは男性同士の性を描くことで能動的な性としての男性の性を反転させている。こうしてみると腐男子だけではなく男性の性から発する描写は多様に広がり、いろいろな男性性を考える可能性を拓く。セクシュアリティにおける受働と能動の二分法は根強く男性のセクシャリティを規定しているので男性性の多様性を表象しやすい。

この点について二村ヒトシは男性の受動的な性のかたちを開発し、それを強調している(『オトコのカラダはキモチいい』、二村ヒトシ他、角川文庫)。

2. 男性同士の関係性−他の男性を模倣することと構築される男性性

ホモソシアルをはじめとしたこうした諸観念は、男性は男性を意識していることをとりあげる。社会的地位、若さや容貌、体格や筋肉、職業や収入、所有物、パワー、性器の大小、モテ度合い等が比較対象になる。女性からの賞賛も視野に入るがそれは間接的。まずは同性のまなざしを通して男性性の骨組みがつくられる。他の男性をとおして男らしい姿を想像する。自らの男性性の現実を多様な序列のなかに置いていく。

社会のなかの支配的な男性性形成をめざす競争ともいえるだろう。他の男性の現実は、単に競争対象としての排除や距離化だけではなく、羨望や憧憬等、同一化対象としても写るので、本来的には親密な関係性と近い関係性にある。しかしそこには序列や競争があるので距離ができるという両義性がある。同一化対象となると、そこにはエロス的な様相もでてくる。それがセクシャルなものにならないように心的な調整が必要になる。そこにつながり方としてのホモソシアルなものと意味づけることできる関係性の観念がつくられる。「つながりたいけどつながれない」という両義的な様相を呈する男性同士のつながり方となる。

この捻れた関係を表現するものに攻撃性やその具象としての暴力がある。それはパワー感を支えている。男性性はアリーナのようにして、競争と葛藤、ライバル視、同一化と敵対等の背反的なものを同居させる場となり、それらが「メビウスの輪」のように捻れてつながる一続きのようなものとなる。たとえば少年漫画につきものの「友情と闘い」がそうである。また、ブラザーフッドという言葉にはこの距離化のなかに「敵対と友愛」が同居する。「よお、兄弟!」という言い方には暴力と友愛が同居している。

もちろん男性一般が一律にホモソシアルなものに染め上げられているわけではないが、主流となっているジェンダー秩序はホモソシアルなものを強調するように作用する。当然、男性も一様ではなくパーソナリティ的には十人十色であるが、しかし単に様々な男性が存在しているというのではなく、ジェンダー作用は社会的要素と結びつき、セグメント化され、序列化された男らしさの布置を構成する。その男らしさの意

識と態度の布置は社会秩序の構造のなかに置かれている。社会が保持する支配的な男らしさの人生脚本にホモソシアルなものは強く影響をあたえる。

3. 思春期のエピソード
ーチャムシップとホモソシアル

関係性を語る言葉は発達心理学や精神医学で使われている。たとえば「チャムシップ」という関係性を語る言葉がある。精神医学者の H.S.サリヴァンの概念である(『精神医学は対人関係論である』中井久夫他訳、1990 年、みすず書房)。チャムシップ関係は、思春期にさしかかる前後に築かれる同性同年代の仲間関係を意味する。同性同士の思春期のつながり方である。親密さはまずは同性同士のつながりのなかから生成する。年齢的には、小学校中学年から高学年の児童期に相当する。とくに遊びを中心にした数人程度の仲間集団をつくり、時には閉鎖性が高いグループを意味する。この時期は「ギャング・エイジ」と呼ばれることもあり、自立を準備する。ホモソシアルなものの原型ともいえる。

私が男性の暴力に関心をもつようになった背景には男としての育ちの過程で感じた男性性ジェンダー形成の過程を言葉にしたかったからでもある。とくに主流となっていく多数派の男性性の形成過程に少なからずの違和感をもっていたことが関係している。『対人援助学マガジン』第 29 号(2017 年 6 月、第 8 巻第 1 号)の「臨床社会学の方法 (17)踏みとどまる力」のなかで次のようなことを書いた。文脈は異なるがホモソシアルなものへの気づきとなっている。その一部を本号の文脈にあわせて引用しておこう。

「まさる君のこと―記憶のなかのホモソシアル

はっきりと覚えています。小学生 5 年生の教室です。まさる君という同級生がいました。学級の係を決める日でした。どうしてもやりたい係があり、私はそれに固執していました。担任はじゃんけんではなく話し合いで決めることをすすめていました。まさる君と私がその係をやりたくて最後までなかなか決まりませんでした。とつぜん、背も高く、運動神経もよく、快活なまさる君が「ただし君がやったらいいよ。似合う係だと思うよ。」といったのです。その瞬間、「すごい奴だ!」と思ったのです。我にこだわる自分を恥じました。潔くて格好いいなと思ったのです。11 歳の少年の心に刻み込まれたその時の情景は、長じてリーダーシップ、他者への配慮、友愛(フレンドシップ)、男らしさという難しい言葉を考える時の、現実感としていまでも鮮明に残っています。」と記した。

思春期の同性同士の関係はチャムシップとされるが、それに関わるエピソードとして鮮明に記憶に残っている。これはホモソシアルなものとして私のジェンダー意識に沈殿している。同じようにして学童期から思春期はこうしたエピドーソに満ちている。少年たちのサブカルチャーも同じような内容になっていた。

同性同士の関係と異性との距離化はさらに同時に進行し、思春期や青年期前期のジェンダーアイデンティティ構成のギクシャクした様子を覚えている。特に、どうしても同性他者との親密な関係性の作り方や関与の仕方(コミットメント)の困難さを感じていたことが記憶にある。

脱暴力を焦点にした男性同士のグループワークにはホモソシアルなものが表出され

る。関係の力学的なものがみえてくることがある。男性のグループワークをするとそこには育ちの過程で身につけた男性性の意識と態度が提示される。

矯正施設で性犯罪者の再犯防止プログラムに関係していたことがあるが、そこには刑務所内部でのグループワークという強い枠があり、グループワークをしていてもマウンティングをはじめとした男性的行動様式は抑制されていた。しかし DV や虐待などは社会のなかで行うグループワークにそうした枠はない。だから自然なかたちで男たちの関係性の生態がカウンセリングやグループワークをとおして再現されることになる。

4. ウィークネス・フォビア(弱いとみられることを恐れる心象

脱暴力についての男性のグループワークには男らしさと暴力を意味づける意識と行動のエコロジカルな様相が具体的に表出される。子ども虐待親向けの大阪で開催している「男親塾」は任意参加であり、児童相談所の主催でもない「中途半端」な立ち位置なのでよけいにそうしたことがみえてくる。男性たちからすると児童相談所は子どもを保護した「敵」であり、対決すべき権力装置である。しかしいくら闘っていても無駄であることは時間とともに理解する。その外部に位置づく民間の任意参加の「男親塾」はいったいどちらの見方なのかという駆け引きが行われる。そこでいったいどのように振る舞えばいいのかという逡巡のなかに揺れ動く心理がみえてくる。できれば脱暴力にむけて家族としてやり直したいという思いはあるが男らしさの意識と態度は習慣として内面化されているのでその思いを阻害する。

そうした性格の男親塾というグループワークで示す男性たちのなかにホモソシアルなものものが染みついている様子がみえてくる。とくに加害のナラティブからみえてくることを整理しておきたい。その中心には、男らしさの構築には「男らしくないもの」が不可欠となり、それは端的に「ウィークネス・フォビア(弱いとみられることを恐れる心象)」であることが読み取れる。これは戦争と男性性の研究で指摘されてきたことだ(内田雅克『大日本帝国の「少年」と「男性性」—少年少女雑誌に見る「ウィークネス・フォビア」』、2010 年、明石書店)。

男らしさの形成に暴力は手がかりを与える。暴力を魅力だと感じる男たちがいる。暴力は手っ取り早くパワーを感受できるからである。攻撃性や競争性あるいはリスクテイキングと言い換えると男性性は暴力を招きやすいことがわかるだろう。

さらに儀礼的暴力という言い方もされる。特に男の子の育ちには通過儀礼としてのリスクテイキング行為が説かれる。成長に艱難辛苦はつきもので、それは有益だと先の父親や教師たちは考えている。確かにこうした筋立てはマンガやゲームに多く登場する。セックスも同じように用いられる。バイオレンス、セックス、パワー、リスクテイクは男性がその社会で主流となった男性性を身につけて生きやすくなると考えられている。つまり男らしさの行動特性となっている。

こうしたことは加害者臨床の場面においてさらに垣間見えてくる。加害の語りは難

しい。言葉がでてこないからだ。それでも表現される脱暴力のグループワークの語りたら、男性たちの認知の図を考察してみよう。

5. 男性同士が意識しあうことと脱暴力

こうしたグループワーク暴力を行使してきた男性たちが語る。「脱暴力は『脱力』に近いのでやりにくい。なんだか腑抜けになっていくようだ」と語る 30 代の男性は DV でグループワークに来た。暴力をとおして妻に君臨していた男性はその違法性を指摘されたことの失意とともにこうしたグループワークにまで参加させられ、暴力を取り除くことのもつ意味をうまく構築できずにグループワークに参加していた。いかつく振る舞うこと、他人をコントロールすること、威嚇することをバネに生きてきた彼の人生の課題に、はじめて妻から脱暴力を指示され、心の準備ができないままにグループワークに参加した。そうした彼の男性性の生態学的行動特性は、長い間の習慣となった男性の身体的なふるまいなのでついていかれない。三回程、グループワークに参加したがその後は来なくなった。彼はこう語りながらグループワークのあとはいつもスポーツジムに通っていた。

「そんなに誉められるような、柔な、簡単な男ではないので軽々しく誉めないでほしい。先生はそもそも俺をほめるに値する男性なのか。どんな苦労をしてきたのか。」と語る 40 代後半の虐待父親は、職人さんだった。虚勢を張ることでなんとか力の衰弱に抵抗しようとしている様子が垣間見えた。

刑務所で取り組んでいた性犯罪再犯防止グループワークでも同じようなことを語る男性がいた。「こんなプログラムは意味があるのか。プログラムでそう簡単に変わることができるのか。」と抵抗していた。プログラムによって動かされまいとする男性の「主体性」がこうしたかたちで発揮されていた。なぜなら刑務所は主体性を剥奪する施設なので、僅かではあれグループワークという教育的処遇の場はプログラムに関与したり抵抗したりする能動性が発揮できる場と機会だからである。再犯防止の教育プログラムがあるからといってその成否が刑期を短くするわけではない。グループワークで主体性を発揮しようとするとこうした言い方になり、プログラムそれ事態に抵抗する。男性性ジェンダーと動機形成の課題である。組織としての児童相談所は抵抗しやすいので反抗は常であるが、こうした取り組みで自らの意思と責任でグループワークへの意味づけや意義を構築していくことが大切となる。

「グループワークでやるアサーション的なコミュニケーションの練習は嫌いだ。男には克己のためにネガティブな課題だしの方がいい。」と話す 40 代前半の男性。

また別の加害の男性のナラティブはこうだ。「喧嘩をして殴り合うほどに情が深まる。競争も同じ。」だという。「悪いことをして体罰を加えられて育ったことが役に立つ。」とも語る。

こうしたことを多くの男たちが真顔で語り、彼らの家庭内暴力を正当化する意識として作用している。対話をとおして理解した男性の暴力を肯定している世界の意味付

けを「暴力神話」とくくり、暴力を肯定する男性の意識をまとめた(末尾に掲げた表1)。

これは現代日本社会で主流となっている支配的なイメージの男性性が宿す「暴力神話」である。脱暴力への取り組みは、まずはこの「暴力神話」の乗り越えをめざす。男らしさ意識はマインドコントロールのように男たちをとらえている。本連載では一貫した論調であるが、男性性ジェンダーが深く関係している。男親塾などの脱暴力グループワークでは、最低限、暴力に結びつかない男性性の再構成をめざすことが有益だと考えている。暴力と結びつく男性性の意識と行動の解毒の取り組みである。そのことの上に、DV や虐待への加害者プログラムを組み立てることを試みていく。

さらに、ホモソシアルなものに染められた男性同士の関係では、他方の、脆弱さをかかえる男性は被害ポジションとなる。男性の性被害である。特に青少年男子たちの被害が声に出せないというサイレンシングを考慮すると潜在的には多いと考えられる。男性と男性のあいだの暴力がもたらす被害であり、これもジェンダー暴力といえる。これをどう位置づけるのかが男性性研究において問われている。

6. 暴力のその前にあること

筆者のグループは自治体と協力して男性相談にも取り組んでいる。相談の多くは暴力加害問題である。暴力を振るう男性は、確かに自らの暴力をなんとかしたいと考えているが、被害者にも非があるとも考えており、喧嘩両成敗的なことを期待して相談にやってくる。

その意識には社会が体罰を否定していないことが反映されている。また、相談に通うように妻に指摘され、紹介されることも多い。いやいやしぶしぶだけども相談に足を運ぶのでまだ変化を期待できる男性たちである。だから動機はおしなべて低いが一般的な男性からすると男性性を暴力から切り離そうとする意志はある。実態を聞きたくて被害にあっている女性や妻から話を聞くようにしている。

被害の立場の妻に話をきいていると、同じ関係性を生きているとは思えないような異なりがある。それをただちには暴力と言えないが、すれ違うエピソードが多い。夫婦喧嘩で終わるようなすれ違いではないことがある。ものを投げつけた、殴ったことがある等の「事実としての暴力」行為の認識はそんなに違いがなく、「やりすぎた」という反省とともに暴力行為を認めることが多く、それは来談して語りやすい。

しかしそうではないエピソードが語られる。たとえば、「いのちに対する感受性の違いがあるようだ」と DV で相談にきた夫の妻は語っていた。できちゃった婚となる夫婦、妊娠したと嬉しくなって話をしたら「堕胎できるのいつまで？」と聞いてきたという。車でネコを轢いてしまったけど放置した彼氏に恐ろしさを感じたという恋人。育児ストレスで「子どもを殴ってしまうかも知れないと」話した翌日普通に仕事に行ったことに寒気がした若い妻。ベッドで大事な夫婦の話をしていてちょっと離れたらその間に携帯でゲームしていた彼への不信が大きくなったことも忘れられないと語る。暴力ではないが関係性を維持することの不安をもつ女性たちがほとんどである。

パワーとコントロール行動は関係性のなかで日常的におこる。筆者の加害者臨床体験から引用してみる。

○「自分のものを買うときにいつもいっしょに付いてくる。『僕の好みの女性になってほしい』と言う。自分が自分でなくなっていく感じがする」。

○「交通の便の良くないところに住んでいるので本当は免許が欲しい。必要なのに、免許を取らせてくれない。『運転が下手だから』って言う。だからいつも彼の車で行動することになる」。

○「『習い事をしている』と言うと、『それは男性から教わるのか』って聞いてくる」、

○「『同窓会に行く』と言うと嫌な顔をする」。

○「DV を受けているのに彼といる方が安全だと思うような意識になったことがある。実家に逃げていると追いかけてきたり、メールが頻繁に入ったりするので結局一緒にいることで落ち着くから」

○「『今日は何をしていたのか』といつも聞いてくる」

○「『死んでやる』と言われると別れられない。元の関係に戻ることが多い」

また、こんなコントロールもある。

○「授業の前に携帯メールがあった。『俺のとっている講義が休講になったのでこれから会いたい』と。彼女はこれから講義がある。そうしないと愛情が薄いと非難されると思うと怖い」。

これらはすべてが直ちに暴力やハラスメントだというわけではないが、境界域にあるコミュニケーション的、行動的な特性を有している。総称すれば「関係コントロール型のコミュニケーション」(Stark, Evan.(2007) Coercive Control: How Men Entrap Women in Personal Life, Oxford University Press, 2007)である。パワーハラスメントはこの様相を呈する。「関係性の濫用」である。しかし当人は愛の日常と考えている。

グループワークで観察していると、その暴力の出来事は、単発的に起こるのではく、習慣となっている様子がよくわかる。確かに明確な DV ではない。共通して、他者への配慮の欠落がある。

その上で思うことは、私もまた男であることを思わせられることである。男たちのナラティブを聞いていると、残念ながら理解できてしまう男性としての自分(=筆者)がいる。同じ意識をもっているわけではないが、男性の育ちのなかでは共通に体験していることがあるからだ。生育過程における、とくに学童期や思春期の育ちにおける共通体験である。ホモソシアルな出来事をとおして友情が育まれていくので、主流となっている男性性から逃れることは難儀なことだといえる。

7. 水平的なホモソシアルはいかにしてありうるのか

男同士が、例えば、感情的な親密さ、親しみやすさ、そして利益にならない友情を発達させるためには競争や排除となるようなホモフォビアを削除しつつ交歓ができればいいのだろう。それを仮に水平的なホモソシアルなものとしておこう。女性や子どもへの男性の脱暴力を考える際にまずは同性同士の関係においてつくられる両義的な親密な関係性の再考を迫る必要がある。学童期や思春期からのジェンダー構成に根ざし

た脱暴力教育の課題という意味でもある。この視点を保持すべきなことは、ホモソシアルなものはさらにもうひとつ「ミソジニー(女性嫌悪や排除)」と結びつくことも多いのでこれへの注意が要るからだ。つまり、ホモソシアルなもののあり方である。支配的な男らしさに関する多くの議論が示しているように、それは必ずしも家父長制の強化ではないこともある。ブラザーフッドが垂直的なホモソシアルなものに転化していかないように「ブロマンス」(男性同士の友愛)という言葉もある。ホモエロスを肯定した男性同士の関係である。

男性同士の関係に着目する脱暴力論は、男性のホモソシアル関係の伝統的な理解とは異なる視点の形成が必要となる。競合や階層に焦点を当てたいくつかの男らしさの理論に見られる男らしさの構成とは異なるホモエロス的なものを強調するという意味である。

ジェンダーの研究では、コネルの「ヘゲモニック(覇権的な)な男性性」の概念がよく引用されるが、その動的な性質を強調する理論モデルを開発することが重要である。さまざまな男性的立場を調査し、ヘゲモニック(覇権的な)男性性とは異なる側面をもつ男性の諸相を注意深く調査することにより、日常生活におけるさまざまな力のパターン(たとえば、反暴力への共感、育児や家事への関与程度、フェミニストの動きや代替男性性への意欲等)、あるいはLGBTQへの関心や当事者であることの可能性を識別することができる。同時に、社会における男性の特権と権力の地位を守るのに苦労している保守的な男らしさの最新のバージョンを見いだすことも重要である。

たとえば、先に紹介したブロマンスという言葉。腐男子もそうかもしれない。ホモフォビアとの距離によって定義される男性の友情は緩められ、親密な友情関係をもたらすという考えは、受け入れられつつあるのだろう。しかしまだまだヘゲニックな(覇権的)男らしさの枠組みは根強い。「覇権を超えた」ことはなく、「家父長制を超えた」ことをいかにして構想していくのかの議論をすべきだろう。そのためにはヘゲモニックで支配的な男性性の再定式化が望ましい。明らかに、覇権的な男らしさは常に女性らしさに反対し、特権があると定義されているというコネルの概念を破る必要がある。

また、適切なリーダーシップに重なるイメージをジェンダー論が開発すべきだろう。そして、これはおそらく男性のパフォーマンスと友情が親密さ、愛、そして愛情と関連しているときに起こる。しかし、男性との親密さや感情的な近さを明確に表現することは、男らしさを完全に混乱させることはないかもしれないが、女性らしさに関して先験的で必ずしも特権ではない男らしさを再構成する可能性がある。それが男性にとっての親密な関係性における脱暴力の課題となるべきだ(ここで紹介した水平的なホモソシアルと垂直的なホモソシアルなもの論は次の文献からアイディアを得た。Homosociality: In Between Power and Intimacy, Nils Hammarén1 and Thomas Johansson, *SAGE Open*, January-March 2014: 1–11)。

8. 多様な男性性へ
–ホモソシアルなもののカタチ

さらに、ホモソシアルなものの垂直的実践と水平的実践を区別することにより、ホモソシアルなものに関するより動的な見方を展開することができる。ホモソシアルなものについて垂直/水平の見解をとることは、構造主義のヘゲモニックなジェンダー秩序との関係、つまり、同程度の社会的関係が「伝統的な」覇権的な男性と女性の社会的地位をどの程度維持し維持するかを強調する。ヘゲモニーの読解は、ヘゲモニーの潜在的な再調整を、ジェンダー平等とより公正な社会のための闘争の一部として解釈することを可能にする。おそらく、ブロマンスと水平的なホモソシアルなものの開発と概念化は、変化と移行を指し、その結果、親密性、性別、権力関係の最終的な変化への傾向を含む覇権の再構成を指す。しかし、ヘゲモニーの潜在的および部分的な再定義だけでなく、男性性の多様性や他の社会的属性との結びつきを強調する「交差アプローチ intersectional approach」をとることにより、ジェンダーの秩序をより徹底的に分析する必要ある。これはマジョリティとしての男性をより豊かなものへと「解体」してく方略ともなる。ホモソシアルなもの等の一連の観念をとおして男性同士の関係性を問い直すこととしていきたい。

表 1　暴力神話–グループワークで語られた男性たちの暴力を肯定する意識の整理

暴力は愛のむちである。	暴力は相手が引きおこさせる。
暴力は問題解決になる。	暴力に耐えてこそ人は強くなる。
暴力は正しい。	暴力を振るわれるには理由がある。
暴力をとおして痛みがわかる。	暴力は人を鍛える。
暴力を振るうほどに関係が密である。	暴力は絆を強くする。

2020 年 3 月 3 日受理
中村正
（臨床社会学・社会病理学・社会臨床論）

人を育てる会社の社長が
今考えていること
vol.5

オペレーティブな業務で回っている組織に

どうすればイノベーティブなマインドを根付くのか

「働き方改革」が一般用語になり、「兼業」が市民権を得始めた数年前から、私が経営するアソブロック株式会社に取材依頼や講演依頼が増え始めた。アソブロックは10年前から「兼業必須」の経営をしているため、その様子を伺おうということである。

アソブロックが「兼業必須」に舵を切ったのは、会社の存在意義を「人の成長支援プラットホーム」だと位置づけたことが大きい。すべての経営判断は、それが「社員を含めた関係する人たちにとって成長支援的であるかどうか」で決める。会社の中で、ある意味当然の業務とされるものも、ひとつひとつを検証し、成長支援的でないと思うものは止めていった。出社は自由とし、細かいものでは「電話を取る」のも止めた。

☆☆☆

人が成長するには3つの「きょう」が必要だとされる。「熱狂」「逆境」「越境」の3つだ。熱狂は文字通り、仕事に熱狂すること。逆境は少し背を伸ばしてがんばらないと乗り越えられない仕事をすること。越境は自組織以外で学ぶ場を持つことだが、兼業必須にするということは、常に「越境」を与えられるということだ。

熱狂は、やりたいことをやらないと訪れないと思い、会社としては「なるべく再現性で稼がない」ことを志向している。再現性で稼がないということは、自ずとイノベーションが起こる。イノベーションは逆境のかたまりなので、結果的に「熱狂」と「逆境」はセッ

トで訪れる。このセットアップを持って、アソブロックは仕組的にも「人の成長支援プラットホーム」であり得るのだ。

ただ、ここまで思い切って会社のマネジメントを変えられる経営者は少なく、また雇用人数が増えれば増えるほど、再現性でベースの利益を稼ぎ、余剰部でイノベーションチームを組むというマネジメントをしがちだ。しかしこのやり方で会社にイノベーティブなマインドが根付くかというと、正直難しい面がある。理由はいくつも挙げられるが、最たるものは、再現性チームが結果的にイノベーションチームの邪魔をするからだ。「それは本当にうまくいくんですか？」という再現性チームが発しがちな問いが、必要以上に力を持ってしまう。稼いでいるからだ。

☆☆☆

経営者からは、そのことも理解した上で、「そんな中、オペレーティブな業務で回っている組織にどうすればイノベーティブなマインドを根付くのか」を聞かれる。この問いに対するもっとも簡単な答えは、「再現性で稼いでいる仕事を止めること」だ。何かを始めるための第一歩は、何を止めるかを決めること。だがそれも、社員の雇用継続や自身の生活のことを考えると難しいという。それもよく分かる。

そんなときに、多少でも有効だと思うのは、自分のやりたい仕事や、ありたい姿からビジネスモデルを立てる練習を繰り返すことだ。

「今ある仕事をどう大きくするか」
「今ある仕事の周辺をどう開拓していくか？」
は、多くの人が現状業務で嫌というほど考えている。それにより、生産性があがったり、売り上げがあがったりすることも多い。ただ、それらの多くはオペレーションの改善であって、イノベーションではない。そうしたオペレーションの達人が、現在の多くの会社の経営陣や役職者に多いのもまた、組織にイノベーションが起こりにくい要因のひとつだ。

「自分のやりたい仕事や、ありたい姿からビジネスモデルを立ててみよう」というと、多くの人がまず躓くのが「自分のやりたい仕事や、ありたい姿が見えない」ということだ。人によっては、そのことに戸惑う。そして、「そんなものが本当に必要ですか？」と言い出す人もいる。

「失敗したくない」「必ず成功するモデルを立てなければ！」といった、長年しみついた勤め人マインドが、自分の興味本位で動くことにストップをかけてしまう。実はその献身性

も、イノベーションを妨げる要因になり得るのだが、一方で自分勝手な振る舞いをしたいわけでもなく、足がすくんでしまう。評論家でいるのが一番楽だし、稼いでいれば、当面文句は言われない。「会社の未来を考えるのは、経営陣の仕事。社会の未来を考えるのは、政治家の仕事。どっちも何をやっているんだ！」と言いながら酒を飲む毎日だが、果たして本当にそれでいいのだろうか？

そのような自問自答を経て、最終的に、まず必要なのは「セルフイノベーション」だと気が付く。そして、それこそが「組織にイノベーティブなマインドを根付かせる」第一歩目となるのだと、ぼくは思う。

文／だん・あそぶ
「人の成長に資する場づくり」をポリシーに、業態様々な９つの会社の経営に携わる一方で、「社会課題を創造的に解決する」をモットーに様々なプロジェクトを手がける。元は雑誌の編集者。立命館アジア太平洋大学では「街場のキャリア論」と題して、インターンシップを軸（実習）にそれぞれの人生のビジョンを考えるキャリアの授業を展開。独自の経営手法が、働き方改革の流れで注目され全国で講演も行う。
団遊の組織論；https://corp.netprotections.com/thinkabout/1536/
団遊の採用論；https://job.cinra.net/special/asoblock/
仕事を辞めたくなったときに：https://goo.gl/bFOdpC

カウンセリングのお作法　第二十二回

CONカウンセリンオフィス中島　中島(水鳥)弘美

初回面接前の家族のできごと

支援を必要としている家族と、支援する人が初めて顔を合わせる初回面接は、特に重要であるといわれています。

これから関係を築いていく最初の面接において、どのようなことがカウンセラーに求められるのか、そのなかでも面接に来られるまでの家族のできごとへの理解について、話します。

疲れている家族

何か困りごとや課題をもって相談に来られる家族は、初回面接に至るまでにさまざまなできごとが起こっています。

スムーズにいかない何かが発生して、最初は経過を見守り、なんとか改善できないものかと対処したにもかかわらず、困った状況は継続し、停滞して、もどかしさや疲れがたまっていきます。

このようななかで、新たに、相談機関の人物と一から関係を築いていくことなります。

何か改善の兆しがみられるのではないかという期待と、本当にわかってもらえるのだろうかなどの複雑な気持ちを合わせ持っています。

初回面接は、家族にとって、まさに大きな負担であると考えられます。

相談機関の増加

近年、さまざまなカウンセリングが地域にみられるようになりました。個人面接だけでなく、家族面接も増えています。かつては、家族療法を求めて、北海道や九州から大阪まで相談に来られることもありました。通うだけで体力や時間を使っていたころに比べると、通いやすくなりました。

何か所も相談に行く

一方、新たな傾向は、初回面接に来られ方がすでに心理療法やカウンセリングなどの支援を受けていることが多くなったことです。相談機関に行くたびに、困りごとの状況の説明を繰り返す、そのことで辟易している場合も少なくありません。

初回面接前の家族

疲れている

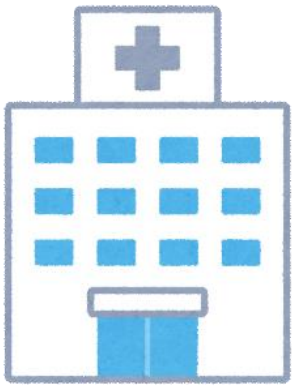
「すすめられたクリニック、病院、

カウンセリングに行ってみたけれど、よくならない」

相談歴

何か所も相談に行く

開業医



病院検査

カウンセリング

初回面接前の家族のできごと

多くの相談機関とさまざまな支援

相談機関を転々としている家族もいて、より適した専門相談機関にたどりつくまで、道のりが長くなっている印象があります。

見立てや診断が確定しない

不安定な症状や状況があり、ストレスによるものか、体のどこかに異変がおきているのか、落ち着いているときもあれば、急変することもあり、まずは、かかりつけの医師のところに行って、そこから医療機関などを紹介されて、くわしい検査を受けたにもかかわらず、異常はなく、経過観察をしているなかで、さらに新しい症状がみられるなど、見立てや、診断が定まらなかったりすることも多く、先の見えない状況に不安が膨らんでいきます。症状や状況の変化とともに、これまでどのような医療機関や相談支援機関にかかわったのかを把握しつつ、家族の不安な思いを受け止める必要があります。

さまざまな支援

また、現在は支援の種類や領域が増え、こまやかな体制が整えられています。

例えば、うつ状態で職場を休んでいる人の場合は、医師の診察を定期的に受け、同じ病院内で認知行動療法も受けます。職場復帰をめざす場合は、社内の産業医との面談が必要で、同時に職場復帰を専門とする施設に通うなど、多くの支援サービスがあり、さまざまな役割の支援者とかかわります。相談歴と支援関係者の把握が必要になります。

関係者の把握

つまり、クライエントさんとその家族や親せき、友人、さらに、専門領域の支援者など大勢の人がクライエントさんにかかわっていることがわかります。

「ご本人さんのいまの状況について知っている人は、他にはどなたがおられますか？」と、たずねて、かかわりのある人がだれで、どのような立場なのかを正確につかみます。

前のところは効果がなかった

混乱　あきらめ

↓

あらたな相談機関

期待とともに複雑な思い

CON 子さん　心理カウンセラー

「これまでのことについて、

私が知っておいたほうが良いことが

このほかにもありましたら、おきかせください」

初回面接前の家族のできごと

望みを捨てずにあらたに相談

効果がなかった

相談歴が長い家族のなかには、前の相談機関で思ったほど効果がなかったと感じている場合があります。

初回面接では話されなくても、しばらくあとから、実はほかの相談機関に行っていたと知らされることもたびたびです。これまでのできごとについて、なかなか話せない家族への理解が必要となります。

また、ご家族には、

「これまでのことについて、私が知っておいたほうが良いことがこのほかにもありましたら、おきかせください」

と伝え、無理強いはしないけれど、話していただけるよう言葉を添えます。

繰り返さないこと

過去の相談歴や支援関係者とどのようなことがあったのかという情報を通して、家族にとって、繰り返してはいけないこと、カウンセラーが家族に対して、何をどう気を付ける必要があるかが、みえてきます。そのことは、今後に多いに役立ちます。効果のなかった対応は繰り返さないことです。

望みを捨てずに来所する家族

これまでを整理していくと、これから、どうなることが望みなのかを改めて、問うことになります。

なんとか今の状況を改善したいとおもって来所している家族の姿を受け止めながら、

「今回、ここに来られて、これからどんなふうになっていったらいいなとおもいますか?」

と、方向性を確かめる問いかけをします。なんどもたずねられた問いでも、より意味を持った問いかけになっていることが望まれます。

初回家族面接の九十分で、確認するべき事項が多いですね。その内容も複雑です。

クライエントとその家族との関係づくりがすぐに築かれるとは思いませんが、初回面接に来られるまでの家族の思いを描きながら、良いスタートができることを願っています。

今後の方向性を確認

CON 子さん　心理カウンセラー

これからどうなりたいですか？

初回面接　90 分

クライエントご本人家族の思いを

受けとめる

関係者の把握、相談歴、

これからの方向性確認

ビジュアル系子ども・家族の理解と支援

七　面接の流れ②

家族援助あれこれ（２）

児童精神科を訪れる家族は、当事者ならではの「問題理解」への賛同を強く期待している。

それを受け入れるのが信頼関係確立の最短距離だろうが、その理解から問題は煮詰まったわけで、おいそれとはうなずけない。

今回は、「家族のそうした期待を外し別の仮説を出す」ことを考えてみる。

いつものように、団士郎氏の許諾をいただき、木陰の物語と家族の練習問題からマンガを転載しています。

Okada Ryusuke

（2）想定外→揺れ・痛み→枠の外へ

当事者の“期待通り”に話が進むと、とりあえず「安心・安定」をもたらすだろう。それに対し、”変化”は「いまと違う」ところにあるから、ある種の痛みを伴うことになる

しんどい不適応感には杖を、痛みを伴う変化には鎮痛剤か局所麻酔を！って話やな

変化に伴う痛みの緩和には、
❶これまでの解決策がうまくいってなくても、その努力をきちんとねぎらうこと
❷クライアントの困りごとを最優先すること、が必要だ

そらそや、ワシらの意図とは違っても、先方さんが困ってはることに手を差し伸べるのがスジや

さらに、❸いまそこにある「強み」について語ること。リスクや問題点は、当事者としてじゅうぶん承知しているけど、その真逆は思いもよらないはずだ

ええこと言うがな！弱点とか問題点と信じているものを視点を変えて強み・長所として語れたら、プラスマイナス2倍の効果があるもんな

そうしてある程度痛みを緩和できたら、前回言った「最低・最悪」の根拠が詰まった箱を開けさせてもらう

根拠となってるのは、だいたいざっくり否定したエピソードやろ？

そのとおり。だから、話の全体や核心じゃなく周辺・脇を見る。で、肯定できる部分とか例外的にマシな部分を見つけ出す

脇見運転のススメかい！

エピソード間の時系列的な比較から、
些細な変化とかちょっとした違い、微妙
な改善など「ささやかなマシ」を取り上げ、
どんな工夫をしたのかと尋ねる

そこから「もしかしたら
最悪・最低じゃない
かも・・」「だったら、
このままでいい？」
みたいな”揺れ”を目
指すわけや

そういうこと。変化には痛みの緩和が欠かせないように、変化の持続には「心地よさ」が必要なんだ

ダイエットと同じやな。体重減少を目で確認するっちゅう快楽刺激がないと続かへん

・・・

極めつけは、当事者自身が“最悪・最低”の根拠に合致しないエピソードを見つけることだ

それこそが最強の快感や。どうやら、エピソードのチョイス、ながめるポジション、そのあたりがキモみたいやな

そして、いよいよ置き換えだ。概して、当事者が確信している説だと解決が難しい。で、「○○が問題だと考えておられたのですか？実のところ、わたしは△△が問題と考えてます」と。こっちの説が想定外でなんとかなりそうで、かつ実行可能な具体策とセットだと、この置き換えはうまくいく。内科や外科では、ふつうにやってることだろ？

そうか？微妙にちゃうやろ！

置き換え、けっこう力業やな。けど、話長うなりそうやし、もう終わろ

続・家族理解入門

家族の構造理解・応用編

2020/03/15 版

家族のことを書いていると、時と共に変化していっている自分を感じる。洞察が深まったり、研究が深化しているのなら結構なことだが、どうもそうではない。

それは年齢と共に起きている変化のように思えてならない。つまり、老化現象である。徐々にではあっても、負担の大きいことを見なくなっている気がする。これは無意識にだが、積載可能重量に合わせて、見えるモノが変化していっているのではないだろうか？

大きな荷物を背負うのは苦しい。若い力業（チカラワザ）でなんとかしのげる時期も遠に過ぎた。だんだん賢明さで対応できるようでなければならない。無論そういう面もあるだろうが、何もかもにというわけにはいかない。

その結果、引き受けられるモノしか、見えなくなってきているのではないかと懸念するのである。だからすぐにどうこういうモノでもないが、世の中にある引退というのは、そういうことが個々人の中で深く関わっているのだろう。

第十回　パワー③　「金」

金

お金が力を持っていることを否定する人はいないだろう。だから、「金がすべてではない！」という言い方も、常に学習させられてきた。

人は見かけではない、中味だというフレーズが、延々と語られてきたの同様、慣用句で戒められているものが非常に強力であることは誰もが知っている。お金はそれくらいパワフルだということだ。

お金と幸福について語った言葉も世界中に溢れている。あれこれ調べたわけではないが、各国の金銭についての感覚も様々なようだ。

アメリカ人の金銭感覚やお金の教育話は時々耳にするし、機会の平等、結果の不平等がその結末だと言われる。誰にもチャンスのある国だという価値観をアメリカ人は大切にしている風だ。

しかし結果の自己責任を強調しすぎて、貧富の差が社会構造的な面が大きいのを問題にしにくいのを、たいした主張だとは思えない。そんな空気を日本社会がまとい始めるのと併走しながら、私達は貧困を自分の能力の不足であるかのように感じる学習をさせられてきた。だから努力は「もっと金を！」の行動化に集約され、才能のない者は長時間働いて補填するしかないと思わされてきた。

断言できるが、昔からそうだったことなどはない。ドンドンその傾向が強くなっていったのだ。そして結果的に、非正規雇用者が多くを占めることになり、平均賃金も時と共に低下するという世界でも希な国（経済状況）をつくってしまった。

金だけを目当てに、持てる個人から持たざる者（？）が奪う振り込め詐欺が、犯罪トレンドの中心に居座ったままだ。

数年前、ヒマラヤの小国ブータンから発信された、GNP（国民総生産）ではなく、「国民総幸福指数」の話がニュースになった。幸福度も主観的なものだから、押しつけられるものではない。ただ、幸福を稼いだ金額とイコールだと考えないのは、負け惜しみだけではない大切なものを含んでいたと思う。

しかしブータンも経済成長の兆しが見えると、やせ我慢のような幸福度からこぼれ始めた人が増えたとか。なにより、このニュースに飛びつきたくなる心情が日本社会の世相を表していた。

一億総中流化だと浮かれていた時代があっという間に過去のものになり、今は子どもの貧困が時の話題になっている。

誰もが中流だと浮かれていた頃と比較して、勝ち組と負け組の所得格差拡大が顕著になったのだという報道に，そうなのかと頷いていた。

ところが実態は、その中流全体が落ち込んでいるらしい。つまり圧倒的多数の人が、昔と比べて所得が下がっているという。どうやら中流小市民がやせ細っているらしい。

各国いろんな事情はあるが、基本的に世界の国々の国民の所帯所得は微増だという。日本だけが、10年前、20年前と比較して下落している。

ところが庶民は不思議なことに、自身の低所得はさておいて、プロスポーツ選手の三年契約五十億円なんてうわさ話が大好きだ。他人の高額年俸を語っていないで、自身の所得が低く、雇用も不安定なことをもっと怒り、語ればいいのだが、この話題は日常場面ではたいていタブーだ。

欲張りな大中小資本家は安い労働力確保と、内部留保に様々な企みをこらすのに、庶民は声も上げずに疲弊する。

そして病気に逃げて、なんとか自分の身だけは守ろうとする。セーフティネットも、他国と比較すれば、利用の節度は顕著な国民性なのに、更に不正受給の話題ばかりをメディアが取上げる。弱い者叩きしかやれない世論にメディアが迎合し、誰も幸せにはならない社会が構成されていく。

こんな現状を、個人のプライドが関係していると言う者もあるようだが、この誇りにも怪しいところがある。この翻訳は「誇り」ではなく、「弱者の見栄」とした方が適訳だろう。そして見栄を張るのは、弱虫と相場は決まっている。「武士は食わねど高楊枝」なんて言ったが、その武士は滅びた。

仕事で酷い目に遭わされても、闘えない労働者が多くなったら、雇用側がやり放題になるのは当然だ。権力の横暴や職権乱用に歯止めをかける力は、渦中にいる者の賢さ（知恵）の中にある。そこで自分を護るためには、立ち向かう言葉と勇気が必要だ。

しかし言葉を持っていても、それを行使する分岐点に「お金」の問題が立ちはだかると、闘ったことのない者の勇気はすぐにくじかれる。

時には利益や勝ち目があるかどうかだけではなく、理にかなっているかどうかで行動することが、子ども世代の未来を支えることになる。

老若対立

上世代の意気地のなさによる崩れは既に起きていると考えるのが妥当な現実がある。新卒大学生の内定率が六割を割ったことが、約10年前の秋には大きなニュースになった。

まだ何も始まっていない若者が、勇んで出発しようというときに、「来てもらわなくて結構！」としか応えない社会って何だろうと思った。

これは、「みんな若い頃には、そんな思いをしながらやってきたのだ･･･」という話ではない。今、社会の主要部分を担う世代の多くの人たちは、気楽に、当然のように世の中で職を得て、そこから一人前にしてもらってきた。即戦力なんて、誰からも求められなかった。

その人達（10年前の団塊世代管理職）が次世代に向かって、景気の動向を考えるとなかなか厳しいなどと、情けないことを訳知り顔に言っていた。何でもかんでも、経済（景気）の先行き次第だなんて安易に言ってしまって平気なんて、主体性や責任感のないにも程がある。

中長期計画の立てられない、単年度決算ばかりの社会では、新たなモノが育つ余地などない。

一方、求職する側がこぞって「寄らば大樹の陰！」と合唱してしまうのにも疑問は消えない。本当

に仕事口がない訳ではなかった。中小企業や個人商店のようなところには、なかなか人が来てくれないと聞いた。

こんな背景にも、先述した上世代の親たちがいる。人は自分に経験のないことは、なかなか他人に勧められない。ましてや我が子。ついつい、念のため、結局世の中は･･･なんて下世話な世相診断をしてしまう。

若者も親の安心のためと、自身のよく分からない不安解消のために、大手企業の求人に列を作る。しかしそれでは結局、「世の中は金だ！権力だ！」という考えにひれ伏して、しかも大多数は敗北するだけのことになる。

犯罪とは言い切れないのか、いっこうに進展が感じられない。関西電力の「饅頭・金塊一時預かり事件」など、ばかばかしくて話にならない。シュレッダーの順番待ちで等と言うために東大を出て官僚になったのか！

こんな事をしていると自分たちだけではなく、世の中全体が腐り出す事への責任は感じないのか？

振り込め詐欺が相変わらず後を絶たない。ここに見られるリアリズムの一つは、世代間貧富格差の結果だ。詐欺を容認するつもりはさらさらないが、被害者はおおむね小金を持っていそうな上世代、詐欺師の手先は、貧しい下世代だ。

他の犯罪でも、逮捕された人の属性に「30、40代無職」と書かれているのが目につく。若年層の失業、若者が真っ昼間から街にブラビラしている都市の治安の悪化･･･なんて、外国映画の背景でさんざん見てきた風景ではないか。そんな街に日本の都市をするつもりなのか？

次世代を犯罪者と予備軍に仕立て上げてしまっているメカニズムは間違っている。定職を斡旋することは、経済対策だけではなく、社会の安定や、未来への希望なのだ。けっして自由競争の結果の自己責任などではない。

（そして現在は、人手不足と残業何百時間が話題だ。こんな世間と、自分の人生の時間を重ねてみたら、景気やブームに身をゆだねるのが、いかに愚かしいかは分かるだろう。経済はあなたを、自在に使い捨てられる労働力にしか扱わない。専門職と言っても同じだ）

無職青年

一〇年ほど前、個人的知り合いの息子の相談を3件受けた。共通していたのは、皆大学卒業の青年。親はいわゆる、中産階級の団塊世代。それぞれ息子の意志を尊重してやりたいと言いながら、先行きの不安を抱えていた。

どの家族も皆、親のあり方として当然のように、学費を使い、息子の将来のことを考えた投資は惜しんでいなかった。私立大学の四年間の学費数百万円、食べさせて寝かせて、通信費も負担してやって、二十四，五歳になっていた。

彼らに共通していたのは、学生時代、アルバイトをほとんどしたことがないことだった。親としても、アルバイトをさせるために、高い学費を払っているわけではないという、もっともな主張があったかもしれない。

親自身は学生時代、必然的に家庭教師やその他のアルバイトをいくつか経験していた。それは家庭の経済的事情ゆえだと思いこんでいた。もしアルバイトなどしなくても良いだけの経済的支えが親からあれば、もっと勉学に集中できたなどと、空想的な思いが頭の中にあったかもしれない。

しかし残念ながら、拘束されて時間をお金に換えているときが一番充実している人は少なくない。自分自身の才覚だけで時間を充実させるのは、なかなか難しい。

中高年世代は、「日々の生活費を稼ぐことに、あくせくしなくて良いほどの金があったら、もっと有意義に時間を過ごせたのに･･･」と自身の過去の、ありそうもないことを口にするのが好きな生き物なのである。

そして実際、彼らが潤沢に経済支援をしてやった

息子は、アルバイトもなかなか勤まらない青年に育った。

彼らは社会復帰プログラムとして、とりあえずアルバイトからはじめることだって容易ではない。そういう事態が中産階級の小金持ちの周囲で起きている。

講演依頼

ずいぶん前のことだが、大阪市内の中学校から講演依頼を受けた。リクエストのあったテーマは「子どもとお金」。さすが大阪の中学校だと感心した。

その頃私は、大阪のラジオ局で月に一度、子育て関連の話題で出演していた。直近の放送の話題もお金が絡んでいた。

「小学校5年生の子どもの母親です。うちは昔から、小遣いは申告性にしていますが、三番目の息子は全くお小遣いを要求しないのですが・・・」

無駄遣いをしない良いお子さんですねーなどと言って、流しておいてはいけない話だと思った。

大人も子どもも区別のない価格のゲームを、連日のCMであおらないと物が売れないと思いこんだような世の中である。

無駄遣いばかりして、「お金！お金！」しか言わない子どもも少なくない。そのあげくに援助交際だ、カツアゲだなどととにかく金しかないような風潮にはうんざりだ。

しかし、このお母さんが訴えるお小遣いゼロで平気な少年を、良い子だと言っていていいだろうか？欲望はその人が見ている世界の目安だ。欲望の中に成長発達のプロセスも見ることができる。

友達も持っているから自分も欲しい、誰にも侵入されない自分の部屋が欲しい、使い道を報告させられないお小遣いが欲しい、こんな欲求はみな、子どもの成長に深く関わっている。

それがないというのだ。「私なら、定額制にして小遣いを与えると思います」と答えた。そして小学校高学年になったら、使い道のはっきりしない少額の消費行動が存在する方が普通だと添えた。

お金に家庭的な事情が付きまとうのは仕方のないことである。一律に何年生で何円などと知りたがるのは母親の不安だろう。金遣いの上手、下手は大人にもある。上手になるためには早いうちに失敗もしておかないと、というのも常識である。

「現実の生活を考えると・・・」の金

離婚しない母親からの相談を持ちかけられたことがある。夫とはしばらく前から一緒には暮らしていない。夫は同じ地域にある実家で暮らしている。

夫は自営業の跡取り息子だが、父親がまだ現役のため、気楽な息子のままだった。会社で次期社長として、それなりに求められる責任もある中で体調を壊し、軽い鬱病だと診断された。

給料は支払われるし、親が建ててくれた家で暮らす夫婦と子ども二人の四人家族に、大きな支障はなかった。だがこれは、回復の必要のない状態とも言えた。当然のように夫の症状は長引いていた。

子ども達に悪影響があると、まことしやかな心配を口にして夫を責め立てたのは妻だった。息子がクラスメイトとのトラブルが原因で、不登校になったのである。

うるさいことを言われるのが嫌だった夫は実家に一時逃れた。そして数年、本宅に祖父母と夫の三人、別宅に母親と二人の子どもの暮らしが続いている。

相談に来たのはいよいよ問題が深刻になってきたからだ。冷静に考えれば解ることだが、課題含みの状況があるにもかかわらず、何も手を打たないのは問題である。どんな問題かよりも、何もしようとしないことが問題である。

今、母親には生活費が夫名義の口座に会社から振り込まれている。家賃も要らない状態での三人暮らしに、聞かされた額は十分すぎるものだった。

夫の症状に改善はなく、時折奇異な行動に出ることがあると妻は心配する。しかし、こんな状態を続

けていれば、子ども達に良からぬ影響が出るのは明白ではないかと私は話した。

しかし母親はぐずぐずと話をはぐらかすばかりだった。時には離婚の話題もだすのだが、併せて必ず、現実の生活を考えると･･･と続く。現実が金銭問題だけに絞られていて、他の様々な課題は軽視されたままである。

現実

この女性は夫の大学の同級生で、高学歴の専業主婦である。彼女の語る現実的判断は息子を腐らせ、夫の回復にも何の力も発揮していない。

離婚しないのなら、４人で家を出て、今後の自分たちの生活設計をし、子ども達にもその意図を伝えたら、みんなが元気になる可能性はあると思う。しかし彼女は、既得権を手放したくない。手に入れているモノより、失っているモノの方が多いではないか！と叫ぶのは私の価値観だと思っているらしい。

彼女が現生活を維持するお金のために、どこまで譲ってしまうのか、私には見当がつかない。お金が大事だということに異論はない。でも他にも大切なモノはたくさんあるし、時には、正しく天秤にかける仕事もしなければならないのではないかと思う。

金の使い道

賛否両論あると思うが、こんな話を耳にした。あるケアマネジャーが担当している人の話だそうだ。

月に一度、訪問することになっている七〇代の男性。50歳で事故にあい、下半身不随になり、それ以来車椅子生活。他に障害があるわけではないが、65歳以上なので介護保険対象になるのだそうだ。

この男性にアジア人女性の妻がある。一〇年近い婚姻歴だそうで、彼は初婚。当然、二人の間に子どもはない。

妻はまったく日本語の話せない状態で来日。そして結婚。現在四〇代半ばの彼女は、アルバイトをしていて、賃金の一部は母国で結婚していた時に生んだ子のために仕送りしているそうだ。

担当のケアマネジャーは初めて事情を聴いた時、金目当ての外国人女性に騙されているのではないかと思ったそうだ。

しかし彼はケアマネのそんな疑念に対して、「自分がいよいよ要介護状態になった時には、施設の世話になりたいと思っている。妻に介護してもらおうとは思っていない」、「妻はその時には、出て行けば良いのだ」と言う。

彼の言い分はこうだ。「私はずっと結婚したいと思っていた。しかし縁のないまま四十歳も過ぎて、年老いた両親を抱えた自分のところに嫁に来てくれる人はなかった。そのまま五十歳で自分が車椅子生活になり、両親も相次いで亡くなった。こんな自分を承知で結婚してくれる日本人女性が居るとは思えなかった。

妻のことは、障害を持ちながらアジア人女性と結婚した知人から斡旋業者を紹介してもらって知ることになった。妻は自分の稼いだ給料はしっかり貯蓄している。自分よりもずっと若いし、母国には子どももある。私はこれでありがたかったと思っている」と語ったそうだ。

この話を聞きながら私は、昔マンガに描いたある人のお金の使い道のことを思い出した。

無駄遣い

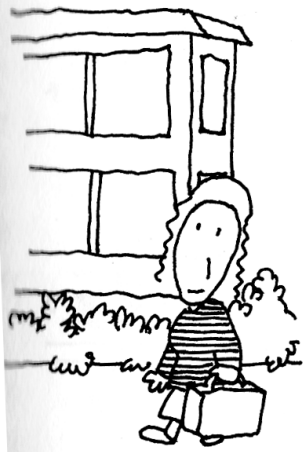
in the shade of family tree

木陰の物語

団　士郎

鈴子さんは療育手帳Ｂをもった五〇才の一人暮らし。年金と生活保護費で慎ましく暮らしていた

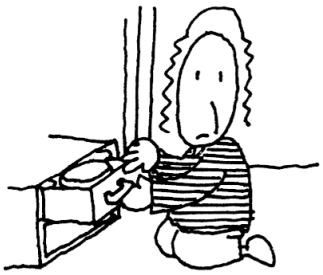
とくに問題を起こすでもない、平穏な町営住宅での毎日だった



鈴子さんのことが話題になったのは、手帳の更新時期が来たことをしらせに、福祉事務所の担当が家庭訪問したことがきっかけだった

先客があった。何かの営業の人らしく、鈴子さんも親しげだった。ケースワーカーの顔を見ると、あいさつをして帰っていった

鈴子さんが引きだしにしまいかけた書類が気になったので



何かの月々の支払い受取の書類だった。そこには先程の「山下」さんの印が毎月押されていた

購入した鈴子さんのところに、「山下」なる人物は毎月集金に来ているらしい

そういって鈴子さんが見せてくれたのは、金色のシンプルなリングだった

事務所に戻ったケースワーカーは、上司に相談した

翌日、上司と二人で訪れたケースワーカーは、指輪以外にも、数点、大事にしまいこまれているアクセサリーを見せられた

支払いの帳面をみると、数年にわたって山下なる人物に毎月支払い続けていることがわかった

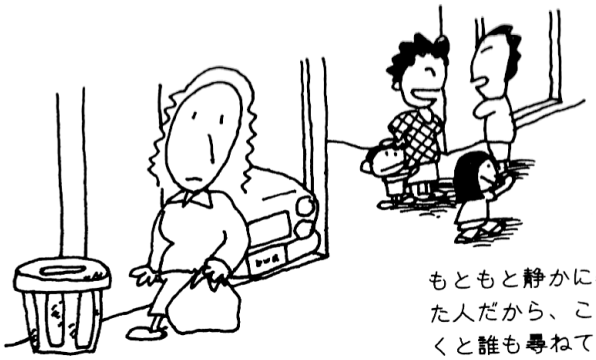
「いつ使うの？」と聞くと首を振る

一度も使用したことはないそうだ

問題だと考えた上司と共に、預かって帰った書類に記載された会社に電話をした

会社は最終的に折れた。未使用のアクセサリーも買い取りに応じた

鈴子さんの無意味に見える
支払いはなくなった



もともと静かに暮らしていた人だから、この件が片付くと誰も尋ねてこなくなった。月に一度、山下さんがきて雑談していく以外、来客は皆無だったのだ

この話を聞かされた時、「自己決定ー自己責任」のことが浮かんだ

鈴子さんはこれで本当に良かったのだろうか

他人から見ると意味がなさそうなことに、自分の意志でお金を使う人は少なくない

彼女のお金が有効に使われるよう配慮したのが悪いわけではない

しかし、月に一度訪ねてくれる山下さんとあれこれ話すのが鈴子さんの楽しみだったとしたら、その為の支払いでかまわなかったのだとしたら・・・

どうして障害があることを理由に、無駄遣いを制限されなければならないのか？無駄遣いする権利も個人に属しているのではないのか？そんなことが思われてならなかった

お金には間違いなく力がある。だから可能だったという遣いみちもあるに違いない。他人の使途について安易に、正しいとか間違っているとか言えない。

それほどの不自由もなく暮らす人が、ためらいなく語る正しさや権利は、字句は同じでも、様々な事情を抱えて生きる人の口にするそれとは、含まれるものが随分異なるのだろう。

マンガに描いたケースワーカーはけっして悪い人ではない。役所も正しいことをしたと思っているだろう。だから誰も何も言わない。

確かに私が知的障害者の相談機関に勤務していた時にも、彼らの障害者年金を狙った詐取事件があった。当時、遡及支給でまとまった額が一度に支払われるケースが多くあった。それを狙って結婚した夫と称する人が、窓口で大声を上げたことなどがあった。

また、サラ金でお金を借りさせられ、覚えのない負債を抱えた人もいた。だまされないように用心してあげるのも、ソーシャルワーカーの仕事の一つだった。

しかし、鈴子さんの暮らしは、その後も続いて、いずれ終わる。その時を、充たされた思いで迎えられるかどうかに、この援助者のジャッジはそれほど貢献しないのではないかと思った。

お金は使い方次第で、様々なことが起こせるものでもある。凡人がお金の力を上手に使うのは、なかなか難しい。

私は最近、「お金は投票用紙だ」と誰かがどこかで書いていたことを、よく思い出す。何に一票入れるか、その意思表示が消費だと考えると、単に欲求充足行動として、買う、買わないを決めたり、お金がある、ないだけで消費を考えているより確かな気がする。

車椅子の男性も、鈴子さんも、自分が良いと思うモノに一票投じていたのではないか。それは投票権を持つ人の自由なのではないだろうか。

第三者の言う無駄遣いを慎んで、大切にしたお金を残して死ぬのが、それほど賢いことだとは思えない。基本的に消費は個人に任されたものだし、意志的（主観的）に浪費するのは娯楽なのだと思う。

客観的に値打ちのあるモノに投資して、死んでからも更に、引き継いだ人が資産運用するなんて、資産の側から見れば賢いことなのだろう。でも、亡くなった人より、残された資産に皆の関心が向いて、奪い合いになったりするのが、それほど優れたことか、と私は思う。

2020年1月から、こんなモノを制作していました。詳細は次号で報告します。

社会的養護の新展開 9

― 続　施設の子どもは恵まれているのか ―

浦田 雅夫

京都造形芸術大学

とある現職の施設職員から聞いた「施設の子どもは恵まれている」という言葉が、何度も筆者のなかでこだまする。そのときは、何が、どう恵まれているか、語り合う間がなかったが、何が恵まれているのだろうかとふと思う。確かに、サロン活動に来た公的機関の支援者と呼ばれる若者はリンゴの皮向きも、お茶を点てることもできなかったが、同年代の施設を退所した若者はいとも簡単にリンゴの皮向きができるし、お茶を点てることやその作法も心得ている。一般家庭では、身につかなかったこと、習わなかったことも施設では学ぶ機会がある。それは、施設では 18 歳で自活するときに備え身につけておかねばならないことだといわれる。したがって、生活力や生活技術については、確かに一般家庭で育った若者以上に身についていることもある。だから「施設の子どもは恵まれている」のだろうか。三食栄養バランスを考えて食事を取り、お小遣いももらえるということだろうか。

永野（2017）はダーレンドルフのライフチャンス概念を用い、「オプション」と「リガチュア」というキーワードから、社会的養育のもとで育った若者の生活実態とデプリベーションについて量的、質的に丁寧に分析している。ここでいう「オプション」とは簡単に言えば選択肢のことであるが、一般家庭と比べ、社会的養育が必要な子どもたちは、「オプション」が制限されたり、そもそもなかったりする。また「リガチュア」とは、つながりを意味するが、これもまた、脆弱であることが多い。永野の分析を見れば、明らかに一般家庭と比して、さまざまな選択肢の制限とつながりの希薄さが社会的養育を終えた若者についてまわる。そして永野はこの「オプション」と「リガチュア」の根っこに『生まれ』と『生きる』ことのゆらぎ、つまり「生の不安定さ」が横たわっており、その開放が重要だと指摘する。この自己存在のテーマは、社会的養育を終えた若者にとって人生のあらゆる局面で自問することになるだろう。

人は人との安定したつながり（ここでいう「リガチュア」）のなかで自己の存在を肯定していく。社会的養育を必要とする子どもは、最もベースとなる家族とのつながりの希薄さ、不安定さ、最も基本となる愛着の対象との信頼関係のゆらぎからくる自己存在のテーマに拘束される。この状況から脱し、人生物語をとらえなおすためには、「オプション」と「リガチュア」の保障が重要になる。

「アフターケア」とは支援をするものから見た状況に過ぎない。社会的養育を受けた若者は、社会のなかで「いま」を生きている。そこを支える人は「いま」とこれからを、若者の家族ではないが、長くお付き合いしていく関係性を作っていく必要がある。

京都中小企業家同友会の前川さんらは、施設を訪問し、子どもたちの適職探索、就労体験をサポートしておられる。前川さんは「一度、子どもたちにかかわったら一生かかわる」と言われていたが、この活動は使いモノになる人材を発掘するなどという浅はかな思いではなく、人と人との関係性のなかから、彼らが自己存在を肯定していくプロセスに沿った、まさに「オプション」と「リガチュア」の保障のひとつではないかと思う。前川さんは、私たちのやっていることは「支援」ではないと言い切る。法や制度のなかで動かざるを得ない支援者とは違って、「終結」はないというわけである。筆者も含め「支援者」と呼ばれる人は「支援ではない」と断言するこの前川さんらの活動から学ぶことが多いと思う。

京都中小企業家同友会の活動についての記事
朝日新聞デジタル
（ひと）前川順さん　「中小企業力」で児童養護施設の子どもたちを支える
https://www.asahi.com/articles/DA3S13786271.html

『幼稚園にある』

40・便利な道具〈紙を切る〉

原町幼稚園園長　鶴谷主一（静岡県沼津市）

■幼稚園にある便利な道具

　幼稚園にある便利な道具についてご紹介します。
第１一回目は、幼稚園でとは切っても切れない、紙を切る道具です。
子どもたちが絵画製作で使う画用紙、ダンボール、カラー工作紙などの厚紙類。
上質紙、コピー紙など薄い紙からちょっと厚めなマーメイド、レザックなどの印刷用紙など
幼稚園ではかなりの種類の『紙』を使います。

■まず、ハサミですね。

　ハサミといってもいろいろ種類があって、

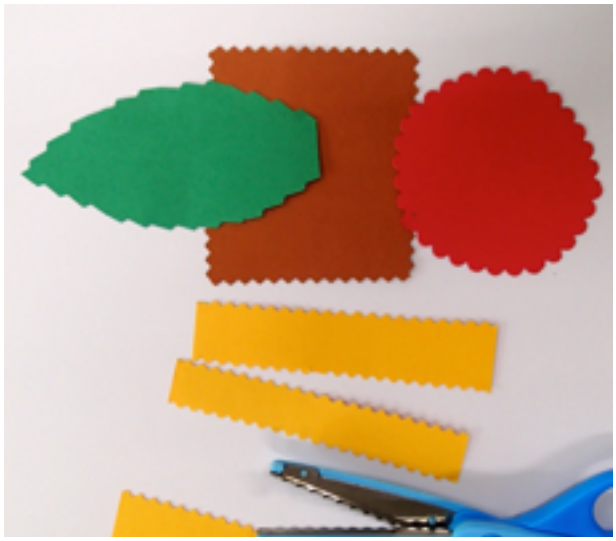
①刃が厚いダンボール用
②刃がストレートでまっすぐよく切れる
③刃がカーブになっていて曲線切りがしやすい
④幼児用
というぐあいに、使い分けをします。

特殊なハサミは、

■ピンキングハサミ

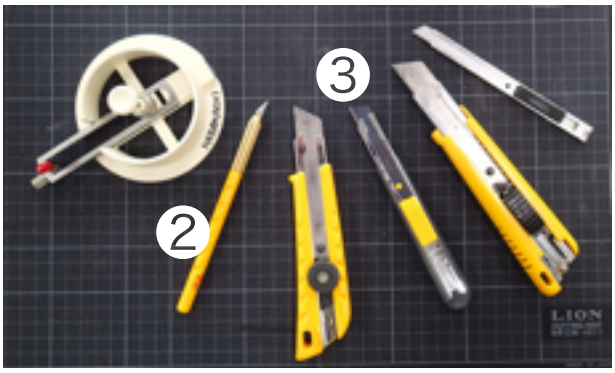
刃がギザギザになっているので、
葉っぱやビスケット、メモの周りをギザギザに切りたいときに使います。小学生なんか好きそうですねー、僕も好きですけど(^^)
右上の写真のケースはコストコで買ってきたもので18種類ありますが、ほとんど使いませんね。ギザギザかマルでほぼ間に合います。

《ピンキングバサミいろいろ》



■カッター

ハサミの次に使う頻度が高いですね。
①サークルカッター
②曲線切りカッター
③あとの４本は普通のカッター大小です。
ダンボールなどを切るときは大きめを使います。



ときどき登場するのが

■型抜き機です

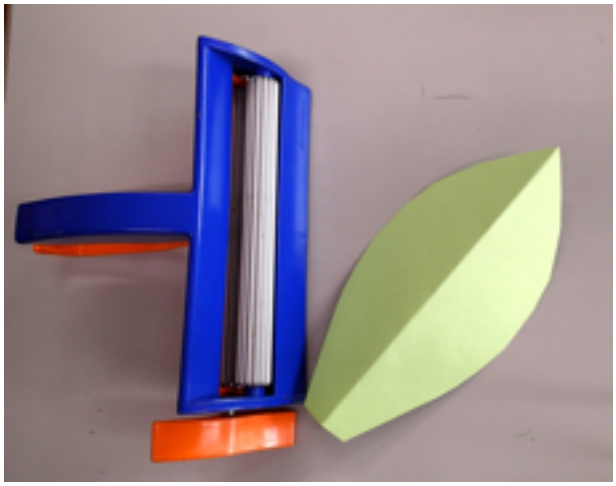
下の写真❷の文房具屋さんに売っているコンパクトなものから、①のハンドルを回して決まった形を切り抜く道具まで揃えてあります。
用途に応じて使い分けますが、小さい型抜きは作品やカードのワンポイント用に、大きなものは製作素材などをたくさん作るときに便利です。
同じ形を何枚も作る便利さと、手ではゼッタイに切れない小さな穴なども抜けるのがメリットですね。切り抜ける型が決まっているので多くの型を買わなければならないことがデメリットです。型の下に敷くまな板みたいなアクリル板が消耗品で、先日はAmazonで発注しましたが、既に国内には在庫が無いのか輸入でした。

型抜き機は、まな板の上に紙、その上に型（カッター）を
載せて圧着しながらローラーを回すことで切り抜ける

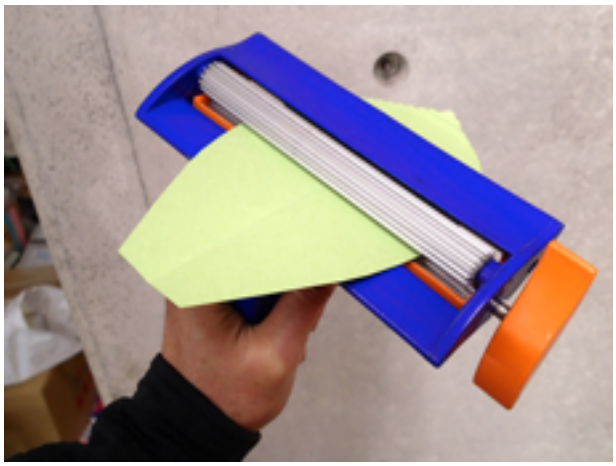
ついでにご紹介！

■紙に波形のエンボス加工

をする道具。



葉っぱの形に切り抜いた紙を



ローラーに挟んで右のハンドルを回すと

波打った葉っぱの模様がつきます。

幼稚園っていろんな道具がありますねえー！

紙を真ん中から真っ二つに切る機械

■デュースリッター

どんなサイズも真っ二つにしか切れません。
比率を変えることはできないのですが意外とよく使います。上のトレーに揃えて差し込み、スイッチを入れると１枚ずつローラーで奥に送り込んで、機械の真ん中にある丸いカッターで切って下のトレイに吐き出します。裁断機と同じですね。

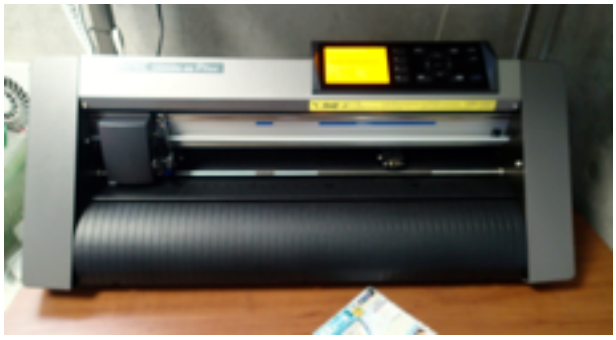
切る道具ではありませんが

■紙折り機

手前に印刷済みの用紙を入れてサイズを合わせ、二つ折り、三つ折り、四つ折りなど希望の折り方を指定してスイッチを入れると、機械が折って写真奥の方から吐き出してくれます。精度はイマイチですので、合わせ目が１ミリ程度ズレる場合が多いです。気になるときは、人の手で丁寧に折るのが正確です。やっぱり最後は人の手！

そしてそして
これが紹介したかっただけかもしれないけど…
最近導入したカッターマシン

■CuttingMaster CE6000-40Plus



正確にはカッティングプロッタと言うらしいですが、これは便利でした！単体で使うのではなく、パソコンにインストールしてあるillustratorというソフトと連動してパスデーターを作って切り抜きを行うのです。
先に紹介した手動の型抜き機と同じ機能ですが、任意の形でA3サイズ内にたくさん並べて切り抜きできるので重宝します。これ以上はマニアックな説明になるので、興味のある方は、販売会社のサイトをご覧になってくださいね。

グラフテック株式会社
http://www.graphtec.co.jp/index.html

こんなに細かい↑足の先まで切り抜きできる

紙を切って何を作るか？

■カードやプログラム

音楽会のプログラム。荷物タグは大量にカッティングマシーンで切り抜いた。とくに丸を切り抜けるのは重宝！
手動だとカッターを使うのでとても手間がかかるところ。

開いたところ。ピアノはストリートピアノをイメージして子どもたちがそれぞれペイントを施しました。カッティングマシーンは、ピアノから覗いているおさかなキャラの切り抜きを担当。

運動会などで、終了したあとに印刷物のプログラムが落ちていたりすると悲しくなりませんか。
そんなことがないように！と手作りプログラムやカードを作ってきました。

　プログラムの大半は職員が作りますが、何かしら子どもが作品に手を入れていこう、という方針に変えてから、子どもたちもプログラム製作をすることで新しい技法を経験したり、運動会や音楽会の行事をより楽しみにするようになってきたのです。

次の写真は、入園式に担任がプレゼントする

『入園おめでとうカード』

です。

デザイン担当の職員が型紙をつくって、数人の手を経て完成します。

カードを開いたところ。ロケットが飛び出す！
ピンキングハサミで周りをカットしています

カード外側・子どもの名前を書きます！

切ったり貼ったり手順良く進めます

雲を切るのは結構手間がかかるので↓

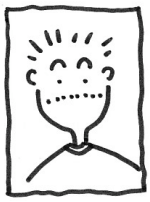
裏に貼るおなまえ記入用シール。手切り

カッティングマシーンに任せます

曲線カッターで１枚ずつ切り抜きを入れたりします

型紙はこんな感じにIllustratorで作成しプリントする

これはどんなカードになるでしょうか？
(^o^)/
カードのご紹介はまた別の機会に



原町幼稚園　園長　鶴谷主一（59）
ＨＰ：http://www.haramachi-ki.ed.jp/
MAIL：office@haramachi-ki.ed.jp
Twitter：@haramachikinder
Instagram：haramachi.k

▶ご感想・ご意見ご質問等ありましたら
気軽に連絡ください。

「幼稚園の現場から」ラインナップ

第１号　エピソード（2010.06）
第２号　園児募集の時期（2010.10）
第３号　幼保一体化第（2010.12）
第４号　障害児の入園について（2011.03）
第５号　幼稚園の求活（2011.06）
第６号　幼稚園の夏休み（2011.09）
第７号　怪我の対応（2011.12）
第８号　どうする保護者会？（2012.03）
第９号　おやこんぼ（2012.06）
第10号　これは、いじめ？（2012.09）
第11号　イブニング保育（2012.12）
第12号　ことばのカリキュラム（2013.03）
第13号　日除けの作り方（2013.06）
第14号　避難訓練（2013.09）
第15号　子ども子育て支援新制度を考える
第16号　教育実習について（2014.03）
第17号　自由参観（2014.06）
第18号　保護者アナログゲーム大会（2014.09）
第19号　こんな誕生会はいかが？（2014.12）
第20号　ＩＴと幼児教育（2015.03）
第21号　楽しく運動能力アップ（2015.06）
第22号　〔休載〕
第23号　大量に焼き芋を焼く（2015.12）2019
第24号　お話あそび会その１（発表会の意味）
第25号　お話あそび会その２（取り組み実践）
第26号　お話あそび会その３（保護者へ伝える）
第27号　おもちゃのかえっこ（2016.12）
第28号　月刊園便り「はらっぱ」（2017.03）
第29号　石ころギャラリー（2017.06）
第30号　幼稚園の音楽教育（その1・発表会）2017.09
第31号　幼稚園の音楽教育（その2・こどものうた）2017.12
第32号　幼稚園の音楽教育（その3・コード奏法）2018.03
第33号　〔休載〕（2018.06）
第34号　働き方改革・一つの指針（2018.09）
第35号　働き方改革って難しい（201812）
第36号　満3歳児保育について（2019.03）
第37号　満3歳児保育・その２（2019.06）
第38号　プールができなくなる！？（2019.09）
第39号　跳び箱（2019.12）
第40号　幼稚園にある便利な道具〈紙を切る〉（2020.03）

福祉系対人援助職養成の現場から㊵

西川　友理

主体的・対話的で深い学び／アクティブ・ラーニング

ここ数年、教育の現場では、「アクティブ・ラーニング」という言葉が頻繁に使われるようになりました。

アクティブ・ラーニングについて、文部科学省が出している文書には「教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。」と書かれています１）。

2012 年ごろから、文部科学省や中央教育審議会が出す大学教育に関する答申にこの言葉が現れはじめ、2017 年の学習指導要領には「主体的・対話的で深い学び」という名前で幼稚園から大学に至るまで、アクティブ・ラーニングを導入することとなりました。

小中高大学ではどんな授業方法が良いのか、様々に授業研究がなされたり、アクティブ・ラーニングの手引書が出版されたり、教員向けの講座が開かれたり、自主的な勉強会が開催されたりと、様々に試行錯誤しつつ、それぞれのよりよい方法を模索している最中だといえます。実際私も、とある大学の授業用のシラバス作成にあたり、ある年度から各授業のアクティブ・ラーニングの方法について、授業内容に合わせて設定した上、学生に公開することになり、面食らったことが

あります。

一方、幼児教育や保育の現場では十数年前から「主体性を大切にした保育」「対話的な保育」という言葉は頻繁に使われていました。2017 年の学習指導要領の改正時には、幼稚園の要領にもこの言葉が入りましたが、小中高大学ほどの混乱はなかったような印象を持っています。

しかし、実際に、何をどうすることが「主体性を大切にした保育」「対話的な保育」なのか、というと、その基準は大変抽象的です。「主体的・対話的な幼児教育（あるいは保育）をしている」という幼稚園・保育園はいたるところにあります。いや、逆に、ありすぎるのです。

「主体性」「対話的」とは？

ある就職活動中の学生が、沢山の園を見学した後、要約 1 つの園の就職試験を受けると言いに来ました。

「どこに見学に行っても“主体性を大事にした保育”って言うてはるんです。本当に、どこに行ってもね。」

「幼稚園や保育園のホームページを見るでしょ。ほぼ絶対、 “子ども達の主体性”とか“子どもの気持ちを尊重した教育”とか“対話を大切にしたかかわり”って書いてあるんですよ」

「でも、だから何をどういうふうに工夫してるっていう、特徴や考えが見られるところは本当に少なかったんです。」

「別に変わった取り組みをしているところがいいとか、そういう意味じゃないんです。逆に変わった取り組みでごまかしているような園はたくさんあるんです。」

「でも、今回就職したいと思った園は違ったんです。“主体性って何だ？”って、先生方みんなで考えて、それを実践に移している園やと思ったんです。」

彼はこの園の理念に共感し、就職試験を受けて見事合格、今ではいきいきと働いています。

幼児教育・保育の場では、小中高大学に先駆けて、「主体性を大切にした保育」「対話的な学び」という課題に取り組んできました。しかし、それが上手に成熟し、今も成長を続けている園と、そうではない園があるように感じています。どちらかというと「主体性」「対話的」という言葉は、様々な保育現場で使われすぎて、言葉が独り歩きし、残念ながら形骸化しつつあるケースも多いのではないか、と思うのです。

保育者の対話の場をつくりたい。

子どもに対する支援について考える時、私は最近、「まずその支援者が、そのような扱いをされたことがあるのか」という事を考えます。その行為のよさ・悪さに関わらず、自分がされたことがある行為ならば、そのように扱われた時にどのような感覚がおこり、身体的な反応があり、思いがわきあがるのかを体感的に理解しやすく、その経験が自らの支援に強く影響するのではないかと考えるためです。

今回ならば、子どもに対してどう対話的に接し、どう主体性を尊重するのか、

という方法論の前にまず、「幼稚園教諭や保育士、保育教諭（以下、まとめて保育者とします）は、対話的な場で、主体性を大切にされた経験があるのか」という点を問いたいと思うのです。

もしもそういった経験が少ないならば、対話的な場を経験し、主体性を大切にしたコミュニケーションを経験してみる場を作れないだろうか。

そう考えて私は、保育者に向けた、対話的な場を作りたいと考えました。

このアイディアを、長年保育士をしている友人に聞いてみました。すると、
「うーん…保育士ってあんまり孤独やないからね…。」
とのお答え。
「どういうこと？」
「女の人が多いし、なんだかんだ言っておしゃべりするから。別に対話っていう場がなくてもええんやないかなぁ」
「そう…いいアイディアやと思うんやけどなぁ。」

実は私は、対人援助者が集う対話の場を２年以上続けています。広くオープンに参加できるようにしているのですが、児童分野の人、保育関係の人はなかなか参加に結びつきません。高齢者分野や障がい者分野の専門職、また子ども分野でも障がい児分野の専門職は、面白がってよく来てくださるのです。
「やっぱり、保育園や幼稚園の先生たちには、対話の場っていらないのかなぁ‥‥」

私の違和感

いやしかし、本当に保育者さんには対話の場をわざわざ設定する必要はないのでしょうか。

確かに、個々人のレベルで見ると、熱い先生、面白い先生、子どもの事を大切に考える先生などはたくさんいらっしゃいます。また、組織全体が元気でいきいきとしている園はあります。

しかし、なにより、私自身の違和感があります。

だいたい、保育士・幼稚園教諭の退職に関するどのような統計を見ても退職理由の上位に「職場の人間関係」があるのです。

それに実際に、職場での人間関係に悩み、話を聴いてほしいと駆け込んでくる卒業生がいます。お話をしに来てくれること自体は全然かまいません。むしろ久しぶりに顔が見られる機会は嬉しいのです。でも、卒業してしばらくたって、新しい社会で新しい社会関係をつくっているだろうに、そこでこんな話を出来る人がいないのか…と思うと、何とも言えない痛みで、ぐっと胸が詰まってしまいます。

また、こんな経験もあります。

ありがたいことに、対人援助や教育、福祉の分野の専門職の皆様の職場や法人に、研修講師として呼んでいただくことがあります。この際、受講生の皆様が同じ事業所内ではなく、その地域にある様々な事業所・法人から集まってくる場合などは、やはり初対面の方々同士ですので、緊張も高い様子。私の講座はグル

ープワークが多く、打ち解けるためのアイスブレイクが必要です。

とはいえ、人と接するお仕事に就いていらっしゃるみなさんです。誰かが口火を切り、話し始めると、徐々に打ち解けていきます。グループ内で発表者を決めたり、発表の段取りを話し合ったりと、恥ずかしがりつつ遠慮しつつも誰かが腹をくくって率先して動いてくださいます。

ところが、ほんとうに稀に、こういったグループワークが大変進みにくい時があります。

いろんなケースがありますが、今まで何度か、保育者だけで構成されたグループが動きにくい、ということがありました。例えば、グループワークの時間が始まったのに、誰も口火を切らず、グループ全員がぐっと押し黙ってしまう。発表者を決めるにも「私はそんなことできませんから…」「いやいや、私も無理…」「わかんないです…」と、遠慮しあう。作業の進め方がわからないが質問をせず、グループ全体が困ったように黙っている。こちらから「大丈夫ですか？」と声をかけるとはじめて「これ、何をどうするんですか」と聞いてこられる。再度解説すると、同チーム全員が「あぁ、なるほど…」とうなづき、やっと作業に取り掛かる…

「そうそう！！」

と、ある元幼稚園教諭さんがおっしゃいました。この方は安本志帆さん。生きづらさを抱える人や幼児から大人まで様々な人との哲学対話を実践しておられる、「対話」のプロフェッショナルです。

「ある幼稚園で、壁にはってある絵を見た時、例えばライオンの絵だったら、みんな同じ向きで同じ表情のライオンが描かれている、なんていうことがあって…」

「私が働いていた園は、子どもも職員も話し合う事をすごく大事にしていたから、そんな絵を貼り出そうものなら、すぐに「なんでこうなるの？」という質問がとんできたと思います。」

「様々な園を見ると、そのライオンじゃないけど、なんだか妙に子どもが“同じ方向を向きすぎている”ような印象を持つ園が時々あって…。そのような保育のあり方に疑問を持たないという保育者の態度は、業務の中でも、同じ方向を向くことが当たり前だったりするのかな？なんて感じてしまうんです。」

‥‥確かに、そういう園で保育者をしている人は、独自の個性や自分なりの考え方で動くよりも、「同じ方向を向く」「同じ支援をする」ことを目指す仕事になってしまうのかもしれません。そのような仕事をするためには周りと歩調を合わすことが大きな目標になりますから、保育者それぞれが「自分の意見を出す」「自分の考えを言う」という振る舞いからは遠ざかってしまうかもしれません。

以上のような私自身の実感に基づくと、やはり、保育者の方々が「対話的、主体的でいられる場所」が必要だと思うのです。そのためにはまず自分の言葉を自分のお腹から、本当の思いを発してもよいと思える安心感のある場、そのよう

な話をしても、きちんと聴いてもらえる場を、保育者自身が体験する必要があると考えます。

3種類の対話

先日、立命館大学で行われた第34回国際障害者年連続シンポジウム「自立生活運動・オープンダイアローグ・当事者研究」において、東京大学の熊谷晋一郎先生と、兵庫大学の竹澤寛先生、それに会場の参加者を交えたトークの中で「対話には3種類ある」という話が出ました。「問題解決のための対話」「共有するための対話」「違いを知るための対話」の3種類です。

一般的に企業や社会的な集団で行われている対話は「問題解決のための対話」です。答えを見つける対話です。

いわゆる共感するとか、理解を深めるような対話は「共有するための対話」です。相手と自分の感覚をすり合わせる、同じ価値観や同じ理解に落ちつく会話です。

３つめの「違いを知るための対話」、これはお互いの認識や考えの違いを知り、相手を知る対話です。

（ただ、私は対話は「～のために行うもの」ではないと思っています。「～のための対話をする」というより、「～という対話になる」という感覚の方が、日々の対話の感覚に近いように感じます。以下、上記3つの対話を「問題解決の対話」「共有する対話」「違いを知る対話」と表記します）

このやりとりを聞いた時に、あ、そうか！と感じました。

この国には、会社や学校における、文明を構築するための「問題解決の対話」がメインストリーミングに存在し、これとともに、家庭や友人関係といった文化的な生活の中での「共有する対話」が存在します。その一方で「違いを知る対話」はとても少ないか、日常コミュニケーションの支障になるものと考えられがちなのではないでしょうか。

特に保育現場はエモーショナルな心の触れ合いが重視されるため、「共有する会話」が多用される現場です。なぜなら、受容的な感情のやり取りは保育の基本であり、そのやり取りが安心した環境の中で行われることは、子どもはもちろん、保育者自身の安心につながるからであり、場の安定に直結するためです。保育者が安定していれば、様々な保育を想定内で行いやすくなります。子ども達の落ち着きを確保することが出来ます。

ですから、安定した場を作る事を大切にするタイプの保育者にとって、第三者との関係性の中に「違いがある」という事は本当に恐るべき、避けるべき非常事態になるのかもしれません。そのような状況になるかもしれない状況に対して、極端に注意深くならざるを得ないのではないでしょうか。だから、初めてあった人、よく知らない人、つまり「明らかに自分と違う所が多くある人」に対して、「違いを知る対話」にならないように、警戒心が強くなってしまうのではないでしょうか。

他者の不在

先日、言語学の論文を読んでいて、なるほど、と思ったことがありました。

ある非常に親切な老人が、ヒヨコを飼っていた。冬の日に、あまりに寒かろうと思ってお湯を飲ませた。その結果、ヒヨコは皆死んでしまった。つまり、「日本人の親切は、自分の感情を相手に移入してしまうものであり、そこにいるのは相手ではなく自分自身なのだ、ということである」「自分は水を飲むのは冷たいからいやだ、きっとヒヨコもいやだろうと勝手に感情移入する。自分の感情を相手に移入し、それを充足させ、それで相手への同情とみなしてしまうのである。」

さらには、

「日本人はひとりよがりであり、純粋に相手の立場に身を置く―つまり同情する―という事が本来的に得意ではない、というよりそもそも日本人にとって自己と対立的な他者は不在であり、相手はいわば自己の延長なのだ。これが日本人の基本的な意識構造をなすものであり、したがってそれは他にも日本文化の様々な局面に姿を現し、日本人の行動様式に深い影響を及ぼしている事が予想される[1)]」

「そもそも日本人にとって自己と対立的な他者は不在」、つまり自分と異質なものに対して、どう向き合えばいいのかわからず、慣れている方法、知っているやり方、常識と思い込んでいる考え方が通じない状況・相手だと思った時に、相手を不在として扱う、という振る舞いは、実は私も思い当たります。いや、もちろん全く無視をする、存在を認めない、という意味ではありません。

「そういう人もいるんだねぇ」「そういう考え方もあるのねぇ」といって、相手の存在を認めたふりをして距離を置く。あるいは、見ないふりをする。あるいは、関わらないようにする。正直に言うと、そういった無視の仕方を、私もしたことがあります。「共有する対話」にならないと思うと、無意識に「違いを知る対話」を避けてしまうのです。

保育者は、古くは太平洋戦争の前から、社会的なニーズに応えて名前や必要とされる業務が少しずつ変化しつつも、機能してきた仕事です。特にその業務においては、子どもや保護者とのエモーショナルな関わり合い、生活の中での関わり合いがその大部分を占めます。理知的・理性的なものが優先される文明性よりも、感情的・感性が優先される文化性の影響を大きく受けるお仕事です。上記したような行動様式も深く影響している可能性があります。

なぜ「違いを知る対話」を避けてしまうのか

「共有する対話」が多い事が良くないという意味ではありません。共有したい、通じ合えたらいいなという気持ちで話をするのは自然なことだと思います。特に保育の現場では、上記したように「共有する会話」が大変重要です。しかし、

「違いを知る対話」になることを避けようとしすぎないほうがいいのかもしれません。

なぜ違いを知る対話は避けたくなるのか。不安定な感情、例えば面倒くささや怖さといった感情が生まれるからだと思います。

何が面倒で怖いのか。相手とケンカになったり、相手を失望させたり、相手に失望したりといったマイナスの感情が発生する可能性があるからではないでしょうか。

なぜマイナスの感情になりやすいのか。「相手に自分の意見を受け入れてほしい」と思っているから、相手が変化してこちらの正しいと思う方に従ってほしいと思うため、ではないでしょうか。

なぜ、相手に変化してほしいと思うのか。相手との違いを知った時、自分の認識や想定を相手の思うように変えることは、大変ストレスになってしまうためではないでしょうか。相手と自分は違う人間であり、相手もまた、変化するには大きなストレスがかかるはずなのに、相手に代わってほしいと思う、しかし、相手を自分の思い通りに変化させることは出来ません。

映画『降りてゆく生き方』の総合プロデューサーである森田貴英さんは、以前、ツィッターで「「私の意見は正しい。相手は間違えている。よって、相手がかわらねばならない」という考えに固執している限り、対話は成立しない」「「対話」とは、「自分が変わること」にこそ本質がある」と述べていらっしゃいました。

心身の障がい、暮らしむきの状態、常識とする生活様式、出身国、性のあり方…あらゆる多様性が認識され、様々な格差がある時代、何が「普通」なのかはっきりしないこの時代に、社会の中で生きて行こうとすると、「違いを知る対話」を避けることでは対応できない事案が増えてきています。

その中で、自分が変わらず、安定し、変化することを避けることは難しいのではないでしょうか。

安定的な環境を目指すよりも、むしろ安心して不安定でいられるような環境、いつでも変化可能な自分でいられる環境こそが大切ではないでしょうか。

「違いを知る対話」に慣れること

では、同じ福祉分野でも、高齢者や障がい者の分野の支援者の人と、保育分野の人は何が違うのでしょうか。それは、高齢者分野や障がい者分野の対人援助者が、否が応でも意見の違う人と「違いを知る対話」をする場面が多い、ということではないか、と思うのです。

本人とその家族の意見が合わない時にどうするか、本人の希望を叶える社会になっていない中でどう生きていくか、社会のあり方と本人の希望の落としどころはどこになるか、ということを一緒に考える。これらの分野の専門職は、支援の中で「自分と違う存在と、どう一緒に存在し続けるか」という問いによくぶつかるのではないでしょうか。そしてそのやり取りの中で、自分も変化しつつ、相手も変化していく体験に慣れていら

っしゃるのではないでしょうか。

しかし、保育分野は、誰かや何かとの違いに出会うと「出来るだけ同じ部分、共感できる部分」を探して、それに寄りそう努力をする。そうして「共有する対話」に結論を持っていこうとする。それが「安心・安全な場の確保」につながる方法になる、という論理が存在しやすい場なのではないかと思うのです。

「違う部分がある、どうしても相いれない部分がある。だけど、いや、だからこそ、あなたと共にいたい」「違いがあるからこそ、お互い一緒に変化しあうことが出来る、この社会でいっしょに生きていける」といった視点は、もともと保育や幼児教育の場面では言われているはずなのです。その手法は、出来るだけ共感的で安定的な場を作る、という方法ではなく、いつでも不安定でいられる、変化できるという安心と信頼のある環境の確保が出来るような方法をとるほうが、子どもにとっても、保育者にとっても、生きやすい場になるのではないかと感じるのです。

さて、では具体的に何をしましょうか。

多様性の現代、違いを喜ぶという姿勢を単なるお題目にせず、どのような子どもであっても安心・安全に多様であっていいと思えるような支援をするためには、まずは保育者同士が、保育者同士の多様性に対して、どのような態度をとるのか、という所だと思います。子どもや保護者が多様になってきていることと同様に、保育者も多様になってきているのです。

そのためには、保育者それぞれが「共有する対話」「問題解決の対話」だけでなく「違いを知る対話」をも安心してできる場の環境に慣れること、そのような対話の文化の醸成が必要ではないかと考えています。

では、具体的にどうすれば保育者に「対話の場」の環境設定が出来るのか、「対話の文化」の醸成が可能なのか、そのためにどういう仕掛けを作る必要があるのか。それらについて、どんなことが出来るのか。

これについては、色々とトライ＆エラーを繰り返しながら、考えていきたいと思います。

引用文献）

１）中央教育審議会　答申『新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～』　　平成２４年８月２８日

２）斎藤伸治「日本語と日本文化のモノローグ的性格について」 アルテス　リベラレス (89), 49-62, 2011-12 岩手大学人文社会科学部

境界あれこれ

15

～　AIと人間の境界　～

かうんせりんぐるうむ　かかし

河岸由里子

はじめに

今回でこのシリーズは最終回としたい。今まで子育てや家族、人そのものに関わる様々な境界を考えてきた。これらは、どれも人間であることから考えてきたものである。

AI の著しい発達、アンドロイドの美空ひばりなど、科学の発達とともに、人間にとって代わるものが次々と発明され、今や人間の働く場への浸食が著しい。人口は増えているのに、職場が減るということは何が起こるのか？これから生まれてくる子どもたちの未来は一体どうなるのか？便利さ、速さ、正確さ、そして低コストを追求する中でこうした危惧を覚え、最後に AI がどこまで人間にとって代われるのか、想像してみようと思う。

AIとは？

AI（Artificial Intelligent）とは人工知能のことで、人間が行う様々な知的な言動の一部をコンピュータープログラムによって人工的に再現したもの、或いはそうした研究分野を指す。知的な言動とは、すなわち脳で考えて実行する活動全般があてはまる。

AIの歴史

人工知能の研究は 1950 年頃から始まる。

第一次人工知能ブームは 1956 年のダートマス会議でジョン・マッカーシー氏により初めて「人工知能」という言葉が提示されたことに始まったとされている。ニューラルネットワーク（注:1）の基盤となる概念の「パーセプトロン」（注:2）が 1957 年に考案され、ニューラルネットワークの研究が活発になった。この時代の研究の中心は、主に迷路やパズル、数学定理の証明など、「推論・推察」に関するものであった。

その後 1960 年代に入ると、単純なパーセプ

トロンの限界（線形分離不可能なパターンを識別できないこと）から、簡単な問題しか解けない（トイプロブレムの問題と呼ばれる）が明らかになり、その後しばらく AI 研究は下火になる。

第二次人工知能ブームが起こるのは 1980 年代になってからである。医療など特定分野の知識を蓄積しておき、質問に答える「エキスパートシステム」と呼ばれる人工知能が生まれ、世界中の企業で活用されて人気になる。このころ日本においても政府主導で「第 5 世代コンピューター」プロジェクトが進められた。多くの日本企業が参加し、人工知能の研究や開発、採用が盛んにおこなわれた。

この時代の AI 研究の中心は、主に「知識」に関するもので、ニューラルネットワークにおいて、「バックプロパケーション（逆誤差伝播）」というアルゴリズムが使われるようになった。しかし、1990 年代に入ると、エキスパートシステムは知識を膨大にため込まねばならず、莫大なコストがかかるため、限界視されるようになり、再び産業界への人工知能採用が下火になる。

そして 2006 年、ニューラルネットワークの階層を深める「ディープニューラルネットワーク」という手法が発表された。これが現在の「ディープラーニング」の始まりとなる。そして、2010 年以降は、コンピュータの性能や容量が大きくなり、インターネットが広く普及して、膨大なビッグデータを管理できるクラウドが発展していくなど、データに関する環境が整備され高度化した。こうしたことによって、膨大なデータを必要とするディープラーニングの研究がより簡単になった。

2012 年に行われた大規模画像認識コンテストでディープニューラルネットワークを用いた人工知能が、他の人工知能の認識精度を大幅に上回り、これが第三次人工知能ブームの始まりとなった。

現在もこのブームの中にあり、AI 研究の中心は、主に「機械学習とディープラーニング」に関するものである。「機械学習」とはデータから学習することで、適切な知的言動を人工的に表現すること、もしくはその研究分野を指す。人間は経験から学ぶことによって適切な知的言動をおこなえるようになるが、機械学習もデータから学ぶことが出来る。その機械学習の一手法として注目されているのがディープラーニング（深層学習）で、画像認識や音声認識等様々な分野に応用されている。こうした研究の成果として、当面の目標が「完全な自動運転」なのである。

AI の定義

色々な定義があり特に厳密に決まっているわけではない。例をあげれば、「人工的に作られた人間のような知能、ないしはそれを作る技術」とか、「人工的に作られた、知能を持つ実態、或いはそれを作ろうとすることによって知能自体を研究する分野」などとされている。

ロボットと人工知能の違い

人工知能は人間における「脳」に相当するが、ロボットは人間における「体」に相当する。もちろん人工知能がロボットの一部として活用されることもある。ただ今の段階ではロボットを持たない人工知能の方がより多く活用されている。

アンドロイド・ヒューマノイドって？

高い知性をもつ人間型ロボット。歴史的には人間に近い外観をもち、機械や電動装置で人間と同じような作業ができるものをさしていた。漫画やアニメーション、また SF の中で活躍しているロボットがそれで、人工的につくられるので人造人間（artificial man）、人間に似たものであることからアンドロイド、ヒューマノイド（humanoid）などと呼ばれる。有機体と機械を合成したサイボ

ーグも広義のロボットといえ、さらにからくり人形(自動人形 automata)の類もロボットの先駆形態と考えることができる。

「強い AI」と「弱い AI」

強い AI(Strong AI)とは、人間が行う知的活動を完全に模倣出来る AI で「汎用的な AI」(AGI: Artificial General Intelligence)とも表現される。これは人間の様に考えて行動できるもので「ドラえもん」の様に心を持つ人工知能のことである。しかし、現在の技術ではまだこのレベルまでには達していない。

一方弱い AI(Weak AI, Narrow AI)は、特定の処理のみを実現する AI で、「特化型 AI」とも呼ばれる。心を持たず、有用な道具として使われる人工知能のことである。

どんなところに使われているか？

①画像認識

・物体認識：識別や、物体の意味の言語化等。

・不良品の検出：部品の検品等

・異物混入の検出：食品の製造ラインでの異物検出など

・病変の検出：レントゲンなどの医療画像から病変を見つけるなど

・自動運転：完全自動運転に向けて競争が激化しているが、一部自動運転はすでに始まっている。

②音声認識・自然言語処理に関するもの

スマートスピーカー：音声で問いかけると、何らかの回答を話す製品。Google Home など。

チャット Bot ：Web サイト上で質問が投稿されると、それに対する適切な回答を自動的に返すことで、会話を成立させるもの。例えば女子高生 AI[りんな]など。

これらは最適解やルールを見つけ出すなどを行ってくれる。

③ロボティクス

ゲームの自動対戦：2015 年に人間のプロ囲碁棋士を AI が破ったとして有名になった。これは、単純に二次元のボードゲームではある。より複雑なもので言うと、スクウェア・　エニックスとオムロンが共同開発した卓球ロボット「ふぉるふぇうす」にはスクウェア・エニックスがゲームて培った AI がオムロンの卓球ロボ tt 二搭載されていて、人の成長を促すように相手をしてくれる。（ https://www.jp.square-enix.com/company/ja/news/2019/html/bd6d93dcca44e934783215090632cd72.html）

AI に我々人間は何を求めているのか？

人間は、科学の発達とともに、様々な便利さを享受してきた。移動に関して考えれば、大昔から船に乗っての移動や馬に乗っての移動があった。少しでも速く、遠くへ行きたいという人間の思いから、馬車、蒸気機関車、自動車へと発展し、もっと速く、もっと遠くへとの思いから、電車や新幹線が生まれた。そしてさらに空まで飛べるようになり、宇宙へと進んできた。コンピュータの開発に伴い、鉄道、飛行機やロケットの精度は格段に上がり、安全な運航が保障されるようになってきた。

人とのやり取りも、手紙から電話、電信、そして今ではパソコンやスマホによって、画像でも何でも瞬時に送れるし、スカイプなどで相手と画像で顔を見ながら話も出来るし複数での会議も可能になった。待ち合わせをしても、遅れるなどの連絡を瞬時にできるため、連絡が取れぬまま待たせる心配も無くなった。その反面、早め早めの行動と言うのが減ったようにも感じるが。

何か調べ物があれば、ネット検索や Kindle で書籍を見ることも出来るようになっている。情報を得ようと思えば、色々なところにアクセスが出来、わざわざ図書館など、あちこち出向いて行かなくても良い事が増えた。

お金も通帳もネットバンキングでは必要なくなっているし、買い物もネットで出来るようになった。宅配便もオンライン決済で送れるし、荷物の配送状況もネットで確認できる。世界中のものをネットで買えるし、世界中の地図、街の様子もネットで見られる。レストラン情報も世界中の情報を見ることが出来る。

とても便利になり、何もかもが素早く対応されるようになったのは、我々人間が求めてきた結果であろう。そうした機械的な進化があっても、人為的なミスと言うのはつきもので、人為的ミスを減らすために、工業用ロボットや前述の商品検査、画像認識など AI が発展してきた。

我々人間は完璧を求め、AI 研究を続けてきた。ミスがなく、完璧であること、素早いこと、それに関して人間は AI に勝てないのかもしれない。

しかし、人間はミスをするからこそ、不完全であるからこそ、科学の進歩に貢献してきたともいえるのである。

AI は何処まで人間に近づけるのか？

ドラえもんの様に、涙を流したり喜んだり、失敗したりする人間のようなロボットが出来たら、子育ても人間に代わって出来るようになるのかもしれない。機動戦士ガンダムが TV で放映されたころ(1979 年)、ロボットが二足歩行できるようになるのは遥か先だと言われていたが、半世紀も経たないうちにアシモ君のように走れるロボットが出来た。ボストンダイナミクスの人型ロボットは宙返りするし、犬型ロボットはドアを開けることもできる。

（https://japan.cnet.com/article/35143121/）

今人間がやっている仕事の中で、AI によってとって代わられるかもしれないという仕事には次のようなものがある。

銀行の融資担当、スポーツの審判、不動産ブローカー、レストランの案内係、保険の審査担当者、動物のブリーダー、電話オペレーター、レジ係、カジノのディーラー、ネイリスト、集金人、パラリーガル、ホテルの受付係、仕立て屋、時計修理工、映写技師、等々。（オクスフォード大学認定資料から）

長崎県のハウステンボスには、ロボット化されたホテルがある。公認心理師試験のための現任者講習でも、パソコン音声とアニメーションによる授業があった。ということは、授業などもいずれは人間がやらなくても良くなるということではないか？学校の先生方が頑張っているものの、時々ニュースになるような教師の問題が公教育で続けば、AI にとってかわられるかもしれない。薬剤師も要らなくなると言われているし、今小学校で授業が展開されている英語教育も、ポケトークなどの翻訳機が進化すれば必要なくなるだろう。実際スマホで何十か国もの言語に変換できる無料ソフトがある。小学校でパソコンのプログラミングを学ぶことになったが、それも必要なくなるのではと思う。ソフトがどんどん作られている今でも、わざわざプログラミングを知らなくても、出来ることは多いのだから。

色々な職業が、今後徐々になくなっていくだろう。完全自動運転になれば、電車や自動車、飛行機などの運転手やパイロットという職業も無くなるのかもしれない。家事を代行してくれるロボットも出来てきた。食器は食洗器が、洗濯は洗濯機が乾燥までやってくれる。機械から出して片付けるのはまだ人間の手で行うことになるが。お風呂も自動で沸かしてくれるし、自動洗髪機もある。入浴介助機械もいずれ自動でできるようになるのではと思う。装着型の介助ロボットスーツがあるが、これもいずれは完全ロボット化するのではと思われる。

心理学で、クロスマザーとワイヤーマザーの実験というものがある。アカゲザルの赤ちゃんに母ザルと同じ大きさでボディーに布を纏わせたもので哺乳機能がないものと、ワイヤーで作ったボディーに哺乳瓶を持たせたものを用意し、赤ちゃんがどっちに行くのかという実験である。赤ちゃんザルはクロスマザーと多く時間を過ごし、お腹

が空くとワイヤーマザーの方に行き空腹を満たした。恐怖体験をさせるとクロスマザーにしがみつき、クロスマザーを隠してしまうとパニックを起こした。という結果から、子どもにとっては、柔らかく暖かいという感触が必要で、ただ授乳だけされても、愛着は育たないというハーローの有名な研究である。

しかし、科学の発達とともに、アンドロイドがより人間に似せて作られ、抱っこするだけではなく、体温と柔らかさ、声掛け、授乳といった状況を、実際の人間の様に出来るとしたら、子育てが苦手で、子どもを可愛いと思えない愛着障害の母親の代わりに子育てをしたり、不足する保育士の代わりになったりする時代が来るのかもしれないと思えてくる。

人間は一体何のために AI を開発し、ロボットを作っているのだろう？このまま、100%とは言わないまでも完全・完璧を求め、速さを求め、不完全な、愛すべき人間らしさを非とするのであれば、いずれ、ターミネーターの世界になってしまうのかもしれない。もしロボットが、AI の進化と共に、ドラえもんのような感情を持つ、強い AI となって、人間のようなアンドロイドの体を持つようになったら、人間はそれをコントロールしきれるのか？ハッキングされ、情報漏洩が今でも取り沙汰されているくらいである。強い AI が暴走し始めることがあったら一体どうなるだろう？

便利さ、完璧さ、ミスを防ぐことはとても大事なことではある。しかし、失敗し、ミスし、不完全な人間を守らなければ、人類の未来は無くなるかもしれない。地球温暖化が進み、地球に人間が住める環境が無くなったとしたら、そこはロボットだけの世界になるのかもしれない。酸素も要らないロボットにとっては、エネルギーさえあれば生きていけるかもしれないから。AI ロボットに任せることと人間がすべきことの境界をシッカリ引かないといけないのではないか？複雑な感情を持ち、人情があり、変化に適応できる人間の長所、新しいものを生み出す力、発想力、想像力、そして創造力、これは人間だからこそではないのか？計算で、プログラムすることで、データを積むだけで学習をしていく AI と人間の脳に機能的な違いはないのか？

人間の脳はまだまだ未知の部分が殆どである。学習に関しては人間の脳も結局ニューロンの電気信号で学習しているので、仕組みとしては AI と同じである。そういう意味では AI と人間に機能的な違いはない。人間がコストをかけ、人間と同じ様に、心を持ち、考えることができ、創意工夫も出来る AI を持ったロボットを作れたとしたら、人間の定義は一体何なのだろうか？ 血が通っていることか？肉体がもろくて壊れやすいことか？病気になったり、怪我をしたり、痛みを感じたりすることか？老いとともに肉体も脳も徐々に衰えて行くことか？機械にももちろん故障したり壊れたりということがあるし 100%完璧な部品は無いから、出来たロボットも完璧ではないだろう。それでも人間よりは頑丈で長持ちするかもしれない。

ちょっと前まで SF の世界でしかなかったことが、どんどん現実化している今、我々は、未来の子どもたちのために、注意深く人間と AI それぞれの定義を定め、適切な共存を模索して行かねばならないだろう。そして、人間であること、人間らしさを敢えて意識し、大事にしていくことが、人間が生存する意義になるのではと思う。

注１：

ニューラルネットワーク（神経網：neural network、略称: NN）は、脳機能に見られるいくつかの特性に類似した数理的モデルである。

注２：

パーセプトロンは人工ニューロンやニューラルネットワークの一種。

参考資料：

AI 機械学習の概念、一色政彦，デジタルアドバンテージより。

対人援助学マガジン第 40 号

生殖医療と家族援助

～家族マイノリティの一考～

荒木晃子

前々号で、–多様なジェンダーの苦悩–とサブタイトルをつけ、アウティングが原因でLGBT 当事者に生じた事件とそのリスク、及びアウティングがもたらす苦悩は当事者の死に直結する危険性があることを紹介した。

多様な「性と生殖のマイノリティ」

ときに、病、身体機能の不全・特性と共に生きる少数派の当事者を、〇〇におけるマイノリティと位置付けることがある。そういった意味において、LGBT 当事者も社会的には何らかのマイノリティといえるであろう。この前提に、本稿では、「セクシュアルマイノリティ」を LGBT 当事者に限定する呼称ではないことを先述する。

心とからだの性別違和、性自認、性的指向の他に、生殖器官、生殖機能の不全・特性など、いわゆるセクシュアルな意味におけるマイノリティ当事者には、LGBT を含めその要因となる疾患、身体の性の構造・つくり、身体機能の不全・特性を持つ多様な人々が存在する。一方、筆者がアライとして活動する中で、マイノリティと表現するにふさわしくない（と感じた）LGBT 当事者や、同性の両親と暮らす子どもが“寸分にも両親をマイノリティと思っていない”家族と出会う機会を得た。「（おそらく自分は）皆が言うところのマイノリティのカテゴリーに属している自覚?はあるがその実感はなく、本当のところ、自分はマイノリティとは思っていないのです」と筆者に語った当事者とも出会った。からだと心の性別違和、性自認、性的指向を前提に、LGBT 当事者を「セクシュアルマイノリティ」と称するその根拠とは何なのか。多様なからだと心の在りようを持つ個人を、マイノリティという括りで呼称することに、筆者は今、一石を投じたい思いに駆られている。

過去にさかのぼれば、本連載の創刊号に「国内の不妊に悩む当事者の約 3 分の一にあたる約 50 万人が不妊治療を受けている」と記述した。その頃は、（主に女性を対象に!）約 10 人にひとりが不妊症といわれていたとの記憶がある。あれから 10 年を経て生殖医療現場の状況は大きく様変わりした。2019年現在、不妊症患者は約5～6人にひとりといわれ、男性不妊に特化した国内の生殖医療施設の予約は数か月先との盛況ぶりだという。かつて女性の問題とされていた不妊症の要因は、その後の科学研究により、多くの男性にもあることが明らかにされたのである。

かつて、サイレントマイノリティと（筆者が）称した不妊当事者を、いまだにマイノリティと称することに、現在は戸惑いを感じると同時に、感慨深い思いがある。

こころはマジョリティ？

果たして、異性間で子どもを/家庭を持ちたいと願うことと、同性間で同様に願う、その心理状態は同じではないのか。からだと心の性別違和があっても無くても、性自認が如何様であっても、性的指向がどの性に向こうが向くまいが、同様に共通しているといえるのではないだろうか。例え自身がどのような状態・状況でマイノリティであっても、子どもを/家庭を持ち、親になりたいと願うその心理は、決してマイノリティ（＝少数派）とは言えない。唯一マジョリティと異なるのは、子どもを妊娠/出産するために必要な「生殖の条件」、つまり、精子、卵子、健康な子宮がその関係にあるか否か、のみではないだろうか。この 3 つの条件が揃えば、少なくとも「生殖におけるマイノリティ」と称することはできず、性に関しても本人の自覚がなければセクシュアルマイノリティにカテゴライズすることはできないのではないだろうか。

うえの疑念は筆者だけに生じたものか否かは不明だ。しかし、実際に LGBT 当事者の家族と出会い、我が子を見守る同性カップルの親子と共に過ごした時間には“一瞬にも感じることのなかったマイノリティ感”が彼らの本質に思えてならず、浮かんだ疑念であることは確かである。

成人しパートナーと暮らす家庭に子どもを迎え、親になり共に子どもの成長を見守り続けたいと願う人々に対し、性別や社会的カテゴリー等でその善し悪しを判断する権限を何人も持たない。この世に生を受けたすべての人には、個人が尊重され、幸福を追求する権利が保障されていることを日本国憲法第 13 条は定めており、憲法第 14 条には法の下の平等が記されている。ここで今一度、互いを人生のパートナーに子どもを育てる家庭を築いた LGBT 当事者の家族を一考し、脳裏に浮かぶ疑念を掘り下げてみたい。

養子＋提供精子で家族をつくる

A 子さん（30 代前半）とB子さん（30 代後半）はレズビアンカップル。西日本のある地域で幼い女の子と 3 人で暮らしている。女児は A 子さんの卵子と「匿名の提供精子」で作成した受精卵を B 子さんに移植し出産した B 子さんの実子である。かつて A 子さんは重篤な子宮疾患が原因で、子宮を摘出し子どもが産めなくなったのだという。戸籍上（法的に）は子どもを出産した B 子さんが実母だが、血縁上（医学的に）は A 子さんとも親子関係にあるといえるため、多様な意味で「ふたりの子ども」であることには違いない。

また、B 子さんは A 子さんと養子縁組を結んでいたため、家族構成は、「親である B 子さんが、養子の A 子さんと、実子の女児と三人で暮らすシングルマザーファミリー」というところであろう。事情はどうあれ、共に仕事をしながらの子育てはご多分に漏れず大変で、「この子がいるとまるで毎日が戦争のようです！」といいつつ、日常に追われながらも家族で暮らす幸せを感じる日々を送っているという。くるくると元気に走りまわる子どもに目を細めるふたりの背景には、どこにでもありそうな家族の日常を垣間見た気がした。

家族のマイノリティ

A 子さんと B 子さんは共に女性のため、その関係に子どもが生まれることはない。A 子さんには子宮がないため、妊娠/出産は B 子さんに限定されるが、いずれにしても A 子×B 子の 2 者関係で子どもを産むことは不

可能である。ある日、当事者が集まるイベントで 2 人は出会い恋に落ちた。互いに離れがたい思いが募り、その後共に暮らし始める。共同住宅の賃貸契約書にはふたりの関係を「姉妹」と記入したという。事前に LGBT に理解のある不動産業者を探したが見つからなかったからだ。引っ越し時には、隣近所に「姉妹です」と挨拶した。家族となったふたりは共に子どもを育てたいと思った。役所では特別養子縁組の相談を、とある生殖医療施設では精子提供の相談をしたが、いずれも「婚姻関係がない」という理由で断られたという。

ふたりは悩んだ末、やむをえずパートナー関係を養子縁組で結び、B 子さんが妊娠/出産するため、ネットで匿名・無料で精子を提供する男性にアクセスし提供を受けた。「“私たち 2 人”の子どもを持ち、家族になって社会で暮らすには、この方法しかなかったんです」と訴えるように語りつつ、互いにうなずき合う二人が今も印象に残っている。

2 人はレズビアン関係にあり、性に関する問題は（二者関係に）ない。対して、同性婚を認めない日本では現状、2 人の関係を保障する法律はない。未婚同志の二人が実際にパートナー関係を結んでいても、戸籍上異なる性別でなければ、婚姻という社会的契約が結べない。婚姻関係が結べなければ、家族として暮らす社会にその保障を得られることはほぼないに等しい。一例をあげると、住居や保険など生活に必要な契約、有形無形にかかわらず共同で購入した（一部を除く）資産の所有権及びその相続、入院など医療に係る同意や承認などそれらは多岐に渡る。例え、2 人の関係に「性に関する問題」はなくても、その「関係性に生じる問題」、表現を変えれば、「社会的関係で生じるマイノリティとそのリスク」は計り知れず、時にそれは子育てや子どもにも影響が及ぶのである。

一方、生殖に関しては、双方の合意で無事 B 子さんが妊娠/出産したため、A 子さん個人にある不妊問題は、ふたりにとっての問題とはならなかった。しかし、卵子と子宮はあっても、精子がなければ子どもは生まれない。生殖に関しては、二者関係で解決できない医学的な問題が残る。通常、異性カップルの「精子がない」生殖の問題は、生殖補助医療にその答えを求める傾向がある。男性不妊の問題解決のため第二次世界大戦終了後まもなく始まった「精子提供という生殖医療技術」である。現在、それを多くのレズビアンカップルが子どもを妊娠/出産する手段として利用し出産するケースを確認し、筆者は複雑な思いに駆られている。

答えのない自問自答

カップルが切望した子どもの誕生を、筆者は無条件に悦ばしく思う。ふたりの合意で生まれた子に、彼らは親の責任を果たすだろう。やがて子どもは成長し、いつか親の役割を終える時が訪れる。人は世代を超え日々のいとなみを繰り返す。成人したその子が“自分も親になろう”としたとき、自分のルーツの空白をどのように捉え、それをどう埋めようとするのだろうか。その揺らぎを誰がどうやって支援するのか、またできるのか。性と生殖のマイノリティを克服した同性カップルに向き合い、新たな疑念が浮上した。親となったふたりが将来直面するであろう“子どものルーツの空白という葛藤”への支援と法整備こそが、社会が備えるべき今日の営みと責任なのではないだろうか。悩みはつきない。

高齢者とのドラマセラピー

尾上 明代

９．この瞬間を即興で生きる

高齢者施設におけるデイサービスで実施しているセッションについて連載してきた。参加者は８０－９０歳代で，これまでの最高齢は１００歳の方であった。「認知症」と診断されている方も少なくない。ドラマ的なゲームや物語を演じ合うプロセスの中で，コミュニティーが作られ，かつ一人一人の個性が際立ち，創造性が発揮される。たくさんの笑いが共有され，セッション後，皆さんは，より生き生きとして帰って行かれる。もちろん，そのように意図的に導くドラマセラピストがいるのは事実だが，この連載の中で証明されたのは，上記の方々のさまざまな「力」であった。セラピストもエネルギーをいただいている。逆に言えば，普段は隠れて見えないそのような力やエネルギーを，ドラマのセッションが顕在化させるということなのだ。

今号は，このシリーズの最終回となるため，セッション内容を概観し，そこで起きていることを改めて考えてみたい。

＊この施設でのセッションの流れ

内容は，より効果的にするため試行錯誤を重ねながら，近年ではセラピストが演じる全員向けのパフォーマンスと，それに続いてセラピストのストーリーテリング後に参加者自身に演じてもらうセミ・クローズドセッションという流れに落ち着いている。以下，解説する。

１　パフォーマンス・セッション

まず大広間で利用者全員に向けて，２０分くらいのワークを行う。ここでは，皆さんが受動的に「見る」だけにならないよう，いろいろな感情を表情で表現する「顔体操」から始めて，可能な限り観客参加型のパフォーマンスを私達セラピストが実施する。

日本のことわざを当ててもらうゲームでは，私たちの演技を一生懸命に観察して能動的に答えて下さる。「当てる」という目的があると，身を乗り出して（というか，気持ちを乗り出して！）くれるので雰囲気が高まる。出題の方法として，例えば「焼け石に水」とか「犬も歩けば棒に当たる」などは，言葉通りの情景を演じる（わかりやすい！）が，「可愛い子には旅をさせよ」とか「鉄は熱いうちに打て」などの場合は，その内容が表している状況をミニドラマにして演じ，当ててもらう。当然，後者の方が難しいが必ず誰かが当ててくれる。有名な歌の歌詞の内容を演じて当ててもらうこともある。外国の迷信を紹介するコーナーも作った。毎回，変な迷信を調べる私たちも楽しんでいる。ちなみに少し紹介すると，メキシコでは「花嫁が真珠をつけると結婚生活は不幸になる」そうだ。また韓国には「大きな試験の前に髪の毛を洗ってはいけない」「恋人から靴を送られると別れることになる」など面白いものがいくつかある。一緒にいる施設のワーカーさんたちも楽しんでくれる。

その後，古今東西のお話の中から毎回違うものを選んで，その日の「ドラマ担当」職員と私たちで演じる。このときも，最後の解決方法を観客に募ったり，一緒にできるアクションは，その場に座ったままでやっていただいたりと，なるべく「受け身」にならないように工夫している。いつも一緒に過ごす職員が演技をしている様子を見るだけでも意外性があるようで，楽しく見て下さる方が多いと感じる。最後は「幸せなら手を叩こう」の歌を全員で歌いながら，実際に手を叩いたり，足を鳴らしたりする。三番の歌詞は，いつも即興でその日のおとぎ話の内容から作る。例えば桃太郎のときは「幸せなら，きび団子食べよう」とか「幸せなら鬼退治しよう」などと歌う。

２　セミオープングループ・セッション

＜ジェスチャーゲームと自発性＞

後半は希望者を募って，数人から１０人前後で別室に移り，ここでは見るだけなく実際に演じてもらう。好みを聞くゲームや，このマガジンで何度か紹介した架空のものを手渡すゲームの後は，たいがいチームに分かれてジェスチャー当てをする。しばらくの間，お題はちょうどよい難易度で楽しめるものをセラピストが決めていた。例えば歯を磨く，洗濯物を干す，夕立に会うなどである。

しかし最近では, 参加者に一緒に考えてもらうようになった。例えば卓球, めんこ, 犬の散歩, 富士山のご来光を浴びる, などが出題された。トレーニーの岩崎貴子さんの報告によると, お題を考えること自体が大変有効に働くことがわかる。いつもより積極的になり良いアイディアを出してくれた人が, 終了時「楽しかったわ！」とセラピストの手を握って帰るということがあった。また, ある初参加者は,「相手のチームがわからないような難しいのを考えましょうよ！」とノリノリで,「デイサービスにこんな楽しいプログラムがあるなんて。本当に楽しかったわ！」と言って帰られたという。施設の職員からも, お題を考えるときは皆さんが生き生きしてくるという発言があった。認知症の進行に伴い, 自発性が減っていくことは事実なのかもしれないが, このようなゲームが,「与えられたもの」を受けいれる高齢者の日常と違って大きな刺激になり, 参加者の自発性を活性化したのであろうと考える。またお題を思いつくのも, 演じるのもその場の「即興」であり, 瞬間瞬間を生きることなのである。

ドラマセラピーの重要なルーツを創った一人である J. L. モレノは, 自発性と即興は同じものだと言う。モレノは, 言われたとおりにする・ある目標に向かって進む・社会的に認められた形になるよう努力する, などは全て死に至る活動であり, そこには抑圧と弾圧しかないと述べる。反対に, これまでやったことのないことを行う・今までのやり方と違うことする・今までなかったものに向かう, というような心情こそが創造的な方向であり, また人間を真に解放する力であり, これが自発的状態にあるとしている。そして, 多くの人がその状態になっておらず, 死んでいるも同然だ, と力強く訴えている。これは私たちの生きる指針となるが, 人生の終盤にいるであろう高齢者にとっても, いや高齢者にとってこそ意味深いことばであると思える。またモレノは, 脚本通りに完成させる演劇を批判し, 即興で作り上げるドラマの重要性を強調している。彼の即興と完成に関する主張を簡潔にいうと次のようになる。

> 作り上げる過程こそが大事であり, 作り上げたもの・完成されたものは人間を離れ, 人間を抑圧する。瞬間の芸術, つまりこれからどうなるかわからない即興の瞬間の連続が芸術であり, 完成されたものはその抜け殻でしかない。人生も同じで, 不明, 不安だからこそ, 意味・意義がある。完成されたものはその結末であり意味はない。

完成されたものは芸術ではない, という考え方はデューイの芸術論と同じ考え方だ。彼は, 美術館に「作品」として収まってしまっているものは, 芸術ではないと主張している。その意味で考えれば, ドラマセラピーに限らず, すべての心理療法は生きている芸術であると言える。

＜語りとドラマの力＞

そして後半のセッションでも毎回, さまざまな昔話やおとぎ話を使う。まずポイントとな

るのは,その日にやるお話をはじめにセラピストがストーリーテラーとして語ることだ。私が自分の特技を活かして小学校や児童養護施設でやり始めたものだ。紙芝居や絵本の読み聞かせとは違い,身一つで語るので,現実的なブツは何もなく,こちらの演技力と表現力だけが勝負であり,参加者の想像力を信じて語るのである。これまでの経験では,進んだ認知症で参加は無理だと職員から言われた方たちも,熱心にしかも集中して聴き感想を述べて下さった。たとえすぐに,その内容を忘れたとしても,今このときグループのメンバーとともに架空の世界に生きて遊ぶこと自体に意味がある。

セッションではその後,実際に配役を決めて全員に演じてもらう。現実ではなかなか自発的に言葉を交わして交流しない方々も,架空の役を通して関わる中で実際の感情を表現したり親しみを感じあったりする。ここでのもう一つのポイントは,モレノの言うように,物語のあらすじに沿って始めても,演技は即興で行ってもらうので「瞬間の芸術」になり,結末もどうなるかわからない点だ。その様子は,過去の連載で記したので今号では割愛するが,参加者が来たときより明らかに元気になって帰っていく姿を見ると,いかに自発的・主体的な活動が気分を高めるかが証明されたように感じる。これはもちろん高齢者だけではなく,どのような対象者でも同じである。

また,演じることで五感や記憶が刺激され,過去を思い出す人もいる。昔話には自然の情景が多く出てくる。それらを想像しながら演じたあと,疎開していたときのことを語ってくれる人や,長年帰っていない故郷を思い出して,その山や川の景色,食べ物などについて熱心に語り出す人,子どもの頃の出来事や家族の話をイキイキと話す人も多い。大好きな故郷の民謡を歌い出す人もいた。身体を通して演じることの力でもある。

＜想像力と小道具＞

また,私はどの対象者のセッションでも小道具や衣装などの現物は,あえて使わないことが多い。人の想像力は偉大で,それらがなくても十分以上にリアルな情景が思い浮かび,現物がないからこそ,ドラマの力をより楽しめることを参加者に知ってもらいたいからだ。想像力を使うゲームや演技に慣れた皆さんは,当たり前のように新しい役を創造的に演じる。ある日,白雪姫を演じてくださった A 子さんは,「夢のようなもんでしたよ。夢にもお姫様になるとは思いませんでした！」と初めての「体験」に高揚している様子だった。

一方で,現物の力も否定できない。現物の小道具等があることで,物語の筋や流れがよりはっきり理解してもらえることも事実だ。そこで,一つだけ現物を使い,あとは想像力だけで進めるという方法を取り始めた。白雪姫のときにりんごだけ本物を使うなどである。(もちろん,「毒」りんごではないが。)現物は現物なりの威力があり,意地悪なお妃様は,意気揚々と白雪姫にりんごを勧めたりする。

ある日シンデレラ用にトレーニーがおもちゃのティアラをもってきて,かぶってもらったところ,演技者の気分が良くなったように見えた。しかし,周りのメンバーが「あら素敵,お似合いよ」などと言っても,かぶっている本人が自分の姿を見られなかったので,効果が

半減したと思い，次の機会には鏡で自分の姿を見てもらうことにし，全員にかぶることを誘ってみた。男性の参加者がしばらくいない時期であったが，ティアラより冠が良いという人もいるはずだと両方用意した。予想通り，冠で王子様になることを希望した女性もいたが，多くはティアラを選んだ。鏡に写った自分を見て，顔がぱっと明るくなった人が多い。お化粧の効果に似ている。あとで感想を聞いたところ，７名中，嬉しかった方が５名，自分をかわいいと思った方が４名だった。

そしてセッションの最後には，円になったままで全員が手をつなぎ，「幸せなら手を握ろう」という歌詞にして，収束の儀式として歌っている。全体セッションのときと同じメロディーなので良いと思ったからだ。ぎゅっぎゅっ，と歌詞の間のリズムに合わせて握り合うとき，皆さんは必ず笑顔になる。唯一の現実的な触れ合いのときだ。ドラマで心身が温まり，親しみがより湧いていて，それを互いに確かめているような感覚になる。

以上，２つのセッションの流れを紹介した。

＊セッションでは「別人」

ドラマのセッションに参加開始してから数年経つＡ郎さんは，持ち前の豊かな表現力と剽軽さで周囲を明るくして下さる。例えばジェスチャーゲームで「口紅をつける」というお題のときも，ユーモアたっぷりに唇に紅をさし，グループの雰囲気を盛り上げてくれた。当初から浦島太郎や一休さんなどの主役を務めたが，セリフは自発的で，ノリノリの演技をする人だった。途中，施設の職員から「認知症の症状のせいで参加が難しくなった」ということでお休み期間があったが，その後カムバックし，再びレギュラーメンバーとなっている。

岩崎さんは，Ａ郎さんについて以下のように記録している。

> 入室からにこやかで，自発的に自己紹介をされます。架空のものを手渡すゲームでも，自分の番のときは，その時間をじっくりと味わう姿を見せて下さり，とても優しい表情をされています。ご自身が理解できた中で，一生懸命にドラマに関わって下さいます。その姿勢に生きるエネルギーを感じます。この時を一生懸命に取り組みたいという意欲がひしひしと伝わってきます。

このようなＡ郎さんの参加でセラピストが助けをもらっているように感じるという。ゲームでＡ郎さんが答えを言う場面はないようだが，他の参加者が当てると「すごい」とその人を褒めたり，セッションの最後には「今日は皆さん，ありがとう」と感謝のことばを述べる。これについて岩崎さんは「Ａ郎さんは，成熟されている良い面をグループに返してくれています。他のメンバーはこのような参加態度をとても評価しているのを感じます。」と報

告している。A 郎さんのもつさまざまな力,セラピストの感性,そしてお互いを尊重するグループの力が同時に発揮されて,このような場が形成されているのである。

ところが,施設で私がときどき遭遇した A 郎さんの普段の様子や職員から聞いた話は,セッションでの A 郎さんとはかなり違っており,職員たちはドラマグループでの A 郎さんを「別人のようだ」と話す。A 郎さんに限らず,普段いわゆる「認知症の症状」があっても,ドラマセラピーではそのような状況にはならない人がこれまでも複数いた。そして毎回,交代でセッションに参加する職員たちは,利用者たちの様子を見ると必ず驚きのことばを口にするのである。いくつかのコメントをあげる。

いつも居眠りをしている人がイキイキと表情豊かに自己表現していた。
進んだ「認知症」の人が物語の流れを理解した上で演技をしていた。
役を通して（普段はわからない）その人の考えていることがわかった。
他者との穏やかな関わりを見ることができて貴重な体験だ。
日常ではトイレに行くことばかり頭にある人がセッションの間は集中している。
皆さんは全体セッションでも笑うが後半グループでの笑顔は優しい。

なぜだろうか？演じること,表現することの効果はもちろんあるが,それに加えて,何よりも重要な点は,評価されないところで好きなように過ごせること,しかし一人一人が自分の表現や存在をしっかり承認されること,と言えるだろう。また,そのような安心できる場では,当然自発性が引き出されて主体的な言動ができるので,自己肯定感も高まる。即興力を使うドラマやゲームでは「今ここ」に存在しないわけにいかないので,当然集中できる。

だとすれば,そのような場があれば,もっと QOL を上げることができるといえる。しかし毎日ずっとそのような場をつくり続けることは,施設でも家庭でも難しい。だからこそ,そのような時間を提供できることは嬉しい。

＊ドラマで多面的にかかわる

大広間で全員一緒に過ごすときは,そもそも個人個人の顔が見えるような交流にはならない。皆で物理的に一緒にいるが,何かを見たり参加したり集団行動をしているだけで,全員で A さんはこういう人,B さんはこういう人というパーソナリティーを共有する場ではない。もちろん,隣同士で座る人たちと,個人的に仲良くなることはあるだろうが,全体として,自分を他者とは違う,1 人の個性をもった「こういう人」と表現する機会はない。そうした機会を提供しているのが,たとえばドラマセラピーの時間なのである。

考えてみれば,高齢者施設でなくとも,そもそもそのような場は世の中にあまりない。た

とえば職場などでの交流は,その仕事を通して,ある人の部分的な側面を知るにとどまる。主にその仕事を遂行するために表現されたパーソナリティー同士でお付き合いをするのが普通である。つまり,ドラマ活動のように多面的に,人のさまざまな側面をお互いに知り合い,交流する機会は貴重だと改めて思う。そういう意味では高齢者施設も然りだが,こういう場こそ,それが必要とされている。特に援助者が,被援助者の一側面だけに注目しない関わりが言うまでもなく重要だからである。利用者同士の交流促進だけでなく,職員の利用者への理解が深まり新しい視点が提供できている点は決定的に重要である。さらにはセラピストが参加者に助けられたり,セッションが施設職員たちの癒やしになることもある。ドラマセラピーでは参加者全員,どの立場の人もひっくるめて扱える。同時に変容が起きるダイナミックな場なのである。

＊私のセッションの原点

私の高齢者向けドラマセラピーの原点となっているセッションを思い起こしてみた。それは米国のシカゴにある高齢者施設でのことだ。ずいぶん昔のことであるが,３０００時間近くの実習時間のまさに一番初めの時間だったので,今でも鮮やかに記憶に残っている。単回セッションを,当時とても仲良くしていたトレーニー仲間の Deb Mier と一緒にリードしたのだった。彼女は,今もシカゴで活躍しているドラマセラピストだが,私をこの道に導いてくれた恩人の一人でもある。

その日は偶然７月４日だったので,参加者に過去の独立記念日の思い出を聞いた。何人かが打ち上げ花火だと言い,私たちは（花火を見る,のではなく）皆で花火になった。どーん,どーん！炸裂しては散っていく美しい花火！盛り上がっている最中,一人の男性が,「君は日本かた来たんだってね。僕は戦争中,日本にいたんだよ！」と話しかけてきたのだ。皆で一緒にプロセスを進めている最中に,お構いなしでずっと私に話しかける彼の相手をすることには戸惑いがあったが,彼は話し続けた。幸い,Deb と二人でファシリテートしていたので,私はある程度,彼の話を聴くことができた。正真正銘の新米だったので,「ドラマ」を進めることに気を取られていたが,参加者のニーズに柔軟に対処することが必要であると強く意識させられたできごとだった。

その後,別の男性が家族に電話をかける場面をすることになった。Deb がそこに小道具としてあった本物の電話を渡すと,彼は演技スペースの真ん中に座りこみ,電話をかけようとした。しかし,彼は電話からぶら下がっている線を掴みながら「線が切れていてかけられない！」と訴えたのだった。「いいから話してみて」と Deb に言われた男性は,もしもしと声を出してみるが,「電話をかけるふり」という想像上の行動ができず,少し苛立って「かけられない！」と訴え続けていた。結局 Deb が次のワークに進めたという記憶がある。架空

の設定が理解できないと,こういうことになるのか,とインパクトを受けた。しかし,今の私なら間違いなく彼に合わせたプロセスを作っただろう。

他に印象に残っていることは,視覚障がいのアフリカ系女性の手を引いたことだった。一見したところでは障がいは全くわからなかったので,どんな参加者にも先入観をもってはいけないことを学んだ。彼女を不安にさせないよう,耳元で話しかけながら一緒に歩いた。今思えば薬の副作用だろうが,足を非常に小刻みにしか進められず,短い距離にも時間がかかった。この最初のセッションは強烈な思い出となっている。グループ全体を進めることと,その中の個人にも注意を向けること,そのバランスの難しさも印象に残った。そしてもちろん,異国においては自分の国籍が影響を与えることも。

＊おわりに

この施設での実践を通して,高齢者の普段秘められた力を表に出すことができた。表現力,想像力,正直さ,寛容さ,ユーモア精神,などたくさんある。そして,演じる中で,何よりも皆さんの創造性が発揮された。モレノは,「創造性の力こそ,社会的に作り上げられた『妖怪』―機械や組織など人間を押さえつけ縛り付けるもの―から自身を解放させる力である」という。社会で生きている以上,そのような抑圧から完全に自由である人はいない。だからこそ,可能な限り死ぬまで何かの方法でクリエイティブな活動を続けたい。最後にモレノの誕生と完璧についての考えのエッセンスを記して，連載を終えたいと思う。

> 誕生するということは,未知の世界に飛び込むこと。完璧の状態とは,最終の形でこれ以上の発展はない。常に誕生を繰り返さなくてはならない。完璧は死だ。

完

連載を終えるにあたり,この施設で出会えた参加者の方々に心から感謝申し上げます。

日々,より良いケアを提供するためにお仕事に邁進している施設職員の皆様にも敬意を表し,

日頃のセッションへのご協力に深謝申し上げます。

文　献

モレノ，J.L.　(2007)「サイコドラマ」増野肇ほか訳　白揚社
デューイ，J.　(2010)「経験としての芸術」栗田修訳 晃洋書房

きもちは、言葉をさがしている

「紅茶の時間」とその周辺

第39話

水野　スウ

ピースウォーク金沢ものがたり

毎年3月、イラク開戦の日の前後に、平和を願って金沢の街なかを歩く市民アクション「ピースウォーク金沢」は、2020年の今年で20年目になります。最初の呼びかけ人の一人で、長いつきあいになる小原美由紀さんとは、ウォーク1回目からよく一緒に行動していますが、その彼女から、これまでのウォークのこと、一度しっかりまとめたいと思うんだけど、と相談されました。

それならウォーク実行委員だけでするより、まだ歩いたことのない人や、途中から実行委員に加わった人、ピースウォークをまったく知らない人もふくめて、まぜこぜおはなし会をしようよ、と提案。「ピースウォーク金沢ものがたり～since 2001」と題してのプレイベントを、わが家の「紅茶の時間」ですることになりました。それはおそらく美由紀さん個人とピースウォーク金沢全体をふりかえることであると同時に、日本の20年を俯瞰する貴重な時間になるだろうな、と予感しながら。

――というわけで、今号はそのプレイベントを通してみえてきたピースウォーク金沢の歴史、それにくわえて私自身のウォークとの関わりについて、書いてみようと思います。

「ブッシュ大統領はバカや!」

2020年2月、紅茶の時間でひらかれた「ピースウォーク金沢ものがたり」。まずは小原美由紀さんの語りから。

彼女がウォークを呼びかけることになったきっかけは、2001年にニューヨークで起きた9.11の同時多発テロでした。テロの後すぐ、アメリカ大統領が、テロとの戦争を宣言。犯人はアフガニスタンにいるとされて、アメリカも世界の主要各国も、戦争に向かってまっしぐらに進んでいくように見えました。

美由紀さんはそれまで10年余り、市民の平和学

習サークルに参加して戦争や原爆について学び（ちなみに私も同じサークルのメンバー）、平和が大事といつだって思っていたけど、それまで特にこれといった行動を起こしたことはなかったそうです。アフガニスタンにはすでに大勢の難民がいて、ただでさえ子どもたちが次々に命を落としていっている、そんな国に爆弾を落とすなんてひどすぎる。でもだからってここで自分が何をしようと変わるはずもない、自分じゃない誰かが何かしてくれたら……そう思っていたまさにその時、たまたまテレビを見ていた当時8歳の息子さんが「ブッシュ大統領はバカや！戦争はゼッタイにダメや！」と叫んだのです。

「その言葉に、ガーン！として。ああ、本当にそうだ、ここで自分が何もしないままでいたら、私は3人の息子の前に親として立てないなあ。やっぱり何かしなくちゃ。だけど一体何をしたらいいんだろう……。わからずにいた時、フェアトレードのお店をしていてネットやメールに詳しい友人が、東京でピースウォークっていうのをしてる人たちがいるよ、と教えてくれた。石川で誰も、何もしないんなら、じゃ自分たちでやるか！と、その友人と、アムネスティ金沢の人と、メールでつながっていたお医者さんと、そして私、この4人でウォークを呼びかけたんです。電話やファックスを使って、あちこち声をかけて」

20年前は今のようにはまだSNSが普及していない時代、そのころやっとパソコンを使いはじめた私も、ファックスでその呼びかけを知って、集合場所の金沢市役所前に駆けつけた一人です。

急遽の呼びかけだったにもかかわらず、120人が集まり、アフガニスタンへの爆撃をなんとかやめて、という祈りの夕べを共有し、「ふるさと」を歌いながら街を歩きました。思いは必死だったけれど、シュプレヒコールが飛びかうような、いわゆるデモとは違う、静かであたたかい、手づくりのウォークだったという記憶があります。それが2001年10月6日、第1回目の金沢のピースウォーク。アフガン爆撃がはじまったのは、その翌日のことでした。

CHANCE!でつながる

美由紀さんが、ネットに詳しい友人に教えてもらって登録したメーリングリストの名前は、CHANCE！　そのリストに参加する人の数は次々ふえて、たちまち1000人もが登録するネット空間になっていったそうです。

当時のことを美由紀さんは、金沢の一主婦がいきなり1000人の広場に放り込まれたみたいな感じだった、とふりかえります。CHANCE！のメーリングリスト上で、様々な情報や意見が飛びかい、ぶつかり、議論し、時に決裂し、時に理解しあい、新しいアイディアが生まれ……。さながらそこは、9.11後に突如生まれたバーチャルな、古代ギリシャの直接民主主義的空間だったのかもしれないな、と想像しました。

そして、これは後からわかったことだけど、CHANCE！の中には、ニューヨークに住む坂本龍一さんもいれば、『世界がもし100人の村だったら』『やさしいことばで日本国憲法』（ともにマガジンハウス）の著者で翻訳家の池田香代子さんもいたし、後にNGO日本国際ボランティアセンター（JVC）のイラク現地調査員として子どもたちの医療支援にかかわることになる原文次郎さんもいたし（彼の曽祖父は、反戦ジャーナリストとして知られる桐生悠々（きりゅうゆうゆう））、当時はまだ20代のジャーナリスト、志葉玲（しばれい）さんもいたのです。

さらに、このメンバーの中から「りぼん・ぷろじぇくと」という一つのプロジェクトがたちあがり、数え切れないほどの意見をメールで交わしあって、2004年に『戦争のつくりかた』（マガジンハウス）という絵本をつくりあげました。当時問題になっていた有事関連7法案についてなんとか広く知ってもらおう、この国が戦争のできる国になろうとしていることをわかりやすく伝えよう、とプロジェクトメンバーが奮闘した結果の絵本です。ここに、池田香代子さんも美由紀さんも、美由紀さんの知人である金沢の弁護士さんも参加していました。

この絵本は10年後にその改訂版として、あらたに平和安全法制の解説も加えた『新・戦争のつくりかた』として出版され、さらには映像作家たちの手

によってアニメーションのDVDにもなりました。

最初の絵本がつくられたころは予想でしかなかった未来が、10年の間に次々と本当の法律として実現され、絵本の通りに現実が進んでいることから、この本は「予言の書」とも呼ばれています。

りぼん・ぷろじぇくと（『新・戦争のつくりかた』が読めます）https://sentsuku.jimdofree.com

戦争のつくりかたアニメーションプロジェクト特設サイト　http://noddin.jp/war/

イラク戦争はじまる

2003年3月20日、国連安保理の決議がないまま、イラク戦争がとうとうはじまってしまいました。当時の小泉首相はいち早く支持を表明しましたが、私たちは支持していないよとあらわしたくて、2月に富山であったピースウォークに美由紀さんも私も参加。金沢では3月と4月に「平和の種をまく　明日へのピースウォーク」をしました。

歌があって、楽器があって、着ている服もプラカードも色とりどり。団体ののぼり旗はありません。シュプレヒコールも聞こえません。一色に統一されていないところがピースウォーク金沢らしい。ちいさな子どもたちも一緒に歩きます。

合言葉は、NO WAR, NO DU。DUとは、劣化ウラン弾のこと。過去の湾岸戦争で多量に使われた劣化ウラン弾の影響で、イラクには白血病などに苦しむ子どもたちがすでにたくさんいたことがわかっていました。

この年には、ジャーナリスト、志葉玲さんの講演会「空爆される側から見たイラク戦争」や、湾岸戦争の影響をうけた子どもたちの写真を多く撮っている写真家、森住卓（もりずみたかし）さんの講演会、鎌仲ひとみ監督のドキュメンタリー「ヒバクシャ――世界の終わりに」上映会などが開催されました。主催はかならずしもピースウォークではないけれど、美由紀さんはそのどれもに関わり、私やウォークのメンバーたちも広報を手伝ったり、参加したりしてきました。

この年の秋には紅茶の時間で、慶応大学物理学教室（当時）の藤田祐幸（ゆうこう）さんから劣化ウラン弾の被害について話していただきましたが、その時も紅茶仲間だけでなく、美由紀さんをはじめピースウォークで出逢った人たちがずいぶん聴きにきてくれました。

ワールド・ピース・ナウ

2004年にかけてはアフガニスタン攻撃、イラク攻撃が激化する時期。この年の3月20日は「ワールド・ピース・ナウ」という名のもとに、全国各地でピースウォークがおこなわれました。同じ日に、金沢でも。準備の段階で呼びかけ団体や呼びかけ人を広く募って、この年の参加人数は500人へとひろがり、参加者の中から「こんなに集まるのはベトナム戦争以来だ」と言う声が聞こえたほどでした。

この時点で、すでに13,000人以上のイラク市民が亡くなっている、とのことでした（イラク・ボディー・カウントの調べによる）。

それだけの人がいのちを落とすって一体どういうことだろう、数で括っては見えなくなるものがあるかもしれない。ということで、金沢ではピースウォークの日に向けて「虹色ハートのいのちのバナー」をつくることに。亡くなったひと一人のいのちを一つのハートであらわすことにして、ハートをバナー（横断幕）に描きこんだり、縫い付けたりしていったのです。何十人もの人に協力してもらったけれども、描けども描けども……とても13,000人分のハート

を描ききることはできませんでした。描き込めたハートはやっと8,888。ああ、こんなにも多くのいのちが失われたんだね……と、ずしんと感じられた、世界に一枚きりのいのちのバナーが、これ。長さ7メートルにも及ぶこのバナーを何人もで持ちながら、イラク戦争による市民の犠牲者を想って歩きました。

3月のピースウォークのあと、イラクで3人の日本人が人質となり、突如巻きおこった、自己責任、という非難の嵐。じっとしていられなくて、この時は私が、ピーススタンディングしよう、と呼びかけました。立った場所は、毎年のウォークの出発地点でもある、金沢の中心街にある公園前。

美由紀さんやウォーク仲間、紅茶仲間が駆けつけ、リレー形式で思っていることをスピーチして、その様子を新聞に取材してもらいました。格別大きなアクションでなくても、何かしよう！という時、即こんなふうに声かけできるネットワークがあって行動できたのは、やはりピースウォークという市民アクションが下地にあったおかげかもしれません。

この年、「九条の会」が発足し、それに呼応した動きが日本全国にひろがり、石川にも「九条の会・いしかわネット」が誕生。私も呼びかけ人の一人になりました。私が憲法のおはなし出前に行きはじめたのも、ちょうどこの頃からでした。

いつもとちがう空を見よう

2005年から2010年にかけては、イラク戦争がまだ続いていたけれど、社会では戦争への関心が薄れてしまった時期かもしれません。団体呼びかけから再び個人参加へと、ウォークの形態も変化し、参加人数が300人の時もあれば150人の時も。それでも、ピースウォーク金沢は、いつも誰かしらが呼びかけ人となって、毎年継続されてきました。2005年のピースウォーク後の4月には、池田香代子さんをお呼びしての「100人の村から憲法が見えた」という講演会がひらかれましたが、主催よびかけ団体の一つにピースウォークも加わっています。

ピースウォークでは、呼びかけ文が毎年少しずつ変わります。2006年のウォークは、「いつもとちがう空をみよう」がテーマ。ウォークしながら見上げる空は、そう、確かにいつもと違います。何より、歩道じゃなくて車道を歩くし、知ってる人知らない人と一緒に歩くし、歌も歌うし、そしてその空がイラクともつながっていることを感じながら歩くからです。この年はこれまでの最高の39グループ（平和や音楽、アート、子ども、食などの活動を日頃している人たち）の呼びかけによるウォークとなりました。

2007年のテーマは「踊るように歩こう」、2008年は、「いっしょに歩かんけぇ〜」（石川弁で「一緒に歩かない？」）。2009年は、フライヤーの呼びかけ文を、日本語だけでなく、英語や中国語など4カ国語で表しました。イラクだけが戦場ではない、チベットでもパレスチナでも、人権がひどく踏みにじられていることに気づいてほしいと思ったのです。この年は、環境活動家で未来バンク理事でもある田中優さんが参加し、ウォーク前の集会でお話をしてくれました。

2010年は、「ほしいのは、ピース」。このテーマと同名の、歌まで生まれた年でした。作詞作曲は、巻達彦さん。

わたしのまちで　平和を願う
人が集まって　歩く
そんなことが　9年まえ
はじまった　すてきだね
いつも　はずかしくて
言えなかったけれど
いちばん　いちばん
ほしいのは、ピース

ガレキのまちで　おびえながら
毎日過ごす　人がいる
石油がとれる　ことを理由に
ねらわれる国がある
とどけ　ぼくらの
平和の祈り
いちばん　いちばん
ほしいのは、ピース

この頃から私がかかさずウォークに持っていくようになったのがこのピース旗。既成のものに、私が

家族の思い出の布をいっぱい縫い付け、Peaceの文字もアップリケしたものです。

3.11後のピースウォーク

2011年のピースウォークを準備している最中の3月11日、東日本大震災が起き、その翌日に福島原発が爆発しました。その直後に予定されていたウォーク、ましてや当日は雨。「こういう時だからこそ歩こう」という声がある一方で、「放射能もまじっているだろう雨の中を、子ども連れで歩きたくない、歩かずに語りあいたい」という声もあり、この日は、それぞれの希望する方に別れて、ピースウォーク＆ピーストークをした年になりました。

原発事故による放射能に怯える暮らしは、けっして平和とはいえない。安心して空気が吸えて、食べ物を口にできて、子どもたちを公園で遊ばすことができて、そういった当たり前の暮らしを守るためには、意思表示が必要なんだ。その受け皿としてもピースウォークはあるはず、と感じたこの年のウォーク。ピースウォークの願う平和は決して、遠い地のNO WARだけでなく、自分の足元のことなんだと、みなが強く感じた年でもあったのです。

2012年あたりから、ピースウォーク金沢のかたちが少しずつ変わっていき、歩くだけでなく、ゲストをお呼びしてのイベントとコラボするようになりました。今この国で起きていることをもっと知ってほしいと思ったからです。

前にも金沢に来ていただいた森住卓さんに再びの講演をお願いし、それにひき続いてのウォーク。森住さんをお呼びするためのお金は、森住さんの写真集『福島第一原発　風下の村』（扶桑社）や、福島で被災した武藤類子さんが2011年9月に東京でおこなわれた「さようなら原発5万人集会」でスピーチした内容を本にした『福島からあなたへ』（写真は森住さん、大月書店）を売りまくって捻出する、という方法を美由紀さんが考えだしてくれました。

2013年はフォトグラファー、亀山ののこさんと、彼女が撮影した「100人の母たち」写真展と、ピースウォークとがコラボした年です。原発の事故後、ののこさんは東京から生後半年の双子の坊やとともに福岡に移住。それまでの仕事を失うかも、と一瞬頭をよぎったけれど、たとえ失ったとしても原発というものにNOと声をあげなければ、と思ったそうです。写真集『100人の母たち』（南方新社）には、ののこさんと同じように、日常生活の中から原発の問題と向き合い、命を守りたいという意志をあらわした100人の母と子のポートレイトが収められています。

この頃には、3.11後に金沢に避難移住してきた人たちとイベントなどを通してつながりができ、家族でピースウォークに参加するようになりました。

13年秋頃から暮れにかけて、東京の国会前では特定秘密保護法案に反対するデモが盛んにおこなわれていました。その中で特に、学生さんたちのスピーチが際立ってすばらしかった。なぜこの法案に反対するのか、一人称単数の「私」や「僕」を主語にして語る彼らの言葉を、美由紀さんはこの頃からたんねんに書き起こしては、Facebookに投稿していました。

年の瀬も迫ったある夜、ピースウォークの打ち合

わせによく使わせてもらっているライブ喫茶で（マスターはウォークのメンバー）、美由紀さんが彼らのスピーチ映像を見る会を開いてくれました。おかげで当時まだFacebookをしていなかった私もウォーク仲間と一緒に彼らのスピーチを見聞きすることができたのです。

その学生たちのグループ名はSASPL（サスプル）、正式名は「特定秘密保護法に反対する学生有志の会」。翌年に誕生するSEALDs（自由と民主主義のための学生緊急行動）の前身となったグループでした。

考えることをやめない

ピースウォーク実行委員会では毎年秋になると、次の年のテーマをどんなものにするか話し合いをはじめます。テーマ決めだけに何回も集まることもありますが、2014年のそれは、「歩き続けよう　考えることをやめないで」に決まりました。それまでのウォークを通して、思考停止しないで、面倒くさくても考え続けることの大事さを、みなが実感していたからです。

この年は、ウォーク当日までの間に、特定秘密保護法がどういうものか、ウォーク仲間の弁護士さんにお願いして小さな勉強会を開いたり、映画『ハンナ・アーレント』を見た人たちとのワークショップ、鎌仲ひとみ監督のトークと監督の動画メルマガをまとめた『カノンだより』上映会、フランスの寓話絵本『茶色の朝』（大月書店）朗読会、といったウォーク・プレイベントをしました。

ピースウォーク当日は、原発事故の後、福島を離れた宇野さえこさんが移住先の京都から参加して、出発前の集会でスピーチをしてくれました。

その翌日は石川県小松のお寺で、さえこさんのお話会。除染したから帰還していい、といわれた地域でも、暮らしの中に放射性物質をつめこんだ黒い袋がそのまま置かれている現実。福島県内では安全キャンペーンがさかんだけど、人権として被曝を避ける権利があるということをもっと知ってほしい、と。お話の最後に「昨日は、いま一番大事なことを伝えている人たちに会えました。関東から避難して来た人たちとも合流できたのは、10年以上も、ピースウォークを続けてきてくれた人たち、ともしびを灯し続けてきてくれた人たちがいたからです」と。

この日お寺には、愛知県田原市の絵師、小林憲明さんが描いた「ダキシメルオモイ」の絵が7枚展示されていました。福島県二本松市の7人のお母さん（『カノンだより』にも登場していたハハレンジャーたち）が、それぞれのお子さんを抱きしめているいとおしい絵。思いがけなくその絵を紅茶の時間でひと月お借りできることになり、4月はじめ、ダキシメルオモイの絵の中でピースウォークふりかえり会をしました。そこに小林憲明さんも参加してくださり、その出会いをきっかけに、関東から金沢に移住してウォーク仲間になった親子たちの姿もまた、ダキシメルオモイの中で描かれることになったのでした。

この年から6年間、ダキシメルオモイ展が石川県内のいくつものカフェやお寺でひらかれ、それはいつもピースウォークと連動していました。

小林憲明　ダキシメルオモイ
https://dakisimeruomoi.jimdo.com

2014年から始まったピースウォークの新しい試み、「Peace割」（後に「ピース割引」）についてもふれてお

きます。杉並区高円寺で行われていたデモ割り（デモに参加した人にお得な割引）にヒントを得て、ピースウォークに参加した人は、まわりの商店街でお得に食べたり飲んだりできますよ、という新企画です。ウォークの主旨に賛同、応援してくださるお店の平和に対する意思表示であると同時に、市民の側もそういうお店に感謝しながら利用することで商店街にお返ししよう、という意図から始まったもの。

このピース割引はそれ以後もお店の数をふやし、範囲もひろがって進化しながら続いています。協力店のお店の名前がずらりと並んだフライヤーを手にした人に、ピースウォークってこんなにたくさんのお店に応援してもらってる市民アクションなんだね、と感じてもらえるメッセージにもなっています。

2015年、いくつものピースウォークカフェ

ピースウォークは毎年この指止まれ方式でウォーク実行委員会をつくり、テーマや関連企画を決めるために対話を重ねます。震災から4年目となり、原発事故後に移住してきた人たちもこの委員会に加わってくれるようになりました。

とりわけこの年の委員会にはそれまでにないような熱気が感じられました。第2次安倍政権になってからというもの、秘密保護法の強行採決、これまでの憲法の解釈を変えることになる集団的自衛権行使容認の閣議決定、それを根拠にしたあたらしい安保法案などなど、国民が置いてけぼりのまま、重要なことが次々と進んでいたからです。この年のテーマは、自分たちの言葉で政府のやり方をきちんと批判するSASPLの学生たちのアクションから影響をうけて、「つながろう、集まろう！　語ろう、自分の言葉で」と決まりました。

さて、それならこのテーマの、つながる、集まる、をどう実践しよう。当日のウォーク前に、いくつもの「ピースウォークカフェ」をするのはどう？　個々のサイズはちいさくていいから、今国会で何が起こっているのかを知るために憲法や安保法案を学ぶ場、憲法の解釈を変更した先につながる戦争や平和について語る場をそれぞれがつくりだしていくことにしよう、と決まりました。

その日までのPWカフェをあげてみると、弁護士さんとおでん囲んで自民党の憲法改正草案を学ぶ憲法カフェ、幼子を持つママたちとベビーのPWカフェ、戦争や平和の絵本を読む絵本カフェ。紅茶の時間では『戦争のつくりかた』の紙芝居を上演後、憲法を語りあうPWカフェを、といった具合。中でも特記すべきは、SASPLの奥田愛基くんに金沢に来てもらって、「いのちの授業」で知られる大学教授、金森俊朗さんと対談するイベントをしたことでしょうか。

集団的自衛権を認める安保法制に対する危機感は、この年に私の中でもピークに達し、以前から憲法のお話出前で語ってきたことを中心に、『わたしとあなたのけんぽうBOOK』という本までつくりました。その本の中で、この年のさまざまなピースウォークカフェについても記しています。

2015年12月にはピースウォーク主催でSEALDsメンバーの二人、元山仁士郎くんと伊勢桃李（とうり）さん講演会を。のちに元山くんは米軍基地建設のための埋め立ての賛否を問う「『辺野古』県民投票の会」の代表となりました。

PeaceにVote！

翌2016年は、7月に行われる参議院選挙に向けて野党共闘という言葉が生まれた年です。ピースウォークもそれを意識して、その年のテーマを「抱きしめるだけでは守れない　PeaceにVote！」と決めました。夏には選挙があるよ、大事なものをただ抱きしめているだけで平和は守れない、だから選挙に行こう、平和を目指す人にちゃんと投票しよう、の意思をテーマにこめたつもりです。この年のピースウォークには、SEALDsの本間信和くんと植田千晶さんが参加。ウォーク翌日、SEALDsの二人と金沢の若者たちとのトークイベントも行いました。

2016年のテーマを記したバナーは、夏の参院選でも大活躍。野党共闘のために金沢入りした、野党党首によるサインがはいって、これまた世界に一枚きりのバナーになりました。別名「野党は共闘バナー」です。

バナーを持つ美由紀さん

この年の暮れから金沢でも、アニメ映画『この世界の片隅に』が話題となり、映画を見た人たちと語りあう会を2度開催しました。戦争の時代とは、ごくふつうの人たちが巻き込まれ、協力させられ、何気ない日常の上に爆弾が降ってくるのだということをリアルに感じさせてくれた作品。ウォークのメンバーたちの多くがこの映画を見たこともあって、2017年のテーマは、なんと大胆にも「ごはんとミサイル」！　それはまだ北朝鮮からミサイルが飛んできていなかった春のこと。この年の秋の衆院選で、安倍首相の選挙キャッチフレーズの一つが、北朝鮮のミサイルを意識した「国難突破」だったことを思う時、まるでピースウォークが予言しちゃったみたいだね、と仲間たちと言いあったものです。

コッカイオンドク！はじまる

2017年の国会で大きな問題になったのが、テロ等準備罪ともよばれた共謀罪法案。犯罪を起こしていないのに、相談しあっただけで罪に問われるかもしれない、国民の自由やプライバシーを侵しかねない重要法案が、審議もきちんとされないままものすごいスピードで国会を通りそうになっていたのが4月、5月のこと。

美由紀さんは、なんとかこの法案のことを広く知らせなくては、と国会中継を録画して、共謀罪法案の質疑のポイントとなるやりとりをたんねんに文字起こしして、Facebookに投稿していきました。その投稿をみた友人が、これ音読したい、と美由紀さんにコメントしたことから、あっという間の素早さで、国会答弁を市民が音読するアクション「コッカイオンドク！」がはじまったのです。記念すべき第1回オンドクは、美由紀さんはじめ5人の参加でわが家で行われ、それを2社の新聞記者さんが取材し大きく報道してくれました。（詳細はマガジン30号に。https://www.humanservices.jp/magazine/number30）

国会審議をそのままシナリオにして、市民が首相の役をしたり、法務大臣の役をしたり、あるいは野党議員になりきって音読すると、国会が一気にみぢかになります。なるほど、こんなすごい方法があったんだ！と市民発のこのアクションは、メディアとSNSを通じてたちまち全国へと広がり、1ヶ月後に美由紀さんがよびかけた「全国一斉コッカイオンドク！」では、全国44箇所で、市民によるコッカイオンドク！が繰り広げられたのでした。

共謀罪法案は6月に強行採決されたけれども、このアクションはそこで終わりませんでした。モリカケ疑惑を解明せよ、と野党が臨時国会をどれほど要求しても国会は開かれず、開いたと思ったらその日に解散、衆議院選挙へ突入しました。その選挙期間中、金沢では何度もコッカイオンドク！をしました。このアクションが、政府批判のためでなく、国会の現実を知らせるものだったから、選挙の間も遠慮なく実行することができたのです。

この「コッカイオンドク！」、市民が主体のユニークで新しい情報流通、と評価され、美由紀さんは2017年度の「日隅一雄情報流通促進賞」の特別賞を受賞しました。コッカイオンドク！に参加した金沢の私たちはもとより、全国で実施した人たちもどれだけこれに勇気を得たかしれません。

コッカイオンドク！のWEBサイトでは内容が日々更新されていて、どこでもどなたでもすぐにやって

みることができます。https://believe-j.jimdo.com

コッカイオンドク!とコラボ

「アンテナ立てよう！わたしの明日のことだもの」をテーマにかかげた2018年のピースウォークは、これまでになく大掛かりで特別なものになりました。コッカイオンドクの進化系ともいえる「全国コッカイオンドク！コンテスト」というイベントパフォーマンスを、ウォークの前に実施したのです。舞台は、金沢のど真ん中にあるショッピングビルのステージ。審査員は大学教授、弁護士さん、カフェのオーナー、審査委員長はなんと、「報道特集」キャスターの金平茂紀さん。コンテスト、とはいっても、その評価基準は、1に表現度、2にわかりやすさ、3に次に国会をみたくなる度、の3つです。

当日は、大阪から、関東から、地元から、5つのグループが、それぞれに選んだ国会答弁の場面を熱演オンドクしました。ステージの周りは立ち見の人でいっぱい。ウォーク参加者だけでなく、買い物にきた人もつい立ち止まって、思わず聞き入る珍答弁。おおいに笑いながら、でも、これ、国会の本当の話なんだ、怒らないといけないことなんだ、と気づいてはっとする場面が何度もありました。

一人のお母さんの地道な書き起こし作業からはじまったものが、広がりに広がって社会運動にまでなっていった。私たちは微力だけど決して無力ではないと教えてくれた、これは貴重な経験の一例です。

2019年は、特別のイベントをしない、ゲストも呼ばない、ピースウォーク本来のかたちにもどってのウォーク。かかげたテーマは「未来はこどもたちのために」。それでも前年のコッカイオンドク！つきピースウォークの名が広く知られたこともあってか、県外からピースウォーク金沢に参加したい、と泊まりがけで石川に来てくれた人たちが何人かいました。前日にはその人たちもまじえて、紅茶の時間でピースなコミュニケーションのワークショップ、夜には先述のライブ喫茶で前夜祭。ウォーク当日は、すっかり親しくなった県外の人たちを先頭に、歌いながら踊りながら街を歩きました。その様子があまりに楽しそうだったのでしょう、イタリアから観光できていたご夫婦が、途中から飛び入り参加で私たちと一緒に歩いてくれました。

社会と連動するウォーク

イラク戦争の前後、日本各地でおこなわれていたピースウォークですが、こうして毎年かかさず継続してきたのは、現在、金沢だけのようです。ピースウォークって何？と人に訊かれた時、金沢で20年続く、年に一度、平和を願って金沢の街を歩く市民アクションだよ、とさくっということが多かったけれど、今こうしてあらためて眺めてみると、いやいや、ピースウォーク金沢って決してそれだけのもんじゃなかった。記憶と記録をたどり、ざっとふりかえっただけでもこれだけ豊かにあったウォーク20年の歩み。そうか、私たちはその間ずっと社会や政治と向き合い、連動しながら歩いてきたんだな、と感じました。

9.11のテロからはじまり、戦争にNO！と声をあげ、原発事故を経験し、原発にもNO！と言い、毎年のピースウォークやそれにつながるアクションにはいつも、世界の、日本の、その時々の社会状況や政治が反映されていました。特定秘密保護法も安保法制も共謀罪も、ウォークと無関係ではなかったのです。

2001年も、それから10年後におきた東日本大震災と福島原発事故の時にも、そして今いっそう強く思っていることだけど、とんでもなくひどいことや想定外のことが起きた時、どこから情報を得るか、誰とつながるかって、ものすごく重要なこと。20年前とくらべて、メディアの多くが政権に忖度し、同調圧力を掛けあって、権力にとっての不都合な真実を知らせない方向に傾斜していっているから、なおのことです。

マスコミ報道をうのみにしないで、信頼できる市民や研究者が自ら集めた情報を共有し、役立つ情報をどれだけ持てるか。知ることは力です。そんなネットワークを持つことで、自分の判断も、周りの人たちと一緒にできる行動も、大きく変わってきます。

美由紀さんが2001年の時点でCHANCE！を知ったことの意味は、だからとても大きい。彼女がそ

の時につながった人たちの何人もが、その後のピースウォークやそれにつながる講演会、市民アクションにたびたび登場してくださいました。昨年、桐生悠々のひ孫にあたる原文次郎さんにはじめて会えたのも、さかのぼれば20年前のCHANCE！で美由紀さんが原さんとつながってくれていたおかげでした。

美由紀さんは、社会で、国会で、いま何が起きているか知るためのアンテナを張り、すてきな活動をしている人を見つけてはキャッチしてつながり、そこから得た情報を不断にSNSで発信しています。地元の記者さんたちとも日頃からいい関係性をつくり、市民の小さなアクションでもタイムリーに行動をおこせば報道してもらえることを経験で知っています。

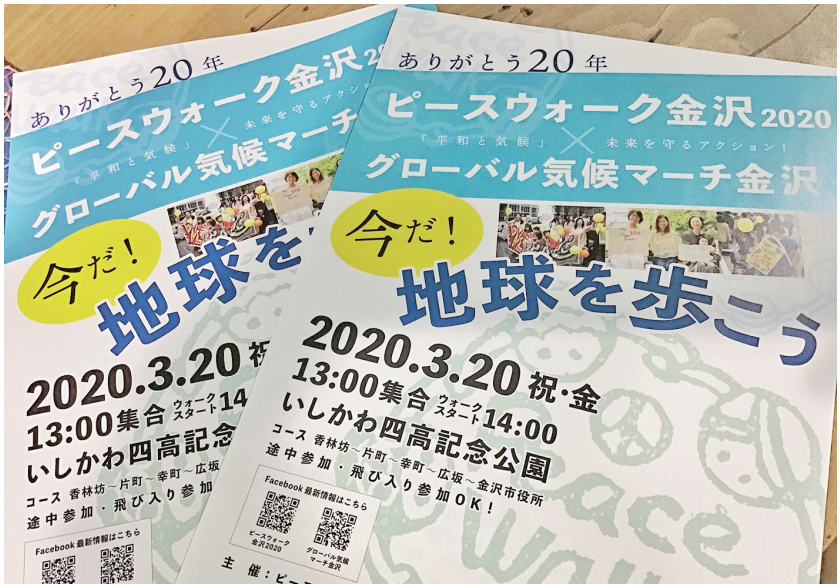
平和のために自分ができることは何だろうと考え、工夫する美由紀さんは、不断の努力を日々普段からしている、文字通り、憲法でいうところの「12条する人（第12条：憲法が保障する国民の自由及び権利は、国民の不断の努力でこれを保持しなければならない）」です。

そして、美由紀さんが知らせてくれたことに対して、自分も黙っていられない、と集まったピースウォークの仲間もみな、12条する人です。ピースウォーク金沢に代表はいません。職業も年齢も様ざま。デザインや広報や音楽やアイディアを出す名人などなど、それぞれ違う得意分野をもちよって、対話×対話の積み重ね。私にとってのピースウォークは、民主主義を練習し、実践する場、市民力を育てる学校のようにも思えます。

ウォークを特別なものじゃなく、身近なものにしたいよね、と知恵を出し合いながら、できるだけ敷居を低くして、テーマにかかげる言葉もきつくしないで（例外もあったけど・笑）、誰でも気軽に参加できる、平和の意思表示の受け皿というスタンスを維持しつつ、歩き続けてきたのです。

年に一度のウォークに限らず、臨機応変しなやかに、スタンディングも講演会も写真展もカフェもイベントもしてきた。20年目になるピースウォークだけど、それを単純に20回目と呼べないゆえんです。

2020年春、掲げるテーマは、「今だ！地球を歩こう　ピースウォーク金沢×グローバル気候マーチ金沢　――平和と気候　未来を守るアクション」です。



2019年秋ごろからメディアで大きく取り上げられるようになった、世界中の若者たちによる気候変動マーチ。金沢でも、地球温暖化はもう待ったなしの危機、と立ち上がった子育て真っ最中のお母さんたちがいて、「グローバル気候マーチ金沢」という様々なアクションを展開しはじめました。このグローバルマーチとピースウォーク、両方のメンバーがつながったことから、2020年はともに街を歩くことになったのです。

新しく出会ったグローバルマーチの、子育て世代の人たちとまざりあいながら私もウォークします。地球の平和を思う、願う、行動する、そこからまたどんな新しい物語が紡がれていくでしょう。そしてピースウォークは続く……。

2020/2/22

ノーサイド

禍害と被害を超えた論理の構築

（３３）

中村周平

これまでに引き続き、首を痛めてしまった後、知人の方を通じて教えていただいたPC入力の方法について触れていきたいと思います。

連絡を取らせていただいた知人の方から教えてもらった方法の一つは、エアマウスというものでの入力でした。自分の体で動かしやすい場所に装着した発信機を動かすことで、 USBでPCに接続した受信機にその動きが信号として送られ、マウスポインターの動きに変換されるというものです。

当該装置のホームページの内容をそのまま説明しているので分かりにくいかもしれませんが、要するに自分の動かしやすい場所、私の場合は頭になるのですが、そこにマウスに近いものを装着し、それを動かすことで画面上のマウスポインターを動かせるという代物でした。知人の方から、「ますデモ機を借りて試してみたら良い」、というアドバイスを受け、インターネットで申し込みをしたところ、１週間もしない間に自宅にデモ機が届きました。説明書に従ってセッティングを行い、実際にパソコン操作を行っていきました 確かに頭を右に傾ければ右に、左に傾ければ左にマウスポインターがゆっくりと動いてくれました。また、その速度も自由に設定することが可能で、クリックやドラッグについても、そ

の場に数秒停止させることで、その機能を発揮できました。さらに、販売会社が出しているアプリを活用することで、その操作を簡略化することもできました。

試行錯誤しながら、数日その装置を試した結果、最終的に自分に合っているものではないというとがわかりました。一番の要因は、自分の動きやすい場所として頭の部分を使うことでした。それによってより鮮明な動きにつなげることができたのですが、首を痛めてしまった自分にとっては、十分に活用することができませんでした。

ただ、この方法については、知人の方からも付則として教えていただいた情報であり、本命は次の視線入力の装置でした。こちらの装置もインターネットから申し込みをして一週間以内に自宅に届きました。

視線入力装置も私が知らないだけで、おそらく様々な種類のものがあると思うのですが、この知人の方から教えていただいた装置は、パソコンの USB につなぐだけで、どのパソコンでも使えるという優れものでした。USB につないだ後、パソコンの画面の下に設置する(マグネットが付いているためにパソコンの画面にそのまま貼り付けることができる)だけで セッティングは完了になります。あとはひたすら、その装置を使って自分の目線の癖や動きをパソコンに覚えこませていきます。画面上に 9 つの点が現れ、それをパソコンが指示する順番に視線を合わせていくと、不思議なことに自分の視線が集まったところに、センサーが反応した後か残り、またそれを繰り返すことで、その反応はより速く、より正確になっていきました。自宅に届いてから 2 日もしない間に、視線入力だけで、左クリック、右クリック、ドラッグ、ダブルクリックといった機能を使いこなすことができていました。 そして、慣れてくると自分が目線を送ったところに、そのマウスポインターが行き、そこで必要な操作をしてくれるので、これまでマウススティックでやっ

ていた方法と変わらないぐらいのスピードで、パソコンを操作することができました。

「今、首を痛めてしまった自分とってこの方法が一番合っているのではないか。他に方法もあるかもしれないが、これからの研究活動や仕事をこなしていく上で、少しでも早く自分が使える方法を実践していきたい」

そのような思いもあって、この視線入力装置の購入を現実的に考えていくようになりました。ただ、購入にあたり、一番の問題はその金額にありました。具体的な金額は避けたいと思いますが、それこそパソコンを1台購入するくらいの金額でした。今の自分の経済的な状況を考えた時、決して安易に承諾できる金額ではありませんでした。最終的に、ここで時間を無駄にしてしまうことと、これを使って自分のしなければならないこと、したいことができる、を天秤にかけた時、購入することを一番に考えたいと思いました。そして、生活費を可能な限り切り詰め、この装置を購入することになりました。

今回は「盆踊り漫遊」をお休みして以下のテーマについて語りたい。

死について

竹中尚文

1．お葬式

テレビで「ちいさなお葬式」のコマーシャルを見て、気分が悪くなった。今回は、「死」について感じることや思いを述べることにした。

お葬式が大きかろうが小さかろうがどうでもいいことだ。「ちいさなお葬式」という言葉が踊るのは、お葬式がカネの話に終始するからだろう。お葬式の費用は、予想外の出費だったのかも知れない。ある葬儀屋さんは「最近、マスコミは葬儀屋が不当にもうけている、とばかりいっている」という。このアナウンス効果で、葬儀屋さんが不当な料金請求をしているイメージができてしまった。

私の感じるところではあるが、近年、葬儀屋さんが減った。葬儀会社ばかりになってきた。葬儀屋さんだった頃は、儲かるお葬式もあれば、儲からないお葬式があった。葬儀会社になって、儲からないお葬式をしなくなった。経済的に苦しい家庭で人が亡くなっても、かつての葬儀屋さんはいなくなった。貧困家庭のお葬式を専門のようにする葬儀会社も現れた。「今回は赤字だなぁ」といって、葬儀を引き受けてくれる業者はもういない。

この葬儀についての社会の変化は、どこかの業者によるものではない。我々の選択の結果なのである。そして、今、私たちの選択がこれからの社会を作るのである。

あるお婆さんが亡くなった時のことである。私は枕経に駆けつけた。集合住宅なので、近所の人たちが集まってくれた。その席で市の担当者の言葉が伝えられた。生活保護家庭なので、指定の業者が霊柩車で迎えに来るという。お婆さんの遺体を乗せて火葬場に行くが、近親者一人だけ立ち会えるという。

近所のおばちゃんが「私らはゴミ扱いや

なぁ。カネのない私らは死んだら、市が回収にきて運んでいく」と泣いた。私は近所の人たちに、お葬式をしようと提案した。まず、一人千円か二千円の香典を頼んだ。私は知り合いの葬儀屋さんにお棺とドライアイスと霊柩車の手配を頼んだ。香典で、お棺とドライアイスはまかなえるかと計算した。霊柩車と火葬料は私が払うつもりでいた。香典は予想外に集まった。お婆さんの孫に、ホームセンターで寝間着浴衣を買ってきてもらった。家族で湯潅をして、納棺をした。集会場で葬儀をして、霊柩車が迎えにきた。自家用車のある者は、人々を乗せて霊柩車に従った。とっても心あたたまるお葬式だった。

先日の法事のことである。法要も終わって家族と雑談をしている時に、お婆さんが「私のお葬式は、この家で、仏壇の前でしてほしいのだけれど、できますか？」と尋ねた。私は「全く問題はありませんよ。ご存じのように３、40 年前はそんなお葬式だったじゃないですか」と答えた。お婆さんは、家で家族に送ってほしいのだそうだ。付き合ってきた近所の人たちにも普段着でちょっと見送ってくれたら嬉しいという。私は、お婆さんの顔を見て微笑んで話ができた。

この法事は、お婆さんのご主人の七回忌だった。亡くなって１、２ 年はお婆さんから笑顔が消えて、うつろな表情だった。少しずつ元気になってきて、自分のお葬式の話をしているときは生き生きした表情だった。お婆さんがまた生きることを始めたのだと思った。

2. いのち

私が枕経にお参りをしたとき、よく遺体や顔に触れる。そんな時、家族で「えっ!?」というような表情をする人がある。私が何か失礼なことをしたのかと思うのだが、違うようだ。故人の表情を変えようと試みて、家族の手を借りようとすると微妙な空気になることがある。家族は死体を触りたくないことがあるようだ。

死がおとずれたのだから死体であるのだが、まだ暖かい。亡くなったとはいえ、親であったり祖父母であったりする。死によって、家族は死体に変化するのだろうか。

死を特別なことだと感じているのではなかろうか？ 確かに家族の死は特別なことであるが、死は我々の身の回りにある。私も、あなたも必ず死ぬ。近年、我々は死を見ないようにして暮らすようになった。

見ないようにしているから、死を身近に感じない。

魚を食べるとき、トレイに乗った切り身を買ってきて、調理するのが通常になった。私が子どもの頃、魚は魚屋さんで買うものだった。魚屋さんは活きのいい魚をさばいて売ってくれることもあった。私は料理好きなので、活きた魚に包丁を入れることもあった。私が命を奪って、その魚を食べたのだ。

かつて、パキスタンで少年が目の前で鶏の首を切って、鶏肉を準備してくれた。同じ所で、やはり目の前で牛を殺して牛肉を提供してくれた。私は牛が絶命するのを見ていて、足が震える思いだった。私たちは日々の食事をするが、その先には必ず死がある。私たちは死に囲まれて生きている。

近年、日本の社会から生花店が激減しているのをご存じだろうか。人々が生花を買わなくなった。花を飾ると、美しいが必ずしおれる。花はその命を終えていく。私たちはそうした命にも触れなくなった。

私たちの生には死が伴われている。返上することもできない。いのちも与えられたものであるが、死も与えられたものである。死に向き合わないのは、生きることに向き合わないことではないか。

3. いのち終えるとき

私の好きな映画のひとつに、ジョン·トラボルタ主演の『フェノミナ』(1996 年、アメリカ映画)がある。主人公は死を目前にして、愛する者、親しい者の心に残ることを望む。自分の死後、愛する者や親しい者が少しでも上手く生きていけるように行動する。死を迎えるまで生きるのである。生きることの延長に死がある。

現在、多くの人が終活の言葉のもとで、生きることを放棄するかのようにしている。お葬式の形はあとの人たちにまかせて、死を迎えるまでしっかりと生きてもらいたい。自分が開き直れなかった人生を送った腹いせかと思うようなことを言い残す人がいたりする。しっかりと生きることが大切である。その延長線上に死がある。そんな生き方をしたい。そんな死に方をしたいものだ。

★★周旋家日記 29★★

シティズンシップについて考える⑥－“単なる調べ学習ではなく，探究学習になるため”の出張講義報告

乾明紀

1．はじめに

安倍首相が新型コロナウイルス対策で全国の学校に休校を要請する少し前，とある私立女子高校（以下 A 高校）から出張講義の依頼があった。1 年生を対象に「単なる調べ学習ではなく，探究学習になるための講義をしてほしい」というものであった。本マガジン 36 号[1]にも書いたが，「総合的な探究の時間」（以下「総探」）が必須となり，同様の相談や依頼が多く寄せられるようになった。2019 年度入学の高校 1 年生から「総探」は先行実施されており，先生方もその方法を探究（模索）されているようである。

探究学習はシティズンシップ教育の一環でもあることから，高校からのこのような依頼に対して，どのような講義を提供したのかを本稿で報告しておこうと思う。

A 高校への出張講義は初めてであったため，学校のホームページなどを閲覧し，生徒の興味関心なども想像しつつ内容を構成し，以下の講義（50 分×2 コマ連続）をおこなった。

2．講義の導入

講義の導入は，最初に 2 つの目的（図 1）を示し，講義の全体像とゴールを説明した。その後，筆者が簡単な自己紹介をおこない，次に生徒たちからも自己紹介をしてもらった。

45 名ほどいた生徒たちの自己紹介の方法は，こちらから配布した白紙の A 4 用紙を 4 つに折り，こちらが指示した項目（図 2）に従って記入し，筆者に見せるというものとした。

この自己紹介の狙いは，生徒たちの緊張を和らげるとともに，生徒たちの状況や探究心の動向を探るものであった。「今の気持ち」の確認は，ワークショップのチェックイン（導入とアイスブレイク）として多用されている手法でもある。「今，ハマっていること」は，生徒のプライベートでの探究的活動を垣間見ることができて面白い。生徒が書いた内容を見ると，特定の歌手や俳優などへの熱心な想いからテスト勉強や部活動まで多様で，それぞれの個性が伝わってきた。

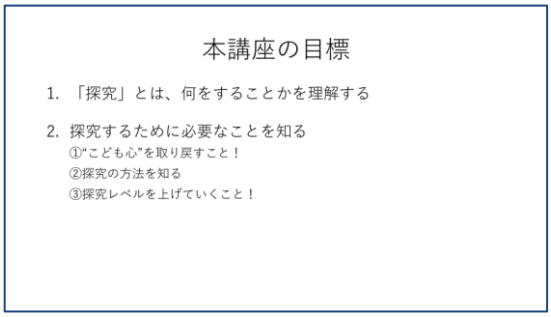


図 1　本講座の目標

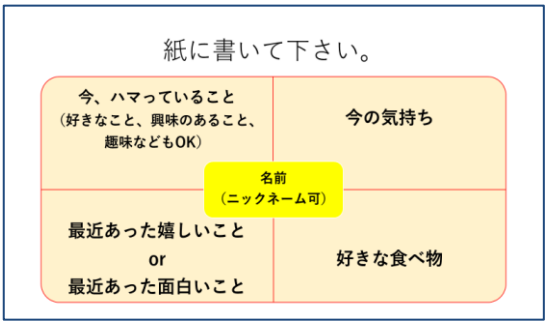


図 2　生徒の自己紹介シート

3．「探究」という用語の説明

導入が終わり，探究とは「物事の本質を自己の関わりで探り見極めようとする一連の知的営み」（田口，2019）[2]であるとの定義を紹介した。しかし，この説明で腑に落ちる高校 1 年生はほとんど

[1] 乾明紀（2019）周旋家日記（27）「シティズンシップについて考える④－高校生の探究学習．対人援助学マガジン．36，pp145 - 147

[2] 田口哲男（2019）「高校における学びと技法 探究で資質・能力を育てる」 一藝社

いないだろう。

そこで，ワークも交えながら体感できるように工夫した。よく使われる手法であるが，騙し絵（図３）を用い，様々な角度から物事の本質を探究することの重要性を気づかせようとした。

図３　騙し絵[3]

また，「自己の関わり」についての気づきを促すために，SNS や買い物を事例に「社会×わたし」の関係について思考してもらった（図４）。

自分たちの SNS の利用[4]が，テレビや広告代理店などのビジネスモデルを大きく変化させ，さらには，子どもたちの意識（男子小学生の将来就きたい職業第１位が Youtuber に[5]）にも影響を与えていることを伝えた。また，自分たちの買い物などで提供する顔も含めた個人情報が，AI によって分析・利用されている事例を紹介し，「社会×わたし」の関係は加速度的に変化していることを解説した。すると，筆者と目が合う生徒の数も増え，「社会×わたし」で捉えようとする姿が見て取れた。

興味関心を高めてくれた生徒たちに対して，「変化の激しい時代だから，変化をつかみ未来を予測できる人になってほしい！」そのために「最も必要な能力が，探究する力！」であるというメッセージを送り，本題に入った。

図４　「社会×わたし」の事例

４．探究するために必要なこと

ここから生徒たちに，単なる調べ学習に留まらない探究活動とはどのような行動かを示していかなければならない。

講義では，探究するために必要な３つのポイントとして「①“こども心”を取り戻すこと」，「②探究の方法を知る」，「③探究レベルを上げていくこと！」を示した（図５）。

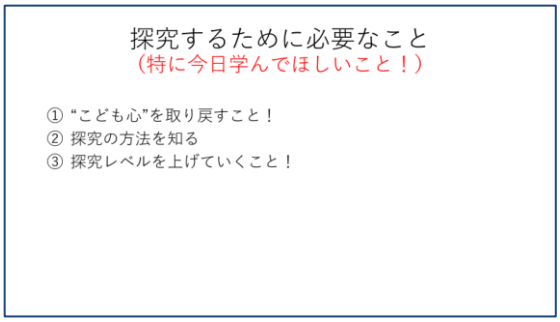


図５　探究するために必要な３つのポイント

（１）“こども心”を取り戻すこと

幼児期のこどもたちは，様々な外部刺激に素直に反応し，手に取ったりしながらそれが何かを知ろうとする。この頃の子どもは，時間や服の汚れなどを気にすることなく夢中になる（図６）。しかし，周囲からの目を気にしたり，すべきことが優

[3]出典 http://www.senju.co.jp/consumer/resteye/damashie/011.html

[4] 生徒たちにテレビと Youtube を比較し，どちらの視聴時間が長いかを尋ねたところ、ほとんどの生徒が後者と答え、生徒たちのメディア環境の変化が見てとれた。

[5] 学研教育総合研究所（2019）「小学生の日常生活・学習に関する調査」https://www.gakken.co.jp/kyouikusouken/whitepaper/201908/inde

先されていく過程で「なぜ？」という反応が生じにくくなっている可能性を指摘した。

自己紹介に書いた「今，ハマっていること」のように，社会で生じる様々なことを探究することの大切さを説いた。

図６　探究する子ども

（２）探究の方法を知る

ここでは，能動的なサイクルである「探究」と「単なる調べ学習」の違いを図によって示した（図７）。こども心を取り戻せば，目の前のこと（きっかけ）への反応性が高まり，左のサイクルが駆動しやすくなることを伝えた。

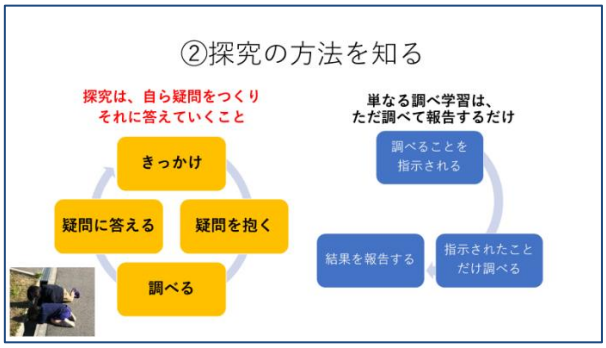


図７　探究活動と単なる調べ学習の違い

（３）探究レベルをあげていくこと①（探究レベル１～３）

ここでは，５段階の探究レベル（図８）を提示し，より深いレベルの探究ができるように，各レベルの行動を具体的に示した。

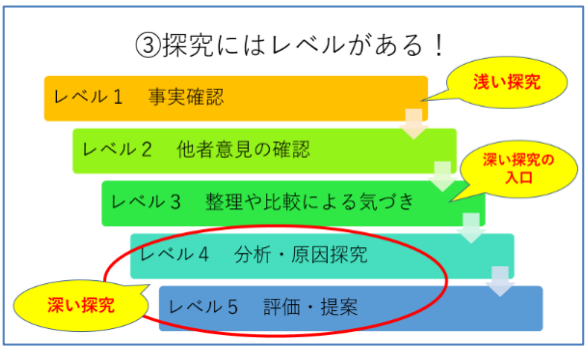


図８　探究レベルの５段階

レベル１は「事実確認」である。例えば「日本の人口は？」,「訪日外国人の数は，10 年間でどのようになったのか？」などの問いに答えていくことが該当する。スマホを用いればすぐに答えにたどり着ける探究である。

レベル２は「他者意見」の確認である。例えば「訪日外国人が増加することで，どのような影響があると言われているのだろうか？」といった問に対して，報道や識者など他者意見を確認していくことである。

また，このプロセスで注意すべきものとして，できるだけ専門家の意見に触れること，事実と意見は異なること，デマやフェイクニュースがあることを伝えた。

レベル３は「整理・比較による気づき」（または「整理・比較と気づき」）である。これは，分類や比較をすることでより高次の疑問が生じ，それに答えていく探究活動である。例えば「専門学校と大学の違いは何だろう？」という問いに対して，それぞれを調べ比較していけば，共通点や相違点が見えてくる。この比較によって得られた情報が，さらなる探究（より深い探究）のきっかけとなるのである。

講義では，ここまで説明した３つのレベルうち，主に「事実確認」と「整理・比較による気づき」の方法について，実例を示した。

まず，ファッションに関する次の記事[6]を提示し，

6 Oggi.jp https://oggi.jp/51317

それを読ませ，どこまで理解できるかを確認した。

> **黒ライダース**に**黒スキニー**のカッコよいスタイルを際立たせるのが，襟元＆そでの**白ブラウスレイヤード**。ゆるっとしたサイズのニットから**ヴィンテージ**風ブラウスだから〔原文ママ〕，より**モード感**と今っぽさが表現できる。

ファッションに興味関心が高まる年頃の女子高生ではあるが，文中の赤（太）文字の意味をすべて理解できている生徒はいなかった（同席した男性の高校教員はほとんどわからなかった）。

そこで，わからないことをそのままにしておく弊害として，チャンスの喪失などがあることを述べるとともに，「事実確認」の面白さを伝えた。例えば「黒ライダース」では，黒いライダースジャケットという言葉の意味だけでなく，ファッションと映画（「the Wild One」でマーロン・ブランドが着用したことで人気が高まったと言われている）や若者文化との関係に触れたり，スキニー（skinny）という単語が最難関大学入試レベルであることを紹介したりしながら事実確認によって世界が広がり，知識も増えることを示した。

また，「分析・比較による気づき」については，1920 年代と 50 年代のブラウスを提示し（図 9），生徒に比較してもらった。

図 9　1920 年代と 50 年代のブラウス

（4）探究レベルをあげていくこと②（探究レベル 4 ・ 5）

探究レベル 4 は，「分析・原因探究」である。ここでの問いは，ただ比較するだけでなく，理由（原因），背景，影響などを分析することで，出来事に潜む「意味」を発見していくものである。

例えば，「1920 年代と 1950 年代のブラウスの形態が変化したのはなぜか？」（図 10）といった原因究明の問いを立て，それに答えていく探究活動である。講義では，第一次世界大戦から 1950 年代までのアメリカ社会を紹介しながら（例えば図 11，探究レベル 2 の「他者意見の確認」でもある），社会と女性の関係変化について解説をおこない，この問いに答えていった。

図１０　探究レベル４「分析・原因探究」の例

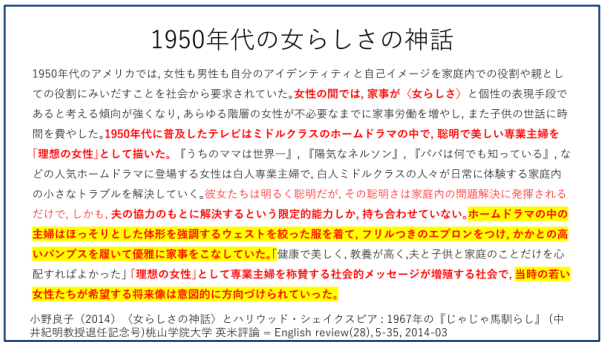


図１１　1950 年代の女らしさ（小野, 2014）[7]

探究レベル 5 は，「評価・提案」である。妥当性

[7] 小野良子(2014)．〈女らしさの神話〉とハリウッド・シェイクスピア ：1967 年の『じゃじゃ馬馴らし』（中井紀明教授退任記念号).英米評論．28, pp5-35

を評価したり，将来を予想したり，解決先を提示したりするための探究活動である。

講義では時間の関係もあり探究活動の実例を示さなかったが，レベル 4 の問いを発展させ,「女性や社会の意識を変えるために，高校の制服はどうあるべきか？」などに答えていく探究活動であることを紹介した。

このようにレベル毎の探究活動を実演しながら単なる調べ学習に陥りがちな「浅い探究」と「深い探究」(高校生レベルの探究学習) の違いを示した。そして，探究の魅力や利点として次の 7 点を伝え，この講座をまとめた。

① 興味が連鎖していく！
② 新しい発見につながる！
③ 「わかる」(知識)が増える！！
④ 暗記じゃないから簡単に忘れない(記憶しやすい)
⑤ より深いレベルまで理解できるようになる！
⑥ プチ専門家になれる！
⑦ 他者に説明できるようになる！

5．まとめ

50 分×2 コマという限られた時間の中で，かつ講義という形態で探究学習の面白さを伝えてみたが，生徒たちにどこまで伝わったであろうか。残念ながら，高校が一斉休校になり生徒の感想や反応はまだ聞けていない。この講義によって探究学習の意義が伝わり,自身の可能性が高まる活動(学習）だと一人でも多くの生徒が認識してくれたならば，とてもうれしい。

世界経済が密接につながり，テクノロジーが加速度的に進化し，社会やビジネスのあり方が革命的に変容する時代に生徒たちは生きている。また，国内に目を向ければ，人口や経済の縮減傾向が若者たちの未来に暗い影を落としている。

「このような時代に生きる若者たちをどのように育成していくべきか？」という問いに対して，大人が探究して導き出した解のひとつが，探究学習によって「自己の在り方生き方を考えながら，よりよく課題を発見し解決していくための資質・能力を育成すること」(文部科学省，2018）[8]であった。かつての日本社会のように「家族，学校，企業社会のトライアングル」(小玉, 2002[9], 2018[10]) によって長期かつ安定的な生活環境を若者に提供することはできなくなった。若者には厳しい時代かもしれないが，探究学習を通じて，自分と社会の変化を楽しめる人になってくれればと願う。

日記は続く

[8] 文部科学省（2018)「高等学校学習指導要領（平成 30 年告示）解説　総合的な探究の時間編」

[9] 小玉重夫(2002)公教育の構造変容--自由化のパラドクスと「政治」の復権．特集 1990 年代--教育変動の諸相，教育社会学研究，70，pp21-38

[10]小玉重夫（2018)．「労働と教育」再考（特集 職業と労働市場),日本労働研究雑誌 60(8), pp60-66.

★★★★★★★★★★★★

★★★★★★★★★★★★

男は痛い！

國友万裕

第34回

『ロマンスドール』

1. 京都の落とし物、大阪で受け取る

京都市バスに乗った瞬間、筆入れをなくしていることに気づいた。その日、出町柳駅で降りて、ある大学の図書館に向かうとしていた時だった。「あー、どこかで落とした！」その日は荷物が多くて、リュックの上のファスナが閉じきれずに開いていたので、何かのはずみで落ちたのだろう。俺は次の停留所で市バスを降り、乗った停留所へと再び逆戻りした。道に落としたのかもしれない、バスに乗った瞬間に反動で落ちたのかもしれないと思いながら歩いて戻ったのだが道には落ちていない。誰か届けてくれたのかもしれない。近くの交番に行った。

交番のお巡りさんは本当にのんびりしていて、雰囲気は昭和レトロだった。とは言っても、時代は令和、今はネットで京都中の落とし物をすぐに検索できる。しかし、落としたばかりなので案の定届いてはいない。届を出す前に、出町柳の駅で訊いてみたらと言われ、地下への階段を下りて、電車の案内所に行った。まだ届いていなかった。再び、交番に戻って、正式に届を出すと受理番号をくれた。明日以降はこの番号を電話で伝えれば、警察に届いている場合は保管されているとのことだった。

永久に出てこないかもしれないなあ。まあ、仕方がない。筆入れの中には失くして困るようなものは入っていない。それより少し前まではＵＳＢメモリも入れていたのだが、ＵＳＢをなくすと大変だからと思い、他のところに移し替えたばかりだった。あれは虫の知らせだったのだろうか。ＵＳＢを失くしたりしていたらもっと不安だろうから、不幸中の幸い

だ。

あの筆入れは弟が誕生日に買ってくれたやつで、安物ではない。中には筆記具と前にこれも誕生日にある先生からいただいたコインが入っているので、失くしたくはない。しかし、もう諦めるしかないか。こういう小さなことを大きく考えて凹むのが俺の悪いところなのだ。

新しいのを買おうかとも思ったが、１週間くらいは待とうと思った。俺は強迫的性格なので、何かなくしたりするとすぐに新しいものを買ってしまう。ところが、そのあと意外に出てきたりするので損したという気持ちになることが度々なのだった。

その日、交番の人からは警察の遺失物取扱所の電話番号の他に電車や市バスの忘れ物センターの電話番号が書かれた紙をもらったので、翌日の午前中、たまたま仕事がなかったので、電車の係に電話してみた。そしたら、どうやら俺の筆入れらしいものが届いている。「見つかった場所はどこですか？」と訊くと、「出町柳です」と言われた。あ、これは間違いない！おそらく、前日電車の駅に尋ねに行った直後に届いたに違いなかった。

落とし物は、届いた翌日以降は京橋の忘れ物センターに全て集められるとのことで、俺は仕事の前に京橋に筆入れを受け取りに行ったあと、午後からの仕事に向かった。電車賃はかかったが安堵の思いだった。

俺はできる限りエネルギーを省エネしたいと思って生きている。だんだん歳はとっていくし、そうしなければ身が持たない。だから不備がないように細心の注意をしながら生きているのだが、時としてこういうことは起きる。人間だもの。機械とは訳が違っている。ミスをするから人間。それを許さなくては！！！

2. ネットが切れた3日間。

ネットの接続が 1 月になって頻繁に切れるようになっていた。今のルーターは、取り換えてからまだ数ヶ月しか経っていないのだが、最初から調子が悪かった。

こういう時は本当に憂鬱だ。インターネット関連の問い合わせ電話はいつだって混み合っていて、なかなか通じない。それを待っているのが面倒臭くてたまらないのだった。でも、仕方がない。この頃は LINE で問い合わせというのもあるので、これだと待ち時間は少ないからこちらを選んだ。とはいうものの、パソコンは接続できない状態だからパソコンからの LINE はできない､スマホからの LINE となる。文字を打つのが面倒くさい。適当に文にもならないような文でルーターの会社のサポートデスクにテキストした。

この頃は、先方はマニュアルをキチッと把握していて、折り目正しい返事が即座に返って来る。その後、教示に従って、接続をもう一度やり直した。どうにかつながった。よかったと胸を撫で下ろした。

ところが数時間後、また調子が悪くなり始めた。再び LINE で問い合わせるとプロバイダーの問題かもしれないと言われ、プロバイダーのサービスに電話したところ、そのルーターがどういうルーターなのかをルーターの方の会社に問い合わせてくれとのこと。再び、ルーター会社とのチャットに戻る。どうやら、俺が使っているルーターは古い機種のようだった。俺は早合点して、新しいのを買おうと

決めた。Amazon で見ると 3000 円台で買える。こちらのほうが性能も良いとのことだったので、3000 円の価値はあるだろう。

早速 Amazon で注文して、翌々日の朝、新しいルーターが届き、取り換えることになった。無事繋がった。やれやれ。その日はちょうど大学のテストの採点をしていて、1 日かけて採点が終わり、成績入力もできた。あー、ホッとした。これからのんびりできるなあー。そう思っていると、夜になって、また接続が切れていることに気がついた。まあ、これも入力がひと段落したあとだったことが不幸中の幸い、しかし、なぜ、入力の後申し合わせたように切れるのか？？？

再びチャットに戻った。ルーターの会社の人からは、そこまで試してできないのであれば、電話会社の方に確認してもらうしかないと言われ、今度は電話会社に連絡。しかし、ここでもスムーズには進まない。結局、すったもんだした後、修理係から電話が来て、すぐに新しいレンタル機器を届けますとのことだった。それから 3 時間ほどたって、配達のおじさんがやって来て、今度こそ確実につながったようだった。

しかし、仕事はまだ終わらない。それまで古いルーター経由で繋いでいた機器などの再設定がうまくいかない。また日曜日の朝から電話。携帯をスピーカーにして 1 時間電話しながら、操作して、どうにかつながった。ふーっ。

今はネットがないとどうにもならない。ほんの数日、ネットの接続が上手くいかないだけでも、耐えられないような状況になる。思えば、俺は暇な時間は常に Mac の画面と向かい合っているのだった。

そもそも、新しいルーターに変えたのは、俺のマンションに勧誘の人が来て、特典があるからうちの会社のやつに乗り換えないかと言われたからだった。しかし、その人も別にネットの専門家ではないので、接続のこととかに詳しいわけじゃない。ただ、勧誘の営業の人だ。最後に俺のところに機器を届けに来たおじさんも、あの様子だと全くＩＴ関係ではない仕事の人だろう。

今の世の中、自分も知らんような商品を営業したり、配達したりしている人が多いのだ。自分が何をしているのかわからないという状況。一方で、サポートの人たちも、電話や LINE で会ったこともない人と話をしていく。しかも、その繋がる先が北海道だったりする。東京だと土地代がかかるから、むしろ都心からは離れたところにセンターを置いているところもあるという話はしばしば聞く。

昭和のような濃密な人間関係はなくなっている。ものの本によれば、恋愛だって、この頃の人は手頃な相手と手頃に付き合っているらしい。そういえば、昔みたいに親の反対を押し切って駆け落ちとか心中とかいう話はもはや聞かなくなった。今の子は、最初からそういう面倒くさい人とは付き合わないのだ。

こういう世の中を世知辛いという人もいるけれど、俺はそうは思わない。今の人たちは本当に優しいし、礼儀正しい。当たらず触らずに対応してくれる。それはマニュアルをのみ込んでいるだけで心からの親切ではないから問題なのだという人もいるけど、昭和の無愛想さやぶっきらぼうさに比べれば、今の方が遥かに良い。

先日、『スターウォーズ』を見にいったら、人によっては光に拒絶反応を示す人もいるか

らお気をつけくださいという貼り紙がされていた。敏感さは人によって違っているから配慮する時代となったのだ。こういう時代だとサービスを提供する側はあれこれ面倒くさいけれど、個々の個性に配慮する時代になったことは歓迎すべきことである。

3. スムーズに確定申告

1月の終わり、仕事がほぼ終わって、春休みモードになった。こういう時俺は何もすることがなくて、寝てしまう。いけないことだとわかっていてもやめられない。春休みはまた太るだろうなあ。

その日も昼からしばらく寝ようとすると、郵便受けに源泉徴収が届いていることがわかった。まだまだ3月半ばまで確定申告は受け付けているのだが、例によって、俺の強迫症が始まった。

俺は即座にパソコンを開くと、確定申告の書類を作り始めた。俺は源泉徴収をたくさんのところからもらっているが、それは予め全てファイルに一まとめにしてある。眠いのを堪えながら、さっさと書類を作って行き、1時間ほどで書類はでき上がった。

それをプリントアウトすると、自転車を走らせて、税務署へ。税務署では、「今年から源泉徴収票、要らなくなったんですけど、提出なさいますか」と訊かれた。なぜ、要らなくなったのかよくわからない。誰かズルをする人が出るのではないか？　マイナンバーカードを登録しているから違反行為はできないのだろうか？これだけ毎年、確定申告をしていても税務署のシステムまではわからない。

しかし、手続きが簡素化されたことは事実のようで、毎年、何かの書類を忘れたり、早とちりしたりで、手間取ることが多いのだが、今年は思いの外スムーズに申告書の提出は終わった。

終わった後、マップを使って、先日、本で紹介されていた、税務署近くの昭和レトロな喫茶店に向かった。ここの名物は、海苔トースト。初賞味である。バターと海苔の味がマッチして思いの外美味しい。申告が終わってホッとして、ささやかな幸せを感じる時間だった。

4. 苛立つ心

俺は心にゆとりがない。この頃バスに乗って移動することが多いのだが、市バスの中で席が空いているのに立っている人を見るとイライラしてしまう。席が空いている時は座ってくれなかったら通路が詰まってしまう。したがって、座ってくれと言いたくなるんだけど、頑なに座ろうとしない人がいる。

俺は人に合わせる習慣がないからこれくらいのことで心が波立ってしまう。40年近くも一人暮らししていると、他人が家にいるという状況すら鬱陶しくてたまらない。

俺はたまに埼玉にある叔母の家に遊びに行くが、トイレに行くのさえ気を遣う。トイレは一つしかないし、ちょっとでも汚したりすると悪いという気持ちがある。実家だったら、母と弟だから、ちょっとくらい汚しても構わないが、叔母となると多少距離があるのだった。

シャワーや風呂の後も、オバや実家だと出た後、裸で歩き回ることはできない。大学の頃、自宅生のクラスメートから、「下宿なんて

羨ましいなあ。裸で寝ることだってできるやんか」と言われたことがあった。彼は体育会系のキン肉マンだったのだが、自分の部屋であったにしても、母や妹など女性の家族から裸の姿を見られる恐れがあるから、裸でいるのは躊躇するというのだ。そうだなあ。俺だって、裸ということになると母に見られるのも抵抗がある。抵抗のない男もいるだろうけど、俺は抵抗があるし、そういう男の方がむしろ多いのだ。一人暮らしだと家でさっとシャワーを浴びて、その後タオルで体を拭きながらウロウロできる。妻や子供とマンションで暮らしていたら、狭い脱衣所で家族の目を忍んで体を拭くことになるのだ。一人暮らしの自由さ、開放感は何事にも代えがたい。俺は食べ物の好き嫌いも激しいので、冷蔵庫に嫌いなものを入れられるのさえ超憂鬱なのだ。結婚なんてできる人間ではないのだ。

その一方で、1 人を持て余してしまうことがあるのだった。この原稿がアップされる頃、俺は 56 歳になっているはずだ。56 となったら、昔だったら隠居の年齢。あー、歳だなあ。しかし、俺は隠居することはできない。年金まではまだまだ先だし、年金が下りる年齢になったとしても、年金だけじゃ生活できないから働けるところまで働かなくてはならない。今、ベッドに横たわってこの原稿を書いているのだが、この年の男で、一人暮らしで、誰もいないところで 1 人で寝ているというのはなんとなく寂しい光景である。俺は独り言の癖があって悩んでいるが、家族と暮らしていれば、それもなくなるだろう。

これから何があるだろうと考える。確かに昔の 60 歳と今の 60 歳ではイメージが違ってくる。60 代はまだ若い。母は、60 過ぎてから新しい人生が開けて、世界中を旅行することにもなった。しかし、俺にそういう展開が待っているのだろうか。おそらく、これからの俺は、仕事のチャンスも減り、体力も衰え、容姿も汚くなり、楽しいことや夢中になれることも少なくなっていくだろう。

50 代半ばとなった今でもすでに何を目標にしていいかわからなくて俺は路頭に迷っている。一番したいことは、若返って、スポーツマンになること。ラグビーや野球など男同士の関係をたっぷり味わうこと。ジェンダーなんかに囚われずに生きて、結婚して、普通の家庭を持つことに幸せを感じられる男になること。歌の歌詞にあった「時代遅れな男になりたい♪」とまでは行かなくていいのだが、そこそこに保守的な生活で、リベラルさも持ち合わせて生きること。俺はもうそうなることはできないから、余計にそういう人が眩しく見えるのだった。

昨年の 11 月 23 日のポスターセッションで、これまで 8 年間続けて来た対人援助学会のセッションも終止符を打つことになった。毎年、関心を持ってくれる人もいるが、むしろ興味なさそうな顔で素通りする人の方が大勢である。この頃、男性運動に関しても諦念の思いが出て来てしまっている。世の中の人の大半はジェンダーブラインド。ジェンダーのことを話しても、困惑してしまう。わかってもらおうとするから、ますます俺はイライラしてくる。

わかってもらえなくても構わない。幸い、ジェンダーを強いられるような仕事はしていない。そう思って、いっそ忘れてしまいたい。でも、ここで忘れてしまったら、俺の人生のアイデンティティがなくなる。俺の人生はジ

ェンダーとの格闘の人生だったのだ。しみじみ、人生の早い時期にジェンダーに囚われた自分の人生が悲しくなるのだった。

5. 悲しみは食事の味わい

最近になって、千本丸太町のあるカフェに初めて行った。ここは確か数年前まではジャムを売っていた店だったと記憶している。おそらく前の人がやめられて、そこをリニューアルして、今のところを作ったのだろう。

ここでチャーハンセットを食べ、ＦＢにあげると、ある人が、「ここ、僕も近所だからよく行きますよ」とコメント。「他にもオススメのところはないですか」とコメント返しすると、「ありますよ」と別のカフェを教えてくれた。

早速、そのカフェに行ってみると、期待していた以上に良いお店だった。年配のおばさんたちがやっているのだが、ランチセットに心がこもっている。春巻きのランチを頼んだのだが、付け合わせが栄養のバランスが考えられていて、ご飯にはシラスが振りかけられ、粕汁と温かいお茶がついてくる。文句のつけようのない満足感だった。

2 月の 1 日には、かつて近所の行きつけのカフェで働いていた男性が現在働かれている居酒屋に行くことになった。彼とは今でもＳＮＳでやりとりをしていて、一度行ってみたいとメッセージして、早速行くことになったのだった。カウンター席に座り、彼と話をしながら、酒はあまり飲めないので、普段が不足しがちな魚類をたっぷり食べた。素材にこだわるお店のようで、美味しい、質が高いことを感じる。

彼とは大学生の話になった。「へえ、今の子はそうなんですか」と彼から言われ、「大学生活、そんな昔じゃないだろう（笑）」と言うと、「いや、もう僕よりひとまわり年下の子が大学を卒業しているんですよ」と言われた。あー、そうか、彼ももう 34 歳なのだ。最初に会ったのが 10 年くらい前だから、俺は彼の若い頃のイメージを引きずっていて、いつの間にか年月が流れたことを忘れてしまっている。

彼はその間、結婚もしたのだった。そういえば、彼は独身の頃、子供が欲しいから結婚したいと言っていた。でも、まだ子供はいないみたいだ。おそらく、経済的にしんどいのかも知れない。まだまだこれから大変だろうなあー、と俺は同情を禁じえない。

俺だって、子供はつくれない。学校は公立のところで構わない、大学に行かせなくても構わないと割り切ってしまえば、子供をつくることもできるだろう。しかし、俺は悪夢のような少年時代を送っているので、子供を公立の学校になんてやりたくない。私立だったら、年間 100 万円はかかるみたいだ。小学校や中学から 100 万ずつというのは大変な経済的負担だ。それに俺は大学院まで行っているから、子供ができたら大学ぐらいは行かせてあげなきゃいけない。そんな思いが湧いてくる。もう、俺は今更子供なんかつくらないから、どうでも良いのだけれど、俺はいつだって悲観的な事柄を想定して、自分には影響ないことまで悲しくなってしまうのだった。

彼は、俺が食べ歩きが好きだということを知っているので、俺の家の近所にイタリアンのお店ができたからそこに行ってはどうかと言われた。以前彼が働いたカフェで同僚だった女性が旦那さんと開いた店である。

翌日の昼、早速その店にランチに行った。昨日彼から、この店を紹介してもらったんだと話すと、「まあ、嬉しい。でも、私は子供が小さいからまだ居酒屋の方は行っていないんですよ。まだ、店始めたばかりですしね」と言われた。彼女は俺の顔と名前を覚えてくれていた。

店には小学校くらいの男の子が遊びに来ていた。おそらくこの子が息子さんである。旦那は背の高い人で黙々と料理を作られていた。

ここもこだわりの店で、パスタ、ホカッチャ、サラダ、デザート、コーヒー付けて、ランチが 2000 円くらいかかる。決して安くはない。味は美味しいのだが、2000 円となると毎日くるお客さんはそうはいないだろう。これでお店がやっていけるのかとまた心配になる。店には大きなエアコンがついている。暖房代はかかるんだよなー。子供も小学生じゃ、まだこれからお金もかかるし、反抗期で道に迷う可能性だって出てくるだろう。その困難も夫婦だったら乗り越えられるのだろうか。

俺の悲観癖は幾度も浮かび上がってきて、美味しい食事にペーソスを与えるのだった。まあ、いいか、こういう悲しい気持ちに浸りながら、グルメを楽しむというのも風情はあるのだ。

俺の食べ歩きについて話すと、彼女はまた別のお店を教えてくれた。次はその店だ。俺の食べ歩きの輪は広がっていく。50 代後半になっても、食べる楽しみはあるのだった。これがある限り、少なくとも生きていく価値はあるだろうと思った。今の俺には友達だってたくさんいるし、幸せなのである。

6.『ロマンスドール』(タナダユキ監督・2020)

純愛映画とアダルトグッズをドッキングさせた映画である。

ラブドールを作る工場が、乳がんなどで乳房を失った女性の人工乳房を作るためと偽ってモデルの女性を雇うことになる。その彼女と恋に落ちるラブドール製作の男の物語である。序盤はラブドールの工場という知らない世界が描かれて面白いのだが、そのあとは徐々に常套的な純愛ものとなっていく。

2 人は結婚するのだが、彼（高橋一生）はその後何年も彼女（蒼井優）に自分の仕事のことを打ち明けていない。俺は結婚していないのでよくわからないが、普通の夫婦ってこんなものなのだろうか。自分の仕事先まで偽って、結婚生活を続けるってことができるものなのか。

俺はその部分が引っ掛かった。

この連載で何度も書いてきたように、俺は高校にまともに行っていない。今もそのことは俺の中で重いトラウマとして残っている。その事実を過去のこととして客観化できるようになったのは、40 過ぎてからで 30 代くらいまではまだ生々しくて、おいそれと口にできなかった。俺が女性だけでなく、人間関係を全く紡げなかったのはそのトラウマのせいである。触れられたくない過去を持つことは本当に重いことだ。だから、誰にも触れて欲しくない秘密が人にはあるのだということは理解できる。しかし、この主人公にはその重さが感じられない。彼女の方も、彼からついに真実を打ち明けられたとき、そのことにそれほど驚く様子を見せない。そのことが他のエピソードにつながっていくわけでもない。したがって、彼が仕事を隠すことの意味が共

感できなくなってしまっている。

「隠す」といえば、蒼井優は、ギリギリまで見せておきながら、バストトップを見せようとしない。『宮本から君へ』でもそうだった。どうにか乳首だけは見せないという撮り方がされていて、逆に笑ってしまう。あそこまで見せといて、トップだけ見せないとなったら、いかにもそこを意識しているみたいで、むしろ何も見せない方がいいんじゃないのとも思ってしまう。それとも、隠せば隠すほど観客は見たくなる、人の秘密も隠されれば隠されるほど知りたくなる、それを訴えたいのだろうか。

また別の場面で、ラブドールを愛用している他の男性が、もう生身の女性とは付き合えないという一コマがちらりと挿入されていて、その辺りは共感した。俺はラブドールを持ったことはないが、女性恐怖症なので、生身の女が怖いという現代の若い男性たちの心理はよくわかるのだ。そういえば、『ラースとその彼女』『空気人形』など、２１世紀になって生身の女性ではない人に惹かれる男の話は多くなってきたような気はする。

この映画の主人公もラブドールになぞらえた女性だからこそ彼女と恋愛することができる、怖がらずに付き合うことができるのだ、だから濃厚な愛が育まれたのだと解釈すればいいのかも知れない。そういえば、この映画の蒼井優は貞淑で古風そうに見えて、実はスケベ女ということになっていて、何事も受け入れてくれる聖女のような側面とセックスに関しては淫らな娼婦のような側面を併せ持っている。これはある面男性の理想とする女性像で、昔から古今東西、映画で描かれてきた女性類型なのだった。

今の若い男たちは優しい。生身の人と恋愛して、自分も相手も傷つけるくらいだったら、アダルトグッズやアダルトビデオの方がはるかに気楽と思ってしまうのだろう。これはこれで構わない。セックスだけが人間の人生じゃないのだもの。セックスレスを社会問題とするのではなく、その人の個性、その人の生き方にする世の中にすることがこれからのテーマなのだ！

真理はともに　閉じた日本を越えていけ

文部科学省が、朝鮮学校だけを「高校無償化」制度から除外して7年。朝鮮学校の生徒や卒業生が原告になり、日本社会や司法に、差別を容認するのか問いかけています。

国連は、「少数民族の子どもは民族教育を受ける権利がある」と、日本政府に差別をやめるよう勧告、弁護士会も意見書を出しています。

それでも政府の肩を持つ日本の裁判所。人権は国内外で違うもの？

三嶋あゆみ

役場の対人援助論

（３２）

岡崎　正明

（広島市）

見えるもの。見えないもの。両方大事なんだ。

見える化はススム

マニュアルやアセスメントシート、フローチャートに評価表。
今、さまざまな分野で「あいまいで見えにくい基準」を「わかりやすく、明確な基準」に。
そして「素人では判断・決定しにくい」を、「熟練でなくても判断できる」ように。そんな動きが花盛りだ。

それ自体は「一部の人にしか分からない世界をなんとか広げよう、扱いしやすくしよう」という、人間なら自然に持つ欲求のように思うし、悪いことではない。
現にマニュアル化や見える化で改善されたり、より多くの人がその利益を享受できるようになった例もたくさんある。私自身も現場でマニュアルやアセスメントシート作りに取り組んだこともあり、それなりに意義のあることだと思っている。

ただ何事にも完璧はなく、逆に副作用というものがあったりする。それは忘れてはいけないと思う。この世界はなんでも分かりやすく数値化・標準化できて、目に見えるものばかりで構成されているわけではない。
児童虐待のリスクアセスメントに AI を導入するという話も出てきているが、果たしてそれが家族支援の現場に有効に機能するのか。個人的には疑問の方が多い。手段として取り組んでいたものが、いつの間にか目的に替わるなんてことがなければいいが…なんて思ったりしている。

匠のワザ

「おかあさん。このままじゃったら大変なことになるよ～（トーン低め）」

こどもが不適応のサインを出しているにも関わらず問題意識が上がらない、または感知できない保護者や、必要な手続きをいつまでたってもできない親。
そんな相手に、うちの A 相談員が使う必殺技がこのセリフ（私は愛を込めて「大変なことになっちゃうよオバサン」と呼んでいる）。
ポイントは具体的に何がどう大変になるかは言わないところ(笑)
これは相手の理解力なども考慮してだ。なんとか困り感と動機づけを上げ、事態を動かすための第一歩として使う。もちろんいつでも誰でも多用しているわけではなく、相手の状況やタイミングを見て。これが結構きっかけになることがあり、その後の支援が動き出す場面を、これまで幾度も見てきた。

そのほかにも A 相談員には、
「この世で一番難しい仕事は子育てだと思うのよ」
「同じ女として、お母さんには幸せになって欲しいんよ」
など、一撃必殺の（？）名言がいっぱいだ。１度会った人物の印象から、その後の経過を見通す神業もあり、最近は仏サマのように思えてきた感すらある。この人が占い師やったら、間違いなく人気出るだろうな～なんて、余計だが、かなり的を得たことも考えてしまったりする。

そんな尊敬すべきベテラン嘱託相談員 A さん。別に大学で心理学を研究したわけでも、専門的な資格をたくさん持っているわけでもないだろうが、彼女の持つ感性や相手の懐に入る術、そして家族というものへの理解の深さにはいつも驚かされる。
場面場面で「優しい母」や「賢いマダム」になったり、ときには「おせっかいな下町のオバチャン」を使い分けるなど、自分の個性とその活かし方もよく心得ているし、硬軟使い分けもお手の物だ。
それらはおそらく教科書で学んだものでも、ナントカ療法のスキルでもなく、天性のカンと仕事や家庭生活の経験で培われ、磨かれた「ワザ」というべきものである。

当学会の理事長でもある中村正立命館大学教授は、こうしたベテランのワザ＝実践知の重要性を以前から述べている。
また子どもの虹情報研修センターの川﨑二三彦所長も、著書『虐待死』でソーシャルワーカーの「感じる力、感受性が大切だ」と、マニュアルや法定の研修では補完できない大切なものがあることを述べていた。
学術書や研修で学べる理論的な「スキル」とは違い、理屈だって学べない「ワザ」「勘」「センス」のような感覚的能力。それらを身に付けるための近道はなく、現場で経験し、先輩のやり方を見ながら失敗したり、後悔したりを繰り返して獲得するほかない。まさしく伝統工芸の匠の技に共通するものに思える。

虐待対応マニュアルでは分かりやすく具体的に、
「『一緒に死にたい』と発言し、心中の危険がある場合は最重度として保護を検討」
などと書いてくれている。

しかし実際のところ、現場はマニュアルだけでは有効に動かない。そこを的確に理解し支援する、使い手側の習熟度が大切だ。
この母親の「一緒に死にたい」が、何を意味するのか？どんな文脈や真意があるのか？同じ言葉でも、個人や状況によってその意味は大きく変化する。逆に一見もっと軽い発言であっても、緊急度が高い事態もあるのが人間の生きる現場である。

砂時計の苦悩

今、全国のどこの役所でも起きている問題が「いびつな年齢構成」というやつである。
いわゆる団塊の世代の退職が始まり、それまで比較的抑えられていた新卒職員の採用が、ここ数年で一気に増えた。現在職場は２０代がとても多く、３０代から４０代はとても少なく、５０代がそこそこいる。そんな“砂時計型”になっている。

これで何が困るかというと、若手職員がモデルにしやすく、気軽に相談できるセンパイがおらず、いきなり敷居高めの課長・部長クラスに報告するしかないといった事態である。現場で実働部隊を動かす係長やリーダークラスが不足しているため、数少ない中堅にさらに負担がかかり病休に。そしてますます人手が不足するという悪循環が起きている。
また、若手職員も早急な独り立ちを求められ、それについていけない者が病休、早期退職に追い込まれてしまう事態も珍しくない。私も世のありがちなおっさんとして、「ったく、最近の若者はよ～」と思うことも多いが、反面「そうはいっても今の若手はしんどいわなぁ」と感じる。

そんな中、児童虐待や家族支援の最前線ともいえる市町の要対協事務局では、うちのＡさんのようなベテランの嘱託職員にかかる部分が大きくなっていると、その分野を研究している人から聞いたことがある。

若手職員は優秀だが経験不足。中堅・古参は数が少ないうえに、正規職員は３年ほどで異動を繰り返すため積み上げができず、ワザが磨かれない。そのため非正規のベテラン職員がその部署の心臓になっている。そんなことが現場で起きているという。
果たして身分に適した責任や、仕事内容に合った対価になっているのか？という疑問もよぎるが、さらにいえば、遠くない将来に必ず訪れる「ベテラン嘱託の退職」という課題を感じずにはいれない。
Ａさんのようなワザと知見を、私たちは組織としてどう引き継ぎ、次へと活かすのか。本気で考えなければいけない時期に来ていると思う。

希望のタネ

児相の若手職員であるワーカーのＢさん。彼女と仕事で関わるようになって数年が経つ。

仕事を始めたばかりの頃の B さんは、熱意は感じるが「これは会議で決まったことなんで」などと、正論を最短コースで言う印象が強く、時に自信のなさそうな態度が見えることもあった（慣れてないので当たり前だが）。
しかしこの頃、少し様子が変わってきた。
以前より相手に付き合う余裕が見え、最終的には同じ結論になっても懐が深くなったというか。共感力が上がっている印象である。
この変化の要因は何か。彼女自身の努力や経験値が大きいことはもちろんだが、私はひそかに、うちの A さんと仕事をすることが増えたためではないか。そうにらんでいる。
なぜなら私もそうだったから。

今から 15 年以上前。
私が児相時代に担当したエリアの家庭相談員 C さんも、周囲が頼りにするベテラン嘱託さんだった。多くの悩める親たちからの相談を、ひっきりなしに受けていた。
一緒に水漏れでビショビショになった母子世帯の家に片づけに行ったり、アルコール依存のお父さんとの面接に同席してもらったり、訪問に行く途中の車内で、役所のデスクの一角で、あーでもない、こーでもないと支援のあり方を議論したり…本当にいろんな思い出がある。

C さんからは有形無形の多くのことを教わった。家族への想像力を持つこと。子どもの立場に寄り添うこと。変化を必要以上に恐れないこと。それはアドバイスだったりもしたが、ともに活動し、その姿を横で見せてもらったことで初めて受け取れたものも多かったように思う。

これはあるベテラン保育士から聞いた話だが、ある園で落ち着かない子どもへの対応がとても上手な保育士がいた。ほかの職員が関わるとその子は教室を飛び出してしまったり、他児とトラブルになってしまうのに、その保育士が関わると落ち着いて集団に入れたという。
みんなでその保育士のやり方を教わろうと、あれこれアドバイスをもらうがどうも上手くいかない。そこでビデオでその保育士の保育の様子を撮影し、見せてもらったらしい。
子どもへの声かけの仕方やタイミング、絶妙に関わったり、逆に距離を取って見守ったり。実際の保育を見ることで、他の職員も大いに参考になり、落ち着かない子への対応がより良くできるようになったという。

ヒトが言葉を獲得する過程を例に挙げるまでもなく、私たちの学びの基本は「見て」「真似て」である。アナログだろうが、まどろっこしかろうが、相手の息遣いや間の取り方まで知るためには、繰り返し時間と空間を共有し、舞台の最前列で、まさしく“ライブ”を鑑賞すること。それ以上のものはないのだろう。

そんなことを考えていると、今日もうちの A さんと児相の B さんが、私のデスクの横で同行訪問する世帯のことでアレコレ打ち合わせをしている。時には意見がぶつかったり、愚痴ったり、はたまた笑ったりしながら。
私はその様子を横目で見つつ、C さんのことを思い出している。

臨床のきれはし

Sheet8

浅田 英輔

Guilty or Not Guilty

大好きなマンガの一つに、井上雄彦さん（スラムダンクの人）の「REAL」がある。ひとことでいうと「車いすバスケのマンガ」なのだが、それだけではなくいろんな人の成長が描かれている。

主人公はキヨハルとトモちゃんだと思うが、タカハシもメインに位置する人物。なんでもできてしまうスカしたイケメンであるタカハシに、父がいう言葉がアツい。

「君自身の声を、聞こえないふりをしていると、本当に聞こえなくなってしまう」（REAL6 巻）

「君自身の本当の声」というのは、きれいごと思われるかもしれないけれど、本当に大事なことだと思う。「こんなことしてちゃだめだよな」「こうしている自分はいい自分だな」という声をきくことができれば、「ちょっとだけいい自分」になることができる。聞こえないふりをしていると、ちょっとずつ嫌な自分になっていく気がする。ちょっとずつのいい自分は積み重なり、よりよい自分になるように思う。

「こんなことに本気になってどうするんだ」と斜に構えていると、できることは一向に増えない。「一生懸命やったって世界一になれるわけでもないし」「周りが笑ってるような気がする」なんていうのは、自分に対する言い訳をしているだけで、自分の声を聞こえなくする方法だ。

そこから考えたのだが、この対極に位置するのが「法に触れなければ、犯罪でなければ何をしてもいい」という言い方ではないだろうか。本当に法に触れなければ問題ないのか。

まず、罪とはなにか。犯罪を調べてみた。いうまでもなく「法を犯すこと」であるのだが、その法とはなにか。

刑法は明治 40 年に制定されたという、ずいぶん古い法律のようである。ただ、古来から「殺すな盗むなだますな」は罪と考えられているので、基本的な部分は古くてもいいのかなと思う。もちろん、死刑問題、自動車の運転について、わいせつや強姦について、電子データの扱いなど、時代に合わせて改正が重ねられてきている。

まずは刑法に該当するものを犯罪と言っていいだろう。飲酒運転で人にけがをさせたら、「危険運転致死傷罪」という立派な犯罪であり、罰則規定も設けられている。飲酒運転は、「ダメ！ゼッタイ！」だよ！

そのほか、一般的な法令の中で刑事罰が定められているものは特別刑法と呼ばれる。例えば、児童虐待防止法の第 17 条「罰則」である。こういったものも刑法にある刑罰と同じ扱いとなる。

犯罪とは、刑法または特別刑法で定められているものと考えていいようだ。法治国家である日本は、こういった明文化されたルールのもと動いている。

これらに違反すると「犯罪」となり、定められた手続きのもと、刑罰が科せられる。

そのほか、「法律に書いてあることをしなかったこと」も問題となることがある。

例えば、児童虐待防止法第 9 条の 5 では、「臨検又は捜索の許可状は、これらの処分を受ける者に提示しなければならない。」とある。臨検するときにその相手に許可状を見せなかった場合は、「違法な手続き」ということになる。これについて罰則規定はないので「犯罪」とは言わないが、その相手に「オマエ、許可状をみせなかっただろうが！」などと言われた場合は問題となることがある。これが報道されると「児童相談所職員が臨検に際して違法な手続きを取った」と言われるわけだ。もちろん、決められた手続きは守らなければならないし、それが法律というものである。ただ、それをさも「犯罪」であるかのように、悪意をもった不正行為であるかのように扱うのはどうかと思う。生活保護の「不正受給」についても、「十分な所得や貯蓄があるのに受給している」という違法性ではなく、書類が不十分だったり、手続きが何か落ちていたりといったパターンが結構あると想像される。

法律に書いていないことについて罰せられることは（基本的に）ない。司法機関のみならず、個人が勝手に罰することについても、法律で禁じられているからだ。ただし、組織として間違っていたという判断がなされる場合には、組織内での罰則（減給とか訓告とか退会とか）を適用させる場合もあるだろう。

話を戻すが、では「法律に反していない、組織内規にもダメとかいていなければ何をしてもいい」のか。

よく挙げられる言葉に「マナー」がある。「ダメじゃないけどマナー違反でしょ」と言ったりする。

じゃあマナーってなんなんだ？

Wikipedia には「マナーとは行儀・作法のことを指す」と書いてある。定義はさまざまあるが、「相手へのおもいやり」といった言葉がみられる。いわば、「お互い気持ちよく過ごすためのもの」といえるだろう。「一般常識」と言われることもあるかもしれない。

朝に職場の人と会ったら、「おはようございます」くらいするだろう。それがマナーだ。しなくたって罰則規定はないけれど、したほうがお互い気持ちいいだろう。

一人で家でごはんを食べるときは、膝をたてようがくっちゃくっちゃしようがごはんに箸をぶっさそうが、好きにすればいい。しかし、家族も含め、自分以外がいる場であれば、「行儀よく食べる」ほうがお互い気持ちよく過ごせるだろう。

もしかしたら、「マナーがないやつだと思われようが知ったこっちゃない」という人もいるかもしれない。そういう考え方は否定されるものではないのだが、周りが不快なのである。あなたのことを「マナーがない人」と思うだけでなく、同席するのが不快であるということも多々ある。

貧乏ゆすりや独り言がわかりやすい。本人は「どう思われようとかまわない」かもしれないが、周りは不快なのだ。本当にやめてほしい。あと、舌打ち。あと、音立ててコーヒー飲むの。あと、したねっぱり（標準語でなんというのかわからない）。私は音にうるさいほうである。

逆に、名刺の渡し方なんてものは、私は全然気にしない。「こちらをぞんざいに扱っているのではない」ことがわかればよい。「マナーを学んだ渡し方」をする人が、名刺もこちらも見もしないほうがよっぽど心地よくないではないか。

マナーとは、形式を知っているかどうかではなく、その場や相手を大事に扱う気があるかどうかで違ってくるのではないだろうか。

今回言いたいことは、「周りが不快だからマナーを守れ」ということではない。

法律は守らないといけないし、お互い気持ちよく過ごすために最低限のマナーを守りましょう（どれが最低限かわからないけど）というのは、基本的に賛成だ。

しかし、「法に触れなければよい」という考え方はどうかと思う。マナーを気にしなければならないのはもちろんであるが、それ以上に、「法で決められたことだけが、してはいけないこと」なのであろうか。

例えば、人の陰口を言うというのはおそらく犯罪とは言えないし、本人に聞こえないところであればマナー違反とも言い難い（めぐりめぐって本人の耳に入ることはままあるが）。法に触れていないし、常識的にもそれほどおかしいころではない。私だって言うことはあるし、たまには言った方がいいとも思ったりする。しかし、「顔を合わせればいつも人の悪口ばかり言っている人」のことはどう思うだろう。顔を合わせれば文句ばかり、私がいないところでは私の悪口も言っているだろうし、明るい話のひとつもないのかと、つきあいたくなくなってくる。

法には触れていないが、人が離れていくことになるだろう。また、周りが離れていくだけでなく、悪口を言っている人自身も「人のいやなところばかりに目がいくいやなやつ」になってしまうのだ。いいところを見つけるのが下手になるし、そうすると自分自身を認めることも下手になってしまう。

「君自身の声を、聞こえないふりをしていると、本当に聞こえなくなってしまう」

妬み、嘲笑的な態度、多すぎる自己弁護などは、「君自身の声」を聞こえなくするものである。

自分の声をきちんと聞くことができれば、後悔しにくくなるし、後悔しても切り替えて次の行動をとりやすなるはずだ。自分の声の聞き方も上手になるかもしれない。

こう考えると、「法に触れなければ何をしてもいい」なんてことを言う人は、「価値を他人に決めてもらう人だ」ともいえる。自分の声よりも、他人が決めた法律のほうが大事なのだ。「法律で禁止されてるからダメだ」というより、「法律で禁止されてるし、私もダメなことだと思う」という言い方の違いは、小さいようでいて大きいのではないだろうか。

「法が行動を縛る」のではなく、「個人個人の善悪判断が法を作る」と考えた方がよほど自由なのではないかなと思う。法律なんて、変えることができるんだし。

全くもって、「法律を軽視しろ」と言いたいわけではない。法律を守ることが基本である。知らない法律だってたくさんあるし、「やべえ、知らなかったこれ違法になるのか」ということはこれからも起きるだろう。

でも、法を大事にしつつ、法だけに縛られない、自分の声をよく聞いてみる生き方のほうが、人生楽しいのかもしれない。

ブラインド・アナリシス

新版Ｋ式発達検査をめぐって　その㉚

大谷　多加志

今回はちょっと趣向を変えて、検査自体の話ではなく「検査に関する学び」をテーマにしたいと思います。発達検査の実施や活用についてさまざまな形での研修会が企画されていますが、その一つに事例検討会があります。例えば発達検査に関する事例検討会であれば、発達検査を用いた発達相談の事例を取り上げ、その検査結果をもとに子どもの発達の見立てや保護者や関係者への助言、発達支援のあり方などについて検討していきます。実際の事例を扱うわけですので、実践的なレベルでの検査の活用に向けて、絶好の学びの機会であると言えます。

一方で、近年、対人援助職の事例検討会はいくつかの課題を抱えているように思います。

その一つが、事例検討会に事例を提示する人が減少していることです。減少の理由のひとつには、個人情報保護の観点から事例に関する情報の取り扱いが厳しくなったことがあります。もちろん、個人情報の適切な保護は重要ですが、場合によっては“下手に問題が生じるくらいなら…”ということで、外部の研修での事例提示を一律に（当事者の許可の有無に関わらず）禁止したり、幾重にも許可と決裁が必要な非常に複雑な手続き設定されたり、という事態も生じています。これは制度や組織の問題なのですが、もうひとつには、事例検討会の運営上の問題があります。

事例検討会において、しばしば事例提示者が批判の的になる場合があります。事例に関する情報をどの程度報告するかは、事例提供者によってさまざまですが、多くの場合、事例提供者がこれまで行ってきた関わりや支援等についても報告がなされます。誰しも、常に完璧な支援が行えていることなどありませんので、第三者が外野からツッコミを入れようと思えば、いくらでも入れられます。「…とかしたらいいと思うんですけど、されてますか？」とか「〇〇については、保護者の方から何か聞いていますか？」とか、参加者からの言いたい放題のツッコミに、「そうしたいと思ってたんですけど、なかなか…」とか「いや、すみません、気づきませんでした」とか、弁明に追われる事例提供者を見ていると、これは何を目的とした集まりなのかな？と疑問が膨らんでしまいます。

研修の本来の主旨で考えれば、当該の事例についてよりよい対応や支援のあり方を探求すること、あるいは、そのような検討を通して参加者がさまざまなケースを理解する力を養っていくことが目的であるはずです。事例に対して適切な（時にはこれみよが

しな）コメントできる人がすごい、という空気ができている事例検討会に参加すると、事例提供者を叩きまくる力動が働いたりするので、用心しないといけないなと思ったりします。研修の企画・運営を長くやってきたのでよく肝に銘じていますが、事例提供者あっての事例検討会なわけですから、事例提供をしたい人がいなくなるような場にしてしまえば、自分で自分の首を絞めていることになります。しかし、なかなかこの悪習は根強いと感じています。

今日のテーマである「ブラインド・アナリシス」は、この問題について、100%ではありませんが、低減させることができる方法であるとも思います。

ブラインド・アナリシス

「ブラインド・アナリシス」とは、非常に限られた情報だけをもとに事例検討を行う方法のことです。与えられた情報以外は、隠された（ブラインド）状態で事例について考えるわけです。私自身の参加経験の範囲では、家族支援についての事例検討会や、K 式発達検査を用いた事例検討会で、この手法が用いられていました。

家族支援に関する研修会では、家族構成に関する情報だけが提示されていました。家族構成や年齢、祖父母、子どもや孫など、同居以外の家族の情報についても一通り集めますが、「この人はこんな仕事をしている」だとか、「この人とこの人は仲が悪くて…」とか、「実は以前こんな経緯があって…」というような個々人の特徴や具体的な経過については情報を示しません。あくまでも、家族のメンバーと年齢についての情報に限られます。

しかし、限られた情報でも、推測できることもあります。例えば両親と子どもの年齢を比較すれば、子どもが生まれた時の両親の年齢がわかります。また子ども同士の年齢差や祖父母との住まいの位置関係等で、育児の状況が想像できたりもします。「若くして親になったんだな…」とか、「兄弟は年子だし、祖父母も遠方らしいから、小さい頃の育児は大変だっただろうな」とか、その家族が過ごしてきた時間に思いを巡らせることができます。ただ、これはあくまでも「推測」です。実は大金持ちのご家庭で、お手伝いの人を雇っているため家事も育児も全然大変じゃなかったです、という展開もあり得るわけです。

推測と実際が違った時、それは「無駄な考え」や「無駄な時間」になるのかと言えば、決してそうではありません。推測では“そうなっていてもおかしくなかった”家族が、推測のようにはならなかったという“結果”を示したということです。先ほどの例ではそれは「お金」という力によって成されたわけですが、実際には多くの家族はお金ではない、別の何かで、“そうなっていてもおかしくなかった”結果を回避していたりします。その「何か」こそ、その家族がもつ力です。

前置きが長くなってしまいましたが、K式発達検査に関するブラインド・アナリシスの話に戻ります。この場合、最初に提示される情報は「検査用紙」です。各検査項目の＋（通過）、－（不通過）や、子どもが描いた描画、言語課題での回答内容、検査者の注記などが用紙上には示されています。それ以外の情報、たとえば、家庭や保育園などでの様子や相談の主訴、家庭背景などは示されません。そのため、検査用紙に示されている

情報から、子どもの発達像を見立てていくことになります。

その次に、検査場面での子どもの反応について確認・質問の時間を取ります。検査用紙に子どもの反応はある程度記載されているのですが、用紙を見ていると例えば『この課題が達成できた時の子どもの反応ってどうだったのかな？』といった、より詳細な子どもの反応を確認したくなる場合があります。課題を達成しても淡々としている子どももいれば、嬉しそうにしたり、達成感を味わっていたり、検査者や保護者に“できた！”と視線でアピールしてくる子もいます。

余裕で達成したのか、達成した時も「…できた？」と半信半疑の様子だったのかという反応の様子から、課題への理解度の差がみえることもあるように思います。このような情報を加味して、子どもの発達について総合的な見立てを行っていきます。

そして最後に、相談の主訴（誰が、何に困っているのか）や家族背景（家族構成等）、これまでの相談歴や生育歴などの情報を追加し、当該の相談に対して検査者がどのような助言や支援を行っていくことができるかを検討します。つまり、最終的には通常の事例検討会で提示されるような情報は一通りそろうことになります。

事例検討の落とし穴

結局全部の情報を伝えるのであれば、最初から出し惜しみする必要はないと思われるかもしれません。

ですが、最初から背景情報を伝えた場合と後から情報を追加する場合とで、検討の展開は大きく異なります。

先に情報が出そろっていれば、検査情報の解釈はしやすくなります。検査場面での様子と、生活状況や家庭背景とをつなげて考えることができるため、より合理的で説得力のある見立て（子どもの発達についての仮説）を行うことができます。

一方で、ここに落とし穴があるとも思っています。情報が豊かであるということは一見良いことばかりに思えますが、思考が制限されるという側面も持ちます。つまり、「この情報がある以上、こうは考えにくいであろう」と消去法的に考えてしまったり、「こうに違いない。なぜなら家族背景にこの情報があるからである」と思い込んでしまったりするリスクがあります。

ある事例検討の場で、子どもの行動面の特徴（落ち着きがない、多動傾向である、他害的な行動がある…等）の原因をとにかく家庭内の対人関係（多くは母子関係）から解釈しようとばかりする方がおられて、思わず閉口してしまったことがあります。確かに、それも可能性の一つだとは思います。ただ、実際に見たこともない（事例検討の情報だけ）親子の関係性だけで説明をつけてしまい、それ以外の可能性について検討しないのであれば、あまりにももったいないと感じてしまいます。

検査者は、まず検査場面で子どもと出会います。予備的な情報がある場合もありますが、それが先入観や思い込みにつながらないように注意する必要があります。その姿勢を養っておく意味でも、自分の既存の枠組だけみで安易に解釈をしてしまうのではなく、“よくわからないけれど”という曖昧さも受け入れ、その子どもの世界を想像していく試みに時間と力を割いておきたいと思っています。

講演会＆ライブな日々㉒

古川　秀明

就労継続支援A型施設でのオープンダイアローグ＆ライブ

就労継続支援Ａ型施設は、障害や難病のある方が、雇用契約を結んだ上で一定の支援がある職場で働く事ができる福祉サービスです。

障害や病気に理解のある職場スタッフがサポートしてくれるので、安定的な就労が期待できます。

それなら安心して長期に働けると思うのですが、障害や病気を抱える人達の全てが定着するわけではありません。

Ａ型施設でも続けられない人もたくさんおられます。

それでも何とか、ここで頑張られている方もおられます。

今回はあるＡ型施設で、親の会のオープンダイアローグを実施しました。

話し合うテーマは「親が死んだあとの子どもの行く末」です。

Ａ型施設の平均給与は７万円前後です。

働く人のほとんどは親と同居しているか、親の援助を受けて暮らしています。

小さい頃からずっと我が子の障害や病気と向き合い、頑張ってきた親も高齢化します。

子どもが４０代になると、親は７０代になり、親亡き後の子どもの将来が心配になります。

この子に家や財産の管理はとても無理、さりとて、この子のきょうだいに面倒を見てもらうのも忍びない。

子どもよりほんの一日だけでもいいから、長生きして死にたい。

「親亡き後の子どもの将来」についての不安は、私が福祉施設で勤めていた３５年前からありました。

施設での保護者会の度にその話題が出ていました。

様々な福祉や社会システムは変化しても、障害や病気を持つ子どもの親が抱える心配は、今も昔も変わらないようです。

当時は、親御さんの多くが「入所型生活更生施設」の建設を望んでおられました。

そこに入所できれば、親が死んだ後もずっとその施設で面倒を見てもらえる。

つまり、入所型の施設こそ、親亡き後の、最後の切り札でした。

現在はノーマライゼーションの考え方の普及や、福祉予算の削減から、入所施設の建設は減少し、グループホームやＡ型施設や就労移行支援による在宅でのケアが主流です。

そうなると、また親亡きあとの心配が始まります。

結局ぐるっと回って振り出しに戻った感じでしょうか。

話はどんどん弾んで行きました。

決定的な答えは出ませんでしたが、話し合う前のネガティブな考えから少しだけ前進したような気がします。

みんなで対話した後は、コーヒーとケーキを頂きながら、私のライブです。

今回は私一人のギター一本での弾き語りです。

もともとこのスタイルで歌っていたので、なんだか懐かしい。

リクエスト曲をたくさん頂きました。

だいたいが６０年代にヒットした昭和の流行歌です。

歌っているうちに、ちょっと流しになった気持ちになれました。

一番最後は、私のオリジナル曲の「タダタンタント」で締めます。

気持ちが楽になりましたという感想をいただき、歌って良かったなぁとおもいました。

シンガーソングカウンセラー
ふるかわひであき

家族と家族幻想１

坂口　伊都

家族は不思議だ。

大事なものでもあるが、時として呪縛にもなり、苦しめる存在になると感じるのは私だけなのだろうか。

最近感じているのは、プライベートでも仕事でもいろいろな出会いがあり、うれしいことも悲しいことも随分と経験してきたような気がする。それだけの年月を経てきたという年齢に入ってきたのかも知れない。その中で、「家族」って何だろうと思い返すことが増えてきた。家族が、一言で言い表せるものではないこともわかっている。それでも、問いかけてみたい気持ちが居続けている。

ご存知の方もいると思うが、昨年の夏まで里子と暮らしていた。その子と週末里親等で、これからも何らかの形で繋がっている大人でありたいと願っている。

この子にとって、里親の生活が、家族がどのような存在としてあり続けるかはわからない。ただ、この子に「お母ちゃん」と呼ばれ、この子の母だと思う感覚は、別の場所で暮らすようになってからもそのまま私の中にある。そして今日までこの子のことを思わなかった日はないし、この子に辛い思いをさせてしまったのではないかと自問する言葉が相変わらず脳裏に浮かぶ。この子が大人になっていく過程で、家族について思い悩む時が来た時、私に何ができるのだろうか。何ができるかはわからないが、家族について向き合い整理をすることぐらいはできる。せめてできることは、後回しにせずにしていこうと思う。

また、仕事を通してもいろいろな家族に触れさせてもらっている。その中に出会う家族には必ずと言っていいほど葛藤があり、怒り、悲しみ、寂しさ、辛さというようなネガティブな感情を抱き、思い出さないように記憶に蓋をしていたり、親から暴力を受けていても「普通の家族」だと信じよ

うとし、「私の目標は自分の親」だと話す人もいる。そこにある葛藤はそうとうに大きく、聞いているこちらが息苦しくなる時もある。

私自身も家族の葛藤は物心ついた頃から、横にいた。家の中に母親はいるが、父がいたことはなかった。写真の中で小さな私を膝に乗せている父親しか知らずに育った。母は、「あなたのお父さんは猫の子捨てるかのように私たちを捨てたのよ。大きくなったら仕返ししようね」と子守唄のように私に聞かせた。私は、見た記憶もなく実態の持てない父親を恨むなんてことはできず、その言葉をただ聞き流していた。それよりも母の激しい気性の方が厄介で、どう安全に過ごすか作戦を立てる方が忙しかったと言い直した方がいいかも知れない。

私の小学校時代の名簿は、男の子が上段で女の子が下段、子どもの名前の横には父兄欄があり、男名前が並んでいる形だった。私は、学年が変わる度に父兄欄を確認した。すると女名前はクラスに一人か二人しかいなく、「やっぱりな」と呟く私がいて、どこかでもっと仲間が増えないか期待していたが毎年裏切られた。

家の中に父親がいないことが当たり前の家庭だったが、急に父親と会うように母から言われた。確か中学 2 年生の頃だったように思う。母は、自分の力だけではこれからお金が足りなくなるから父親に会ってお金をもらってこいという趣旨のことを私に言った。母によると、父母が別れる際、父親側に弁護士が立てられ、父に会いに行く時はお金を支払わなければならないという約束事が交わされたそうだ。結局、父に会うためにお金を支払ったことはなく、気性の激しい母親対策だったのではないかと思う。母も、子どもを抱えて生きていくことに必死だったのだろう。そうであっても、子どもだった私にはピンとこなかったし、大人の勝手に振り回すのは勘弁してくれと思っていた。

私から父親に会いたいなんて一言も言ったことないし、これっぽっちも思っていないのに、娘が会いたがっているという理由で父に会うはめになった。父自身は子どもがいないと豪語し、子どもを育てたことがない人だった。お互いに会いたいと思っているわけでもなく、ただ圧力に屈しただけで、初めて見る父親の印象は、どこかのおじさんだった。よくドラマとかで、道ですれ違うだけで血のつながりのある親子はピピっと何かを感じるというシチュエーションが演出されていたが、それは真っ赤な嘘だと思った。父親にいい印象も悪い印象も持てずにいたからなのかも知れないが、緊張だけして感情が動かず淡々としていた。

日常生活の中でほとんど、おじさんと話す機会がなかった私は、父を前にしてもテンションもあがらず、ほとんど喋れなかった。父の方も困ったのだろう、「学校の勉強は何が好きだ？」という気の利かない話しか出ず、全くもって使えない似た者親子だった。会食の終わりには、母から言い渡されていた、お金をくださいと言うミッションがあり、それを言った時の父の嫌そうな顔が忘れられない。それから、父と会うのが苦痛以外の何者でもなかった。途中から、母親の言うとおりに動くとろくなことが起きないと気づき、母からのミッションを聞き流すことにした。別れ際を濁す必要もないし、その方が楽で父との関係も良好に終えられた。

父と友好関係ができたのは、私が就職してから

だった。化粧品会社に勤め、苦手な上司（もちろん、おじさん）と出張に行くことが決まり、何とか怒られないようにと商品の勉強をし、説明できるように準備をしていった。その出張で苦手な上司から「よく頑張ったな」と褒めてもらえた。それが、予想もしていないことだったので衝撃的に嬉しさが沸き上がった。それ以降、その苦手な上司と仲良くなれた。その経験を経て、父親にも笑いかけてみたらどうなるのだろうと思い、実践したらみごとに成功した。自分の気持ちに壁を作らなければいいだけだとわかり、こんな簡単なことに10年も気づかなかった自分に呆れた。上司とのやり取りは、父とのリハビリになり、人との関係をどう作っていけばいいのかを教えてくれた。

今、思い起こせば私の周りには私を気にかけてくれるおじさんが何人かいた。無条件に可愛がってくれるのだが、「この人には実の子どもがいる、どう頑張っても私はその子たちには敵わない」と思って、甘えたい気持ちを抑えた。気を許して傷つくのが怖かった。でも、そのやさしいおじさんは、そんなに器が小さいわけではなかった人々のように思う。

逆に父親には、実子の私よりも父親の身近にいる子どもの方が親しみを持っているのだろうと悲観していた。遺伝子レベルでの近さが父との間にあるが、その事実が足枷となって余計に遠く感じる存在となっていた。普通の家庭にいる「父親」が何なのかわからなかった。それは、今も父親というものがよくわからない。子どもの頃の私は、それを知りたくて仕方がなかったし、知らないことが恥ずかしかった。

自分の家族を日々、営んでいるが、家族ってもっと良いもののはずだと幻想に陥ると、それに囚われて自分はダメなんだと思い込んでしまう。

そんなことは、割とよくあることのようだ。

父親は私の出自に直結することなので、自然と拘ってしまうが、父親と一緒に暮らせないことに拘り続けても、苦しいばかりでいいことは起きなかった。私をまず一番にかわいがってくれる人は父親であるべきで、それの第一歩が叶わない自分は価値がないと思い込んでしまっていた。周りを見ればいろいろな人がいて、可愛がってくれる人も出てくる。周りにいるその可愛がってくれた大人と出会えた経験が、私の中で育っていて肩の力を入れずに人と向き合える土台をくれていることにその頃は気がつかなかった。親がなくても子は育つと言われるが、本当にそうなのだろうなと感じる。理想の親に出会えなかったことに拘っても実りはほぼない。

母は、「子猫を捨てるかのように捨てられたのよ」の他に「あなたには家族はいないから、自分の家族を作りなさい」とよく言っていた。そう言われるたび、あなたと私は家族じゃないのか？と疑問に思ったが、何故か言い返すことはなかった。たぶん母親は私に良いことを言っているつもりで、それに水を差すのを控えていた。そして母は時々、「私はあなたがかわいい」と言っていた。その言

葉を素直に受け取っていなかったが、悪い気はしなかった。母が言う言葉として子守唄のように聞かされた二つの言葉よりも、ずっといいよなと思う。母は、褒めたり可愛がったりすることが下手で、恥ずかしさが勝っているようなところがあり、「私はあなたがかわいい」という言葉が娘の気持ちを穏やかにさせるとそれほどわかっていなかったようだ。母親は、お金で愛情を図れると信じている節があり、それは子どもにとって、迷惑以外の何者でもなかった。誰にでも言えることだが、親だからといって立派になれるわけでもなく、不器用に振舞ってしまうことが起きるが、子どもへの影響力は大きいと知っている方がいい。

母は、どのような人生を送ってきたのだろう。お金に苦労したのか、お金が無くなることに恐怖を感じたのか、子どもを抱えて生き抜くための苦労は大きなものだったと想像に難くない。信じられるのは、人ではなくお金だったのだろう。頼った人に裏切られた経験もしているような気がするが、今もそれを確かめたいとは思っていない。

私はただ父親がいないというだけで、自分の身体に穴が空いているように感じていた。それをある人が、「この状況は、子どもの頃のあなたが何かをしてどうにかなるような問題ではない。このことについてあなたは、何も悪くない」と言ってくれた。それも、衝撃的だった。私自身も母親になっている年齢になっていたが、それまで誰もそんなことを言ってくれる人はいなかった。苦労したね、大変だったね、かわいそうと口にしてくれる人はいたが、どこか他人事のように受け止めて私を憐れんでいるか、己が放つ言葉で相手が傷つくのではないかと恐れているように聞こえた。その場面になると、居心地の悪さがあった。人は言葉そのものではなく、言葉を口にする人の気持ちを受け取っているもののようだ。それは、いろいろな人の訴えを聞いていて感じている。

言葉は、その人が本当にそう思っていないと言葉にされても相手に共感していないと伝わり、嫌な感じにしか残らない。この部分は、対人援助者の落とし穴かも知れない。子どもの頃のあなたに状況を変えることはできない。だからあなたに非があるわけではないという言葉には、責任が伴う。その責任を背負う覚悟がなければ言えない言葉なのだろう。そういう言い方をする人になかなか出会わない。それほど難しい言い回しではないと思うが、どこかタブー視され、そこまで言い切ってもいいのか、一援助者がそこまで立ち入ってもいいのかという感覚が強くなっているように見える。図々しくなれずに遠慮する感覚の方が勝るのかも知れない。その遠慮は、結果として相手との縮まない距離感を作り、壁となり、わかってもらえないという印象を与えているように感じる。

家族の中でも親は特別な存在だ。大人になってからも、子どもとして親の機嫌を保たれるように奔走し、親の顔色を見ることに多大なエネルギーを使って疲労困憊しているなと感じる人に出会ってきた。そのことに囚われると、周りが見えなくなるようだ。親を敬い、大事にすることが子どもの役割だと信じ、親の言うことを聞き、親を立てなければならないと頑張っているが、その親の言っていることが滅茶苦茶だなと感じる時がある。多分、この人が何をしてもその人の親のイライラはなくなることなく、怒りをその人にぶつけ続けてしまうのだろう。その状況は、家族の誰にとってもいいことがない。

そのような時、第三者が今までとは違う視点を投じ、違う選択肢も存在することに気づくと、少し冷静になって考えられるようになる。それは親を怨むとか、切り捨てるとかではなく、自分の親と距離を保つことができるようになれている。自分は、いつまでも親の子どもではなく、我が子の親であることを優先することに責任を持てる方が、子どもにとっても、親である自分にとっても、子の祖父母にとってもいいと思う。家族のことだからこそ、第三者の言葉が新たな可能性をつかむきっかけを作るのだろうと思う。

人は、子どもの立場での家族と大人になってから作っていく家族がある。その過程で保護される者から脱却して、自分の足で生きていくことを学ぶ。母は、成人した私を手元に置き、自分の嘆きを聞いて欲しがった。母のやり方は、悪循環にはまっていくようで、このまま一緒にいると親子共々押しつぶされてしまうと感じ、家を出る道を探した。できるだけ、母の怒りスイッチを入れず、私自身も自分の足で生きてける選択を考え、家から通えない距離の大学を社会人入試で受験することを決めた。受験をする直前に母に話をすると、驚いてはいたが反対はしなかった。学費を工面するために父親に稟議書を作ってお願いをすると、父も「俺は頑張っているやつの応援をするのが好きだ」と言って、協力をしてくれた。

25 歳になってから大学生になり、18 歳の若者達が眩しく見え、社会人からの脱落したような気分になったが、もっと年上の社会人入試の方々にも出会い、当たり前ではない生き方もあるのだと知った。自分のけじめとして、母から渡されたお金を使わないと決め、バイトをいくつもしてきた。大学とバイトの日々で生活はきつかったが、自分で生き方を選択し、行動したこの時から自分の足で歩けたように感じた。自分と同世代に会うことはほとんどなかったが、年下や年上の人との出会いは数多くあった。小さな居酒屋でバイトしていた時も私を可愛がってくれるおっちゃんがいた。社長の俺に愛想をしないと言われたが、誰に対しても愛想のない私を面白がってくれたり、人生論を聞かせてくれたり、美味しいものを食べさせようとしてくれたり、酔って陽気になって財布を無くしたりもして、抜けている所も見せてくれていた。実家の店では、大学なんて行かずに結婚相手を探した方がいいと言う人が多くいたが、自分が実際に動くと面白いことをしている人には出会えた。そして、私を支えてくれるのはおっちゃんだけでなく、おばちゃんも年下の友達もいた。子どもの頃は、親の影響を大きく受けるが大人になれば、面白い人の背中を見ることもできる。面白さを見つけられるかどうかは、私次第らしい。

子どもは親からの影響を大きく受ける存在だ。でも、親に自分の人生を合わせなくてもいい。親から離れて自分の人生に責任を持とうとすると、いろいろな人との出会いが起こる。その中に自分らしく生きるヒントがあるのかもしれない。

周辺からの記憶 26

2017年度　福島・むつ・多賀城・岩手

村本邦子（立命館大学）

2020年2月23日、9年目を迎える「東日本・家族応援プロジェクト・シンポジウム2019～被災と復興の証人とこれから」、コロナ肺炎で様々なイベントが中止になるなか、注意を呼びかけつつも予定どおり開催した。午前に団さんの漫画トーク、午後からは、例年どおり院生チームによる現地の状況と学びの報告、その後、アーティスト瀬尾夏美さんの「震災9年、二重の風景」の講演、瀬尾さんと院生たち3名とのパネルディスカッションとなった。

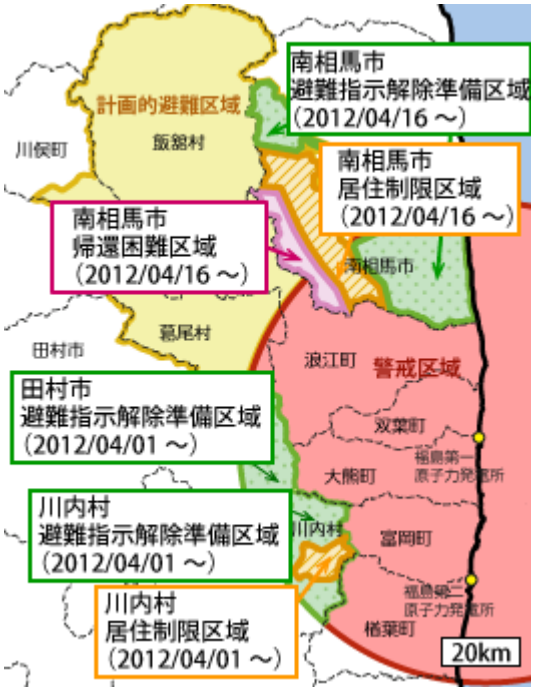
瀬尾さんは、院生たちとそれほど年齢が変わらない若手だが、著書『波の下、土の上』（晶文社）の印象通り、鋭い感性とともに思慮深く言葉を選びながら、陸前高田で経験してきたことを話してくれた。彼女がやってきたことは、アーティストとして絵や文章を通じて語りの場をつくり、「他者のことばを記述する」という取り組みとして説明されていた。誰かが体験したことが話され聞かれることで、他者の身体が介入して物語が生まれる。そこには「誤読」も生まれるが、それはフィクションの始まりであり、語り合われることによって共有体験となる。そうやって、その場にいなかった非当事者から、津波に流されて亡くなった死者まである体験のグラデーションをつなぐことで、伝承が可能になる。シンポ後の食事会での話を含め、話せば話すほど、私たちのやろうとしてきたことと近いのではないかと感じたが、逆に、明確に違うとわかったこともあった。

いずにしても、彼女が本当に自分を鍛えることのできる場所を上手に選び、そこで起こってくることに誠実に向き合いながら、場に育てられてきたのだということがよくわかった。今回頑張ってくれた院生たちも含め、これからの若い世代に期待しよう。

2017年8月福島

2017年8月29日(火)
川内村　感がえる知ろう館

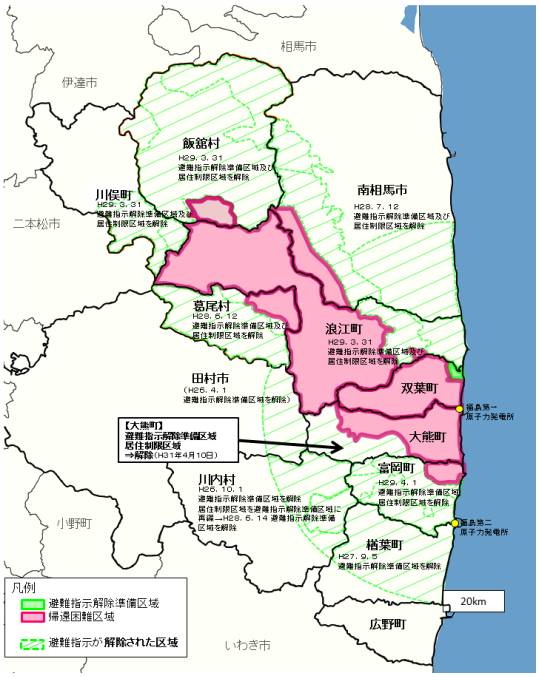
いよいよ7年目のプロジェクト、夏のスディツアーは福島だ。2017年3月末日、川俣、飯館、浪江、富岡などの避難指示解除準備区域だったところが解除となった。



2012年4月1日　経済産業省

郡山でレンタカーを借り、双葉郡川内村高田島地区にある「感がえる知ろう館」を訪ねた。原発25キロのところにある。

これは、2012年8月に、バイク雑誌の編集者である西巻裕さんが、廃校になった学校のプレハブ音楽室を利用して開設したものだ。西巻さんは、もともと関東の人で、震災の2年前、川内村に住みつき、高田島



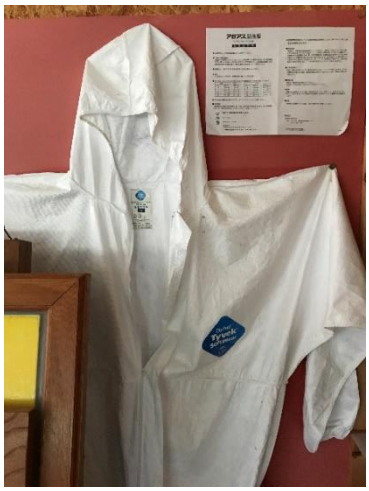
2017年4月10日　経済産業省

地区がおもしろいので、こちらに移ったという。

おもしろいというのは、「いい加減さ、我は我、ゆるさのような感じ」なのだそうだ。ここはもとから水道がなく、それぞれ地下水や井戸水をポンプで汲んで使ってきた。だから、地震の時も、インフラに困らなかった。水道のない村は、日本に3か所だそうだ。

もともと田口ランディさんとネットでつながっていて、震災後から、毎夏、1泊2日で「川内村自由大学」を一緒にやっている。ランディさんの勧めもあって館をオープンしたが、展示物は手作り風で、かつての村の風景やニュースレター、原発作業員の防護服、放射能測定器、メルトダウンに関係する資料などである。イノシシでもキノコでも何でも食べているそうだ。

感がえる
知ろう館



動物が入るので
開けたら
必ず閉めてください

東日本巨大地震
原発2万人避難

仮置場の設置 を
しております

スパリゾートハワイアンズ

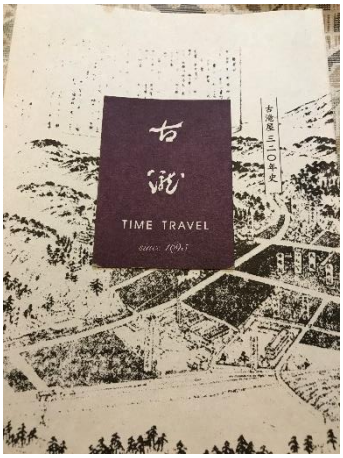
それから、フラガールのいわきスパリゾートハワイアンズに寄った。炭鉱閉山の危機を生きのびる映画「フラガール」も印象深かったし、震災復興のシンボルとしても際立っている。雑誌などでもしばしば取り上げられているが、常磐炭坑で働く人たちに伝わる「一山一家」という精神的支柱があったからこそ、助け合い、困難を乗り切れたということのようだ。たしかに、たくさんの家族連れが来てにぎわっていた。

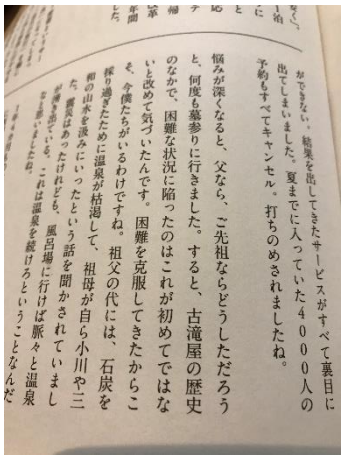
いわき湯本温泉古滝屋

たまたまその夜の宿は、いわき湯本温泉古滝屋だったが、部屋に 300 年を越えるという宿の歴史をまとめた冊子が置いてあり、思わず読みふけった。現社長が震災の危機を「歴史があるから乗り越えることができた」と実感したことから冊子を作成したという。

この宿は、過去にも二度、存続の危機があったが、生きながらえてきた。今回も、一年半の休業を経て、事業を縮小して再開したとのこと。ずいぶん頑張っている若社長のようで、館内には、水俣からの通信物やさまざまなチラシも置かれていて、共感できる宿だった。

あっちに行っても、こっちに行っても、福島のみなさんが、いろんな次元で頑張っておられることがよく伝わってきた。

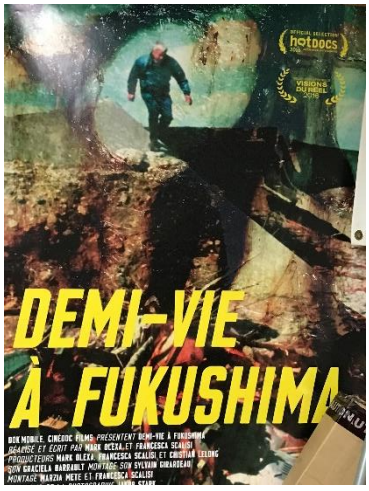




2017年8月30日(水)
富岡町　松村直登さん

翌朝、富岡町の松村直登さんを訪ねた。原発12キロ、この4月1日に避難指示が解除されたが、無人地帯となったその町に動物たちと一緒に住み続けた人だ。

松村さんを主人公とする「残されし大地」というドキュメンタリー映画の大きなポスターが貼られていた。ベルギー人監督によるもので、最後の編集をしにベルギーに帰ったところで、ブリュッセルのテロに遭って亡くなったという。テロの犠牲者を追悼する会で上映されたそうだ。どういう因果なのだろう。



原発が爆発して、自衛隊がしつこく出ろ出ろと言ってきたが、動物70匹くらいに餌をやって回っていた。最初は、犬の鳴き声に隣の家を覗いたら、置いていかれた犬が、「顔見知りなものだから、餌くれくれとねだる」。もしかしたらと、扉あけたら玄関に餌があった。隣も、その隣も、そのまた隣もと、2～3キロ走ったら、ずっと置いていかれたペットがいて、餌をやって回ることになった。そのうちやるものもなくなったので、ダメ元とネットで訴えたところ、いきなり百万円入ってきた。自分で使ってしまうとまずいだろうと、団体を作って、通帳を別にした。結局、NPO法人まで作ることになった。そして猫何千匹も飼うことに。

ここは警戒区域だったから誰も入れなかった。ライフラインは全部切れたが、地下水も出るし、ロウソクはあった。自給自足だ。日本のメディアは上から縛りがあっが、外国のメディアは逆に何とか入ろうとして、最初にやってきたのがAP通信のドイツ人だった。行けるとこまで行ったらあ

とは線路歩くと言うが、30 キロはある。迎えに行くかと、夜中、車で走れる所まで走って、ライトをつけたまま線路に上がって歩いた。自動販売機がまだ生きていて、駅のホームで缶コーヒーを飲み、さらに歩いて、トンネルに入った。真っ暗だが、足音が聞こえる。途中で出会ったので、「マイネームイズ松村」と言ってみたが、ずっと何も言わない。「なんだこいつ」と思いながら、後で「なんでしゃべらないの？」と聞いたら、びっくりしすぎて、口から心臓が飛び出そうだったと。車まで戻ったら、バッテリーあがってエンストしていた。朝、とりあえず缶ビールで乾杯。その男は 3 日ほどいたが、その間、ほとんど何も口にしなかった。松村さんに出会って人生変わったと、今も、毎年 2 度ほどやってくる。

そこから、外国人向けに記者会見をしたり、映画の話が複数舞い込んできたり、ヨーロッパに講演に招かれたりした。動物の話や東電とのやり取りを面白おかしく話してくださるが、非常に個性的で一本筋の通った人だ。東北にはこんなタイプの人がいて、ひょんな巡り合わせから国際的な有名人になっている。元気で力強いが、健康だけは心配だ。

南相馬復興ツアー

午後は、南相馬の復興ツアーに参加、ボランティアガイドの長谷川義信さんに 3 時間ほどかけて南相馬を案内してもらった。南相馬は日本で三番目に観光資源が多いところなのだそうだ。長谷川さんは、もともと観光ボランティアをしていたのであって、震災からではない。

実際、大悲山の摩崖仏や大杉は迫力があった。南相馬の一本松も見せてもらったが、まわりに無骨に除染土の袋があって驚く。VTR で見た馬追もなかなかの迫力。機会があったら実際に見てみたいと強く思った。

2017年8月31日(木)
浪江町　豊田動物病院

31日（木）は、浪江町の豊田動物病院を訪れ、豊田先生と赤間さんの話を聞いた。浪江の動物の保護活動を続けている人たちだ。

ここも「帰還困難区域」を除き、4月1日に避難指示が解除された。豊田先生は、毎週木曜日に避難先の二本松から戻ってきて、犬猫の避妊去勢手術をしている。赤間さんはそれに合わせて犬猫の捕獲をし、手術して、里親探しをするか捕獲した場所でリリースし、餌を与えるということをやっている。野生動物に餌付けしないようにしながら、猫に餌をやるのに苦戦を続けてきた。

もともと、赤間さん自身が動物好きと言うよりは、妻と子どもが好きで、犬 4 匹、猫 13 匹を飼っていたそうだ。震災翌日の朝、避難するよう放送が流れたので、みんな避難したが、赤間さんと妻は犬がいるので避難しなかった。3月20日まで浪江にいて、2 日目から部落部落を歩き、ペットを保護して自宅に連れてきて餌をやっていた。20日以降、自衛隊や警察がうるさくなり、フル装備で全面マスク、装甲車ばかりという中で、一時は津島に行った。ペットを連れて避難所で飼っていた人たちが、そこから移動する時にペットはだめと言われ、泣く泣くもらう人を探さなければいけないという状況だった。

4 月 22 日から浪江にはいっさい入れなくなった。赤間さんはＪビレッジで原発労働をしていて、通行許可証があったので、仕事に来て、餌やりに家に寄っていた。あ

る日、放された動物が道路いっぱい、チワワや猫やらがドーッとたくさん走ってきて、その光景をいったん見てしまったら、もうやるしかなかった。最初のうち、犬たちはみんな寄ってきた。興味ない人は走るから、車に犬がぶつかって犬の死骸がいっぱい。夏場頃には、ほとんど寄ってくる犬がいなくなった。寄ってくるのだけを捕まえて保護していた。

郡山の息子の所から朝 4 時に J ビリッジ集合なので、郡山を夜中に出て、遠回りしてこっちに来て、犬猫を保護したら、家の裏につないで仕事に行く。仕事が終わったら、また保護して連れてくるということを 2 年間やった。犬だけで 200 匹以上。最初の頃は、団体が預かってくれていたが、だんだん引き上げてしまって、2013 年の初めには犬の団体がいなくなった。初めの頃は、動物支援団体になると 300 万もらえたが、その時期が過ぎれば誰もいない。フェイスブックに写真を載せて里親を捜すが、6 年も経つと出る数も少なくなり、犬 25 匹、猫 70 匹近くいて、全部面倒見ている。

人がいなくなって 6 年。「犬が可哀そう、猫が可哀そう」と餌をばら撒いていった人たちがたくさんいた。立ち入り禁止だから、大丈夫というところにどんどん投げ込んだ。犬猫の餌にもなったが、鼠も食べ、アライグマも食べ、ハクビシンも食べた。可哀そうだからとただ餌をやる、そこに理念がなければ多頭飼育と同じ。繁殖制限も必要。

2013 年 9 月に獣医の豊田先生と TNRS を始めた。町の中に餌箱を置いて放す。アライグマがすごいので、餌箱の高さを工夫したり、入口の大きさを工夫したりした。改良に改良を重ね、最新版では、アライグマにかじられないよう鉄板で作り、1m50cm くらいの高さにした。低いと猪が来るが、高すぎれば猫が届かない。行政が「今は人間優先で」と、動物保護への風当たりが強くなった時があった。それで役場の人と話した。規制すれば必ず入る人がいるから、誰かを中心にきちんとやる。地域猫はできないが、TNR して餌箱にえさを供給していくということで、浪江町の役場と双葉の警察に許可をもらってやり始めた。

人間と動物の双方に作られている秩序のすごさを思う。川と海の汽水域のように、ちょうどいい塩梅の動物がいた。それが、帰還困難地区を作って 5 年も 6 年も人が住まなくなったから、猪やハクビシンが巨大に成長し、野生と人の境界がなくなりつつある。今は猪もふつうに歩く。除染している作業員の前を子ども連れの猪がのどかに歩いて行く。危害が加えられないことを学習すると共存する。

害獣駆除も地元の人間がやらないとダメになる。夜、暗くなって、ドンとぶつかったら大変。アライグマは強くて病気にかからないし、繁殖力すごく、どんな雑菌や病原菌を持っているかわからない。アライグマには北限があり、震災まではほとんど見なかった。猿もいなかった。今、全体的な変化が起きている。

動物の胎児や内臓の線量調査もしているが、それほど影響はないようだ。多少影響があるのはアライグマで、アライグマは土の奥深くの物を食べる。それ以外はペットフードを食べているので、なくなった。津島で保護した猫の 1 匹に少しあったが、ふつうの餌を食べさせたらゼロになった。

犬猫の支援に補助金出ることを知ったのは何年も経ってからで、申請してもだめだった。福島で 3 団体に出たが、被災犬猫ではなく地域の犬猫だった。金目当てと言われるのしゃくだから、もらわずやろうと、餌も現物をもらい、シェルター作るもすべて自腹、スタッフも完全ボランティア。自分の庭を掃除したり、遊びに来て餌をやっている感覚。そうやっていると変な人はこない。天敵は人間でしかない。震災がなかったやってなかった。光景のインパクトで人生が変わる。原発と地域猫なんて、世界でも初めての経験だろう。

原発に近く避難指示区域となっていたところに住み続けたり、活動を続けたりしてきた人たちの尽きることのない話を聞きながら、自分の 価値観に添って自分の人生の決断を行い、生きて いる人は魅力的だと思った。 20 キロ圏内でも、田んぼには青々と稲が育って いた。食べられないので、家畜の餌になるそうだ。 こんなに美しい土地を汚し、生態系を崩してきた人間の欲望と愚かさが無念だ。

2017年8月むつ

2017年8月31日～9月2日
プロジェクト2017 in むつ

31日、福島からむつへ移動し、夜はプロジェクトのレセプション。現地で動いてくださっている実行委員会のメンバーは、毎年入れ替わりつつ、入念な引継ぎと継続メンバーの支えがあって、今では当たり前のように、しかし密かにあちこちに細やかな配慮とともに運営が回っている。1年目は何もわからなかったというスタッフが、回を重ね、常に変化する状況に対応しつつ、より良いプロジェクトになるよう工夫し、十年後、どのようにこれを着地させるのかという悩みも含めて共有してくれていることを知って、感謝の気持ちでいっぱいになった。メンバーのこんな姿勢は日常の仕事にも反映されているに違いない。移動になった元実行委員会メンバーたちが毎年、駆けつけてくれるが、それもこんな関りがあってのことだろう。「十年間のプロジェクト実行委員の同窓会名簿を作ったら、かなりのネットワークになりますね」と言ったら、「青森だけでなく、岩手や宮城、福島でも、このプロジェクトに関わった人たちの同窓会名簿を作ったら、直接会ったことがなくても、すごいネットワークになりますよ」という答えが返ってきた。

いつも一緒にやっている中村正さんが事情で今回は参加できなかったため、地元の力に頼み、支援者支援セミナーをむつ市児童相談所の杉浦裕子さんと一緒に担当し、お父さん応援セミナーを「お父さん・お母さん応援セミナー・ほほえみ講座」として「青い森のほほえみプロデュース推進協会」にやって頂いた。支援者支援セミナーでは、毎年、むつ市の事例を提供してもらい、ワークショップ形式で議論しているが、今年の事例は、虐待、DV、精神障害を含む母子家庭を地域の支援機関と支援者たちが、丁寧な議論を重ねながら、連携してしっかり支えてきた事例だった。誰の人生にもいろいろなことが起こるものだし、この親子にこれから先もいろいろなことが起こるだろう。ちょっと困ったところもあるけれど何だか魅力的なお母さんと子どもたちを、地域が見守りながら支えている様子に、これが本来の支援だと思った。

セミナー参加者の活気にも驚かされた。こちらも入れ替わりがあるものの、固定メンバーが増えるにつれ、このセミナーの趣旨を理解して、主体的、かつ協力的に課題に取り組んでくださる参加者が増えているので、年々発言は活発になっていたが、今年は、セミナー開始前より、すでにグループのメンバーとの交流が始まっており、和気あいあいとしたムードが出来上がっていた。初めて会うメンバーとも、目的を同じくする同士として知り合い、知恵を寄せ合おうという姿勢は、これもきっと日常の支援の小さな変化につながるだろう。

地元で準備してくださった「ほほえみ講座」は、ほほえみとともに暖かさを拡げていこうとする青森発祥のモーブメントで、講座を受け、「ほほえみ太陽メッセージ７ヶ条」を実践する「ほほえみプロデューサー」はすでに４万５千人を超えるという。問題は専門家に丸投げするのでなく、それぞれがそれぞれの場所でできるささやかな取り組みを拡げていこうという主旨が素晴らしい。今年は、立命館側からも、職員として同行してくれた修了生の小池英梨子さんの「人もねこも一緒に支援プロジェクト」のプレゼンをして、とても好評だった。

2017年10月 宮城

2017年10月6日(金)～9日(土)
プロジェクト2017 in 多賀城

今年は一日早く仙台に入り、上山真知子さんと合流し、山形蔵王温泉に泊まった。濃い温泉に浸かり、山形牛のすきやきに舌鼓を打ちながら、常日頃感じていること、あらたに経験したことなど延々と語り合った。

翌日、仙台に戻り、会場である多賀城市立図書館で漫画展の確認をし、夜の支援者交流会に参加した。丸山元館長、中島順也館長、伊藤由美子さん（教育委員会学校教育課課長補佐)、CCCから三木さん、高橋さん(マネージャー)、おおぞら保育園からは、黒川先生、みなと先生、男性の保育士が来てくださった。

自己紹介をした後、それぞれ語り合う。教育的配慮もあってか、地元の方々は例年、若い院生たちに被災時の体験をしてくださる。それぞれの立場から見える風景、思いに皆、揺さぶられる。なかでも、大川小学校について、震災遺構についての思いを聞かせて頂き、それぞれなりに考えさせられたようだった。

10月7日（土）の午前は、鵜野祐介さんのコーディネートのもと、加藤恵子さん（宮城民話の会）とおおぞら保育園とのコラボで、「民話と絵本と遊びのワークショップ」が開催された。早くから来て待ってくれていた親子や、たまたま通りがかった子どもたちなど、入れ替わり立ち替わり40～50名の方々が参加してくれた。

加藤恵子さんの語る民話には、幼い子どもから大人まですべての参加者を惹きつけて離さない力があった。さすがだ。

おおぞら保育園の「パパの絵本読み聞かせ企画」では、3人のパパが絵本を読んでくれた。子どもの反応を伺いながら一生懸命絵本を読むパパたちの姿にママたちもほっこり、全体が暖かい雰囲気に包まれた。その後、子どもも大人も、参加者も企画者も一緒になって、お手玉やこま回し、ゴム飛びなど、昔ながらの遊びを楽しんだ。

今年の漫画トークは、1階のオープンスペースで行われ、集中して話を聞きたい人には少し不満の残る形だったかもしれないが、参加の仕方にグラデーションのある、ゆるやかな境界の中でのトークは、なかなかよかったのではないかと思う。来年、立命館大学に入学するという高校生も来てくれた。

プログラム終了後、多賀城市立文化センターに移動し、山形大学の上山真知子先生に、沿岸部の史料レスキューとレジリエンスについての講義をして頂いた。人間は歴史的存在であり、歴史を救うことが人間を救うことなのだと思った。フィールドワークとして翌日訪れる大川小学校についてもお話を聞くことができた。

2017年10月10日(日)
旧大川小学校

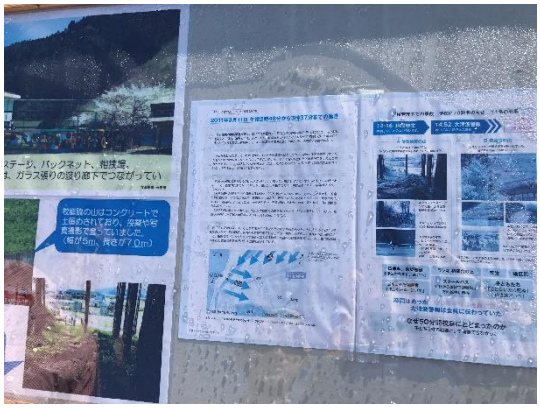
午前、石巻にある旧大川小学校へ向かう。全校生徒の7割にあたる74人が死亡・行方不明になり、学校にいた先生11人中10人も犠牲になった。地震発生から津波到達まで約50分間あったが、子どもを運動場に待機させ、適切に避難させなかったと、子どもの遺族の一部と市・県との間で、事故の責任をめぐる裁判が続いており、何ともやりきれない気持ちにさせられる。

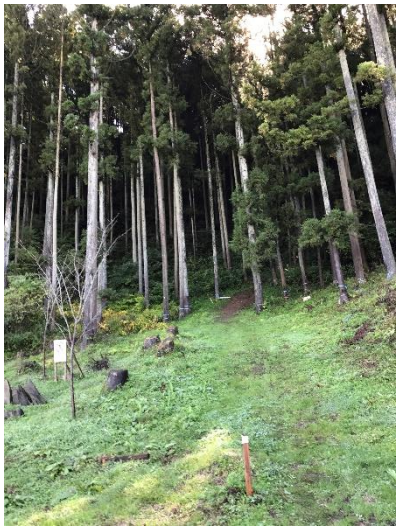
校舎は、2階建てのモダンな建物で屋上がない。津波の衝撃によるものだろう、鉄筋の渡り廊下が落ちて曲がっている。立ち入り禁止のロープの周りに咲き乱れるコスモスと青い空がたまらなく悲しい。

朝からたくさんの人たちが次々とやってきている。鹿児島ナンバーの車もある。校庭には、新しい慰霊のモニュメントが複数あり、3か所ほどにパネル展示があった。「50分あったのになぜ逃げなかったのか」と書かれ、地図と子どもたちの足取り、しいたけ栽培の山道を逃げる可能性を3つほど矢印で示してあった。

見ていると、3人の男性が道具を持ってやってきて、フレームやアクリル板をとってバージョンアップした表示に入れ替え作業をしていた。関係者なのだろうか。お一人は、「大川を語り継ぐ」のネームプレートを首から下げ、案内をしていた。なぜ逃げなかったのかの内容のようだが、話しながら涙ぐんでいる。どなたの立場に立って考えてみても、いたたまれない。

シイタケ栽培の道を見に行く。上の方は急こう配で、きのうの雪でぬかるんでいる。ずっと先まで行くと、お寺跡に新しい大きな観音像と記念碑があった。





女川

雄勝を通って女川へ。駅前の小さな一角ではあるが、正面に海が見えるおしゃれなスペースとなっている。カフェや食堂、みやげもの屋が並び、お天気もよく気持ちのよい空間に、若い家族連れがたくさん集っていた。女川は、防潮堤を作らないことを決め（防潮堤がないのは、あとは決定がまだの気仙沼だけ）、盛土をして、商業スペース、宅地スペースと段階をつけているそうだ。女川駅には温泉もある。海鮮丼を食べ、マザーポートというカフェへ。気仙沼のKポートとチェーン店なのだそうだ。薫り高くおいしいコーヒーだった。

それから、工事中の場所をぐるっと迂回して小高い丘に上がり、震災の後、避難所としても使われたという町営総合体育館内の一室で、安倍ことみさんから民話や震災体験談をうかがった。ことみさんは、家の壁が抜け、津波に顔までつかって流されたらしい。

昔話はおばあさんに聞いた。3 人子どもがいたが、自分は昔話が好きで、おばあちゃん娘で、かわいがられた。あとは、友達が買ってきてくれた本などでも仕入れた。子ども向けにできない色話ばかりで、震災後、警察や自衛隊の人たちが喜んで聞いたという裏話を聞かせてくれる。昔話は関係のツールになる。「ふつうにはそんな話できなくても、昔話ならできるでしょう」と笑っておっしゃったが、おもしろいなと思う。

yupopo

女川は流されたのではない、新しい女川に生まれ変わるんだ。

女川交番
被災前
昭和 55 年に建設された、鉄筋コンクリート2階建ての施設。1階が交番、2階が休憩室として使われていました。原位置付近で転倒しており、津波の引き波により転倒したと考えられます。
現在満潮時に 30cm 程度浸水している状態で、建物の上部には漂流物による損傷等も見ることができます。杭が引きぬかれているのも特徴です。
「コンクリート」などが はがれて 落ちてくると "きけん"なので近よらないように してください。

それから、高台の地域医療センターに移動して、公園で、元教育委員長夫人の遠藤さんにお話を聴く。教育委員長は歴史家で、資料を書庫に集めたが、すべて流された。脳梗塞で倒れ、今は家で元気にしている。家の屋根の稜線まで津波につかった。孫たちとさらに上に逃げたが、あまり覚えていない。でも、カメラを持っていて、当日、周辺の写真を撮っておられ、引き伸ばしたものを見せてくれた。

女川浜で生まれ育ったという遠藤さんは、復興中の町を見下ろし、「やっぱり海が見える風景が好きです」としみじみと語られた。

駅前商店街に戻ると、ファッションショー（小さな女の子たちのドレスショー）をやっていた。

何か飲もうと店に入ると、おじさんがメロンジュースを飲んでいたので、同じものにした。桃が一番おいしいが、今日は売り切れたのだそうだ。他所から仕入れており、今日のメロンは青森産。

おじさんがいろいろしゃべってくる。もともと三重の出身だが、名古屋から来ている。6 年前から復興の工事をしている。引き潮の加減で、夜の 11 時頃まで作業をすることもある。毎日ここにくる。家のようなもので、みんなよくしてくれるとご機嫌だった。

つづく

病児保育奮闘記

（２２）

子どもサポート H&K
大石　仁美

飯炊きばあさん活動開始

病気をしてから丸一年。すっかり健康状態を取り戻した私ですが、息子は気遣って、食事の準備さえ済ませれば、「もう帰っていいよ」と言ってくれます。保育は保育士さんに任せて「ゆっくり休んで」と言う言葉に甘えて、午後からは帰宅する毎日です。

実を言うと以前から、「早く飯炊きばあさんになりたぁ～い」と思っていたのですから、願ったりかなったりの幸せな日々を過ごしているわけです。

本当に忙しくて、朝 5 時過ぎから夜 8 時過ぎまで、働きどうしの日々もありました。晩飯もそこそこに 11 時頃まで翌日の食事の仕込みをして、もうくたくた。腰痛で泣きそうなこともありましたが、それが自営業のつらいところ。それでも楽しみとセットなので、やり抜くことが出来たのです。

子どもとふれあい、共に過ごす時間はとても楽しい。さらに成長ぶりがみられるのは、この上なく幸せ。自分の子どもでないからこそ、高望みをすることもなく、思い通りにならないからと、感情的に怒ったりすることもなく、緩衝地帯を保ちながら遊べるので、気が付くと元気をもらっていることが多いのです。この濃い時間を過ごすためには“お手伝いさんが欲しい！ご飯を作ってくれたり、お掃除をしてくれる人が欲しい！”と悲壮な願いを持ち続けていました。でもそんな贅沢なことは、経営上許されないことでした。

しんどくても自分でやるしかなかったのです。そのうち優秀な保育士さんに来てもらうことになったことで、私の仕事は少しずつ、保育よりも裏方の方に比重が移ってきました。保育士さんが動きやすいように外回りの仕事をするのが自然になってきたのです。嘔吐した吐物の処理、消毒、トイレ掃除、昼食の配膳、食器洗い等々やることは山ほどあります。そして私自身子供と遊ぶよりも実は観察する方が好きなのだと気付きました。子どもの行動を観察すると面白いことがいっぱい。月齢があまり変わらない子ども同士でも、相手が自分より年下だと、それと分かることの不思議さ。すごい能力です。いろんな能力が見えてきます。自分が世話になる人を選ぶ能力。この人は自分のことを大事にしてくれるのか見抜く力。すごいです！
子どもの能力をみせてもらう時のおもしろさ！子どもから教わることは多いのです。

でも、彼らにエネルギーがある分、世話をする大人の疲労度も大きく、「しんどいなぁ～飯炊きばあさんに特化したいなぁ」とつぶやく時も多々ありました。それがここに来て願いがかなったわけです。

先ずは味噌作りから

年が明けて 2 月に入った頃、毎年一年分の味噌を作ります。これは 40 年近く続いている我が家の年中行事ですが、病児保育を始めて以来、ますます欠かせない行事になりました。子ども達の昼食に味噌汁は必須なのです。どの子も、ご飯やおかずを食べなくても味噌汁だけは飲んでくれるので、水分補給にもなるからです。お代わりをする子もいます。「バアバの味噌汁は美味しい！」と言ってくれる子は多いので、気合を入れて作業をしています。

7 年前からは５歳になった孫が参加し始め、その後弟たちも４～５歳になると「ぼくもやりたい！」と加わって、今では兄弟３人が主力戦力になりました。今年はさらに息子のところの孫娘も加わり、賑やかに作業は進みました。

「バアバは楽ちん‼」ということも勿論嬉しいのですが、みなで協力し合って、楽しんで作業をしてくれるということ、そして、日本の伝統的食文化を引き継いでくれるということ、それがとても嬉しいのです。

最近、味噌作りはブームになっているようです。**「時短」**というキャッチフレーズで食材が売られている昨今ですが、味噌作りの魅力は、時短とは真逆の「熟成をじっと待つ」という長いスパンの非日常が、夢を見させてくれるからだと思います。「待つ」ということは楽しいのです。そして、大豆や麹、塩の量を各々変えてみることで、自分好みの味を作り出すことが出来る、これも魅力の一つです。今年の我が家は、大豆 4 kg、麹 4,5 kg、塩 1.4 kg、にしてみました。

さて、どんなお味になるかなあ。

初めて参加した孫娘は小学 5 年生。最近料理の面白さに目覚めたらしく、特にショウガを使った料理に凝っているとのこと。子どもが何かに夢中になるというのは、面白いです。例え続かなくても、その時点の好奇心は、周囲の大人たちを刺激するのに十分です。

漬け込んだ味噌も、時間の流れで、どう変化するか観察できるように、半透明の小さな容器に入れて持ち帰らせました。これからの気候の変化に合わせて発酵が少しずつ進み、暑い夏を越して彼岸を迎えるころには、亜麻色の美味しい味噌が出来上がることでしょう。

「冷暖房をせずに自然のままの状態でじっと待つ。
重石をしたまま蓋を開けないこと。かびを生えさせないためには空気に触れさせないことが大事よ。」とだけ伝えると、嬉しそうに帰っていきました。
秋までのお楽しみ！
子どもサポート H&K も次世代の子供たちの応援を得て、パワーアップしたような嬉しさです。

対人支援点描（21）

「臨床宗教師の活動と北海道臨床宗教師会の立ち上げ」

小林　茂（臨床心理士/牧師）

はじめに.

スピリチュアルなケアという言葉を聞くとき、私たちに戸惑いを覚えさせる。その戸惑いにあるもののうち、一つはスピリチュアルという言葉が持つ私たちの印象が挙げられる。この言葉が持つ社会的なイメージがニューエイジや霊能者が話題とする何やら怪しげな印象があるからである。もう一つは心理学で扱う心や精神医学で扱う精神といったものが何となく感覚的に“ある”ものとして受け入れられているのに対し、スピリチュアルな対象というものは実感として捉えがたいものがあることが挙げられる。

そのため、スピリチュアルなケアをおこなうという話には、どこか遠ざけたいような、回避してかかわりから離れたいという気持ちを起こさせるのではないだろうか。平たくまとめるならば、怪しげでわからないものは避けたいのだ、といえる。

しかし、スピリチュアルという言葉が適切であるかの是非もあるが、肯定的にこの言葉が扱われるために、本小論では、スピリチュアルなケアについて雑感を交えながら考察を進めたい。

1. 宗教的ケアとスピリチュアルなケアの相違

まず宗教的ケアとスピリチュアルなケアの違いであるが、宗教的なケアについては、さほど問題とならないと思われる。なぜなら、宗教的なケアというものは、ある宗教的な立場からほどこされるケアを示し、その宗教的信念に基づき扱われるものといえる。宗教者が信者信徒に宗教的な指導や配慮を行うといった直接的なケアの次元から、礼拝や参拝や祈りといった宗教的な儀式を通じて信仰の対象からケアを受ける次元まで宗教上の行為の中に宗教的ケアが含まれる。この場合、ケアの行為者と被行為者の関係は宗教的信念の合意の上で成立し、この基本的な合意がなければケアの関係は生じない。極めて限定的なケアであるといえる。特に、ケアの受け手の合意がなければ成立しない。というのは、ケアの行為者側の宗教的立場に被行為者が賛同しない限りケア以前に要をなさないか、ありがた迷惑となるといえるからである。たとえば、キリスト教の教職から仏教の信徒に宗教的信念に基づき神の加護を語りかけても、それがそのまま慰めや励

ましにつながるわけではない。

こうした宗教的ケアに対しスピリチュアルなケアは、ケアの行為者の側に特定の立場を限定しない。つまり、何かしらの宗教的信念を有していなくても、スピリチュアルなケアが可能であるという前提を持っている。

日本には、日本スピリチュアルケア学会というものがあるが、学会会則第二条(目的)には、このように記されている。「本会は、すべての人びとがスピリチュアリティを有しているという認識に基づき、スピリチュアルケアの学術的・学際的研究およびその発表と実践とを通して、スピリチュアルケアを含む全人格的なケアが社会のあらゆる場面で実践されるよう推進することを目的とする。」

だが、この日本スピリチュアルケア学会の定義からは、すべての人が有しているスピリチュアリティが何を示すのかがはっきりしない。スピリチュアリティとは、特定の宗教の信念は持たないが宗教性は持っている、という意味なのか。それとも、いっさいの宗教や宗教性とは異なる何かなのか。人びとが心を持っている、身体を持っている、社会性を持っている、というのと同じような意味で「すべての人びとがスピリチュアリティを有している」といえるのだろうか。また、メディアで人気のある占い師や霊能者がいう意味のスピリチュアリティとの相違や含有はどうなのだろうか。このような疑問が挙げられる。スピリチュアリティの内容理解は、別に取り上げられなければならないと考える。

2. 臨床宗教師とスピリチュアルケア師

臨床宗教師という名称は、公共空間で宗教者が活動するために倫理規定を設け、布教を目的としないスピリチュアルケアを行う日本版のチャプレンとして名づけられた資格である。基本的に資格を有するための条件が“宗教者”であることが前提とされる。この臨床宗教師に対し日本スピリチュアルケア学会が認定するスピリチュアルケア師という資格がある。臨床宗教師もスピリチュアルケア師も所定の研修プログラムを受け認定される資格であるが、スピリチュアルケア師になるには必ずしも宗教者や特定の宗教の信者である必要がない。スピリチュアルについての定義上、当然、すべての人が資格を取得するための権利は有している話となる。

この場合、日本スピリチュアケア学会の定義に従えば、スピリチュアルケアのなかの一部に宗教的ケアが含まれると表現もできるし、スピリチュアルケア師の資格の方が臨床宗教師よりも包括的な資格であるともいえる。

3. 臨床宗教師のジレンマ

余談であるが、北海道臨床宗教師会設立総会のために藤女子大学の藤井義博先生のもとに赴いた時に交わした会話から、「臨床宗教師とは何か」という話となった。その時に藤井先生から話されたことの一つに「臨床宗教師とは、宗教者のなかのスピリチュアルケアを行う人…」という指摘をいただいた。スピリチュアルケアを行う人々のなかには当然宗教者も含まれる。そのうえで、どうして臨床宗教師という資格を作る必要があるのだろう、という疑問もあったのではないかと思われる。“臨床”何々という資格が乱立するなかで、また一つ新しい資格が作られる必要があるのか、

という疑念もあったのではないか。この点については同感するものがある。しかし、すべての人がスピリチュアルケアに携われることと、実際には宗教者であるがために公共空間ではお断りいただいたり、排除される両方の現実がある。そのためにも、布教を前提としない臨床主教師という中立的なケアワーカーとしての宗教者の立場が望まれたのである。現代日本の社会では、スピリチュアルケアを行うために宗教者という立場を無くすか、カッコ書きにしないと活動ができない現実的な理由があるといえる。

しかし、このような臨床宗教師という、ある意味で活動のための方便ともいえる名称も、このスピリチャルなケアを行うために宗教者の立場からも警戒されるというジレンマをかかえることになった。具体的には、臨床宗教師という新しい宗教を作ったとか、スピリチュアルを強調する諸宗教・宗派を超えたカルト運動というようにみられる誤解が生じたのである。比較的、私が信仰するキリスト教関係では、臨床宗教師とは日本版チャプレンの日本的な名称であると伝えると理解してもらえたり、関心を持っていただけたりするのであるが、他宗教の臨床宗教師の皆さんのところでは温度差があるようである。

また、素朴で妥当なこととして、スピリチュアルなものはすべての人が有するものであるので、特定の宗教者がその宗教的信念とは別に、そして延長にスピリチュアルなものを意識することはあることである。そうした感覚からすれば、あえて宗教的ケアではなく、スピリチュアルケアを強調する必要性に疑問が出ても不思議ではない。さらに、宗教的ケアとスピリチュアルケアを分けて考える必要もなく、そうした発想自体が考えられない宗教者もいることだってある。

このような立場からすれば、宗教者でなくともできるスピリチュアルケアという発想自体、それが可能かと訝しがられるだろう。宗教者の立場から見て「あやしい」とされてしまう可能性がある。

こうした諸々のジレンマを起こさせる事柄は、特定の宗教をもたない立場や公共空間においても、特定の宗教の宗教者から見ても、それは宗教的ケアとスピリチュアルケアという二つのものの理解をめぐって生じているといえる。

4. 課題～スピリチュアルのとらえ方をめぐって

この小論では、宗教者、臨床宗教師とスピリチュアルケア師を軸にスピリチュアルケアについての雑感を考察した。スピリチュアルというものの扱いによって、実際にかかわる者への影響に触れてみた。スピリチュアルという言葉を、どのような意味でとらえているか、そのとらえ方によっても受け止められ方が異なると考えられる。より肯定的な文脈でスピリチュアルという言葉が理解され、是正されるためにも、引き続き考えていきたいと思う。

「あ！萌え」の構造（11）

－「関係性萌え」としての「推し」－

総合心理学部　齋藤清二

近年急速に論じられるようになってきた「推し」現象であるが、第 10 回でも一部論じたように、「萌え」が情動をその中核とする「美的総合」に深く関連した体験であるとするならば、「推し」はより「主体と対象との相互関係」に関連した体験であると思われる。もちろん、「萌え」と「推し」は、密接に関連した現象であることは確実であり、「萌え」についてこれまで行ってきた考察は、「推し」に対してもかなりの部分適用することが可能であると思われる。以前に「萌え」には「キャラクター萌え」と「関係性萌え」と「ストーリー萌え」のような下位分類が可能ではないかと論じたが、本稿では、「関係性萌え」との関連から「推し」について論じてみたいと思う。

推しとファンの関係

ファンが「推し」に対してとる行動の典型は、アイドルなどのグループにおける特定のメンバーに対して強い魅惑を感じ（萌え感情を抱き）、その「推し」に対して何らかの利他的な行動（ライブに行く、課金をする、プレゼントをする、コンテストで投票する、など）を熱心に行うことである。このような行動を総称して「推し活動」と呼ぶことにしたい。「ファン」と「推し」の関係は、対等ではなく、「ファン」は「推し」に対して一般には個人的な見返りを求めない。「ファン」は「推し」に対してある意味無償の愛を捧げるのであり、何らかの見返りを求めることは、推し活動の本質にそぐわないと見なされるようである。ただし、推される側のアイドルなどは、推し活動を自分に捧げてくれるファンに対して何の義務もないかといえばそうではなく、ファンを「分け隔てなく愛する」、あるいは「ファンと推しとの関係を暖かく受け容れる」ことが推しの側の義務であると思われる。

推しの側からみるファンとの関係は「個人的な関係」であってはならないようである。推しは原則として個々のファンの間に、差をつけてはならない。ただし例外もないわけではなく、推しが特定のファンを好むような行動をとる（あるいはそういう感情をもつ）場合、そのファンは、その推しにとっての「お気に入り＝オキニ」と呼ばれる。「推し」と「オキニ」の関係は、個人的な関係であるが、元来の推しに期待されている態度とはむしろ相容れず、それは同じ対象を推して

いる同士（推し被り）の中では逸脱行為とみなされる。推しにオキニがいることが露わになると、極端な場合、そのオキニは推し被り集団に属する他のメンバーからは、憎悪の対象にさえなる。そして最悪の場合、推しの対象であったアイドルは、「推し」としての存在そのものを失ってしまうことさえある。アイドルが結婚や特定の相手との交際を公開した時におこる、悲鳴にも似たファンの動揺や嘆きはこのようにして生じるのであろう。

ファンから見た「推しとの関係」

上記のように、典型的なファンは、推しを一方的に崇拝し、推しに対して無償の愛を捧げ、奉仕する。ファンはあくまでも「集合的な愛」を形成する集団の一員であり、ファンが「私と推しとの個人的関係」を求めることは、いけないこととして抑制されている。このような集合的な関係はファンにとっては、見返りの少ない関係のように見えるが、実際にはファンはこのような関係を推しとの間に結ぶことによって、十分な見返り（報酬）を受け取っている。

この時にファンが推しから受け取る「報酬」は、「萌え」に伴って生じるポジティブな効果とほぼ共通しているだろう。それらは「快感」「苦痛抑制」「行動活性化」である。これらは、「没頭」という概念で表現することもできるだろう。ここで起こる「行動への好ましい影響」は、行動分析的に言えば「正の強化の随伴性」を布置することである。「正の強化」は、楽しいことをすればするほど楽しいことが増えるという、まさに人間を幸福にする随伴性なのである。

一方で、推し活動によって、生じる（可能性のある）害は、「依存」である。このことも「萌え」の場合とほぼ同様である。しかし、「依存」一般にいえることであるが、その人の生活や人生を破壊してしまうような「病的な依存」が生じる頻度はさほど多くない。もちろん直接の統計データがあるわけではないが、おそらく専門的な対策を講じなければならないような「病的な依存」に陥る人は、推し活動をしている人のたかだか数％を超えることはないだろう。むしろ多くのファンは、推し活動をすることを通じて、自身の人生をより豊かで安全なものにすることに貢献しているものと思われる。

それでは、推し活動が「役に立つ依存」になる場合と、「破壊的な依存」になる場合は何が違うのだろうか。行動分析理論から推定するならば、これは「強化行動の随伴性」が「正の強化」であるか「負の強化」であるかということに関係すると思われる。

推し活動の行動分析的解釈

正の強化とは、行動（例えば推しに課金すること、コンサートへ行くことなど）が、次の行動への先行刺激（これを正の強化子と呼ぶ）として現われ、その行動

の頻度が増加するような状況のことをいう。つまり楽しいから推し活動を行い、推し活動が楽しいために、さらに推し活動の頻度が増すというサイクルが成立していることである。

それに対して「負の強化」とは、行動によって、刺激が消失し、その結果として行動の頻度が増えるというパターンのサイクルが生じている場合である。これはちょっと分かりにくいが、この場合、消失する刺激とは、「人生への虚しさ」とか「苦痛の感情」などであることが多い。つまり、負の強化の随伴性においては、行動が増えるのは、「楽しいから」ではなくて、「その行動をしている時だけ苦痛が消失する」からである。負の強化の随伴性が存在している時、人間は破壊的な依存に陥る可能性が高くなる。推し活動に没頭したり、萌え感情に没入している時には、一時的に「人生の苦しさ」が消失するので、負の強化の随伴性によってそれらの行動の頻度が増える。しかし、その行動をやめたとたんに、「苦痛」や「苦悩」はすぐに戻ってくる。しかも「推し行動」や「萌え情動」以外には、その苦痛を軽減する手段をもっていない状況では、その人は、次第にエスカレートする「救済希求行動」を続けるしかなくなるのである。

負の強化が破壊的な依存になりやすいのに対して、正の強化ではなぜそのようなことが起こらないのだろうか。これについては完全に実証があるわけではないが、生物一般に認められる基本的な学習のパターンである「馴化」が関係していると思われる。簡単に言えば、私たちは楽しいことを繰り返すと、それに「慣れ」てしまい、最終的には「飽きて」しまうのである。この「馴化」の学習メカニズムは、「鋭敏化」と並んで、生物学的には非常に古いものであり、古典的条件付けやオペラント条件付けに先行する。残念ながら私たち人間は、永遠に続く快楽を手に入れることはできない。どのような快楽もいつかは「卒業」の時がくるのである。意味のある幸福な人生を過ごすためには、「卒業と再出発＝新たなる旅立ち」の繰り返しを受けいれるしかないのだろう。

推し活動への支援の在り方

実際に「推し活動」や「萌えの探求」のど真ん中にある人に対して、私たちはどのように関わるのがよいのだろうか。極めて単純化していえば、「その活動を純粋に楽しむことを承認し推奨すること」である。推しや萌えが害のある依存になってしまうのは、その人自身やその人に影響を与える周囲の人が、その活動を否定的に評価している場合である。これは本人にとっては「罪悪感」として感じられ、せっかくの活動を正の強化から負の強化へとシフトさせてしまう。つまり、活動に没頭している時だけ「罪悪感（という苦痛）から逃れられる」というパターンに陥ってしまうことになるのである。したがって、推し活動や萌え探求行動（この中には実に多様なものを含むが、要するに「いけないことだが楽しいこと」

である）を、禁止したり、罪悪感を増強させるような働きかけは、うまくいかないということである。楽しいことは純粋に楽しむべきであって、そのようにしていてもそれが無限にエスカレートすることはない。結局は「あるがまま」を受け容れることによって、それぞれが「あるべきように」収まっていくように、私たちは創られているのである。

推し活動における相互性と再帰性。

萌えは、一人でも楽しむことのできるものであるが、推し活動の多くははそうではない。推し活動は多くの場合集団で行われるし、推しは「布教」などの積極的な交流を推進するので、推し活動をするファンは、積極的に他者との交流を通じて自分の世界を拡げていくことになる。ファンから見ると、推しとの関係は、少なくとも出発点においては個人的なものである。しかし、推しからファンには個人的な関係は返報されない。そこで生じるのは、推しという共通項を通じてのファン同士の相互交流である。推し活動がもっているこの「相互関係の拡張機能」は、「萌えの探求活動」よりも強力である。特定の推し対象を共有する推し被りの集団は個々の構成員の主体性を保ちながら、イベントなどにおける没個性的な集合性の体験を供給するものであり、これは人類が古くから行ってきた、宗教活動などに非常に近いものである。

人間は一人では生きていけないとは、よく口にされる言葉ではあるが、現実には、人間は生まれるときは一人であり死んでいく時も一人である。この「個人性」は、現代の人間が健全に発展させなければならないものであり、それは社会・文化的な活動に表現されると同時にそれによって大きく影響されるものである。しかし、個人性の深い自覚は、同時に深い「孤独」や「寂しさ」をもたらすものであり、人間が個人として生きる（おおざっぱに言えば子供から大人になる）ためには、「寂しさに耐える強さと方略」が必要になる。確立された誇り高い個としての「私」が存在するために、推し活動において得られる、没我的集合的一体感の世界は強力な援助的時空間を提供する。「萌え」と「推し」に共通するこの機能は、人間が人間として存在することの力となる、とてもうまく設計された営みなのではないかと思われる。

精神科医の思うこと⑯

「手紙とライン」

松村　奈奈子

近頃は、メールやライン、インスタグラムなどなどＳＮＳ発信でなんとなくつながっちゃうので、手紙を書くなんてほーんと少なくなりました。それでも私は手紙好きなので、旅にでると未だに絵葉書を買って家族や友達に送る事があります。「こんな風景に感動したんだよー」と伝えて、次に会った時に一緒に話せるのが楽しみです。

子どもの頃から手紙が好きで、祖父母に、お年玉のお礼などの手紙を書いていました。祖母が亡くなった時、部屋の隅の紙箱の中から私が小学校の頃から書いていた、たくさんの手紙が出てきた時、おばあちゃんは何度も見てくれてたのかな？と嬉しかったです。そこで、今の子ども達は手紙を書くのか？実は、こーんな時代でも、家族との連絡に手紙でのやり取りをしている子ども達がいます。それは、面会制限があったり、携帯電話を使えない自立支援施設や児童相談所の保護所にいる子ども達です。

一方で、若い患者さんから診察場面でラインの画面を見せられる事が増えました。「こんな事をバイト先の店長が言ってくるんすよー。どうしたらいいっすかね」なんて軽―い感じなのも含めて、時代だなーなんて思います。

そこで、まだまだ健在な手紙と、なんだかよく見せられるラインの画面、そんなこんなで思う事があるので、今回のテーマは手紙とライン

自立支援施設での診察では「お母さんから手紙きてん、見てみて」と見せてくれることがあります。大事にポケットにいれて持ってきてくれる手紙を、一緒に読んで「よかったなー」というだけなのですが、本人はとっても嬉しそうです。

施設入所の経過はいろいろですが、生き方も子育ても、不器用な家族がもちろん多いです。母親からの手紙も、まるで１０代の少女が書いたのか？と思うほど、ハデハデな便せんにひらがな多めで「さみしいよー」「好きだよー」「早く帰っておいでー🩷」なんて感じです。でも、入所する前はなかなかコジレタ関係になってる事も多く「ここに来る前は毎日ケンカして家出してたー」なんて子ども達は話します。離れたことで初めて「会いたいよー」「好きだよー」とお互いを思いながら、書けたんだと思います。もちろん、施設を出た後、すぐに元の関係に戻り、家出を繰り返しちゃう子もいますが、また手紙を見返す日がくるといいなって思います。

もちろん「お母さんから、手紙こおへんねん」とさみしく語る子どももいます。手紙を書いても書いても返事がない子どもの悲しみを聞くのも診察室です。

精神科では、治療的に手紙での親子の交流をお願いする事があります。
重度の拒食症で入院治療をする時、入院初期に面会をできない期間を設定していました。

それはいろんな意味があって一言では言えないのですが、家族との生活で症状が改善

しなかったので、家族と距離を置いてみる期間が必要だからです。その期間には、手紙から親子の交流を始めます。

そんな治療の中で、忘れられない手紙があります。それは入院中の拒食症の少女が、診察室に持ってきた手紙です。学校の教師をしているという母親からの手紙は、パソコンで打たれていました。手書きではない娘への手紙に私はびっくりしました。さらに、何枚もの手紙には、理路整然と長文で「頑張れ」的な内容がみっちり書かれていました。手紙から母子の関係が透けて見えた様に感じました。「うーん、これはもらってもあんまり嬉しくない手紙やな。いつもお母さんはこんな感じやねんね」と思わず言うと、「そうですよね」と少女は悲しそうな表情で笑います。それは、読み手がどんな気持ちになるかを想像することはなく、言いたいことだけを綴った文面でした。この仕事を２０数年していますが、印刷された手紙はこの母子間の手紙だけです。

この手紙を彼女が見せてくれた時、「拒食」でしか反発できなかったんだなぁとしみじみ思いました。拒食症は基本「いい子」が出す症状です。「食事を食べない」というのが唯一の反発のサインととらえる事が多いのです。

そしてラインでの親子のやりとり。

みんながスマホを持つこのご時世、外来診療では親子のラインのやり取りを見せてくれる事が多くなりました。ラインでは、リアルに親子のやり取りを追えるので、本人が語る以上に、家族との関係が見えたりします。

２０代女性の診察で「先生、お母さんとのライン、見て」と出されたスマホ画面には、大人の女性へのメッセージとは思えないほど、過保護で指示だらけの文面がドカドカありました。「まじかー。それはしんどいなー」なんて返すと「ウザいやろー」「ムカつく時は既読スルーしたんねん」笑ってと話せる彼女は大丈夫。

一方で、就活が難航している男子大学生、離れて暮らす父親から厳しいメッセージがどんどん届きます。「読んでみてください」と見せられた内容に思わず「これでは、逆に頑張れんなぁ」と返すと「そうですよねー」と本人は泣き出してしまいます。

ラインを通して、どうやって家族と上手く距離をとるか・・・返信内容を一緒に思案しあったりします。

親子のやりとりをのぞき見する事で、見えてくるものは多いです。

手紙やラインを見せて欲しいと、こちらから言う事はありません。親子の秘密も大事です。

でも、子ども達が手紙やラインを見て欲しいと言って来るときは、家族を知って欲しい、家族との関係を知って欲しい、からなんだと思います。そして、その内容がしんどい時は、どう対応していったらいいのかを教えて欲しいからなのかな、と思います。

手紙は時間をかけて、離れている相手がどう思うのかを想像しながら書くものですが、いろんな事情で相手を思えない大人もいます。

診察室に直接来れない不器用な大人を、一緒に理解して受け止めるツールとして、手紙やラインは大きな意味を持つのかなぁって思います。

「君の社会的ミッションは、何か!」中村　哲医師　の遺された言霊

馬渡　徳子

昨年 12 月 4 日、アフガニスタンにて凶弾に倒れて永眠された「中村　哲」医師は、金沢大学大学院の私の副指導教官、堤敦朗准教授の元上司でいらした。

私は、堤先生より「国際障害学」を学んでいる。聴講生は、私以外全員様々な国からの留学生で、博士課程後期の方もおられ、毎回の課題に対するディスカッション場面での、真剣な自分の言葉で表出する意見のぶつかり合いが、情熱的であり、心が揺さぶられ、愉もしい。講義後には、率直に自分を顧み、わからないことを認め、それを調べようという動機と行動につながる時間となっている。

そのようなご縁から、キャンパス内と、そして県民公開講座として、観光中心街にある金沢大学サテライト・プラザで、ミニ講演会「中村　哲医師の『直接の言葉』−君の社会的ミッションは何か−」が開催された。添付写真

直前の広報にも関わらず、会場には高校生から後期高齢者まで、あふれんばかりの県民が参集し、質問や意見が相次いだ。石川県での様々な講演では、主体的にフロアからの質問が相次ぐという現象は、まずもって稀であり、この反応に、とても励まされた。

特に、大規模災害の被災移住体験者の方による「1、支援される側としての現地住民（当事者）の本音。2、自分にも何か出来たらと思い立ちボランティアとして現地入りする様々な善意の人々への、支援される側への倫理的配慮提起」に、「人が人を支援するということの倫理・価値」を振り返る機会となり、心が揺さぶられた。

私は、所属機関の特徴として、幅広く、外国人も含めた生きづらい人々を支援する倫理綱領と独自の医療費助成制度を持ち、日々実践している医療ソーシャルワーカーの後輩 4 名と、いしかわ家族面接を学ぶ会の仲間（このマガジンに連載されておられる水野スウさんも。）３名とともに、中村哲医師の言霊を、今回の講演で拝聴した。

ともに活動された直接の元部下だからこそ堤先生より語られた中村哲医師のご功績と生き様に、心よりの哀悼の意を表するとともに、永年とも

に暮らし、関わりのあった現地の様々な世代の人々が、どんなに理不尽な思いでおられることだろうと、思いを馳せるとき、胸がつまる思いがした。

そして、様々な世代の参集者一人一人に、それぞれのこれからの人生の宿題「課題」を頂くことができた。
以下に、書き留めることができたいくつかの言霊をご紹介したいと思う。

1、何かを与えられることを考えるのではなく、何を生み出すが、何を与えるか、何を変えていくかを考える方が、価値があり、愉しい。
2、国際化とは、異質な文化(人と人との関係のあり方)の中に、自分の文化と共通な基盤を発見し、そこからお互いの文化の違いが生ずる経過をたどってくる作業である。
3、自分の社会的ミッションは何か、そこをとことん考えなさい。
4、経験は大事だ。だが、自分の経験だけでは語ってはいけない。
5、若いからと言って、責任がないわけではない。
6、自分を変えようという意思がないところには、真の国際化は生まれない。
7、艶、つけんでんよか。
(博多弁で、かっこつけなくてよい)
8、郷愁がないと頑張れないなあ。
9、今は、仕事(任務・業務)よりも、街に出て、市場に行き、遺跡を観て、人々と話し、五感で現地を感じなさい。→最短でも三往復の会話をする。
10、自己実現の先に何があるのか、考えなさい。ちょっと、立ち止まりなさい。
11、一緒の方が、愉しいよ。
12、社会的課題に対して、自己実現だけでは人は壊れていく。ミッションを、パッションをもって一生懸命やるだけだ。
13、現地の人々の、「尊厳と誇り」を大切にするという価値・人権感覚を率直に自身でふりかえり続ける。

先生の御著書は、沢山あり、是非とも購読して頂きたいと、存じます。

天国の中村　哲医師に合掌。

絵と文・柳たかを

匂いの記憶

昭和 32 年、小学 2 年の夏休み、姉と一緒に初めて帰省した父の故郷・和歌山の実家、僕にとってその時の記憶は匂いの記憶でもある。澄んだ空気、青々とした田んぼと青草の匂い、農耕用に一頭飼われていた巨大な牛のいる牛小屋、隣合わせの人用の汲み取り便所と牛糞の混ざった匂い、都会の大阪では知らなかった匂い体験が強烈だった。

「田舎に着いて、大阪とは全くちがう匂いにとまどう」

昼は蝉の声、夜になると田んぼにいる殿さまガエル達の鳴き声がにぎやか、化学肥料や農薬をほぼ使わない当時の農家は、昔ながらの汲み取り便所の中の物は下肥えに利用するため早朝に父の兄のおじさんが桶に汲み取り、天秤棒に担ぎ発酵用の野井戸へ運んでいた。

帰省して驚いたのは漬物類の美味しさ、大阪ではタクアンを美味しいと感じたことがなかったが、おばあちゃんが漬けるタクアンなどの漬物は、子供にもわかる適度の酸味と旨味が入り混じったもので、薪と鉄釜で炊くアツアツの炊きたてご飯と一緒にお腹いっぱいいただくのが大好きになった。

タクアンにする大根や茄子や胡瓜などの野菜畑に撒く肥料が、あの下肥えだと知って驚いた。牛糞や鶏糞も不可欠な肥料だということも後で知った。当時の僕には自然が循環しているという知識はなかったが、それまでは臭くて汚い便所のイメージが大きく変わったのは間違いない。

当時、大阪の我が長屋も汲み取り式で、トラック一台がやっと通れる幅の路地に汲み取り車が来て、最初の頃は桶を担いだおじさんが家々の路地を通って裏にある汲み取り口から柄杓で汲み取り、トラックの荷台のタンクに担ぎ上げていた。そのうち、桶からバキュームホースに変わったが、水洗トイレが普及するまでかなりの期間、汲み取り車の匂いの思い出は残っている。

田舎に帰省してボンヤリ目覚めたのは、排泄のことを忘れて食の楽しみを語れないんだなと。美しいものも汚いものも両方あってどちらも大切、美しい仕事にも汚れる作業があり、一見汚い仕事も思い込みの部分がかなりあるということ。

日々の生活が滞らず回るのは、汚れ作業をしてくれる誰かのおかげだと思うようになった。

やぶにらみ日記

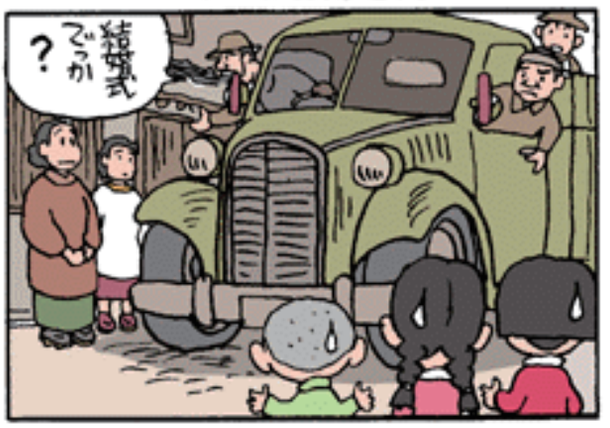
東成区の昭和

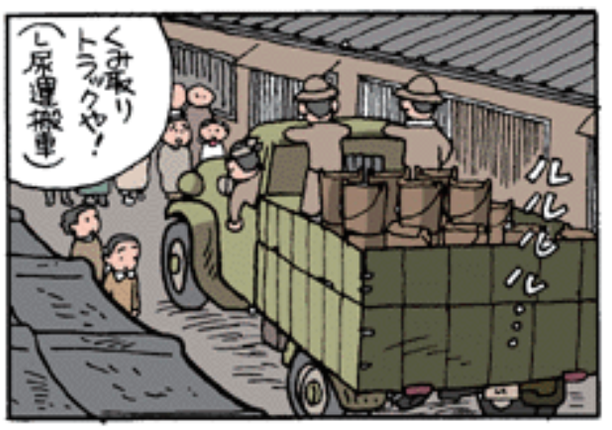
(362) お嫁さん

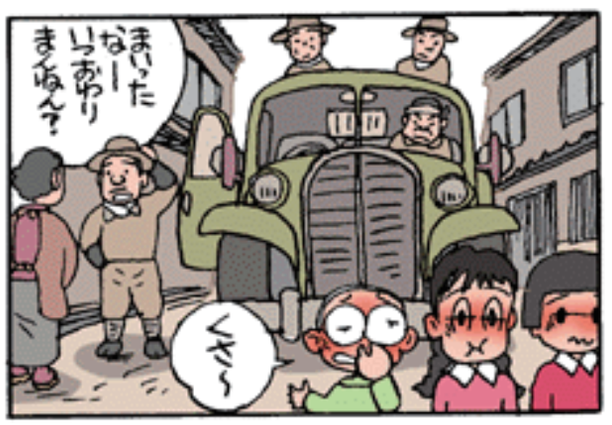
やぶにらみ日記

東成区の昭和

(363) お嫁さん







やぶにらみ日記

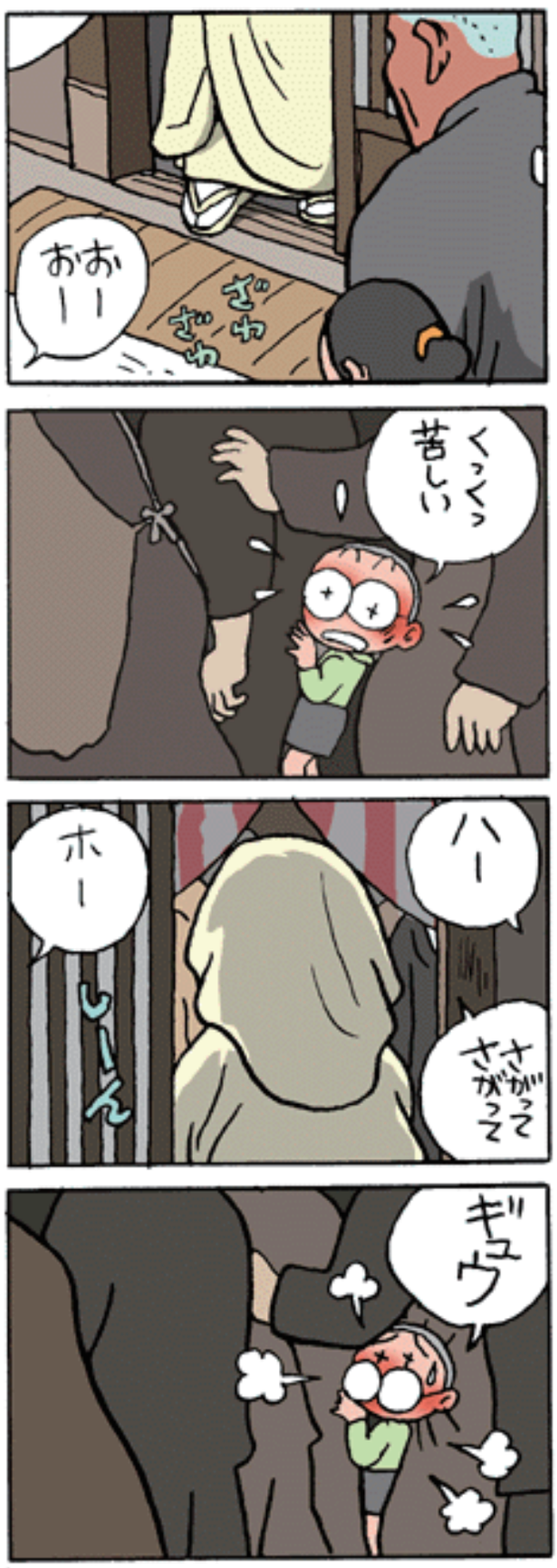
東成区の昭和

(364) お嫁さん

やぶにらみ日記

東成区の昭和

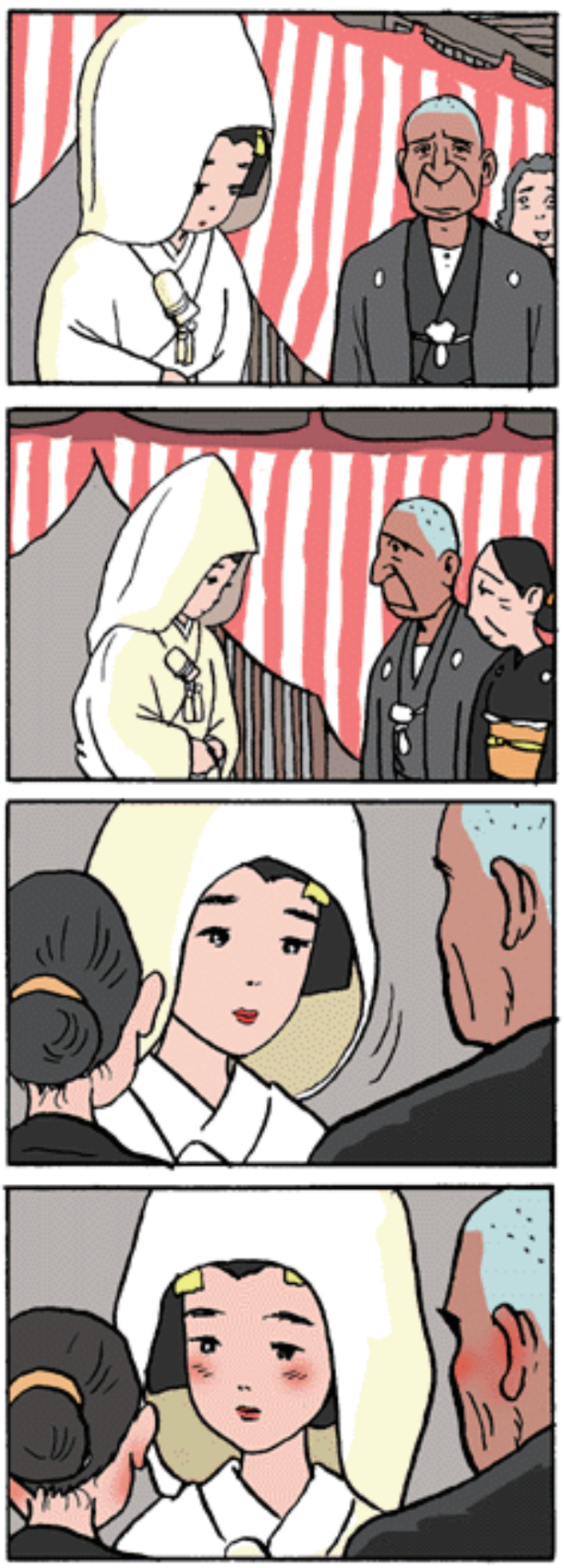
(365) お嫁さん



やぶにらみ日記

東成区の昭和

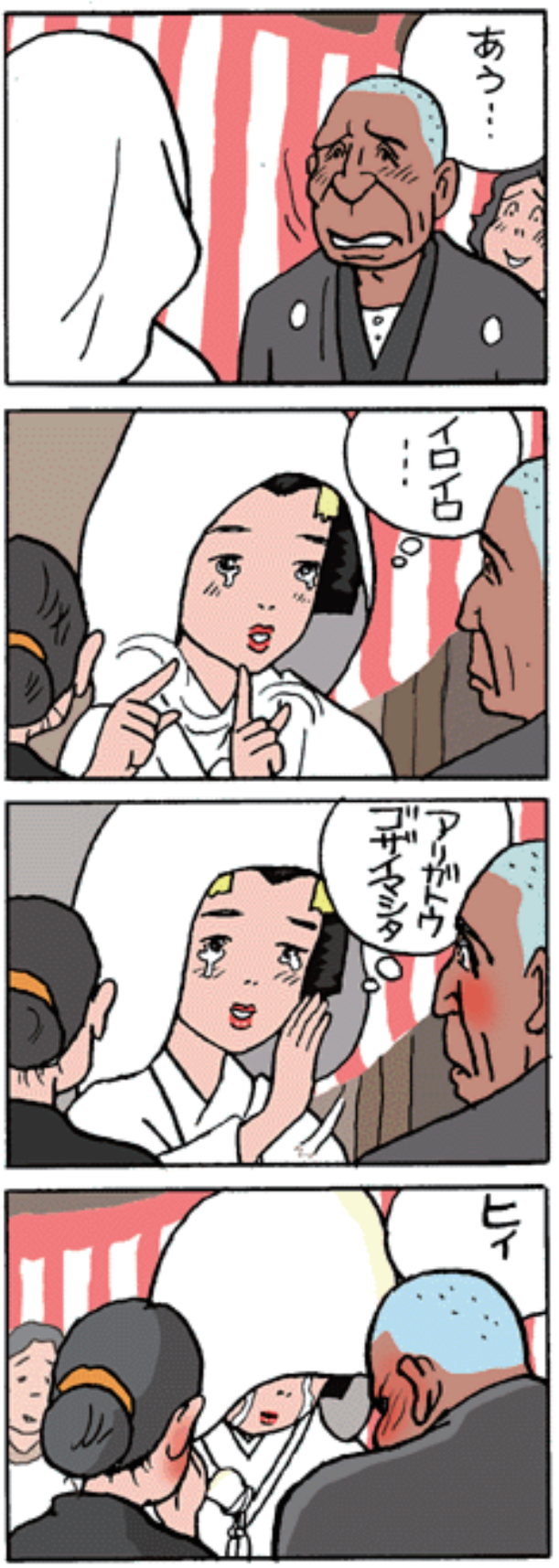
(366) お嫁さん



やぶにらみ日記

東成区の昭和

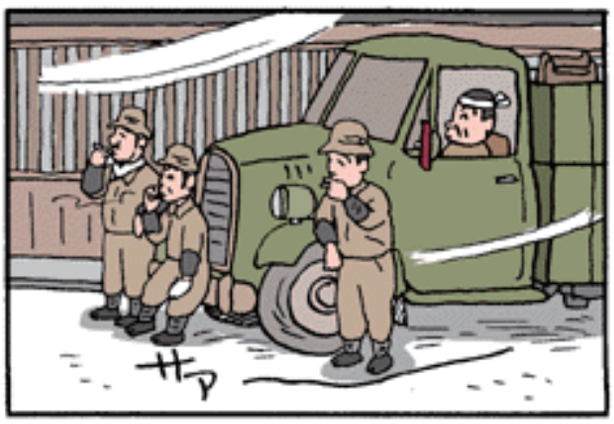
(367) お嫁さん



やぶにらみ日記

東成区の昭和

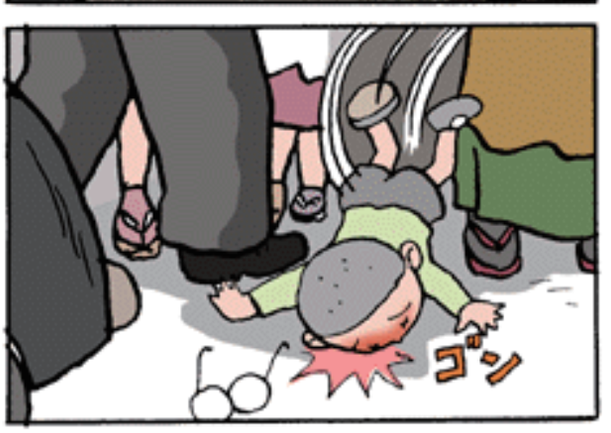
(368) お嫁さん



やぶにらみ日記

東成区の昭和

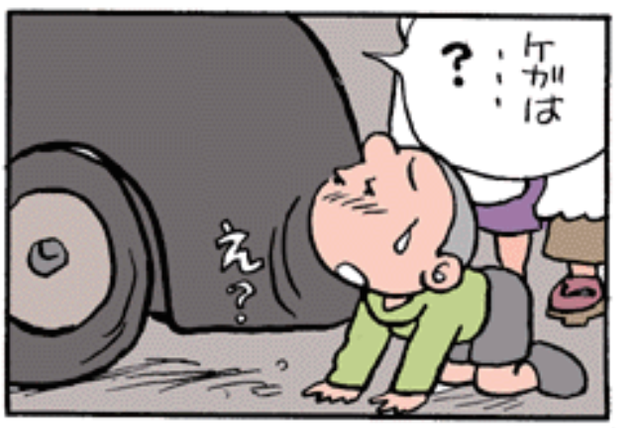
(369) お嫁さん

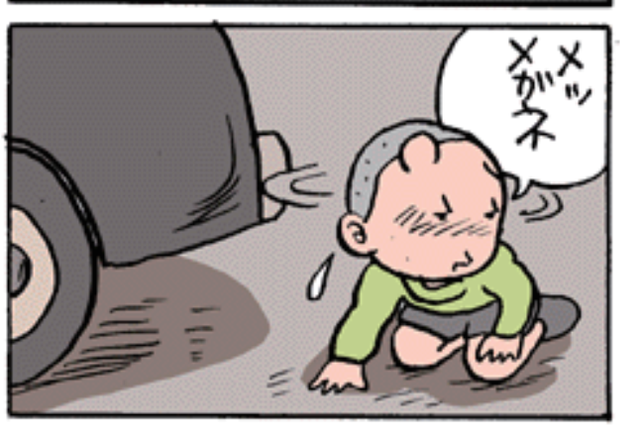


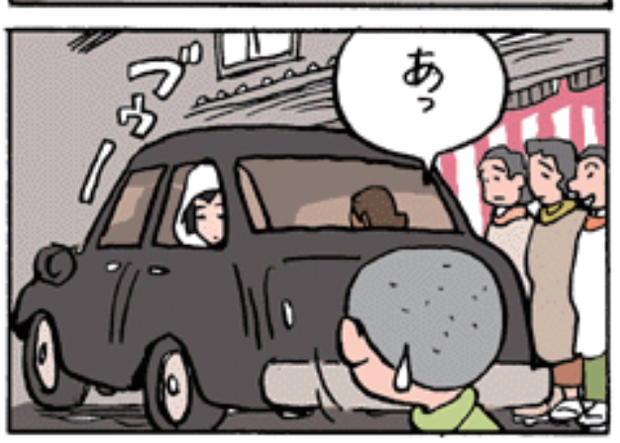
やぶにらみ日記

東成区の昭和

(370) お嫁さん



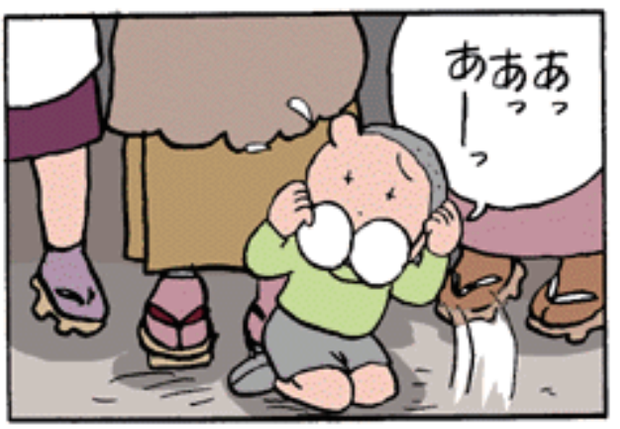




やぶにらみ日記

東成区の昭和

(371) お嫁さん



やぶにらみ日記

東成区の昭和

(372) お嫁さん

やぶにらみ日記 (373)

東成区の昭和

(1)新入生

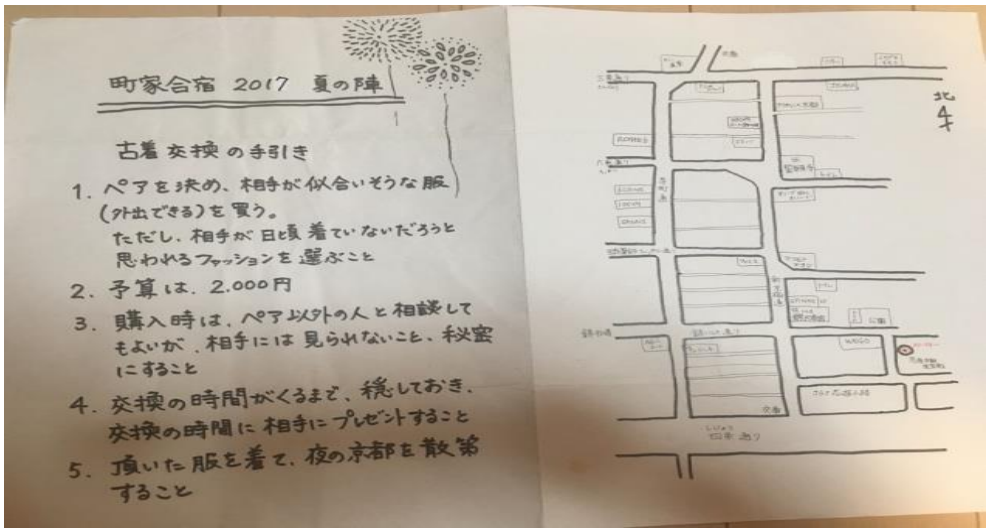
新入生へつづく

町家合宿 in 京都 Vol.13
～お金の使い方～

山下桂永子

「2000 円で洋服をコーディネートする。この時代、むちゃな。皆も高校生でお財布にお小遣いだって入っている。黙っていれば、インチキして 2000 円以上の洋服を用意することだって出来る。誰もインチキしなかった。ルール違反をしなかった。限られた中で、考えて動いて、自分の目的、欲求を達成する。これって、法律が張り巡った日本の社会で、自分のやりたいことを最大限に行うために、どうにか試行錯誤するのと一緒だなぁと。気に入らないからといって、ルールは破れない。破っちゃいけない。欲求が叶わないからといって、怒らない。不貞腐れない。暴力を振るわない。落ちこまない。この力は、生きていく上で本当に必要な力なんじゃないか、と思いました。」

これは、10 年近く前にとあるスタッフが書いてくれた感想文の中で、町家合宿で行っている古着交換についての一部抜粋である。



☆古着交換でのお金の使い方

町家合宿では、参加者にお金（現金）を使ってもらう場面がいくつかある。古着交換はその 1 つで、2000 円でペアになった相手の服を購入し、プレゼントするという取り組みである（vol.4 参照）。

10 数年前、消費税はまだ 5%だったわけだが、それでも服を買うのに 2000 円以内で選ぶというのはなかなかに至難の業である。感想文にあるように結構「むちゃ」である。特に全身コーディネートでなくても良いのだが、古着交換のルールには「相手が日頃着ていないだろうと思われる、そして似合うと思うファッションを選ぶこと」というのが条件に入っており、ガラッと相手のイメージを変えるためには、どうしても T シャツだけとかスカートだけではインパクトは薄い。結果として全身コーディネートになるわけである。

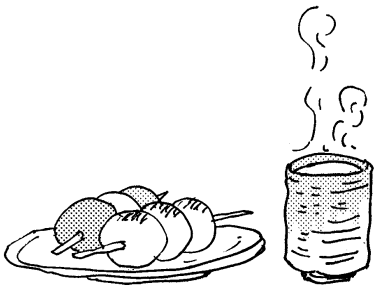
それでも、リピーターの参加者の中には、2000 円以内できっちりと、上下の服はもちろんアクセサリーを加える猛者も現れる。この 10 数年の歴史の中で、参加者は誰も「インチキ」をしたことがない。

☆食事でのお金の使い方

町家合宿の食費は一食 500 円である。昼食は大学の学食で参加者に 500 円を渡し、それぞれ好きなものを食べてもらうことが多い。

初めての町家合宿参加者は、ここでもかなり苦労をする。そんなに悩まなくてもいいのにと思うぐらい悩む。その上、選んできたのはうどん一品だけで 200 円以上おつりを返してくれたりもする。私が「デザートでも飲み物でも買ってきていいんだよ」と言っても遠慮する子も多い。（ただ暑くて食欲がない子もいるが）

一方、リピーターの参加者は冒険者になる。量り売りのおかずやサラダバイキング、学食の中では高額の定食を選んで 500 円ギリギリまで攻める。私へのお釣りが 2 円などというときには、みんなで拍手喝采である。



☆「インチキ」するのは大人ばかり

感想文にもあるように、古着交換で参加者は一度も「インチキ」をしたことがない。むしろ一度だけ「インチキ」をしたのはなんとスタッフだった。この感想文の年ではなかったと思うが、ある年に学生ボランティアがスタッフとして入ってくれた時に、なんと自分の財布から数十円を足して服を買っていたのである。もちろん悪気はない、良かれと思ってやってくれたのだろう。中高生の参加者に比べたら大学生や大学院生にとって数十円は大した額ではないし、これぐらいいいだろうと思ったのかもしれない。それでもそれは「インチキ」なのである。みんなが平等に楽しむためのルールを破っているのである。

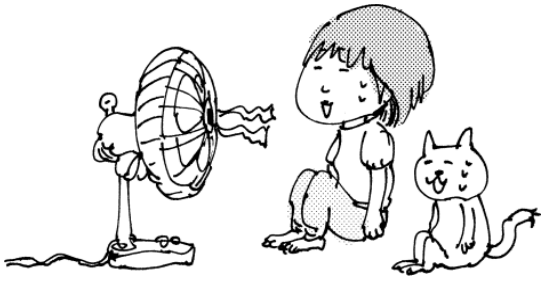
食事については、ある年の町家合宿で、インチキはなかったが、その瀬戸際になったことがある。500 円を渡して昼食を買って席に着こうとした参加者の女の子が、何かにぶつかってお盆をひっくり返してしまい、昼食の中身を地面に落としてしまったのである。女の子は茫然と立ち尽くしてしまい、私は「大丈夫だよ、片付けたらまたおひるごはん買いに行こうね」ともう一度 500 円を渡そうとしていた。その時、片付けるための雑巾かモップを借りにいった町家合宿のスタッフと、学食の方が来て、学食の方は様子を見て「もう一度同じものを注文してください。お代はいりませんから」と言ってくださった。私は「いえいえ、それは申し訳ないのでちゃんとお支払いしますので」と伝えたのだが、学食の方は「大丈夫です、同じものを注文しに行ってください、レジのものにも伝えておきますから。ここも片付けておきますので」と慣れた様子でテキパキと動き始めた。学食がそもそも利益は度外視のサービスであるにせよ、しかも在学生でもない（かどうか見わけはつかないかもしれない）のになんと優しい素敵なサービスであろうかと感動した。

ということがあったのだが、私がしようとしたことはある意味、「500 円以内で」というルールを違反するものであったかもしれない。

☆参加者のお金の使い方と大人（スタッフ）のお金の使い方

実感として思うのは、参加者のお金の使い方は、初心者は臆病で、リピーターになるとだんだんと大胆になっていくということである。では、大人（スタッフ）はどうかというと、その逆で最初は結構攻めるがだんだんと余裕をもって予算内に収まっていくということが多いように思う。

どちらも最初は、ルールの中でお金をうまく使えない（楽しめない）が、徐々にお金の使い方が上手になっていくという点では同じなのかもしれない。



☆お金の使い方は意識と練習が必要

私たちは普段なんとなく、簡単に無意識にお金に対して基本ルールを破る。子どもは親から「一つだけね」と言われて「うんわかった」と言ったのにお菓子を 2 個、買い物かごにいれようとするし、大人だってコンビニでご飯を買って少し予算オーバーだと思いながらデザートや雑誌を買ってしまったりする。

あらかじめの予算というルールを破っても今の自分の欲求を優先してしまうのである。大人の場合は自分のお金だからそれで損をしても自分のせいだからいいという考えもあるが、それは自分がルールを破ることに対してやはり意識を持てているかどうかは大事だと思う。そしてルールをできるだけ破らないように創意工夫ができているかも大事だと思う。

子どもならば、二つ欲しいなら嫌々1 個返してくるだけでなく、安いものにするから 2 個にしてほしいと親と交渉する技術を身に着けていくのもよいし、家でお手伝いをしたら、次に来るときは 2 個買ってほしいというルールを提案してもよい。

大人ならば、コンビニでデザートや雑誌を優先したいなら、ご飯は家で炊く、おかずは自分で作るなどしてみるのもよい。

そうやって、お金を使うことに対して意識して創意工夫することは、子どもでも大人でもやれることだし、練習というか体験も必要なことなのだろう。そしてこれは、冒頭の感想文にもあるように生きていくうえで必要な力である。町家合宿で行っていることは、お金の使い方の練習でもあるのだと最近思っている。

先人の知恵から
27

かうんせりんぐるうむ　かかし

河 岸　由 里 子

　このシリーズは 27 回目を迎えてもまだ「か行」の終わり。スピードアップしようと思いつつも、どうしても伝えたい諺があってなかなか進まないものの、いつかは「ん」に届くと思って続ける。今回は下記の７個。

- 呉越同舟（ごえつどうしゅう）
- 極楽願わんより地獄作るな
- 虎穴（こけつ）に入らずんば虎子（こじ）を得ず
- 心ここに在らざれば視れども見えず
- 志（こころざし）は満たすべからず
- 心の仇（あだ）は心
- 心広く体胖（たいゆたか）なり

＜呉越同舟＞

　敵味方や仲の悪い者同士が、同じ場所に居合わせることのたとえ。また、仲の悪い者同士でも共通の困難や利害のために、協力し合うことのたとえ。呉・越ともに春秋時代の国名。

出典　孫子

　母子関係が悪い、父子関係が悪いなど、家族内で関係性の問題を抱えていることはよくある。普段関係の悪い者同士は距離を取るが、何かもっと重大なことが起こると一気に協力体制になることがある。ケースを見ていて、何をやっても上手く行かない

と言われていたケースが、父親が倒れたことで、それまで仲が悪かった母子が協力し合って家族の問題が解決されたり、父母の関係が悪かったのに、子どもの問題が勃発したことで改善されたりと言うことに度々出会う。こうした時にこの諺を使い、昔からこういうことってあると伝え、今の状況が続けられる方法をともに考えるようにして居る。というのも、問題が解決すると又元の状態に戻ってしまうこともあるからで、そうならないようにするのが我々カウンセラーの仕事である。

英語では・・・
While the thunder lasted, two bad men were friends. （雷が鳴っている間は、二人の悪人どもは友人であった。）
Woes unite foes. （禍は敵同士を団結させる。）

＜極楽願わんより地獄つくるな＞

死後、極楽往生することを願うよりは、地獄に落ちないように悪行をしない事である。幸福になることを願うよりも、むしろ、不幸になる原因を作らないように心がけよという意。

天国に行けますようにと、一心にお経をあげたり、お祈りをしたりする人はいるだろう。それはそれでよいのだろうが、善行を積めば極楽浄土に行けるというのは多くの宗教で信じられている。人は自分の足元を固めるよりも、良いこと、ラッキーなこと、幸せなことばかりを願ってしまいがちだが、この諺は、それよりも、不幸せなことにならないように気を付けなさいと戒めてくれている。

親や子どもたちにも、上手く行かないことを誰かのせいにしたり、イライラしたり、怒ったりするのではなく、上手く行くように、よくよく考えて、焦らず一歩ずつしっかり歩めば、結果はおのずとついてくると伝えている。不幸になる原因は、気が緩めば作りやすい。そんな戒めをこの諺が教えてくれる。

＜虎穴に入らずんば虎子を得ず＞

危険を冒さなければ、大きな利益・功名を得るとはできないというたとえ。虎の子を得るためには危険な虎の住む洞穴に入らなければならないという意から。「虎子」は「こし」とも読み「虎児」とも書く。

出典　後漢書

利益や功名を得ることばかりを考えさせるためにこの諺を使うことはない。むしろ最近の親や子どもたちは、慎重で、臆病で、不安が強い傾向があるため、勇気づけるためにこの諺を伝えている。時には勇気をもって、危ない橋も壊れる前に渡ってみることも大事。

前述の諺と相反するので、使い方は気をつけている。一歩の勇気が欲しい子や親にはこの諺を、慎重に行動してほしい子や親には前述の諺を伝えるようにして居る。

英語では・・・
The more danger the more honor. （危険が大きければ大きいほど、名誉も大きく

なる。）

＜心ここに在らざれば視れども見えず＞

何事にも心を張り詰め、精神を集中することが必要であるという教え。心が他のことにとらわれていると、じっと見つめても何も見えない。うわの空では何も理解できないということ。出典ではこの後「聴けども聞こえず､食らえどもその味を知らず(耳を澄ましても何も聞こえず、食事をしても味がわからないように、物事の正しい判断が出来なくなってしまうのだ)」と続く。

出典　大学

我々対人援助の仕事にいる者にとっても使える諺である。心がうわの空では、人の話は聴けない。傾聴ボランティアや認知症支え合い員講習、教育相談の授業などでは自分自身の体調や精神状態が良くないと人と関わるのはかえってマイナスに働くと話しているが、そんな時にこの諺を出すことがある。

また、子どもたちにも使っていて、食事の時スマホをしながらでは、せっかく母親がつくった料理の味も解らないだろうと説明する。

同様に母親たちにも、スマホを見ながらでは子どもたちの話は聴けないと伝えるのに使っている。親子であれ他人であれ、人と関わるということは、少なからずその相手に影響を与える。そのことをしっかり考えて対応しないと、ボタンの掛け違いが始まり、取り返しのつかないことになるだろう。

英語では・・・

Who so blind as he that will not see?

又は There are none so blind as those who will not see?（見ようとする気のない者暗い者の見分けのつかない者はいない）

＜志は満たすべからず＞

志を実現させるのに完璧を望んではいけない。程々で良しとしておいた方が良いということ。出典には「おごりは長ずべからず（得意げな気持ちを増長させてはならない)。欲は従(ほしいまま)にすべからず（欲望を思いのまま満たしてはならない)。志は満たすべからず。楽しみは極むべからず（快楽は極めつくしてはならない)」とある。

出典　礼記

何事も、程々が良い。私のモットーは「適当、程々、良い加減」。したがってこの諺はよく使う。

最近多くの人が、完璧を求めすぎるように感じている。親が子に完璧を求めればそれは子を歪めることになる。また親が自分自身の完璧を求めれば、それは心を病むことになる。元々不完全な人間が、完璧を求めるから無理がある。

茶道の世界では、偶数は嫌い、奇数を良しとする。奇数は割り切れないからである。これは、中国思想による奇数は聖数とされることの影響である。桃の節句や端午の節句等、奇数が並ぶ。陰陽五行思想においても十二支の奇数番目は陽、偶数番目は陰を司る。このため奇数は縁起が良いとされる。

数学で言う「完全数」は現在 51 個見つかっているが全て偶数である。奇数の完全

数は存在しないのではと言われている。

不完全と言うのは変化が望める。可能性がある。しかし完全、完璧になってしまったらその先はないように感じる。完了となってしまう。The End なのである。だからこそ、完璧を求めないのが良いと思う。

この諺の続きの「楽しみは極むべからず」もまた、調子に乗りがちな現代の人間を戒めることになるのではと思う。

＜心の仇は心＞

自分の心を害する者は、自分の心の中にある迷いの心であるということ。悟りを妨げるものは自分の心の中にある煩悩であるという意。

自分の心の問題は、自分自身が生み出していると考える心理の世界であれば、これは当然ともいえる。この諺は悟りのためであろうが、全ての人に知って欲しい諺でもある。精神疾患の保護者が増え、子育ての世界も日々難しくなってきている。前述の諺の様に、人々が完璧を求め、コンマ何秒の世界で疲弊しているからでもあるが、そういう世界で自分を通そうとすれば摩擦が起こり、流されれば自分が疲弊するというジレンマのなかにある。

心の中を平静に保つことが出来れば、人々の心は安寧を保てるだろう。自分の心に目を向け、迷いや不安から解放されれば、誰かへの怒りや、自分自身への自責の念、或いは自分の存在への否定感なども消えていくだろう。歳をとってきたら、穏やかに過ごしたいものである。心を穏やかに保つためには、煩悩から自分自身の心を解き放たなければいけない。そんなことを自分を含む高齢のクライアントさんにはこの諺で伝えている。

＜心広く体胖なり＞

心にやましいところがなければ、身体も又伸び伸びとしてゆったりする。心に何の恥ずべきものもない境地を言う。「胖」は「おおい」とも読む。

出典　大学

子どもが嘘をつくのはよくあること。嘘が上手な子もいて、そういう子にはすっかり騙されることもあるが、どこかで嘘と分かる。一方、嘘が下手な、正直な子は、身体の緊張感や、窮屈そうな雰囲気で嘘と分かる。そんな時に、この諺を伝える。「今、あなたの体はどんな感じかな？ゆったりと、伸び伸びとしているかな？」と話しながら、嘘をついたらその嘘を隠すためにまた嘘をつかねばならず、何度も嘘を重ねているうちに、必ずばれるし、ばれてからよりばれる前に嘘を修正した方が良いと伝える。身体の感じに正直になろうと。脳は人をだますが、身体は正直だ。身体がゆったりと伸び伸びとして居られるように、心清らかに子どもたちには生きて欲しい。

出典説明

孫子・・・一巻

古代中国の兵法書。著者は春秋時代の呉の孫武

とする説が有力である。「作戦」「軍系」「兵勢」「軍争」「行軍」「地形」など十三編から成る。単なる戦争技術の書でなく、国政・

人事についても触れ、人間の本性に対して鋭い見解を示している。『呉子』とともに、兵法の古典として広く読まれた。

後漢書・・・百二十巻

中国の正史の一つ。南朝、宋の范曄と西晋の司馬彪の撰。後漢一代の歴史を記したもので、本紀（帝王の伝記）・列伝（臣下などの伝記）は范曄の撰に唐の李賢が注を加え、志（社会・文化など）の部分は梁の劉昭が司馬彪の「続漢書」からとったもので注も加えている。志の「東夷伝」には日本についての記述がある。

大学・・・一巻

儒教の経典。「論語」「孟子」「中庸」と共に四書のひとつ。もと五経の一つ「礼記」の一編で、教育の理想と課程を示したものを、南宋の朱熹（朱子）が整理し、三綱領八条目の体形を立てて、身を修めることから治国平天下の教えを説いたもの。

礼記・・・儒教の経典

五経の一つ。前漢の戴徳が収録した「大戴礼」を負いの戴聖が編集しなおして「小戴礼」とし、これが現在の「礼記」となった。周末から秦・漢時代にかけての礼に関する諸説を集めたものであらゆる面に及ぶ礼の記述があり、当時の制度・習俗を知る貴重な資料である。四十九編

私の出会った人

（その12）

関谷啓子

彼女とは４回目の面談である。
小柄な上品なおばあさん。いつも白髪に似合うシックな服装でゆっくりと噛みしめるように話される。
８０歳後半かと思われる。

今日は外は暖かいの？ここは一年中温度調節がされるから暑いとか寒いとかがないのですよ。
四季のある国に生まれて育ったのにね。妙な心持ですよ。
私ね、外出が好きなのにここにきてからは自由に外にも出られないの。
私には母と妹がいてね、バラバラに暮らしています。妹はだいぶボケてきているらしい。
でも私も同じようなものだと思うけどね。母や妹にも会いたいのに外出できないし・・・。
（唐突に）
私、犬が好きなの。いろんな犬をずっと飼っていたの。
犬は人の気持ちが分かると思うの。あなた、そう思わない？
ここにも一緒に連れてきたかったのだけれど、自分だけでなく犬まで他人に世話してもらうのは・・・と思って諦めました。
犬を飼ってきて一番辛いのは先に亡くなることよね。長い間忘れられずに辛かったわ。
でもあんなに辛いということは、私が犬に甘えていたということなのかしらね。
（長い沈黙）
私はね、死ぬ前に自分が知っていることは全て他人に教えておきたいの。誰にでもね。だから友達が多いと思うの。
ここにいたら誰も来ないし、一人でポツンと寂しいですよ。つまらないでしょう。
だから、こんな風になんでもざっくばらんに話せるあなたが来てくれて嬉しいわ。ずっと来てね。
ええっ、もう帰るの？忙しいのね。また来てね。待っています。

＊今日の一番の変化は、退室を告げた私に「今日はもう帰るの？」と言われた事だ。

少しずつ、彼女の気持ちの中で私の訪問が定着してきているのならば嬉しい事だ。

飼っていた犬の死について「あんなに辛いのはその分自分が犬に甘えていたのだろうか」と自問され、しばらくの間、考え込まれた姿も印象的であった。

繰り返される「私には友達が多い」というフレーズは彼女の願望かもしれない。

家族の話・仕事の話・友達のことなど何が事実なのではなく、そうありたい、そうであれば良かったという彼女の願いをそのまま受け入れられる存在になりたいと思う。

人生の最終章で「私の人生はこうだった」と思えるならば（例えそれが事実でなくても）そしてそれをそのまま共有してくれる存在に出会えるなら、それはそれで幸せな一生ではないか。

終わりよければ全て良しという言葉の通りに。

うたとかたりの対人援助学

第 13 回　瀬尾夏美『あわいゆくころ』をよむ

鵜野　祐介

東日本・家族応援プロジェクトシンポジウム

今年（2020 年）２月 23 日、2019 年度東日本・家族応援プロジェクトシンポジウムが立命館大学大阪いばらきキャンパスで開催された。

この日のゲストとして、アーティストの瀬尾夏美さんに参加いただいた。講演やパネルディスカッション、そしてその後の夕食での歓談も含めて、瀬尾さんからいろいろな話を伺い、心豊かな楽しいひとときを持つことができた。

今回は、彼女の近著『あわいゆくころ』の中から、「語り」に関連する部分を切り取ってコラージュ風に紹介しながら、語ることや聞くことの意味について、改めて考えてみたい（編集に際して小見出しを付し、体裁を一部改変した）。

瀬尾夏美さんの紹介

1988 年、東京都生まれ。宮城県仙台市在住。東京藝術大学大学院美術研究科絵画専攻修士課程修了。2011 年、東日本大震災のボランティア活動を契機に、映像作家の小森はるかとの共同制作を開始。2012 年から 3 年間、岩手県陸前高田市で暮らしながら対話の場づくりや作品制作を行う。2015 年、仙台市で土地との協働を通した記録活動をする一般社団法人 NOOK を立ち上げる。現在も陸前高田での作品制作を軸にしながら“語れなさ”をテーマに各地を旅し物語を書いている。主な展覧会に「クリテリオム 91（水戸美術館 2015）、ヨコハマトリエンナーレ 2017（横浜美術館・横浜赤レンガ倉庫）など。2019 年、『あわいゆくころ　陸前高田、震災後を生きる』（晶文社）を刊行（本シンポジウムのチラシより引用）。

『あわいゆくころ』の概要

本書の表紙カバー折り返しに、以下のような紹介文がある。

東日本大震災で津波の甚大な被害を受けた岩手県陸前高田市。絵と言葉のアーティスト・瀬尾夏美は、被災後の陸前高田へ移り住み、変わりゆく風景、人びとの感情や語り、自らの気づきを、ツイッターで継続して記録、復興への“あわいの日々”に生まれた言葉を紡いできた。厳選した七年分のツイート〈歩行録〉と、各年を語り直したエッセイ〈あと語り〉、未来の視点から当時を語る絵物語「みぎわの箱庭」「飛来の眼には」で織り成す、震災後七年間の日記文学。

悲しみ・巨大なさみしさ

（2011/12/05）陸前高田にいます。いつもこのまちが気になっています。それは、ここで会う人たちの、失ったものに対する悲しみがすごく大きく感じられるからかと思います。被害の大きなまちは他にもあるけれど、人の中を占める悲しみの割合が特に大きいと感じるのが、このまちだと思います。

もちろん人によって、感じ方、考え方は違います。でもこのまちでは、なんで私が生き残ったの、と

か、他の人の方が辛いから弱音を吐けない、という言葉を特にたくさん聞く気がします。悲しみを共有するというよりは、一人ひとりが抱いている、という感じがするのです。（p.53）

（2011/12/20）この震災を忘れない、ということは、とても長いスパンで考えなくちゃならないことだと思います。それは、またいつか必ず起こる自然災害で人が亡くならないために。でももうひとつ違う次元で、いま忘れちゃならない、ということもあると思う。

それは、東北で亡くなった人や生き残った人たちの抱える“さみしさ”の大きさに関わることだと思います。親しい人たち、まち、財産、景色、時間……などをいっぺんになくした人がたくさんいる。その“さみしさ”は大きすぎて、もっと大人数で分けあわないと抱えきれないんじゃないかと思うのです。（p.55）

（2012/02/20）私はあの津波で知人を亡くさなかったし、これまでその場所を訪れたこともありませんでした。何万人が亡くなったと言われても、その一人ひとりを想像することはできないと思っていました。ただこの場所に来ると、その一人ひとりを想う人が目の前にいて、その人を通じて、名前のある誰かが亡くなったのだということを実感するのです。（中略）

亡くなった人は、自分が亡くなったことを誰かに伝えることもできない。それはすごく、さみしいことかもしれない。

うまく言えないけれど、生きている人、生き残った人、それを知ってしまった人たちが、そのさみしさを、少しずつでも代わりに抱えるべきなのかもしれないとも思うのです。（p.67）

（2012/03/11）巨大な巨大なさみしさがその場所にある、と思う。けれど私にはそのさみしさの細部が、どのように一人ひとりの身体に入り込んでいるのかは、わからない。そしてその巨大さも、わかりきることは決してできない。

でもきっと、そのさみしさはとてもとても巨大で、その場所にいる人たちで抱えきれるものではないんじゃないかと思う。亡くなった人は声を発することはできないし、生き残った人たちは自分や相手の境遇の間で口をつぐんだりする。口に出せないさみしさは、その場所に染み付いているような感じがする。

なんとかしてそのさみしさを、一緒に抱えるような勇気を、そのために必要な大きな想像力を持ちたいと思う。だから私は、その場所を訪れることをやめたくない。

そして、見聞きしたことを覚えておくこと、なるべく丁寧に書き留めておくこと。いま、いまよりちょっと先、ずっと先にそれらを受け渡していく方法を考え続けること。これは、亡くなった人と生き残った人、これから生まれる人を繋ぐことだと思う。続いているはずのものを、続いているものだと常に認識し直すこと。（pp.70-71）

弔う

（2012/05/22）人が亡くなったとき、その死はその場所に、そっと染み付くような気がする。だからその場所を丁寧に均して、持ち帰れるものを持ち帰って、正面からまっすぐに、その死に向き合えるようにするのかもしれない。（p.92）

（2012/12/21）まちづくりとは、死者の声に耳を澄ますことなのではないかな。生き残った人たちは、亡くなった人たちと一緒に生きているのだと感じる。まず、死者の声を聞くこと。それを怠ってはいけないと感じました。（pp.112-113）

（2013/08/28）一人ひとりそれぞれの方法で、弔いを続けている。弔うことで、生き残ったその

人も何とか生きていく。亡くなった人がその人を支えている。亡くなった人と一緒に生きていく。永遠に続く弔いは、その人が生きるための術でもある。

心霊体験のようなもの。亡くなった人が夢に出てきたり、ふとしたときにそばにいるように感じたりする。夢の中でその人が声をかけてくれて、初めて救われたような気持ちになったという。それは、生き残った人の都合のいい妄想ではきっとなくって、ともに生きているという関係の上に成り立つもののように思う。

死者との関係を大切にし続けること。土着すること、その土地に暮らし続けることの、根っこのことのように思う。（p. 143）

「復興」とは

（2014/04/13）復興という名目で何でもしている、ようにも見える。壊れたものを直すためなら、何でもしてしまう雰囲気がある。自然災害で変わってしまった風景を、今度は人の手で変えていく。どうして欲しいという話はよく聞くけれど、さてどこまでやっていいのか？という話し合いはほとんど耳にしない。

はて、風が強くなったもんだ。海辺のもの何にもなくなったうえにさ、山さも削れて、それはそうだよねえ。鹿だのタヌキだのも居場所なくなって下りてくるよね。みんな居場所追い立てられてさ、俺らみたいに仮住まいを探してる風だ。いま我慢すれば、本当にいいまち出来るもんなのかなあ。（p. 173）

（2014/10/09）復興工事の邪魔になることはしたくないの、してはいけないの。でもね、自分たちが生きてきた場所が土の下になってしまうんだよね。辛うじて残ってた道とか大きな岩もね、ただ平らに埋めてしまうんだよね。復興って、ここで生きてきた私たちを埋めてしまうことなのかなあって思うときがあるの。過去と後悔とともに生きてはだめなのかなあ。（p. 201）

（2015/05/27）……まちが流されて、みんなが散り散りになった。何のためって死んでしまった人のために、まちの続きをつくるんだよ。いなくなった人たちが守りたかったまちなのさ、その無念を晴らすために復興するんだよ。俺はその想いだけでやってるんだけんとね、なかなか伝わらない気がしてもどかしいのさ。いまの風景見てっと、何か大事なこと間違えてしまったような気がしてね、すんごく不安になるのさ。（p. 245）

「物語」とは

（2016/01/15）聞いたこと見たことを、実際の風景や個人の顔から、ゆっくりと引き離し、もう一度語ろうとすると、そこに、物語が発生する。（p. 264）

（2016/02/06）亡くなった人の魂がすっかりなくなるまでには三十三年の時間を要し、それを全うすることを弔い上げと言うそう。私には、三十三年という時間は、何かが物語になっていく時間と似ている、という予感がある。すっかりなくなるけれど、誰かの身体の中に、物語として生き直されはじめるということ。（p. 266）

（2016/02/07）物語ることが弔いに似ているということ。語り手は、忘れられてはなるものかという強い意思とともに、どうしようもないあきらめを抱えているという指摘はとても大切だと思った。（p. 266）

「風景」とは

（あと語り）またある人は、「こころがどこにあるのかと考えたときに、風景の中にもあったことに気がついた」と話してくれた。津波で風景が壊されたときに自分のこころが壊されてしまったと感じ、

ということは、こころは自分の中のみで自立するものではなく、慣れ親しんだ風景のそこかしこに頼りながら辛うじて存在するものだと気がついた。だから、片づけをし、倒れたものを立て直し、壊れた風景からかつての面影を探していく作業は、こころを取り戻していく時間のように感じられたのだと言う。私はその話を聞きながら、個人の支えとなる物語について考えていた。

震災後、暮らしのなかにいつも同じようにあったはずの確かなものたち(たとえばそれは建物や街並み、あるいは積み上げてきた習慣や思想など)が根底から壊されて、自分という存在自体が大きく見失われてしまうことが、被災地に限らずどこにでもあったと思う。そういうとき、なぜ自分はここにいるのか、こうして生きているのかという物語を編み直さないと暮らしは立ちゆかず、人びとは苦悩しながらも、まずはその方法を獲得しようと必死になっていた。彼が言う“風景を立ちあげ直す”行為もその方法のひとつだったのではないだろうか。

そんなことを思いながら、あるまちに暮らす人たちが同じ風景を見ているとして、彼ら一人ひとりのこころがその風景をそれぞれに寄る辺としていると仮定してみる。すると、ひとつの風景はある集団の物語のありかである、と言うことはできないか。そう考えたとき、復興工事によって進んでいく二度目の喪失の意味がより重く感じられた。(pp. 279-280)

語りを聞くということ

(2016/04/30) 誰かの話をうんうんと聞いていると、その人が亡くした人の話を聞くことがある。私が忘れてしまったら、あの人が生きていたことを知っている人はいなくなるから。そう言って、いまはいない誰かの断片を分けてくれる。会うことはなかったけれど確かにいたはずのその人のことを、私も忘れたくないと思う。ある人を介して出会わせてもらった“いまは亡き人”を通して、その周りにいたはずの、無数の、名前も知ることができない死者たちを、感じることもある。(p. 290)

(2016/08/11) いま俺らが七十年前の戦争を語るっづごどは、あんだらが七十年後に震災のごど語るぐれぇ難すぃごどさ。色々間違うごどもあるだろけんと、それを含めて、あんだらには震災のごどを語り継いで欲すぃなあ。そんときに、いま俺らが語った戦争のごども、ちょっとは引き継いでくれでるとうれすぃんだけんとなあ。(p. 294)

(2016/08/12) そうやって、なんとかかんとか語り継ぐのさ。ひとりの経験はひとりの問題でねくて、過去の人と、未来の人のものでもあるんだよ。この世を生きてるっづごとは、そういうごどなのさ。ひとりじゃねんだよ。(p. 294)

(2016/12/05) 語りを聞くということは、同時に、その隣にあるはずの語られなかったこと、どうしても語れなかったことを想う、ということだ。(p. 298)

摩擦と発明

(あと語り) その後も(神戸での…鵜野注)滞在の日を重ね、話を聞かせてもらうなかで、ふたつの震災は、土地の条件や被災の仕方、時代背景も違うために、それからの復興のあり方も随分と異なりそうだと感じるようになった。

その一方で、大きな災厄のあとに人びとが抱える悩みや苦しみには、いくつも共通するものがあるということも知った。その多くはおそらく、異なる境遇にある者同士、突如あちらとこちらに分けられてしまった私と誰か——それはきっと、同時代を生きる人びとだけでなく、死者や、この先の未来に出会う者たちも含むだろう——が、それでもともに生きていこうとする時に生じる摩擦なのだ

と思う。

震災のその強烈な体験自体は、誰かと分かちあえるものではないだろう。だから体験者は、わかってもらえない、もしくはわかった気になられてしまうことへの怖さを感じ、何かを語ることをためらう。また反対に、体験をしなかった者は、辛い体験を抱えてしまった者にどう語りかけたらよいのかと戸惑う。

しかし、震災が作り出してしまったその大きな分断を放っておけば、その場での暮らしは立ちゆかないし、何よりどの立場にある人も苦しい。だから、互いにわかりあえないということを緩やかに了承しあいながら、起きてしまった災厄を分かちもつことによって、“それから”をともにつくり上げていく。わかりあえなさが生む摩擦は互いにしんどくはあるけれど、その実践を続けていくなかで、追悼式の会場などであらわれたあのやりとりのような、やわらかな発明が生まれてくる。前述の悩みや苦しみが共通するのだとすれば、神戸から生まれたこの発明もまた、遠く離れた東北でも共通して、いつか応用できるものなのではないかと想像できる。

災厄のあとに生じる摩擦と、そこから生まれる発明。不意に、被災して間もない風景を戦後の焼け野原にたとえ、「あのときも立ち上がったから、今度も大丈夫」と笑った老人たちの姿を思い出すと、もしかすればこの摩擦と発明は、さまざまな条件や背景の違いを越えて、大きな災厄に遭った土地や人が、共通して出会っていくものなのではないかとも思えてくる。あのときはいささか乱暴に聞こえた震災と戦災の重ねあわせが、思いがけず、すとんと身体に落ちる。（pp. 312-313）

当事者と非当事者、旅する身体

（2017/10/05）体験者や当事者でなければわからない、ということは確かなこと。けれどもたとえば大きな痛みや困難に遭った人たちが同時代に生きているときに、その人たちに何も話しかけなければ、その分断は分断のまま、むしろ深くなっていく。一人ひとりとして、話しあう。そしてできることがあれば、手を取りあう。

非体験者と体験者が手を取りあい、その体験から得られたものを次に渡すための方法を考える。それは、どちらかの力だけでは決して成され得ない、と私は考える。触れあいのないままの、推し測り合いだけではきっと難しい。互いに痛くても、話しあう。わからないということを価値と思いあう。それがきっと次に繋がる。（pp. 326-327）

（2017/10/15）当事者と非当事者という存在がもし分かれてあるとしたら、その間にあるグラデーションを繋いでいくことが大切ではないかな。そうしないと社会は、いつまで経っても前に進まないのではないかな。繋ぐのは、旅する身体、言葉のやりとり（ゆっくり聞くこと、諦めないで話すこと）、触れあうこと、かな。（pp. 327-328）

「もの語れるって幸せなんだよ」

（2018/01/13）語るという選択をした人たちが、受け取る相手と自分自身を守りながら手渡しをしていく作法として、物語という技術を選び、使い、開発していく。語りの前後には、必ず他者がいる。そこにあるのは、どうしようもない伝わらなさと、誤読、幸せ、希望、弱さ、孤独。（pp. 332-333）

（あと語り）おじいさんは、「もの語れるって幸せなんだよ」とも教えてくれた。語る人がいて、聞く人がいる。根本的にひとりではないことを支えにして編まれていく物語は、大切な何かを受け取ったら語らずにはおれない人間という生きものが存在する限り、生まれ続けるものなのだろうとも想像できる。

そうして、いつか誰かが遭遇した“語らずにはおれない体験”は、丁寧な口伝えの連鎖によって、その時代、地域、人によって多少形を変えられながらも、大切な芯を守り抜きながら、したたかに生きのこり続けている。（pp. 341-342）

本書を、多くの方がたが手に取って下さることを願ってやまない。

あぁ、結婚！

―婚活日記―

第13回

黒田長宏

＜2019年12月6日＞

日常的な変化と言っていいのか、なぜかフェイスブックでフィリピンの女性がほとんどの集中リクエストがきて、ほとんど承諾していったら、4000人を超えてしまっていて、5000人の締め切りまであと少しとなってしまった。日本人は以前からの200人くらいだと思う。不思議だが、そうなっているのだからその通りにやっている。

婚難救助隊サイトの広告募集の箇所を削り、ユーチューブを上にもってきた。広告より、ユーチューバーとして認知してもらおうという策にしてみよう。

＜1 月21日＞

おおざっぱではあるが、本日、婚難救助隊サイトの閲覧者が4000人を突破したので、登録者にメルマガを送った（出来たような気がするが）。明後日でサイト開設1年となる。結婚したい人は結婚できる社会実現のために、継続する。私自身は勤務先でも告白ができず、マッチングサイトを頑張っているが、誰もマッチしてくれない。

＜1 月27日＞

思えば、一つだけ残していたマッチング・サイトをさぼっていた感もあり、再び意識してきたが、どれだけいいね！しても反応がない中で、本当に久しぶりに、しかも婚難救助隊サイト開設1周年ちょうどに、一人返信がきて、期待したが、結局最後は、希望年齢より離れているのでごめんなさいと書かれ終えた。4、5日ほどのささやかなご縁だった。しかしくじけず、新たに今日も何人も応募した。午前中ほとんどはそれで終えてしまったくらいだった。

SNS のほうは、フィリピン女性がほとんどという、なにか SNS 側でコントロールされているのかわからないが、ほとんど5000人に近づいてしまい、火山が噴火したニュースが少しあって大変だと思う。以前は関心がなかったのに、意外なことである。しかし日本でも新型コロナウイルスの影響が出てきて、他人事ではない。今年はなんとしても再婚と、婚難救助隊を動きにしたいものだ。朝ドラにも出た有名男優と、某プロモを観ていて期待していた新進女優の不倫騒動には、結婚したくてもできない人もいるのにとがっかりしている。

＜2月10日＞

今回は提出までもっと粘ろうかと思ったが粘れなかった。次は私と同世代の女優の不倫騒動である。有名人でこうなのだから一般人ではかなり不倫があるのだと思う。結婚したくてもできない人もいるというのに大変憂うるとともに、某週刊誌は某アーティストの時はなぜか叩かれたが、また不倫という破壊行為を知らせてくれている。私はその週刊誌を応援して毎週買っている。読むのはさぼっている。新型コロナウイルスは東京オリンピックができるのだろうかと思うくらいになっているような気がするが、私はテレビで観るだけである。昨日は部落の役員決めの集会があり、10年以上か、母親に出てもらっていたが、久しぶりの持ち回りのトップになったのを機に、一昨年から集会に復帰したが、思うところもあった。勤務先の新年会は欠席させていただいた。このように私は少年のころから集会というのが苦手である。ある陶芸家などはほとんど交際は奥さんに任せて一生を終えられたという。なんと幸福だったことだろう。そういう助けてくれる人が1人いれば充分に幸福なはずなのだ。だから私は不倫は批判しなければならない立場をとる。某マッチングアプリは月に2人反応だけきたが、年齢差などで断りがあり、通り過ぎていった。まったく反応がない人と、交際しないのに反応はいちおうくれる人とどちらが良心的なのかなと思う。職場で声をかける気力は相変わらずでない。間接的にもなかなか人が協力してくれるのは難しい。婚難救助隊のサイトはユーチューバーとしてのパフォーマンスを主にしているだけだが、今みると4265カウントになっている。次回こそは、何か楽しい動きが報告できれば良いのだが。

〔PBLの風と土　第12回〕

手続きや内容より関係構築にこそ重点を

山口 洋典（立命館大学共通教育推進機構准教授）

【前回までのおさらい】

筆者は2017年度にデンマークのオールボー大学（AAU）で学外研究の機会を得ました。AAUでは1974年の開学当初から全学でPBL（Problem-Based Learning）を導入していることで知られています。

連載1回目から4回目までは現地報告、第5回から8回目まではアイルランドで刊行されたPBLの書籍をもとにオールボー大学以外の問題解決学習の知見（5回目：AAUの実践の特徴、6回目：学習プロセス、7回目：問題設定、8回目：指導法）を紐解きました。9回目からはサービス・ラーニングとの比較を重ねています。

1. 変容とは何?ニーズは誰が定められる?

本連載では、今回までの3回連続で、2019年7月27日に立命館大学大阪いばらきキャンパスで開催されたシンポジウム「サービス・ラーニングが拓く未来―貢献の時代から連携と倫理の時代に―」の内容を紹介してきた。このシンポジウムは日本サービス・ラーニング・ネットワーク（JSLN）の第4回全国フォーラムの全体会として開催されたものであり、立命館大学ボランティア・サービスラーニング(VSL)特別公開研究会としても位置づけられた。第9回ではミネソタ大学のアンドリュー・フルコ（Andrew Furco）先生による基調講演の前半まで、第10回では基調講演の後半とトークセッションの前半を取り上げた。前回も記したとおり、本連載のテーマはその名のとおりPBLに関する実践や研究の動向を風に、それをどう日本の教育制度などを踏まえて根ざすものにしていくかを土に、それぞれ喩えることで、地域参加型学習のあり方を探ることを目的としてきた。

今回は、シンポジウムのまとめの部分を紹介する。具体的には、前回の予告のとおり、シンポジウムの共同主催者であるJSLN代表理事の市川享子・東海大学健康学部講師によるコメントを紹介するところから始め、トークセッションのテーマに掲げられた「協働的な学びの場のデザインによる多様性の尊重と市民性の涵養」に迫っていくことにしよう。PBLという名前に惹かれて本連載を読んでいただいている方にも、地域社会における多様な人々との交わりと関わりを通じた学びと成長の場づくりによる教育プログラムとしてのサービス・ラーニング（以下、SL）の教授法に関する議論から、何らかの知見が導かれればと願っている。あわせて、よりよい学びと成長の場づくりが対人援助の実践の推進にも関連づくという視点でも捉えられれば幸いである。

市川先生のコメントでは、主に基調講演の内容を踏まえつつ、トークセッション前半における各々の話題提供にも絡めて2点の問いが示された。1つは「変容的なSLのためには高等教育機関にどのような変化が求められるか？」（How do the institutions of higher education need to change for transformational Service-Learning?）であり、本連載第9回で紹介した図1のように、互恵的な関係のもとでの協働的・倫理的なSLは、いかにして実現可能となるか、そのための具体的な知恵に対する問いかけとして位置づけられよう。もう1つは「SLにおいて地域社会の真のニーズは誰が定められるのか？」（Who should define

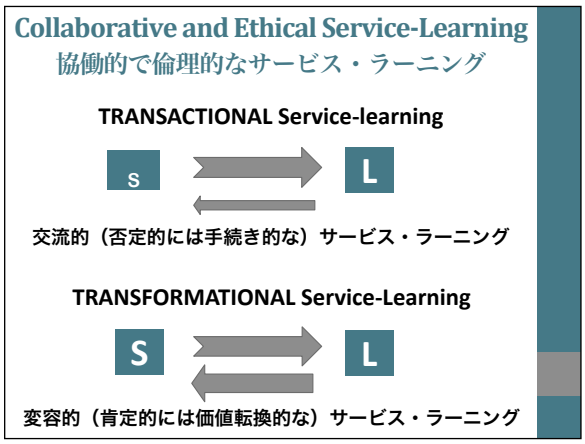


図1：基調講演スライドより（8枚目、訳は筆者）
【連載第9回（山口, 2019, p.211）の再掲】

authentic community needs in Service-Learning?）であった。市川先生はフルコ先生にその問いの意図が明確に伝わるよう、写真1のとおり、スライドにて英語での問いかけ文を用意された。ここで「真のニーズ」と訳したのは、第9回で紹介した基調講演のスライドにおいては「正統的」と訳したauthenticであることを申し添えておきたい。

当日は市川先生からの問いに続き、フロアから3名が午前中の分科会での内容に絡めてコメントや質問を重ねた。分科会1「立命館大学教養教育における『社会と関わる自己形成科目』―SLとキャリア教育に通底するもの―」の共同担当であった立命館大学の中川洋子先生からは「我々は創発的な問題発見・課題解決という言い方をしていますけれども、例えば酒造メーカーから若者の日本酒離れをどうしたらいいかというニーズが示されて、そこには具体的に何が原因で、何を掘り下げてどうすればいいかを扱う上では専門知識が必要」と、学年進行にあわせて科目の教授法や到達目標の設定が不可欠であることに触れた。分科会2「ワークショップを通して考える、SLの理論と方法」の共同担当であった国際基督教大学の黒沼敦子先生からは

写真1：トークセッションの様子（筆者撮影）
（手前からフルコ先生、北出慶子先生、木村充研究員）

「変容的なSLという観点は、JSLNの翻訳プロジェクトにより現在出版準備中のバーバラ・ジャコビー先生による新著『Service Learning Essentials』でも同じ表現で取り上げられており、SLでは規定の枠組みの中で活動を通して学習するのではなく、その枠組み自体を批判的に見ていく態度が非常に重要で、それぞれ接近の方法は違ったとしても、様々な文化や社会の中で、何らかの形で閉塞感を感じている部分や、不合理や正義がないところに変容をもたらす一助になるような省察などが求められているのではないか」と、市川先生の1つめの問いを補足するコメントがなされた。そして分科会3「高大連携、高等学校におけるSLの展開―兵庫県立尼崎高校、立命館宇治高校、高大連携プログラムSAGEの事例をもとに―」の共同担当であった創価大学の宮崎猛先生からは「互恵関係が成り立つのはそれなりの専門性があるときであって、中等教育でのSLでは、社会に関心を抱くきっかけとなるために強制的という印象が抱かれるかもしれなくても学校側による手続き先行による取り組み、つまり交流的（図1ではtransactional）なものもあっていいのではないか」という視点が示された。

2. 立命館大学に見る教育実践の幅

これらのコメントや問いに、トークセッションのパネリストらはどのように応えていったか。ここで、市川先生からの2つの問いに埋め込まれたキーワードを確認しておくことにしよう。1つめの「transactional」については、本連載第11回でも再確認したとおり、学びのコミュニティの構成員が互いに相まみえることで価値の調整・共有・創造がもたらされることを意味している。[1]そして2つめの「真のニーズ」については、例えば前掲の図1をもとにすれば、矢印が行き交う両者に対して、Sを学生が身を置く活動の現場、Lを学生が現場での活動の準備や省察を行う教室等とすると、SからLに何を求めているか（顕在的ニーズ）、あるいはLはSにおいて何が求められているか（潜在的ニーズ）、といった現場から学習者及び大学に寄せられる期待について、果たしてそれは誰がどこまでどのようにして定め、どこまでの関わりの度合いが求められ、日常生活に

介入するカリキュラムにおいて倫理観を携えたものとするには何をすべきか（転じて何をすべきでないか）といった問題提起である。[2]

パネリストからは、立教大学の木村充研究員、立命館大学の北出慶子先生、そしてフルコ先生の順に発言が重ねられた。木村研究員は「どうしたら地域を変容させられるかを真剣に考えることが学生にとって大きな学習で、そこで学習することがやはり地域の変容につながる」ため、地域ニーズについては「学生の当事者意識を引き出すことができるのかに尽きる」ため「教員のリフレクションを促す力にかかっているのではないか」と示した。続いて北出先生は「互恵性でバランスをとっていく際、教員が目標をある程度提示する必要があるものの、ただ提示してしまうとその学生の学びもある程度制限してしまう」ということを教員が認識した上で、「当事者の目線でのニーズと言っても、コミュニティの中には多様な考えを持つ方がいらっしゃるので、真のニーズの把握は簡単ではないこと、そして多くのジレンマが現実社会に存在するということを知る、そうした機会を教員がつくることが大事なのではないか」と示した。これらにフルコ先生が次のように続けた。

> 確かに変容的なSLとはどういうものか、説明するのは簡単ではないのですが、特定の活動経験や特定の種類のSLを指しているわけではありません。変容的なSLとは、現場に、学習者に、教職員に、地域社会に、そして学びの場に、それを展開する経験においてどういった変化がもたらされるかに関心を向けていくことです。変容的なSLはそういうものだと私は捉えています。
>
> その上で、果たして誰が現場において真のニーズを見出すことができるかについて触れることにしましょう。大前提として、それは時と場に委ねられます。というのも、SLにおいては、誰もが平等に参加する（co-equal）ものだからです。
>
> そのため、SLでは、誰でもコミュニティのニーズを特定する可能性を持っています。基調講演（注：連載第11回参照）の中で、私は高齢者施設での幼稚園児のSLの事例で、アートプロジェクトや省資源化を進めるエコプロジェクトが行われたことを紹介しました。この事例では、それが真のニーズだと見出したのは幼稚園の先生でした。というのも、彼女が入所中の母親と話し、その施設では誰も家族が訪問しない高齢者がいることを知ったからです。また、スーダンの奴隷制度の事例では、小学生らがそのニーズを見出しました。そして、大学病院でのSLとして地域の診療所でムスリムの方々の地域密着型診療を行う事例では、ニーズを見出したのは医学生たちでした。その背景には、医療従事者は多文化理解への必要があることを大学側が判断したということがあります。このように、真のニーズを特定するのは、それぞれの経験に委ねられるところであり、パートナーシップを結ぶ誰もが見つけ出す可能性があります。（筆者訳）[3]

ここで、このトークセッション後半での議論の前、具体的にはトークセッション前半での北出先生からの3つの質問に答えるにあたり、フルコ先生は基調講演で触れなかったスライドを用いて、大学と地域のパートナーシップについて追加の説明を行ったことに触れておきたい。というのも、米国に比べてSLが浸透していない日本の状況に配慮して、基調講演の中盤を過ぎたところでフルコ先生は聴衆に対して事例か理論的観点か、どちらを重視したいかを問いかけたのであった。結果として、具体的な事例の紹介を求める参加者が多かった。そこで、トークセッション前半で紹介したスライドも交えて、上掲のフルコ先生の回答の意味を掘り下げていきたい。

3. 関係構築における6のRと4のステージ

フルコ先生は、SLにパートナーシップが大学と地域の互恵的な振る舞いであることを大前提として、それを考えるモデルとしてKaye & Resnick（1994）による6つのRを紹介した。相手に敬意を払い（Respect）、大学と地域にはどこに境界線が引かれているのか互いの役割を理解し合い（Role）、単に問題を解決するのではなくプロセスを共に過ごしていく上で関係構築を図る（Relationship）、リスク等を考えた上で必要な経費を分担し必要に応じて報奨を出す（Reward）、両者が対等な関係のもとで成果を導く（Results）、好意的な点だけでなく否定的な観点にも誠実に相互に承認し合う（Recognition）という姿勢である。これら6つの要素全てに大学も地域も相互に気を配ること

図2：基調講演スライドより（27枚目、訳は筆者）
（当日資料より一部字句を修正）

で、質の高い協調的で倫理的なSLが可能だとするモデルである。これら6つの観点を含んだ分析ツールとしてのワークシート「Climate Diagnostic Tool: The Six R's of participation」は、例えばWolff（2003）などにも収められており、果たして大学と地域とのあいだの向き合い方が適切なものになっているかを教員・学生・受入団体などが評価する際、プログラムの終了時のみならず、設計段階、開始時、中間等でも活用できるだろう。[4]

また、長きにわたる実践的研究を通じて、フルコ先生はSLにおけるパートナーシップを4つのステージに整理した。そして、このステージごとに、パートナーシップの関係にある人々が自問していくことになる、と示した。4つのステージとは、図3のとおりである。順に創始（Initiation）、展開（Development）、維持（Maintenance）、解消（Dissolution）の4つであり、図4〜7のとおり、その各ステージで配慮すべき事柄が順にスライドで紹介された。

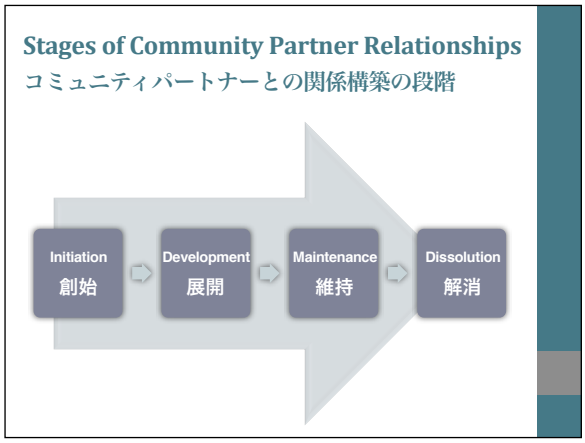
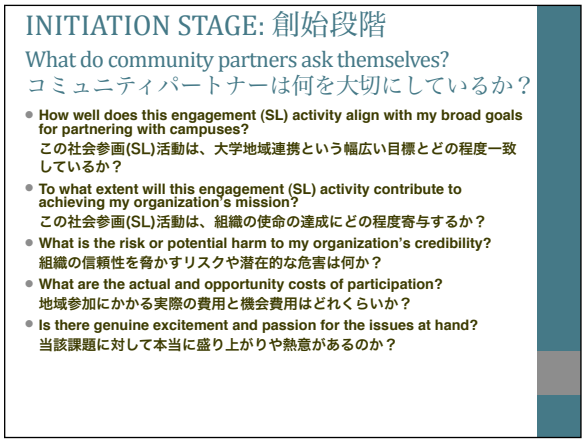
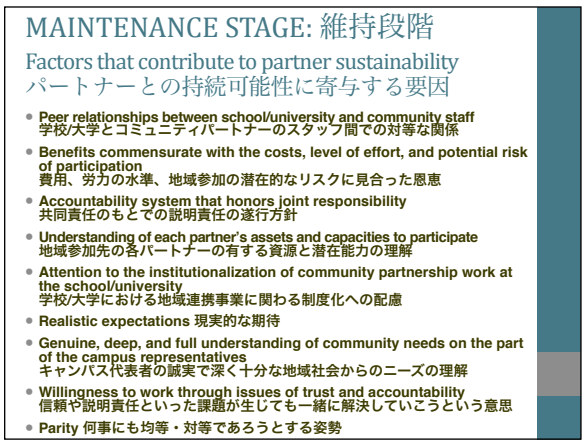


図3：基調講演スライドより（28枚目、訳は筆者）





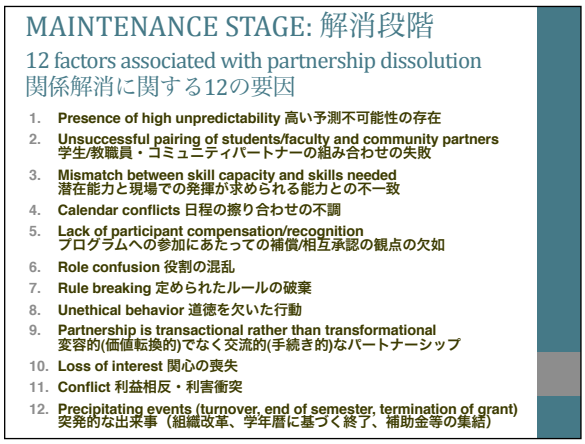


図4〜7：基調講演スライドより（訳は筆者）
（上から順に32枚目、33枚目、34枚目、36枚目）

図8：基調講演スライドより（35枚目、訳は筆者）

SLの創始段階では地域側が「自分の組織にとって大学連携する目的に沿っているか」を自問自答すると、図4のスライドにより具体的な項目が列挙されている。続いて発展段階では地域ではどんな結果・成果がもたらされることを期待しているか、大学側の姿勢が重要になると図5のスライドで示している。続いて維持の段階では両者が対等な関係か、また安定的な展開の上で大学内で適切な制度化が図られているか、それを均等性・対等性を意味する「parity」という言葉を用いて、図6および図8のスライドにより説明された。そして最後の解消段階は、意識的に終わらせる場合ではなく崩壊してしまう場合を指しており、「もう受け入れをやめたいのですが…」と言ってこられてしまう12の要因が示された。

こうして、改めてSLにおけるパートナーシップの6つの要素、そしてパートナーシップ構築にあたっての4つのステージを見つめてみると、変容的なSLにあたって大学に求められるものは、第9回でフルコ先生が用いた前置詞の違いによる関係性の違いについて紹介したとおり、殊更に地域の「ために（for)」と大学から地域への貢献の姿勢を貫くのではなく、大学が地域と「ともに(with)」関わり合うことが改めて重要であることに気づかされるだろう。それは言葉遊びをするなら、地域のニーズを把握あるいは発掘しようとしすぎるのではなく、地域と大学の発展のためのシーズは何かに着目することではなかろうか。それにより、地域から、あるいは大学からお願いをする（please～）という交流や手続きばかりを重ねるのではなく、新たな楽しみや可能性を追究することで共に新たな挑戦が重ねられる（Let's～）ことで結果としてコミュニティの変容がもたらされるだろう。したがって、改めて大学改革の御旗のもとで、理論的観点とコンプライアンスへの配慮のもとでのプログラムの枠組みに関する正統性や、現代的なニーズへの対応が図られた内容としての正当性のもと、大学が地域に依頼をするだけでは、両者のあいだで相互に成熟した関係構築は困難であろう。

4. コンフォートゾーンを抜け出る

以上、3回にわたって、フルコ先生を招いたシンポジウムの内容を紹介してきた。その前には、改めて筆者が取り組んでいるSLの基本的な考え方などを整理する回を設けた。そのため、デンマーク・オールボー大学や、アイルランドでの心理学分野のPBLの検討は異なり、模範的市民としての生き方・働き方への素養を磨く教養教育としての地域参加型学習に関する議論であった。したがって、1回目から8回目とは異なるトーンで4回分の連載を重ねたことになる。

PBLもSLも、共に日本以外で創始・展開されてきた教授法であり、かつ、共に大学以外にも学びのフィールドが拡張されるという共通点を餅ながら、日本におけるSLの認知度や普及はPBLに対して高くないだろう。そのため、2019年7月27のシンポジウムの最後には、参加者にマイクを回した際に、日米での社会的・文化的・歴史的、特に宗教的な違いなどにより、大学と地域のコミットの仕方が大きく異なっているのではないか、というコメントが寄せられた。そして、今後の日本のSLの発展のためには何が重要か、といった問いかけがなされた。フルコ先生の返答を以下に抜粋して紹介しよう。

> 日本とアメリカのSLの比較について、私の経験も交えてお答えしておきます。私は1990年にカリフォルニアのUCバークレーで働き始めたのですが、当時はまだSLは曖昧な（fluffy）言葉であって意味の深いものではありませんでしたし、地域連携に関する実践や研究もあまり主流ではありませんでした。やりたい人がやればいい、そんな感じで、本格的な分野としては位置づけられてはいませんでした。それはカリフォルニアに限ったものではなく、米国のほとんどの大学で同じ状況でした。その後、30年

かけて、現在のような教育制度への進化が徐々にもたらされたのですが、その理由は学生が望ましい水準まで成績を上げていないことを明らかにし、教育制度を改革する上で何が重要でどのようなものが有用かについて検討が重ねられることになったためです。そして大学ではより効果的な学習のためにこれまでとは違った教育法、より良い教育法を導入することが求められた結果、SLが地域社会への参画や貢献の手段として多くの大学で位置づけられるようになりました。

現在、私は大学の社会的責任を果たすために大学全体で地域社会への参画をしていくための制度化に取り組んでいるわけですが、そうして展開されている幅広い地域貢献の活動の多くは、教育面だけでなく研究面も含めて、SLから始まったものです。全ての大学教員が共通して行っているのは教育活動であり、その一方で全ての教員が研究活動に従事しているわけではないため、教育を通じて大学と地域との多様なコミュニケーションを図っていく中心的な機会となりました。そうして地域連携を行っている大学と行っていない大学では違いがあり、地域社会に参画する大学は現実世界から切り離された仕事をする象牙の塔としてのイメージを断ち切っていこう、と働きかけています。（中略）

こうした改革が30年かけて行われてきたわけですが、それはSLを導入することから始まりました。私の感覚では、そうした傾向はこれからも続くでしょうし、JSLNが日本の教育界で重要な役割を持つようになっていくことでしょう。もし、10年後のこの会議にまたお伺いすることができれば、改めてその間にどのような発展がもたらされたのかについて語り会えることでしょう。その日を楽しみにしています。（筆者訳）

10年先の未来を今から断定するのは困難である。しかし、10年前を見返してみれば、少なくとも立命館大学では2012年からのカリキュラム改革に伴い、新たなSL推進のあり方を議論していた時期である。そこで次回からは、2020年度から立命館大学ではSL科目を含めた教養教育改革がなされることを踏まえ、この8年間にどのような受講生がSLを通じて学びと成長の機会を得たのかに焦点を当てていくこととしたい。次回はその分析対象となるプロジェクトの概要と、分析方法として用いるTEA（複線径路・等至性アプローチ）について概説することとしよう。

(gucci@fc.ritsumei.ac.jp)

【引用文献】

Kaye, G. & Resnick, I. 1994. Climate Diagnostic Tool. Brooklyn, NY: Community Development Consultants.

桑名恵. 2019. 大学の海外体験学習における当事者性の醸成――東ティモール体験学習の事例から――. ボランティア学研究 19, 23-34.

Mezirow, J. 1991.Transformative Dimensions of Adult Learning. Jossey-Bass. (=2012. 金澤睦・三輪建二訳. おとなの学びと変容―変容的学習とは何か. 鳳書房.)

上野千鶴子. 2011. ケアの社会学――当事者主権の福祉社会へ. 太田出版.

Wolff, T. 2003. A Practical Approach to Evaluation of Collaborations. in Backer, T. E. (ed), Evaluating Community Collaborations. Springer. 57-112.

【注】

[1] このtransformationalという概念について、極めて類似する理論としてMezirow（1991=2012）によるtransformative learning（意識変容の学習、と訳されている）があることに注意したい。実際、本連載で取り上げてきた2019年7月27日のシンポジウムの終盤に、JSLNの副代表である筑波大学の唐木清志教授が両者を区別して捉える必要があることについてコメントしている。筆者の観点で言えば、フルコ先生によるtransactionalとtransformationalの対比は学びのコミュニティ全般に対して取り扱われているのに対し、Mezirow（1991=2012）によるtransformativeという視点は学習者個人に焦点を当てたものとして捉えられる。なお、SLにおけるtransformative learningとしての変容について、東ティモールでの海外体験学習を事例とした学びのプロセスの分析を取り扱った桑名（2019）の研究があることを紹介しておく。

[2] 顕在的ニーズをもとにしたSLは当事者の要求に応じて一定の手続きのもとプログラムを展開するという点でtransactionalなもの、潜在的ニーズをもとにしたSLは現場も学習者もプログラム開始時点ではわかり得ていないニーズを探索的に掘り起こしてよりよい状況をもたらそうとするという点でtransformativeなもの、と位置づけられよう。この整理は関西学院大学社会学部の関嘉寛教授より、上野（2011）によるニーズの分類が興味深いという示唆を得たことに依拠している。記して謝意を表したい。

[3] 当日の会場音声の録音から筆者が文字起こしをしたもの（フルコ先生には未確認）を翻訳した。p.5の訳出部分も同様である。

[4] ワークシート単体はWolff氏のサイトにてPDF（https://www.tomwolff.com/resources/backer.pdf）で無償提供されている。

ブラックボックス

ＪＲ茨木駅近くの接骨院が、私の仕事場です。
接骨院の施術と心理療法の共通点の一つに、見た目ではわかりにくい問題に向き合わなければならないということがあります。

他人の「心」は、見ることができません。
脳や神経は実体としてありますが、他の人が心で感じていることや考えていることを直接見ることは困難です。

心は、脳の活動といわれています。
脳には１０００億の神経細胞があり、１つの神経細胞からでる軸索は枝分かれして１万個のシナプスで他の１万個の神経細胞と接することができるのだそうです。
神経細胞が受け取る神経伝達物質は１００種類以上あるらしく、想像もつかないくらい複雑な活動に違いありません。＊１
神経細胞の興奮や、神経伝達物質のやりとりが見えるようになったとしても、心が見えるようにはならないでしょう。

脳に傷がついていなくても、心が傷つくことがあります。

現在放送中のテレビドラマ「トップナイフ」でも、天才脳外科医黒岩（椎名桔平）が言います。

「心の傷は、外科医じゃあ治せない」　　（↑椎名桔平のつもり）

第６話では、事故で失った左手が焼けるように痛むという幻肢痛の患者が登場します。
その患者は高校野球新潟県大会の決勝でレフトフライを落球し、母校の甲子園初出場というチームメイトの夢をつぶしたということに、深く心をいためていました。

天才脳外科医はどのような治療を講じるのでしょうか？
（ネタばれなので、その答は記事の最後に書きます）。

今回は、見ることができない「心」を対象とする心理学、あるいは心理療法から、私が接骨院の施術に取り入れたことを書いてみます。

けがには、傷口が開いている創（開放性損傷）と、傷口が開いていない皮下損傷（非開放性損傷）があります。
接骨院では、創は扱えないので、皮下損傷に施術することになります。
皮下損傷には、見た目にも損傷が明らかなものと、見た目だけでは損傷しているのかどうかわからないものがあります。

例えば、変形や皮下出血、腫れなどの症状があれば、損傷が明らかです。
しかし、皮下で生じた損傷の多くは、見た目に明らかな症状を伴っていません。

骨が折れたときは骨折、関節がはずれたものは脱臼、打ち身は打撲、関節をねじっていためたものは捻挫、筋肉や腱、靭帯などの軟部組織を損傷したものを挫傷と呼びます。

例えば、筋肉が大きく断裂したような挫傷なら、外から見てもわかりますが、筋膜や靭帯を伸ばしすぎてしまったような挫傷は、肉眼では何も確認できません。

患者さんが最も取り除いてほしいのが、痛み、違和感、だるさ、しびれ、こり、つっぱり感などの苦痛です。
苦痛は、末梢神経や脳の活動で、これも見ることが困難です。

接骨院の患者さんの多くが、見た目にはわかりにくい皮下損傷や苦痛をかかえて来院されます。

創や脱臼など、見ただけでどのような損傷かわかるものは、おのずと治療方針もわかります。
例えば、傷口なら閉じなければなりません（当院では閉じられないので外科に紹介します）。脱臼なら関節を元に戻します（整復します）。

では、見た目ではわかりにくい損傷は、どのようにして治していけばいいのでしょうか。

大学生のころ、心理学の授業でブラックボックスという考え方や、科学的手続きを学びました。

密封されていて内側が見えないが、中の仕組みをよく知らなくても使うことができる機械装置をブラックボックスと呼びます。
ちなみに、最近、密室で身勝手な意思決定している組織や集団を、否定的な意味合いを込めてブラックボックスと呼ぶこともありますが、ブラックボックスのブラックには本来、否定的な意味合いはありません。
直訳すれば暗箱。光が出入りしない箱という意味です。
ブラックボックスは、無理に開けると、機械装置が破壊されてしまったり、元に戻せなくなったりします。
例えば、パソコンや携帯電話などがブラックボックスです。

ブラックボックスは、開けることが難しいので、ブラックボックスに何かのはたらきかけ（入力）をして、どのような反応（出力）が返ってくるかを調べ、内部の様子を予測しなければなりません。

科学的な手続きでは、まず、中はこうなっていて、こういう入力をすれば、こういう反応が返ってくるだろうという仮説を立てます。
次に、入力と出力（刺激して反応を見る）を繰り返して、仮説を検証します。
仮説は間違っていても構いません。
予想と違う出力（反証）があれば、仮説を修正し、より正確な仮説を導き出していきます。修正されるのが仮説です。
ただし、仮説は、他の人が同じ検証しようと思えばできなければなりませんし（検証可能性）、また、誰が検証しても同じ結果が出なければなりません（再現性）。

仮説で取り扱うのは、測定可能なものや反証が出せるものに限られます。
神とか東洋医学の氣とかは測定できないので、科学では扱いません。
取り扱えないものは、肯定もしなければ否定もしないというのが科学的立場です。

誰がやっても同じ結果が出るようになれば、仮説は定理、法則、理論などと呼ばれるようになります。
とはいえ、定理や法則は修正される可能性があるので、すべての定理や法則は仮説であるとも言われています。

内側が見えているなら仮説は必要ないこともあるでしょう。
しかし、内側を見ることができない場合は、このような仮説と検証を繰り返す手続きが科学的なやり方なのです。

機械装置ではありませんが、人もブラックボックスです。
手術などのさまざまな技術によって、体の内部を見ることができるようになってきてはいますが、体の仕組みが解明されたわけではありません。

例えば人の脳。
脳の仕組みはまだ十分にはわかっていません。

腫瘍や動脈瘤、脳内の出血などは手術で治せることもありますが、冒頭にあげた幻肢痛をはじめ、人格障害、依存症など手術で治せないものがたくさんあります。

脳の活動を少しは観察できるようになってきていますが、心が何を感じ、何を思っているのかを見ることはできません。
心が傷つくことがありますが、開頭しても、心の傷は見つけられません。

心理学では、心を直接観察することはできないので、行動や言葉を観察して、心がどうなっているのかを予測します。
そうして得られた知見にもとづいて、心理療法では、人の行動を変えたり、心の傷を癒したりしようとします。

体のけがも同じです。
手術して治せるものと、手術では治せないものがあります。
手術で治せるけがは、切開すれば損傷しているところが明らかに見えるけがです。
どのように損傷しているかが見えるのですから、仮説を立てる必要はありません。

手術では治せないものは、いくつかの入力を繰り返しながら反応をみて、どのようにいたんでいるのかという仮説を立て、仮説に合わせた処置をし、改善するかどうかをみます。
（医療の現場では、仮説という言葉のかわりに、見立てという言葉もよく使われます）。
改善すれば仮説が正しかったと言えるでしょう。改善しなければ仮説が間違っているので、仮説を修正します。
その場で改善することもあれば、すぐに改善しないこともあります。
すぐに改善しない場合は、翌日とか、２、３日後に患者さんの状態をみて、仮説を検証します。
すぐに改善しても、ぶりかえす患者さんもいれば、すぐに改善しなくても、翌日には治ってしまう患者さんもいます。
改善の仕方はケースバイケースですが、たいていの患者さんは、仮説を立てて検証するのを繰り返す中で良くなっていかれます。

一方で、改善した、あるいは改善しなかったという個々の結果から、それらに共通する法則性が見つかることがあります。
たくさんの事例から法則性を抽出する過程を帰納と呼びます。
この法則性を言い表したものも仮説です。

反対に、見つかった法則性を個々のケースにあてはめ、こうすれば良くなるだろうと予測しながら施術をします。
法則性を個々の事例に応用していく過程を演繹（えんえき）と呼びます。
中には、うまく当てはまらない事例（反証）が出てきて、反証が蓄積していくことがあります。
しかし、あるとき、当てはまる事例も当てはまらない反証もどちらも説明できるような法則性がわかることがあります。
「こういうことだったのか」と腑に落ちる体験（アハ体験）が起きて、法則性が修正されます。
教科書に書かれている知識を修正したほうがよいとわかることもあります。
それまでの常識や信じられていたことが換わるような修正を、パラダイム転換と呼びます。

帰納と演繹、パラダイム転換を繰り返して、法則性を言い表した仮説はより確かなものになっていきます。
確かになった仮説は、定理や法則と呼んでかまわないでしょう。

心理学で学んだブラックボックスという考え方、仮説と検証といった科学的手続きを、私は接骨院の施術に活用しています。
現時点でどんな仮説をもって施術にあたっているのかは、次回以降に書いていきます。

冒頭の「天才脳外科医黒岩は、幻肢痛の患者にどのような対応をしたのか？」の答え

ネタバレが嫌な人は、先にドラマを観てください。

天才脳外科医黒岩が、幻肢痛の患者にとった治療方法は、いくつかの心理療法です。

まず、「幻肢っていうのは、外科医では何もやりようがないんだ。悪いね」と謝ります。
ワンダウンポジションですね。

「今が理想の自分だなんて言ってしまったけど､考えたらいろいろひどいめにあっているんだよ。
変な女にひっかかってさあ、子どもをあずかるはめになって、もう無茶苦茶だよ。
冗談じゃないよ、独身主義なのに。だから理想とは程遠いよ、私生活なんて」
自分の欠点をさらけ出して、患者との距離を縮めます。

ラマチャンドランのミラーボックスを使った幻肢痛治療も用います。

そして、甲子園出場を果たせなかったチームメイトたちに依頼して、見舞いに来てもらいます。

最終的に幻肢痛が治ったかどうかは描かれていませんが、久しぶりに再会したチームメイトたちが、患者の心の傷を癒していきます。
チームメイトの一人が言います「もうあのボールは取れたんだよ」。
それまでの県大会決勝の回想シーンはモノクロでしたが、ボールをキャッチするシーンがカラーの鮮明な映像になって、泣き崩れる患者の脳裏に浮かびます。

＊1　中野信子「脳内麻薬」幻冬舎　2014

現代社会を『関係性』という観点から考える

⑪　血縁あるいは家族について

更生保護官署職員（認定社会福祉士・認定精神保健福祉士）

三浦　恵子

更生保護官署で働きながら，薬物依存症回復支援や社会的養護に関わるボランティアの端に繋がらせていただいたり，様々な生きづらさを抱える人々を支える活動に関わることを長年続けていると，「血縁」「家族」というものについて考えさせられる機会がしばしば，いえ非常によくあります。私自身が後述するように家族療法を学生時代から学ぶ機会を得て,家族の見立てや世代間境界などについて特に意識していることも大きな要素だと思われます。

今回は，「血縁」「家族」について考えてみたいと思います。

1. 日本における「血縁」「家族」観

これは地域性もあることだと思いますが，日本社会はまだまだ「血縁」「家族」を重視する傾向があると感じます。たとえば，「介護の社会化」を目指して介護保険が導入されて約20年が経過しても，家庭における介護要員として嫁や娘が期待される場面は少なくないと思います。

私自身も嫁いだ（→この漢字自体にイエとイエの結びつきという雰囲気が強く感じられるようにも思うのですが）折に，義母から集落の方に

「これがうちの父ちゃん（要介護状態）のチンチン洗ってくれる嫁だ」

と紹介され，少なからず驚いたことがあります。私が実母や伯母の介護の経験を長く経験していたことは義母は勿論知っていましたし,私も義父の介護に関わることについては結婚前から当然のことだと考えていました。そのことで,義母が安堵していたことも承知していました。ただ,いくら義母が飾らない人柄だとはいえ,言葉が言葉だったので,紹介を受けた相手の方も「それは良かったね～」と返すこともできず，行く先々で微妙な空気が漂っていました。ただ，その場で驚きを表明するほど私も配偶者も子どもではないので，社会的な礼節を保って対応しました。その後，配偶者から「要介護状態の親がいるような家に嫁は来ないと母は思い込んでいたから」と聞いた私は，「私を『嫁ぎ先の条件をあれこれ並べ立てるような人間』と思ってるんかい」

としっかりツッコミは入れたのでした。

ただ，この一件が結婚生活のごく冒頭にあったことで，我々が家族として，この血縁関係の中において夫婦間連合をしっかりと保っていくには，相当な覚悟がいると腹を括ったのでした。「嫁いだ以上はもうこの家のもん」という強いメッセージを強く感じましたし，

「嫁いだ以上は実家はないもの」「何事も婚家優先」という義母の意向は態度でも言葉でも強く表明されていたからです。

私は，配偶者の両親に当たる義父母を大切にしたい気持ちは無論ありましたが，そうした気持ちと，世代間境界を曖昧にすることとは全く別だと考えていました。同居・別居にかかわらず，世代間境界を無造作に踏み越える・踏み越えることを許すことが，家族としての独立性や営みの在り方にひずみを生じさせる例を多く見てきた所以です。

私事になりますが，大学時代を京都で過ごし，社会福祉学科の学生としての実習等の際には京都府の児童相談所で御世話になりました。ミニューチンの構造論的家族療法が日本でいち早く導入されていた児童相談所でもあり，私はここで家族療法との本格的な出会いのチャンスを得ることになりました。このことが後の職業選択にも大きく影響しましたし，大学を卒業し更生保護官署に奉職した後も様々な形で家族療法の研修やワークショップに参加する機会を得ながら，今も学びを続けています。これは本当に得がたいことであると今も思います。

20 代半ばで既にベテランのボランティアスタッフが「薬物依存症者の家族のためのセッション」を手伝い，そこで家族のためのグループ・ファシリテーションの実践を経験し，その後独自にグループを立ち上げ 15 年以上にわたってそれを運営することができたのも，「家族」「家族支援」について学び続けてきたからだと思っています。

世代間を巡る様々なトラブルの多くは，「だって家族だからあたりまえ」「子どもだから親は何を言ってもいい」「親なんだからこのぐらいの甘えは許してくれるだろう」というスタンスでどんどん世代間境界を踏み越えること，相手側にそれを許すことに端を発していると私は考えます。「父ちゃんのチンチン洗ってくれる嫁」と呼ばれた私は，結婚生活の中で義母との軋轢が生じた際には，いわゆる嫁姑問題アルアルで片付けるのではなく，世代間境界や夫婦間連合という家族療法の考え方で解決していこうと考え，配偶者とも認識を共有しながら，日々実践を重ねている毎日です。

2.「家族だからあたりまえ」「血は水よりも濃い」ということは本当か

そもそも「家族」であり続けるには，家族を構成するメンバーにそれぞれの自覚と責任と役割遂行の努力が求められると私は考えています。結婚したから，子どもに恵まれたからといって，自動的に夫婦や親としての役割遂行能力が備わるわけではありません。いわゆる婚活や結婚に関するコマーシャルの醸し出すキラキラした雰囲気に接するたびに，私はこうした大切な点がおざなりにされているのではないかという違和感を感じてしまいます。

多くの場合，人は様々な理想や期待を持って「家族」を形成します。まず「結婚」（事実婚含む。）がその最初のパターンでしょう。ただ人にはそれぞれ価値観や考え方，生活習慣があるため，そこを摺り合わせ，ある時は妥協したり折り合いをつけたりして（落としどころを見つけるともいうのでしょうが），その家族なりの雰囲気や文化が形成されていくのだと思います。

「安らぎの場」としての「家庭」を求め自分はその場の醸成に何の努力もせず不満ばかりを述べたり，結婚前の経済感覚や生活習慣を強引に押し通すことも，それに対して相手にきちんと自分の意見を言わず不満を溜め込むことも（パワーバランスが非常に不均衡で DV が発生しているような状況では無論論外

ですが),家族としては健全な在り方とはいえないでしょう。

夫婦間のコミュニケーションが大切だと言われるのも，こうした様々な課題を話し合いによって乗り越えていくためです。

かつて，御父様が「そこは夫婦なんだから察して欲しい。」「夫婦ってそんなもんでしょう。ツーカーというか。」と繰り返される御両親と継続的に面接をしていたことがあります。御父様は決して言葉も荒くなくむしろ多弁な方ではありません。ただ，不機嫌になるとそれが表情や雰囲気に出てしまうので，御母様にとっては「怖い」と感じられてしまい，萎縮した御母様は御父様に相談できなくなるという悪循環に陥っていると感じられる状態でした。私は自分と同年代のこの御両親（むしろ御父様の側にだけですが）「ツーカー神話」（と呼ぶべきもの)があることに驚きながら，「ツーカーって・・・(サザエさんの）波平さんとオフネさんみたいなことを求めておられるのですか。」と返してつつ，「考えておられるなら，はっきり言葉に出された方が，御両親が話し合われるきっかけになるのではないでしょうか。」とお伝えしたことがあります。

こうした「ツーカー神話」，いわゆる「以心伝心」のようなものは，特に男性側（夫側）にとっては理想なのかもしれませんが，一朝一夕でできるものではなく，長年コミュニケーションを重ねてきた結果の賜物かもしれませんが，妻たるものの当然の心得として求められてきたフシもあると感じます。まさに「夫婦だからあたりまえ」という考えの（一方的な)理想型だと言うのは言いすぎでしょうか。

ただ，「言わなくても察して欲しい。」という感情は男性に限ったこと，もっと言えば夫婦関係に限ったことではありません。家庭以外の社会のあらゆる場面でごく普通に見受けられることですし，目の前の状況を素早く観察・判断して，「言われる前に動く」ことを求められる場面は多々あります。ただ，職場等では先輩社員・先輩職員からその動きを学ぶ機会がまだありますが，一番小さな社会である家庭においてはそれがありません。仮に(今では少なくなってきましたが）三世代同居や先に結婚した世代との同居家族であったとしても，その動きをそのまま踏襲すればよいという単純なものではありません。こうした場合に「自分が育ってきた家庭でのやり方・在り方」「自分がして理想とする家庭の在り方」に拘りすぎると，パートナーとなる配偶者との家庭観・家族観とのズレが生じていくことは心しておくべきだと考えます。

「家族だからあたりまえ」「血は水よりも濃い」とも言われてきましたが，果たしてそれは全てにおいて通じるのでしょうか。私は更生保護官署で加害者臨床の仕事に従事してきましたが，「(他人ではなく）家族だからこそ許せない」という心情に接する場面を数多く体験してきました。非行や犯罪が発生すると，それに対する非難は事件を起こした本人のみならず家族にも及ぶことがあります。大きな事件の場合，メディアスクラムで家族が外出すらままならない自体になることもあります。そうした中で,「家族だから」という理由で本人の更生を支えることが当然だというスタンスで家族に接することや，家族の情愛に過度に訴える働き掛けは望ましくないと私は考えています。特に，血縁者内で発生した重大事件(前回で述べたような配偶者殺人や子殺し，拡大自殺としての心中（未遂)）の場合は，当該血縁者は加害者家族でもあり被害者家族でもあるので，その心情は一層辛いものがあることが少なくありません。もちろん個々の事例によって家族の心情には差異がありますが，この点に留意をしておかないと，家族を追い詰めてしまうことになりかねません。

3.「家族だからあたりまえ」の陥穽（非行・犯罪以外）について

そして「家族だからあたりまえ」ということを前提になされるのが，世代間境界を無造作に踏み越えてしまうことや，敢えてそれを許して過度に父母世代に依存することです。子ども世代の子育てに親世代が過剰に介入することで生じるトラブルは小さなものから取り返しの付かないものまで多く見られるものです。確かに経験豊富な親世代から見れば，子ども世代の子育ては危なっかしく思われる場面もあるかもしれませんし，SOS を求められれば適切な援助をすることは問題がないでしょう。しかし子育ての方法は時代によって異なっています。親世代の子育てを押しつけてしまうことは決して望ましいこととはいえません。また，子ども世代が過剰に親世代に頼ってしまうことは，子ども世代の問題解決能力を育てることにはつながりません。

また，親世代が自分の世代で解決できなかった問題を子ども世代に「家族だからあたりまえ」と丸投げすることで，子ども世代が非常に苦しい思いをすることもあります。

ある御家庭では，親世代が「家族だからあたりまえ」という前提で，自分の子ども世代の生活にどんどん踏み込むことが日常的に起きていました。子ども世代はそれぞれの事情を抱えていましたが，そうしたことはおかまいなしに親世代が「自分の価値観」に基づいて子ども世代の家庭の在り方に踏み込むことが繰り返えされていました。親世代にとっては「孫」にあたる子どもが早く欲しいという気持ちは理解できなくもありませんが，それをやんわりとほのめかす程度ではなく，例えば「種がないのか畑が悪いのか」という表現を人前でされることがどれだけ子ども世代を追い詰めているのか親世代には全く理解されていないようでした。

当初私は，ここまで親世代が子ども世代の家庭に介入してくる背景として，子ども世代が親世代に何らかの経済的支援を求めているのかと考えたほどです（下世話な言い方ですが,「金は出すから口も出す」という類いのものです)。ただ，そうしたことはなく，むしろ親世代が子ども世代（最後まで支援の場に踏みとどまっていた子ども世代）に対して金銭的な援助を当然のように求めることが日常的に続いていました。その額は「だって親のためだから当たり前」と求められたバリアフリー住宅を筆頭に数千万円に及び，子ども世代の家計を圧迫していました。子どもは複数いましたが，早々に絶縁状態になっており，絶縁状態になった理由に思い至らない親世代はその子ども世代を悪し様に罵ってトラブルになったり，残った子ども世代にますます介入・依存するという悪循環になり，なんとか親世代の支援の場に踏みとどまった最後の子ども世代もすっかり疲弊していました。私はこの御家庭には業務以外の立場で関わっていましたが，当初は家族間境界がずたずたになっていた状態でした。生育歴なども伺いましたが，全ての子どもが親世代の意向に添うようにコントロールされ，それは暴力の行使や人格的な否定をも厭わない激しさであったことが，絶縁状態となった子ども世代からも，最後までこの親世代を支えている子ども世代からも共通して語られていました。

親世代には介護を必要とする父親がいたということもあり，様々な地域の社会資源が親世代の家庭に入るように環境面の調整を行い，親世代の生活を子ども世代だけで担う状況を改善することがまず急務でした。その上で，子ども世代の側で自らの家庭を守るために家族間境界を明確にすることが勧められました。長年の経緯があり様々な紆余曲折がありましたが，結果的に最後に残った子ども世

代は,「子ども世代として出来るべきことはしなければいけないとは考えていること。民法上の相対的扶養義務などがそれに該当すること。」「しかし，親世代からの様々な要求が自分たちの家庭を圧迫し，これ以上は子ども世代だけでは支援できないので，社会資源や様々な制度利用を図ったこと。」「親世代の要求について，社会のルール等に相反すると思われるもの，限度を超えるものについては関与できないこと。」を親世代に伝えるに至りました。当然これは親世代の怒りや動揺を招きましたし，それが様々な形で子ども世代への攻撃的言動にも及びましたが，

子ども世代は親世代の泣き落としや議論に巻き込まれることなく，壊れたレコードのように同じ説明を繰り返すことを続けました。最終的には，最後に残った子ども世代が，親世代が独自の価値観で積み残してきた，放置することによって親族や地域社会に多大な迷惑をかけるような多くの課題を淡々と解決し続け，地域社会や親族の方々に対しては丁寧に謝罪をする姿に接した親族や地域社会の方々が事情を理解し支えて下さったこともあり，子ども世代は親世代との世代間境界の保持をしたまま，絶縁という極端な方法をとることなく，現在に至っています。

ただ，留意しておかねばいけないのは，一連の過程において，一番ダメージが大きかったのは，親世代から「畑が悪い」「子どもなんて私達親のモノ。嫁なんか人間以下。」とまで言われ，名前ではなく「財布」と呼ばれることすらあった（理系の専門職であり，他の子ども世代の配偶者とは異なり一定の収入があったため，お金を出すことが当然とされていた経緯も多くあった模様です）実子の配偶者（女性）ではなく，実子（男性）の側であったということです。実子の配偶者については，「自分の親から言われればとても情けないし腹が立っただろう。けれども，結婚によって縁が出来た法律上の家族，つまり「mother in　law」（姑という言葉の英訳です。女偏に古いと書くよりも，よほど現実的だと感じました）の言っている言葉だから，衝撃的だったけれども『ああ品がないなあ』とどこかで客観視していた。」という言葉どおり，嫁ぎ先の親世代の言動をかなり客観的に見ていました。そしてその一方で「実の親世代から言われる配偶者の方がもっと辛いだろう。」と考えることができていました。実際に親世代の実子である配偶者が，激しい親世代からの攻撃で過去の負の体験を思い出し体調を崩した時の療養・避難の判断についても迷いがありませんでした。

換言すれば，家族間境界を踏み込まることを繰り返されつつも，夫婦間連合が辛うじて機能していたため，この子ども世代は，子ども世代自身の家庭が崩壊することなく，また絶縁という他の子ども世代がとった方法を採ることもなく，親世代との境界線を強固にするものができたのではないかと思います。

現代社会における家庭の在り方は様々です。自分の考える家族や血縁の在り方を相手に押しつけることは，相手の領域に土足で踏み込む危険性があるということ，
そして，何か不自然な動き（特に物事の決定の在り方など）がある家庭においては，こうした世代間境界の侵犯などが行われている可能性あるということについて，家族に接する全ての対人援助職は認識を持っておくべきだと考えています。

マイクロ･アグレッションと私たち

～分断から動き出す交流～　10

朴　希沙（Kisa Paku）

早いもので、連載を始めてから今回で 10 回目となりました。この間に、マイクロ・アグレッションという言葉も以前より目にすることが多くなったような気がします。前回は、在日コリアンのためのサポートグループ「それが一人のためだとして」での実践から、マイクロ・アグレッションを乗り越えるための対話（Respectful Racial Dialogue）について、3 つの観点から整理しました。

今回から数回に渡っては、これまでの連載のまとめとして、一旦マイクロ・アグレッションに関するよく聞く疑問や自分も感じていた疑問について Q&A 形式で考えてみたいと思います。私もまだまだマイクロ・アグレッションについては勉強中で、分かっていないこともたくさんありますが、私がこれまで勉強したり調査をしたりした範囲でまとめてみたいと思います。

◎マイクロ･アグレッション Q&A　～よくある疑問～

Q１．マイクロ･アグレッションとはなんですか？

A. マイクロ・アグレッションとは、意図の有無に関わらず、社会的に抑圧されたり差別されたりしている人々に侮辱と侮蔑を伝える、日常的で認識しづらい敵意や見下し

（定義の詳細は Sue et al., 2007 を参照）のことを指します。

旧来の露骨な差別やヘイトスピーチとは異なり、日常的で曖昧な「現代的差別」とも呼ばれています。現代社会では「差別はいけない」という常識が（特に欧米では）一般の人々の間にも広まりました。しかしその一方で、差別心がなくなったのかというとそれはまた別の話です。人々の心の中から差別心がなくなることは非常に難しく、様々なアプローチが必要でしょう。一般的には「差別はいけない」ということになっている。しかし差別心自体は消えはしない。そこで意識的で露骨な差別ではなく、無意識的で曖昧な形になり日常に差別が姿を表すようになった、というのがこの言葉が生まれた背景のようです。ただ日本ではまだまだ公の場で政治家が差別的な発言をしてもそのことがあまり取り上げられなかったり、ヘイトスピーチも規制され始めたりしたばかりで、「差別はいけない」という認識自体がそこまで強固なものではない気もしますので、欧米とは状況が異なるかもしれません。

また、マイクロ・アグレッションの「マイクロ」は「マクロ（巨大）」の反対の意味である「マイクロ（微小な）」というより、むしろ「毎日の」「日々遭遇する」という意味であると解釈した方がいいでしょう（Sue et al., 2019）。「マイクロ」と名前はついていますが、その影響は大きく、日常的に繰り返し体験することにより、露骨な差別以上に心理的負荷が高いという研究や、鬱・不安などとの関連も多く示唆されています（例えば APA,2016 や Nadal, Griffin, Wong, Hamit, & Rasmus, 2014 等を参照）。

Q2．マイクロ・アグレッションと差別の違いはなんですか？

A. マイクロ・アグレッションは大きくは 3 つに分類されています。それは、①相手を傷つけることを目的になされる暴力的な言葉や行為による攻撃である Microassault（マイクロ・アサルト）、②自覚していないままに侮辱のメッセージを伝える Microinsult（マイクロ・インサルト）、③社会的に弱い立場の人々の経験や感情などを否認し無価値なものとして扱う Microinvalidation（マイクロ・インバリデーション）です。

この中でも①のマイクロ・アサルトには旧来の露骨な差別とほぼ変わらないものも含まれています。一方で例えば③のマイクロ・インバリデーションは一見差別とは見えないものがほとんどです。例えば女性差別を指摘された男性が「何をそんなに過敏に怒っているんだい？僕は人を男女で見たことなど一度もない。女性は今や男性と平等な立場で、社会的にも力が認めているんだよ」等と答えることなどがその例です。

また、入居差別等の例をとっても、例えば「うちは外国人は入れない」「〇〇人はお断り」というようなことは、明らかに差別であると思すし、昔からあったでしょう。一方で実際には内心同じような理由（差別的な理由）から入居を断っているにもかかわらず、丁寧に「お客様には XX の物件や△地域をおすすめいたします。こちらの方がより快適に過ごしていただけると思いますよ」等と言われた場合はどうでしょう？この例では、もちろん相手が内心何を考えている

か等は分かりません。しかしいくら丁寧であっても、例えば自分が入りたい物件をやんわりと断られる、(有色人種の人が) 白人とレストランに行けば毎回必ず後からサービスを受ける、といったことが日常の中で重なっていくとどうでしょうか？結局は物件を紹介され、サービスを受けているのだからそれは「差別ではない」のかもしれません。しかし、例えば白人であれば、日本人であれば、男性であればそのような体験をほとんどしておらず、自分ばかりがその体験をしていたとしたらどうでしょうか。そのような一見差別とは見えないものも含んでいる点が、マイクロ・アグレッションの特徴だと思います。

そのように考えていくと、マイクロ・アグレッションはあくまで被害者の視点にたった概念だということが分かってきます。つまり、マイクロ・アグレッションをしてしまった側にとったら、それは「無意識」で「悪意のないもの」であり、「たった一回」で「偶然」であることがほとんどでしょう。しかし社会的に差別される属性をもった人にはそれが「日常」で「しょっちゅう自分にばかり起こること」であり、「自分の側だけが気づいている」、「日々葛藤や嫌な思いを引き起こさせられる」ことなのです。露骨な差別ではないものの、被害を受けた人のそのような細かな心の動きや日常を表現するための言葉がマイクロ・アグレッションだと思います。そういう意味では、マイクロ・アグレッションという概念にはこれまで差別という言葉では取りこぼされてきた体験も含まれています。

Q3．マイクロ・アグレッションと一般的な「からかい」や「いじり」とはどう違うんですか？

A. よく聞く疑問の中に、「マイノリティだけでなく、マジョリティも日常的にからかわれたりいじられたりすることはある。ささいな傷つきは誰にでもあるものではないですか？」というものがあります。時にはマジョリティや社会の中で特権的な立場にある人（日本人でシスジェンダー、ヘテロセクシャルの健常者男性等）だってからかわれたりすることはあるでしょう。それでは、マイクロ・アグレッションとからかいはどう違うのでしょうか。

まず、Wang, Leu, and Shoda(2011)は、人種差別的なマイクロ・アグレッションと一般的な人種差別に基づかないからかいとは、量・質ともに明白に異なることを明らかにしています。また Sue（2019）も、マイクロ・アグレッションと一般的なからかいとの違いを 4 つの観点で整理しています。それは、①（差別の対象となる人に）人生の中で絶え間なく続くものであること、②累積的であり生涯に渡る苦しみの現れのひとつであること、③自分たちの集団が社会の中で二流市民扱いされている（マジョリティよりも劣っていると社会的にみなされている）ことを絶えず思い出させられること、④政府や一般の市民の人々が行ってきた不正や差別、時には虐殺を思い起こさせる象徴的なものであること、といったものです。

つまり、確かにだれでもからかいや嫌なことを言われる、不愉快な思いをすることはあるでしょう。しかし、その理由や頻度、

内容が象徴するものが社会的に抑圧されているマイノリティとマジョリティとでは異なるということです。まず、マイクロ・アグレッションが破壊的なのは、それ単体ではなく日常的に絶えずさらされ続けるという累積性があります。それは、言動のみならず、例えば男女でしか別れていないトイレ、韓国や朝鮮民主主義人民共和国に対する敵対的で継続的な報道、インターネットに氾濫するヘイトスピーチ等も含まれます。また、例えば「地震が起こった時に中国人とか韓国人の人が泥棒に入ったんだって〜」等というたわいもない一言が、在日コリアンにとっては過去の関東大震災の時の朝鮮人虐殺を思い起こさせるように、言う側からすれば「たった一言」「何気ない気持ちで」発したことが、マイノリティの千の体験や過去の歴史的差別そして迫害の記憶と結びつくところが、一般的なからかいとは異なると言えるでしょう。

今回は、3 つのよくある疑問に、私なりに回答しました。次回も引き続き、マイクロ・アグレッションについてよく聞く疑問を取り上げて考察を続けたいと思います。

【参考文献】

American Psychological Association (APA). (2016). *Stress in America: The impact of discrimination.* Washington, DC: Author.

Nadal, K. L., Griffin, K. E., Wong, Y., Hamit, S., & Rasmus, M. (2014). The impact of racial microaggressions on mental health: Counseling implications for clients of color. Journal of counseling and Development, 92,57-66.

Sue, D. W., Capodilupo, C. M., Torino, G. C., Bucceri, J. M., Holder, A. M. B., Nadal, K. L., & Esquilin, M. (2007). Racial microaggressions in everyday life: Implications for clinical practice. American Psychologist, 62, 271-286.

Sue, D. W., Alsaidi, S., Awad, M. N., Glaeser, E., Calle, C. Z., & Mendez, N. (2019). Disarming Racial Microaggressions: Microintervention Strategies for Taargets, White Allies, and Bystanders. American Psychologist, 74, 128-142.

Wang, J., Leu, J., & Shoda, Y. (2011). When the seemingly innocuous “stings”: Racial microaggressions and their emotional consequences. Personality and Social Psychology Bulletin, 37, 1666-1678.

保育と社会福祉を漫画で学ぶ

⑨『ペコロスの母に会いに行く』

迫　共
（浜松学院大学）

岡野雄一さんの漫画『ペコロスの母に会いに行く』は、認知症の母親と 60 代の漫画家の息子の交流を描いた作品です。ペコロスとは西洋たまねぎのことですが、見事にはげあがった岡野さん自身が自分のことを呼ぶ芸名です。『ペコロスの母』シリーズは、老親の介護の日常をほのぼのとした長崎弁でユーモラスに描いた作品です。

岡野さんの母親、みつえさんは大正 12 年に熊本県天草に 10 人きょうだいの長女として生まれ、長崎のご主人のもとに嫁ぎました。酒癖の悪いご主人が亡くなった後は認知症と脳梗塞の診断を受けられます。漫画にはみつえさんの認知症の進行、自宅住まいからホームへの入所、たびたびの見舞いの様子などが描かれています。車いす頼みの移動になり、ホームの入所者や職員と楽しく過ごされた後、みつえさんは 91 歳で亡くなられました。その後も漫画にはみつえさんの思い出が描かれています。

みつえさんは目の前にいる岡野さんに「あんた誰？」といい、もの盗られ妄想が起こってわめき散らしますが、そうかと思えば「ゆーいち、どこ行っとった？」と聞きたずね、「さっき父ちゃんが訪ねて来なったばい」と亡くなったご主人が傍にいたと言い出します。一瞬の日差しのように意識が明晰になることもあり、「うちがボケたけん父ちゃんが現れたとなら、ボケるとも悪か事ばかりじゃなかかもしれん」とつぶやきます。母親らしくお説教をすることもあります。

認知症者のケアをする家族は、患者の言うことなすこと、一挙手一投足に翻弄されて大変な思いをするものです。岡野さんも認知症の母親にふりまわされることを負担に感じなかったはずはないと考えますが、その言動も含めて愛すべき母親のありのままの姿と受け止め、ふりまわされることを楽しんでいるようです。みつえさんの自由さに憧れている雰囲気さえもあります。「母ちゃんは良かことも悪かこともどんどん忘れてどんどん身軽になって

いく」。

みつえさんの意識は、娘時代、嫁いだ頃、息子の子育て期、夫の生前など、様々な時期にタイムスリップします。細切れの時間が生起して、亡くなったはずの人が目の前に現れ、様々なエピソード記憶が夢のようにとりとめもなく再現されます。ベッドで目を覚ましたみつえさんは我に返り「遠くまで、うーんと遠くまで、眠っとった」と言います。

みつえさんは赤ちゃんをおんぶして、あやす動作をします。赤ちゃんは実際には何年も前に亡くなった息子です。亡くなった人のお葬式などを記憶している家族からすれば、気持ちの悪い場面かもしれません。しかし背負った赤ちゃんに愛情を注ぎ、喜びを感じているのは、みつえさんの「今・ここ」の現実です。

介護施設のベッドの中で、みつえさんが布団のはしをつまんで針仕事の動作を繰り返す場面があります。周りの人には糸も針も見えませんが、大切な家族のために服のほつれを縫っている、その感情もまたみつえさんにとって、「今・ここ」の現実なのです。

私たちは、時間は過去から現在、未来へと一直線に流れるものと考えていますが、認知症者の生きる時間は現在と過去が混在しており、その脈絡は絶えず揺れ動き、一部が書き換えられたかと思えば、また元に戻るような動きを繰り返します。

時間だけでなく空間もまた、三次元的なつながりを失って、一部は記憶の中の別の空間につながってしまったり、また元に戻ったりします。

認知症者が生きているのは他者と共有できる時間・空間の経験世界だけではありません。当人の記憶が強く作用して、「かつて・あそこ」の経験が「今・ここ」で経験されているのです。それが当人にとっては事実なのです。

認知症者の経験する時間・空間の揺れ動きに、介護者は巻き込まれ、振り回されます。介護者は、認知症者の生きる世界を否定し、何もさせないようにすることがあります。予測できない言動を防ぐためにはそれが一番簡単です。「あなたは糸も針も持っていない。もう縫い物なんてしなくていい」と言ってしまうなら、それはきっとみつえさんが生きて経験している世界を否定してしまうことになるように思うのです。健常であること、意識が清明である状態だけがまっとうな人間のあり方なのでしょうか。

対人援助の研究手法のひとつに「現象学的記述」というものがあります。起こっている出来事を、行為者や当事者の経験のとおりに記述し、理解しようとするものです。

『ペコロスの母』シリーズは認知症者の経験世界の現象学的記述であり、介護者（あるいは死者を悼む人）の現象学的記述でもあるように感じました。岡野さんの思い入れや解釈

も交えられていますが、みつえさんの経験世界の中に浸りこもうとされたから描けた作品であると思います。

車椅子に乗る認知症のみつえさんが、乳母車に乗る赤ちゃんと出会い、握手をする場面があります。人生の重荷を降ろした笑顔と人生の重荷をまだ知らない笑顔がすれ違います。

「お久しぶり」と声をかけてきた老婦人とみつえさんがひとしきり談笑していると、老婦人の息子夫婦が「母さん、探したばい！！」と声をかけてきます。「こうしてよく知らん人に話しかけるとです」と謝られます。岡野さんが「知らん人やったと？」と驚いていると、立ち去り際にその息子夫婦から「でも、こげん楽しそうに笑うとるとは久しぶりなんですよ。ずっとウツだったので」「本当にありがとうございました」と感謝の声をかけられます。

健常者の生きる世界も、本当はこんな風に偶然性でつながり、互いに助けるともなく助け合って成立しているのかもしれません。認知症者と介助者といった枠を離れて、対等の存在として向き合うことの大切さが示されているように思えてきます。

『余地』 ～相談業務を楽しむ方法９～

＜ゲームをしない人間がゲームを語る＞

杉江　太朗

～現在のゲーム事情～

『子どものゲームのことで・・・』という相談が寄せられる。ゲーム依存症が国際基準の診断に採択されたということの影響もあるかもしれない。電車の中でスマホを使用している人の中に、ゲームに興じている人も多く見かける。職場の同僚の中にも、休み時間にスマホでゲームをしている人もいる。

子どもがサンタさんに「ゲームが欲しい」とお願いして、その対応に悩まれたサンタさんも多いのではないだろうか。昔のファミコンのように一家に一台ではなく、今では１人１台持ち、さらに持ち運んで遊ぶことが主流になっている。子どもが集まっていると思えば、皆がゲームを持ち寄って、通信をしているということも珍しくない。

また、ゲーム機と言わずとも、スマートフォンがあれば、ゲームができる。ポケモンＧＯ、ドラクエウォーク、パズドラ、荒野行動、フォートナイトというようなゲームの名称を聞いたことのある人や、実際にプレイしているという人もいるのではないだろうか。

～ゲームの今と昔～

昔は、備え付きのゲーム機（テレビにつないで遊ぶもの）が主流であり、さらに、今のゲームよりももっと高額であった。ファミコンやスーパーファミコンを思い浮かべる方もいるかと思う。その後、プレイステーション、任天堂６４と次々に、新しいゲーム機が次々に発売される。セガサターンを思い浮かべた方は少しマニアックかもしれない。（私はサターン派）

今でも機種によっては高額ではあるが、少なくとも、スマートフォンさえあれば、無料で遊べるという時代ではなかった。また当時は、テレビがなければ、プレイが出来ないので、当然、テレビがある場所でしか遊べなかった。今では、ゲームは持ち運ぶことが主流となり、場所を選ばず、空いた時間でプレイすることが可能となった。当然、外出時もプレイが可能であり、さらには、家庭内においても、テレビがないような子ども部屋への持ち込みが容易となった。固定されていたものが、自由に動かせるようになったことは、私たちとゲームの関係性を大きく変えてしまったのではないだろうか。

そして、Wi-Fi の普及によっても、ゲームと付き合い方が大きく変化している。Wi-Fi に接続することで、ゲームが日々更新され、さらにオンライン上で、遠く離れた人とも一緒にプレイが出来るようになった。過去のゲームは内蔵されたデータ以上にゲームが変化することはなく、限られたデータの中でやり込むということが中心であった。しかし、今は、ゲームが更新されていき、その中で扱うアイテムなども変化していく。新たなストーリーが展開されるなんてこともあるらしい。ゲームに「終わり」がないのである。そして、日々違う人と、離れた環境で遊ぶことが出来る。やり込む要素やその方法が過去と現在で大きく変化している。

～ゲームを巡る相談～

冒頭に書いたように、私の職場にも、ゲームを巡って様々な相談が寄せられるようになった。その多くは、ゲームをプレイする時間が長くなり過ぎ、寝る時間が遅くなり、そして朝起きられず、学校への登校に影響が出た・・・というものである。

他にも、課金をし過ぎたとか、オンライン上でゲームをしていて友人と騒ぎ過ぎて親に怒られたとか、オンライン上でプレイしている人がどこの誰かわからないから不安であるというような話もある。さらには、『この子のゲーム依存症を治してください』というストレートな相談もある。

こういった相談については、ゲームとの付き合い方を家庭内で見直すことが必要になるのだが、ゲームを巡って、凝り固まった状態で、新しい方法や約束・ルールを取り入れるということは容易ではない。ゲームに集中してしまうには、そうなる為の理由があるのである。

～ゲームの誘惑・仕掛け・カラクリ～

とは言っても、私自身は、この 10 年ゲームをしていない。タイトルの通り、『ゲームをしない人間がゲームを語る』なのである。そのため、最近のゲーム事情はまったく知らない。しかしゲームに関する相談に来られた方は、私以上にゲームの事情を知らないことが多いようである。どうしてであろうか。

親はゲームを辞めさせたい、でも子どもはゲームをしたいという、お互いのニーズがマッチしない状況が問題を大きくしており、親の立場で言うと、子どもがどんなゲームに興味を持っているのかとか、ゲームをしている子ども自身への興味という視点には立ちにくいのかも知れない。親の興味は、ゲームの総プレイ時間であり、そのことによる生活の影響である。しかし、私自身、子どもとゲームの話をするにつれて、近頃の、ゲームは、誘惑度が高く、子どもが熱中するだけの仕掛けが散りばめられていることに気付くことになった。

本当に、「任●堂」はうまくやっているなぁと感心をしているのだが、例えば、代表作である「ペンキを塗るゲーム」では、プレイヤーがフィールド上で、ペンキを塗り合い、最終的に、多くのペンキを塗った方が勝ちというゲーム（適当）らしいが、その要素の中に、プレイヤーのゲームのやり込み度合いによって、ランキングやレベルやスキルが上がり、ゲームが進行することで、ペンキを塗るための武器やプレイヤーを飾る服が選べるようになるらしい。また対戦の方法も、オンライン上で知らない相手と戦うことも出来るし、また友達通しで通信し合うことも出来る。また定期的にオンライン上でイベントが開催され、限定のグッズが手に入ることもあると聞く。そのイベントは、フェスと呼ばれ、決まった時間、決まった曜日に開催され、その日を逃すと次の週まで待つ必要がある。

個人としてレベルやスキルを上げて、ランキングの上位を目指すのか、それとも他者と交流を目的に対戦を楽しむのか、それともアイテムを集めるなどのコレクションを楽しむのかなど、それぞれが、その目的に応じてどのような遊び方をするのか選択することが出来るのである。

個人として遊ぶ場合には、ランキングという目に見える形で肯定的な評価を得ることに繋がり、他者との交流を目的に遊ぶ場合でも、連帯感のようなものを得ることが出来る。学校に行かずとも友達と交流が出来てしまうのである。

それ以外のゲームも、多くは、Wi-Fiに繋ぐことを前提に作られており、定期的にコンビニで特別なアイテムが配信されたりとか、期間限定でガチャ（ゲーム上のくじ引きのようなもの）が多く出来たりとか、デパートの新春のセールを思わせるような、それぞれの欲をくすぐる仕掛けが満載なのである。

改めて言うが、私はゲームをしない。それでも子どもがゲームに熱中する理由は良く分かる。今、書いた誘惑はほんの一部に違いない。それぞれのニーズに応じて、ゲームのプレイ方法を選択出来るようになった。そのように仕向ける、仕掛けや誘惑度の高さによって、ゲームに興じている子どもは、自身のニーズに応じて、ゲームを主体的に選択している状況である。だからこそ止められないし、その中で得られるものがあるからこそ、もっと続けたいという要求が生まれるのである。

～ゲームを制限することの無謀さ～

この原稿を書いている最中、とある自治体で、ゲーム依存症対策の条例の策定が検討されているという記事を見た。ゲーム依存症にならないように、保護者や自治体がゲームとの付き合い方に責任を持つと定め、利用時間の制限をするというような内容であった。自治体が条例を作るくらいに、子どもがゲームと距離を

取ることが難しくなっているのであろう。

しかし、私のところに相談に来られる方で、ゲームの時間を巡って、なんの方策も取ってこなかった人はいない。ゲームの時間を決めたり、学校を休んだその日はゲームを禁止にしたり、そもそもゲームが決められた時間しか起動しないようにしたり、携帯でゲームの総時間を把握したり、様々対応をした結果、それでも改善しなかったから困っているという方がほとんどである。

『夜の～時以降はゲーム禁止』という条例が出来たとして、それを理由にしてゲームを止められる子どもがどれだけいるだろうか。また行政がどの程度、ゲームを巡って家庭に介入できるようになるのであろうか。仮にゲームを制限するための条例が出来たとして、本当にその条例に基づいてゲームをする子どもがいたら、それはそれで心配になる。

かといって、ゲームが子どもの生活に大きな影響を与えているのは間違いがない。私も、親や子どもの了解を得て、ゲームを職場で預かったこともある。条例がなくても、こうやって介入する場面はある。しかし、それは、一時的な方策にしかならなかった。

本当にゲームを止めさせようと思えば、全国一律、決まった時間に Wi-Fi を止めてしまうか、任●堂が決まったプレイ時間を超えたらゲームが止まるようなプログラムを一律で組み込むしかないと思う。当然、極論であり、不可能に違いないのだが、そうでもしないと自制することが出来なくなるくらい、ゲームは魅力的に作られているのである。

～ゲームを通して子どもを見る～

何度も言うが、私はゲームをしない。しないというより、一旦してしまうと、日常生活に支障が出るくらい興じてしまうと思っているので、そもそもゲームを買わないようにしているのである。それが私の選んだゲームとの付き合い方である。私が、その付き合い方を選択出来たのは、多くの相談に対応する中で、それぞれのゲームの誘惑度の高さや、魅力的な一面を目の当たりにしたからである。

ゲームは、行政が条例で制限することを検討するくらい、社会の一部として組み込まれている。そこには、製作者側（大人）の、顧客（子ども）をマーケットに取り込むという意図により、様々な仕掛けが存在する。そしてその仕掛けは、多くの子どもを魅了してしまう。ゲームを巡る相談の対応に当たっては、まずは、そうした現実を知ることが大切である。

ゲームを禁止することを目的にするのではなく、まずはゲームをする子ども自身に興味を持つこと、そしてゲームをすることで子どもが何を得ようとしているのか知ることが大切であると私は考える。そのためには、ゲームを一緒にプレイするなんてこともアリなのかもしれない。

♪♪♪♪♪♪♪♪

統合失調症を患う母とともに生きる子ども

～ゆりの日常～

春の風　―15 歳―　（前編）

♪♪♪

松岡園子

ゆりが駅で電車を待っていると、中学の時に同じクラスだった宮田さんに声をかけられた。朝 7 時前。この時間に駅で知っている人と出会うことは珍しい。

「ゆりちゃん、元気～？」

「わーっ、久しぶり」

卒業してからもう 2 か月ほど経つ。宮田さんは、4 駅向こうの公立高校に通っている。今日は所属するテニス部の試合間近ということで、いつもより早い時間から朝練があるのだそうだ。話を聞いていると、もうすぐ中間テストがあるのはゆりも同じだった。ゆりは、乗ろうと思っていた準急を見送り、宮田さんと次の普通電車に乗ることにした。

「もう、うちのお母さん、うっとうしい。帰りの時間まで決めてくるねん！」

宮田さんは、家を出る直前のお母さんとの喧嘩話を、息継ぎを忘れているかと思うほど早口で続けた。

そっかぁ。うちはそういう心配はされへんなぁ。

「今度のテストの点数、50 点以下の教科があったら、ピアノもやめさせるって！」

習い事かぁ。いいなぁ。その話を聞いて、ゆりは中学を卒業して働きだしてから自分の意思でできることが増えたのかもしれないと考えた。先月の 1 日に入社し、昨日、初めてのお給料 14 万円をもらった。給与明細に『今月もお疲れ様でした』と印字されているのを見て、自分が働いたお給料が自分のもとに入ってきたのだということがより鮮明になった。うちでは宮田さんが家で交わしているような会話はない。だけど今は自分の稼いだお金で、したいと思えばできそうなことが増えたように感じる。自分の服を買うこと、友達とのささやかな遊び、好きなものを食べること――。好きなことを好きな時に好きなだけできる、それは幸せなことだと聞いたことがあるが、ゆりも少しだけそうした気分を味わうことができそうな気がしていた。

ゆりが母・夏子と 2 人暮らしになったのは、小学 6 年生を終えた春休みだった。神戸の

家で一緒に暮らしていた祖母が亡くなり、夏子が誰もいない部屋で独りごとを話すようになった。それまで自宅で開いていた英語教室の仕事や家事はできなくなった。それどころか、まともに話をすることさえできなくなってしまった。ゆりと夏子の生活を心配した親戚は、奈良県にある家に 2 人を引き取ったが、ゆりは児童養護施設へ行くことが決まっていた。児童養護施設へ入所したゆりだったが、夏子と離れて暮らすことに納得がいかず、施設を数回抜け出した。その後の話し合いの末、ゆりと夏子は無理やり神戸の家へ帰ってきた。親戚とは意見の衝突の末、疎遠になってしまったが、夏子と暮らすということはゆりにとって何よりも譲りがたいことだった。神戸に帰ってくることができたと喜んだのもつかの間、夏子とは会話が成り立たず、言っていることも日によってコロコロ変わる。ゆりがしなければ、ご飯もきれいに洗濯された服も、掃除された部屋もなかったが、中学 3 年間をなんとか乗り切った。

ゆりが中学を卒業する頃には夏子の様子も次第に落ち着いてきていた。日々の気分には波があり、まともに会話のできる日があるかと思えば、落ち込んでいたり、混乱しているように見え、寝てばかりいる日もある。祖母の遺してくれた貯金の残高も底をつきそうで、ゆりは卒業後、中卒で給食会社へ就職し、働きながら定時制高校へ通う進路を選択した。

夏子は、作業所に通い始めてそろそろ半年が経つ。作業所ではお弁当を作り、近所のお店や事業所へ販売に行っているそうだ。ゆりが高校の授業を終えて帰宅すると、作業所で覚えてきた料理を再現した夕飯のおかずがテーブルに置いてある日が以前よりも増えてきた。

「今日ね、一緒に作業している人にきついこと言われて……」

夏子は寝る前の睡眠薬を飲むととても眠くなるらしく、ゆりが帰ってくる夜 10 時頃にはたいてい寝ていることが多いのに、今日は珍しく起きていた。

「何かあったん？」

「お弁当のおかずを入れ忘れただけで、大きな声でどなられて」

夏子の眉が、ハの字になった。

「その人の機嫌が悪かったとか？　そんなに気にせんでもええと思うけど」

「気になるのよー……」

「気にせんでいいと思うよ」

ゆりは、自分の職場を思い出した。ゆりだって、ベルトコンベアーで流れてくるおかずを入れるのが間に合わずに、飛ばしてしまうことだってある。そのたびにきつい口調で注意されることだって、これまでに何回もあった。

「その後は？　何か言われた？」

台所の椅子に座ったままの夏子は首から上を床に向けて、背中も丸くなっている。

「ううん、その後は何も」

小さいことが気になるんだ。ゆりは、炊飯器のふたを開けた。

「明日になったら、普段通りかもしれへんよ？　もう寝たら？　お薬飲んだ？」
　夏子は小さく返事をした。ゆりは部屋に戻った夏子の気配を感じながら夕飯を食べ終わり、お風呂から出た後で夏子の部屋の戸をそっと開けてみた。これまでも、気になることがあると眠れなくなることが多く、そのたびに調子を崩した。最も調子の悪い時ほどではないにしても、また前のように戻ってしまうのではないかという心配がいつも付きまとう。夏子の部屋の中をオレンジ色の豆球がぼんやりと照らしている。静かに耳を澄ましていると、小さな寝息だけが聞こえてきた。眠ることができたんや――。固く縮こまっていたゆりの頭や背中が、するするとほどけていった。

　次の日の朝、職場に入るとすでにベルトコンベアーはフル稼働していた。作業場は機械音やブザー音、プラスチック製の弁当箱の重なり合う音で満ちている。人々は黙々と作業をしているが、動きを要する体の部分はめいっぱい動いている。12000 食のうち、今日はどれ位のところまで進んでいるだろう。蒸気や熱気が作業場いっぱいに充満し、皆、自分の目の前のことだけに集中している。しきりに 2 階の事務所からマイクで発注数のアナウンスが流れる。ゆりは足早にベルトコンベアーに近づき、自分の入ることのできそうな位置を探して、左右の人に目配せをした。両手を使って 2 種類のおかずを入れていて、大変そうなものを担当している人のおかずを 1 つもらう。八宝菜などのあんかけものや、汁気の多い菜っ葉のおひたしは、ゆりからすると、『大変そう』なおかずの部類に入る。うまくタイミングを合わせないと、交代する時に目の前にあるいくつかの弁当箱におかずを入れ損ねてしまう。動き続けるコンベアーの前に立ち、次々と流れてくる弁当箱に自分の担当するおかずを詰めていく。両手を規則正しく動かす。速く、確実に。
「あっ、今日は肉団子入ってる～」
　入社してから食べたおかずの中でも好きな味ベスト 1、2 に入る肉団子が、『小おかず』の場所に入っている。それだけでお昼休みが待ち遠しくなった。プラスチック製の弁当箱は 7 つに仕切られている。メインのおかずは広いところ、漬物は一番狭いところという風に分けて盛り付けられ、その日の日替わり弁当が完成する。ご飯は別のラインで専用の弁当箱に機械によって詰められる。今日のおかずは、他に千切りキャベツ、オムレツ、焼き魚、肉じゃが、漬物――。キャベツは昨日、同期の小池さんが野菜場で芯を取って半分に切り、何段も積まれたカゴいっぱいに下ごしらえをしていた。千切りの機械にかけて水をくぐらせたキャベツは、カゴのなかでみずみずしく変身して出番を待っているように見える。毎日変わる献立は、2 階の事務所にいる栄養士さんが考える。献立通りに調理師さんが作り、できるとすぐに真空冷却機や大型扇風機で冷やされる。冷えるとすぐにゆりたちのいるコンベアーの方へ運ばれ、弁当箱に詰められる。毎日、大量のお弁当を作り、盛り付ける。入社したての頃はベルトコンベアーの速さについていくことができなかったゆりも、2 か月ほど続けるうちに、少しずつ自分の手を速く動かすことができるようになってきているのを感じていた。

「ゆりちゃん、ちょっと」
朝の仕事がひと段落したところでゆりは責任者の片桐さんに呼ばれた。微笑んでいるように見えた片桐さんは、白い肌にピンクのチークがよく映えている。
「本社の従業員の中から１人、東灘にあるお菓子の工場に出張に行ってもらいたいんよ」
「はい……？」
用事を頼む時、いつも片桐さんは満面の笑みになる。
「今、行っている人と交代して行ってくれる人。ゆりちゃん、あんたにお願いしたいんよ」
「え……はい」
「はい」しかなかった。断る理由も思い浮かばない。
「来週からなんやけど、大丈夫か？　やり方は今、行っている人が教えてくれるから」
その後、片桐さんに説明された仕事内容は、お菓子工場の社員食堂へ訪れる社員さんに、味噌汁やうどんを提供するというものだった。そこでは、1人で調理、提供、後片付けまでをするとのことだった。そんなのできるかどうか、わからない。でも、やるしかない。
できるのかな。でも、片桐さんが言ってくれたことは受けたい。誰よりもいちばん働き者なのに、少しも偉そうにしていない片桐さん。片桐さんのようになりたいし、そうなるにはこれが必要なことなのかもしれない。
心の中が黒になったかと思うと白に、白になったかと思うと黒に揺れる。揺れている心を持って学校へ行き、中間テストの 1 日目を受けたが、テストの最中でさえ気もそぞろだった。テスト期間中は家に帰る時間が少し早くなる。家に帰り着き、夏子の部屋に明かりがついているのを確認するとゆりは、カバンも置かずに夏子の部屋の戸を開けた。こたつに入っていた夏子が「おかえり」と言った。今日みたいな肌寒い日もあるけれど、もうこたつも片付けないと……。ゆりは掛け布団をめくって足を入れた。
「冷た。電気入れへんの？」
「もう暖かくなってきたし、いいかなと思って」
「……ふぅん。今日な、仕事で出張に行ってくれへんかって言われてん」
「へえ。どこに？」
「東灘のお菓子工場の食堂。来週から」
「そぉ。言ってもらったことは、何でもやってみたらいいんと違う？」
やってみたら――ゆりのぐらついていた気持ちに芯が通ったような気がした。

月曜日、ゆりはいつもより早く家を出るつもりでいた。昨日、夏子はしんどいと言って、1日中家から出ずに部屋で寝ていた。でもゆりは夏子の顔を見るだけ見て、すぐに出かける支度にかかった。まだ電気のついていない夏子の部屋の引き戸を開けてそっと覗く。戸を開けるのと同時に布団が動いたように見えた。
「……どう？」
返事がなければ、メモを書いて出ようと思っていた。ゆりは、調子の悪い人に「どう？」

と訊くのが好きではない。訊くことで調子の悪かった時のことを思い起こさせるし、悪いこと前提で訊ねているように感じるからだ。

「うん……しんどい」

　でも、行かないわけにはいかない。

「ご飯、台所に置いてるから。食べれる？　にこにこ、行くよね？」

　作業所に行くことができるのだろうかと気になる。でも、今日はゆりだってお菓子工場に初めて行く日だ。

「……じゃあ、行ってくるね！　今日もテストやから、9 時前には帰ってくるからね」

　夏子の布団の中から小さなうなり声のようなものが聞こえた。それ以上の会話もなく、時計が 6 時半を過ぎたのを横目で見ると、ゆりは家を飛び出した。駅までの下り坂を駆ける。教科書を入れた大き目のリュックサックが背中で上下に跳ねる。坂の傾斜がどんどん後ろに流れていく。自分の意志でなく、勢いをもって動く脚を感じる。駅の向こう側、町を囲うように広がる山に視点を移すと、稜線上で空が澄んだ色を映し返してくれているのが見えた。家の中に閉じ込められていた視界が、ぐんと広がるような気がした。

　駅ではちょうど普通電車が到着したところだった。普段より少し早めの電車にも、こんなにたくさんの人が乗っているんだ。いつも下車する駅を通り過ぎる。今日はこの駅では降りない。片桐さんから聞いた工場までの道順が書かれたメモを開いては閉じ、電車が停車するたびに駅名を確認した。

　駅に着いて工場まで歩く途中で、工事現場を通り過ぎた。阪神・淡路大震災から 1 年半ほど経つ。それ以後、ショベルカーやブルドーザー、大型トラックの通る音は街のあちこちで響いている。きれいに舗装された道路からは、震災での被害の大きさを思い起こさせられる。片桐さんから聞いていた通り、駅からすぐの国道を渡ったところで工場の看板が見えてきた。

　正面玄関では、工場の社員さんらしき人たちが頻繁に行き来していた。ゆりの知っている人は誰もいなかった。時計を見ると 8 時半を過ぎたところだ。しばらくすると、女性が向こう側の道路から歩いてきた。その女性と目が合った。

「吉田さん、おはよう」

　二宮さん――。土曜日にだけ本社で一緒になることがある、見覚えのある顔が目の前にあった。ゆりの両肩に押しつけられていた力が抜けていくような気がした。

「おはようございます」

「こっちから入って」

　エレベーターに乗り込んだ二宮さんについて行くと、3 階にある食堂に着いた。8 人ほどで囲むことができるテーブルが 10 台、右手側には調理台のようなものが見えた。奥にはいちばん離れたところからでもよく見えそうなほど大きなテレビがある。

「ここでの仕事は、本社での仕事とは違うからね。いつも、本社でゆりちゃんが盛り付けていたお弁当が 5、60 食ほど九時過ぎごろに届くから。届いたご飯はここに入れて」

二宮さんは、小さな冷蔵庫のような入れものの取っ手をひいた。ゆりが中で手をかざすと、左右から温かさが伝わってきた。

「保温庫やからね。で、おかずはこの横に五段ずつ積んでいって」

そう言って、二宮さんは保温庫の横を指さした。

「朝来てまずやることは、出汁を取ること」

白衣を着るのは本社と同じだ。その上からブルーのエプロンをつけて歩き出した二宮さんの後をついて行く。二宮さんは、調理台の左側にある棚から大きな鍋を取り出した。小学校の給食のおかずが入っていた鍋と似ている。二宮さんの手には薄茶色の巾着袋と茶色いものが入った袋が握られている。袋には、『業務用　削りぶし』と書いてある。

「これ……大きい」

ゆりは、頭からすっぽりと被ることができそうなほど大きな巾着袋を見て目を丸くした。二宮さんは、目尻にたくさん皺をつくって笑った。

「50 人分の味噌汁やで？　家のんとは違うわ」

そう言いながら、横にあったお椀で削りぶしを 3 杯すくって巾着袋に入れた。底の方で削りぶしが木のチップのように広がる。巾着の口を締め、さらに左右にのびる紐で袋の中ほどの位置をきつく縛った。

「水をこの辺まで入れて」

鍋の内側には、底から二宮さんの指さした 7 分目のところぐらいまで、うっすらとグレーの色がついている。きっと毎日、同じ量の水を入れてきたからなんだろう。ひねった蛇口から鍋に勢いよく水が落ちていく。

「このコンロは昔式やから、何回かせんと火がつかん時があるのと、つけるのにちょっとコツがあるから」

こげ茶色で重い鉄のかたまりのようなコンロだった。二宮さんがガスの元栓を開けてコンロのつまみを 3 回ほどひねると、青い炎がぽぽぽぽと円形に広がった。1 人になったら自分で火をつけることができるだろうか。

「味噌汁と同時に、うどんの出汁をとってお茶も沸かすからね。コンロは 1 個じゃ足りひんのよ」

そう言いながら、その横のコンロにも鍋とやかんをかけた。このコンロは、ゆりの家にあるガスコンロと形もよく似ている。

「さ、そうしている間に来たなぁ」

ゆりが食堂の入り口に目をやると、水色のポロシャツを着た男性が見えた。胸の名札には『配達員・中条』と書いてある。着ている水色のポロシャツは見慣れているが、本社では見たことのない人だった。顔立ちからすると 50 代ぐらいだろうか。

「おはようさん。おっ、今日は新人さんか？」

男性はゆりと二宮さんを交互に見ながら、手際よく黄色の番重を台車に下ろしていく。

「木曜からこの人が 1 人でするから、よろしゅう。私は西区の郵便局の食堂に行くことに

なったさかい」
「そぉか。あんた若いな。いくつや？」
　男性がゆりの方に視線を移して訊いた。
「15 歳です」
「ほぉー。食堂は忙しいさかいな、しっかり二宮のおばちゃんに教えてもらいや」
「慣れたら大したことないで」
　二宮さんが、顔の前で左右に手を振った。
「なんか失敗してもな、二宮のおばちゃんの教えかたが悪かったんです――って言ときぃや」
「ちょっと！　ええ加減なこと教えんとって」
　そう言った二宮さんの目尻にまた皺ができた。
　中条さんが帰ると、最上段に積まれている番重だけをよけて、ご飯とおかずの弁当箱をさっき聞いた場所に置いていった。よけた番重には、野菜が入っている。
「これは、今日の味噌汁の具。ちょうど沸騰しとぅな。沸騰したら、これを放り込んで」
　二宮さんは、削りぶしの入った巾着袋を鍋に入れた。袋にお湯がしみ込んでいく。湯気に乗ってふわっとカツオの香りが鼻の奥に広がる。
「今日の具は――玉ねぎと油揚げやな」
　野菜が入っている番重には、細ねぎが 5 束、油揚げが 10 枚ほど、玉ねぎが 3 個入っていた。
　二宮さんはそう言いながらまな板を取り出し、横に玉ねぎを置いた。
「皮むいて、細く切れるか？」
　ゆりは黙ってうなずいた。小さいころから祖母の手伝いをしてきて良かった。玉ねぎの茶色い皮をむき、包丁でおそるおそる切り始めた。
「大きさは大体でええよ。ゆっくり切ってる時間がないから」
　二宮さんは、ゆりが玉ねぎを切っているまな板の隙間を使って、重ねた油あげを半分に切った。
「11 時には最初の社員さんが食べに来るから。それまでに全部できているようにしとかなあかんから、結構忙しいんよ」
　テレビの横にかけられている時計を見ると、9 時半をまわっている。ゆりは自分 1 人で味噌汁やうどんのつゆを作っているところを思い浮かべた。1 人で時間内にできるのだろうか。何かあっても近くに相談できる人がいないなんて。二宮さんがいる間に全部見て、聞いておかなくてはいけない。そう思うと、目や耳だけでなく手や足も、二宮さんの動きにピントを合わせて動きだしたように感じた。二宮さんは、油揚げの『油抜き』の仕方や、うどんにのせる油揚げの甘辛い味のつけ方を次々に教えてくれた。
　食堂の勝手口が開いて黄緑色の制服を着た女性が 3 人、食堂に入ってくるのが見えた。3 人とも 60 代ぐらいに見える。

「おはようさん」
　二宮さんが、細ねぎの先を指でつまみ取りながら 3 人に向かって言った。
「ああ、この人か」
　最初に言葉を発した一番背の高い女性と目が合った。瞳の奥まで見据えられているような気がする。鋭い目――。
「そうそう。若い子が来てくれたやろ」
「吉田です」
「お姉ちゃん、吉田さんいうんか。私らは掃除の仕事してるさかい、たまに会うぐらいやけどよろしく。私は影山いいます」
　目と口が笑っているのを見て、それほど怖そうな人ではないと思った。
「さ。手、止めてる時間ないでぇ。巾着袋をボールにあげて、今度はうどん用の鍋に入れて。玉ねぎは、味噌汁の方に入れよか」
　ゆりが玉ねぎを鍋に入れ終わりまな板を置くのと同時に、今度は細ねぎが置かれた。
「今度はこれを全部、小口切りにして」
　ゆりの頭の中に、小さく切られたねぎが思い浮かんだ。亡くなった祖母がよく使っていた野菜の切り方を表す言葉は、他の場所でも通じる共通語だったんだと思った。
「輪ゴムで留めたら切りやすいで」
　そう言って二宮さんは、根っこの近くと葉の真ん中あたりを輪ゴムで留めた。ひげのような根のある方から切り始める。ザクッザクッと歯切れのよい音がする。ねぎは途中から枝分かれして、切り進めるほど広がっている。こんな太い束、切ったことないな……。二宮さんの包丁を持つ右手は、ゆりが家庭科の時に習った、人差し指を包丁の背に沿わせた持ち方ではなく、柄をグーで握る持ち方だった。ねぎは輪ゴムで留まっているからまとまっているが、切るには力が要りそうだ。
「上品に切ってる暇ないからなぁ。あんたもやってみぃ」
　ゆりも包丁を持ち、同じように切ってみた。鼻の奥につんと鋭い香りが広がった。
「力が弱いと、『新幹線』になるからなぁ」
　そう言って、ゆりの切ったねぎを持ち上げた。
「あ」
　ゆりの切ったねぎが、5、6 個連なって垂れ下がっている。二宮さんの目尻に、より一層皺ができた。

◇

　お菓子工場の食堂へ行き、調理をして後片付けをして帰ると、高校に着くのはだいたい 5 時になる。二宮さんがついていてくれてこの時間だから、1 人になればもっと速く動かなければ間に合わないのではないだろうか。明日木曜日からは 1 人になる。

バスを降りて、高校までの住宅街を歩く。高校生らしき制服姿の集団とすれ違う。向こうから次々にやってくる子たちの制服姿を見ながら歩いていると、後ろから「ゆりちゃん」と呼ばれた。

「おはよ」

同じクラスのこずえが前髪をなびかせながら駆けてきた。ゆりたちの挨拶は、夕方だって夜だって「おはよう」だ。

「テストも昨日で終わったし。今日、調理実習やったっけ？　エプロン持ってきた？」

こずえが息を整えながら、ゆりのリュックサックに目をやった。

「うん、仕事で使ったエプロン使うわ。昼間も仕事で調理してきて、今日は 1 日中料理ばっかりやぁ」

2 人で笑いあっているうちに、なだらかな上り坂にさしかかった。

「楽しそうやなぁ」

次々と坂を下ってくる高校生を見ていると、自分とは別の空気を吸っているような気がする。学校生活はゆりたちだって楽しい。だけど、みんな仕事を終えて学校に来ている分、どこかはしゃぎきれないところがある。自分は純粋な学生とは少し違うような気がする。大人の世界に足を突っ込みながら、現実にある高校生の自分を、もて余しているようなところがある。

1 時間目の授業が始まった。情報処理室のパソコンで文字入力をしていると、頭の奥に熱っぽさを感じた。

「先生、ちょっと保健室に行ってきます」

「おぅ。大丈夫か？　どうした？」

「なんか、熱っぽくて」

「わかった。荷物は、泉に頼んどくな」

後ろのパソコンを使っているこずえの方を見ると、2、3 回うなずいてこちらを見ている。

渡り廊下を歩く。向こうの方から国語の石黒先生らしき人がこっちへ歩いてくる。

「おっ、吉田。どうしたんや？」

「熱っぽいねん」

「そうかぁ。保健室、行くとこかぁ」

「うーん」

ゆりは遠くを見るような目で渡り廊下の向こうを見つめた。石黒先生は、長髪をひとつに束ねて眼鏡をかけている。誰に対しても今のような話し方で、ゆりは石黒先生と話していると、近所のおっちゃんみたいやと思うことが多かった。自分が敬語を使わず、それが自然に感じられることを不思議だと思った。中学生の時には、先生とは敬語で話すようにと厳しく指導されていた気がする。先生と生徒の間にはっきりとした境界線があり、それを侵すことはタブー視されていた。日々のやり取りや個人懇談の中でも、たくさんいる生徒の中のただの 1 人だと感じることが多く、しんどい時でも中学校の先生には相談をした

ことがなかった。目立つような面倒を起こさなければ、ゆりの家庭の事情も取り立てて扱われるようなことはなく、ゆりの悩みも他の生徒たちが抱える進路や勉強、恋愛などの悩みの渦に一緒くたに混ざって回り続けているような感じだった。

ゆりは、保健室のある一階まで来ると、ドアの小窓から明かりがもれていることを確認した。保健室はたいてい明かりが点いていて、急に入っていっても咎められない。明かりが見えただけで胸が温まって力がほどけていくような気がする。ドアを開けると、机に向かっていた青山先生が顔を上げた。

「先〜生、しんどい〜」

「吉田さん、どうしたん？」

名前を覚えてもらっていることが嬉しい。

「なんか、身体がだるいねん。仕事で疲れたんかな。熱、測りたいです」

「うん、じゃ、測ってみて」

熱はなかった。

「熱はないようやね。どうする？　戻る？」

「もうちょっと休んでいく」

「そ。どう、仕事は？　吉田さんは調理の仕事やったよね」

青山先生は書類を書きかけていた手を止めて、ソファーに移動した。

「今週からお菓子工場の食堂に出張で行くことになって。明日から 1 人で 50 人分の味噌汁を作ったり、うどんの調理をしたりせなあかんの」

「へえー、一人でするの」

「できるかなぁ。時間に間に合うようにせなあかんし……」

「会社の人も、吉田さんならできると思ったんと違う？」

青山先生のくりっとした目はいつも笑っているように見える。

「えー、でも、量が多いわー」

ゆりは、腰かけている丸椅子を勢いよく足の先で回転させた。青山先生から何かの答えをもらいたくて話しているわけではない。明日になれば食堂に行き、教えてもらったことをやるつもりでいる。

「もうすぐチャイムが鳴るわ、集会室、行く？」

青山先生が、時計に目をやりながら立ち上がった。

「行きます。お腹すいた……」

1 時間目と 2 時間目の間には、給食の時間がある。窓の外を見ると、さっきまで夕焼け色をしていた空が暗くなり始めていた。窓に面している体育館との間の道を、昼の学生たちが賑やかに通り過ぎた。集会室の前方にある机には、番重に入ったコッペパンとパック入りの牛乳が並べて置かれている。給食を食べるかどうかは自由だが、毎日同じメニューでもこれを食べるのと食べていないのとでは九時前までのコンディションが違う。チャイムが鳴るのと同時に保健室を出たゆりは、一番に集会室に着いた。しばらくすると、こずえ

が集会室に入ってきた。
「ゆりちゃん大丈夫？　保健室に行ったら札が『集会室にいます』になってたから。はい、荷物」
「ありがとう。熱っぽかったけど、熱はなかったわ。お腹すいてただけかも」
「じゃあ、これから調理実習やから、いっぱい食べたら元気になるなっ」
　コッペパンの甘い香りと優しい味が、口の中に広がった。

　ゆりたちが帰る頃に通りかかった教室では、専科コースの大人の人達がまだ授業を受けていた。席は教室の後ろの方まで埋まっていて、全員の視線が前方のホワイトボードに集中しているのがわかる。
「みんな、何勉強してるんやろう？」
　ホワイトボードには、数字がびっしりと書かれた表のようなものが見える。黒、赤、ところどころ青のマーカーで色分けされている。小柄に見える先生が、右へ左へと動き回りながら、数字を書き込んでいく。
「簿記の授業やで」
　ささやくような声に振り向くと、ゆりたちの簿記の授業を担当している大平先生が立っていた。
「簿記って、私らも勉強している？」
「そうや。ここの人達が勉強してるのは、だいぶ進んだら勉強する内容やけどな」
　簿記って、大人の人がこんなに真剣に勉強するものなんや。ゆりは、自分たちの授業を思い浮かべた。真剣に聞いている子がいないわけではないけれど、おしゃべりをしていたり、「わからん―」と言って机に突っ伏している子がいたり。ゆりだって居眠りをしていることがある。大人の人達が真剣に学んでいる姿ってかっこいいな。ゆりの心の中に春の風が吹き抜けたような気持ちのよさが残っていた。

（後編につづく）

※この物語は実際の体験と、それを探求する虚構の物語をもとにしています。
　実在の人物及び団体のプラ

第８回　「生体肝移植ドナーをめぐる物語」

――　戦地に赴く兵士のような覚悟で臨んだ血液型不適合移植　――

一宮茂子

はじめに

現在の臓器移植は、生体移植でも脳死移植でも広く知られて一般の手術と同じように行われています。ドナー不足はどの国でも深刻ですが、海外では脳死移植が圧倒的に多くおこなわれています。しかし、日本では真逆で生体移植が圧倒的に多いのです。

今回は、患者の病歴が複雑なうえに、病状が悪化して内科的な根治療法もない状況で、余命告知を受けて、移植治療を勧められた夫婦の物語を紹介します。この夫婦はドナー候補者の倫理規定や医学的条件から、当時としては事例数が少なく、成功率が低かった血液型不適合移植を受けざるをえない状況になりました。夫婦が移植を決断する前から、移植後、その後 10 数年以上経過した状況を、対人援助マガジン 34 号 337 頁の分析モデルの時間軸にそって見ていきます。

1　事例紹介

妻である緑さん（仮名：40 歳代）は、夫（40 歳代）と 2 人暮らしです。緑さん夫婦はお互いに一人っ子であり、夫婦とも正社員としてフルタイムで働いていました。その当時の夫婦の両親はともに健在でした。夫は会社員として働き盛りの年齢でしたが、肝臓に持病がありました。あるとき仕事中に体調が急変した夫は地元病院に緊急入院となりました。その後、医師から夫の「余命は 1 年から 2 年」という告知を受けました。そして、ここまで病状が悪化した夫を助けるには、肝移植しかないという説明を受けたのです。

夫が余命告知を受けたとき、昔なら救えなかった命が、今では救える肝移植治療があるという情報を知り得たとき、このまま内科的治療を継続するのか、それとも肝移植に賭けるのか、肝移植は脳死移植か生体移植か、どの選択肢を選ぶことが最善なのか、このときから緑さん夫婦の苦悩が始まりました。だれしもこのような生命危機に遭遇すると簡単に決められることではないはずです。

2　　移植にかんする情報収集

小康状態になった夫はいったん退院して自宅療養になりました。そのときに緑さん夫婦がまず取り組んだのは、インターネットで移植治療にかんする国内や海外の情報収集です。そこで得た情報をもとに日本移植支援協会に相談したり、高額な費用を要する海外での脳死移植は募金という方法もあるという情報を得たり、他大学病院の移植関係者に問い合わ

せたり、電話相談などをおこなっています。また地元病院の医師のアドバイスでセカンドオピニオンとして当時、国内最多の生体肝移植術を行っていた Y 病院に脳死肝移植を前提にして話を聞きに行っています。このときは妻のみが来院して説明を受けています。こうしてあらゆる手段を使って治療情報を入手した結果、緑さん夫婦は海外での脳死肝移植は金銭的にも、時間的にも無理だと判断して生体肝移植を選択したのです。

対人援助マガジン 33 号 352 頁で紹介しましたように、生体肝移植治療には 8 つの特徴があります。それは腎不全患者には人工透析という代替療法がありますが、(1)肝不全患者には代替療法がないこと。(2)肝不全患者は死に直面していて移植をしないと死亡すること。(3)生体ドナーが必須であること。(4)生きた人間の身体の一部が医療資源となること［安藤 2002］。(5)ドナーは近親家族以外の他者には依頼しにくいこと。(6)ドナーの負担や犠牲は介護や育児のように金銭や時間で分配できないこと。(7)ドナーは近親家族の誰かひとりが全面的に担うしかないこと。(8)患者は余命告知を受けているため時間的制約があること。以上をふまえて、ドナー候補者が選択され、決定されることになります［一宮 2016］。

3　誰がドナーになるのか？

緑さん夫婦が移植をおこなった当時の生体肝移植は、誰でもドナーになれるわけではなく、移植施設によってドナーになれる親族の範囲が決まっていました。問題なのはドナーになれる親族の範囲が施設によって異なっていたことです。たとえば当時の Y 病院は原則として血族 3 親等以内の家族（両親、子ども、きょうだい、おじ、おば、甥、姪）あるいは配偶者でした。このようなドナーの規定は、その後徐々に拡大して、2007 年には「ドナーは親族に限定する。親族とは 6 親等内の血族、配偶者と 3 親等内の姻族を指すものとする。さらに親族に該当しない場合は、当該医療機関の倫理委員会において、症例毎に個別に承認を受けるものとする」と規定されました(注1)［日本移植学会 2014］。

さらに生体肝移植ドナーには医学的条件があります。それは、血液型、年齢、健康状態、体格、感染症の有無、組織適合性などです。これらの医学的条件のなかで緑さん夫婦は血液型に問題がありました。

移植にはドナーとレシピエントの血液型一致移植(注2)、血液型適合移植(注3)、血液型不適合移植(注4)があります。生体肝移植はドナーとレシピエントの血液型が同じならば成功率が高いのですが、緑さんは B 型、夫は O 型、夫の両親は 2 人とも B 型、緑さんの母は O 型、父は AB 型です。夫に合う血液型は緑さんの母だけでした。当時の緑さんは夫を助けた

(注1) その際の留意点は、有償提供の回避策、任意性の担保などです。また提供意思が他からの強制ではないことを家族以外の第三者が確認します。「第三者」と は移植に関与していない者で、提供者本人の権利保護の立場にある者で、かつ倫理委員会が指名する精神科医などの複数の者です［日本移植学会 2014］。

(注2) 血液型一致移植とは、ドナーとレシピエントの血液型が同じ移植です。

(注3) 血液型適合移植とは、問題の少ない血液型の組み合わせの移植です。具体的にはドナーの血液型が O 型→レシピエントの血液型が A/B/AB 型、A/B/O 型→AB 型の移植です。

(注4) 血液型不適合移植とは、輸血できない血液型の組み合わせの移植です。具体的にはドナーからレシピエントへの血液型が A/B/AB 型→O 型、A 型→B 型、B 型→A 型、AB 型→A/B/O 型の移植です。近年の血液型不適合移植は、その後の進歩により経験をつんだ施設での成人症例の成功率が 80%にたっしているので禁忌にはならない［江川・上本 2007］、とされています。

い一心だったと思われます。そのため娘の意をくんだ緑さんの母は、進んでドナー検査を受けています。このような緑さんの母の行為は、嫁いだ娘の心情を察した母の家族愛が根底にあったと思われます。

仮に緑さんの母がドナーになることを同意したとすると、夫から見た緑さんの母は血族ではなくて姻族の 3 親等となるため Y 病院での移植はできないことになります。移植が可能と思われる病院が他にありましたが、遠方だったため緑さんの母は受診していません。

ドナー検査に約 1 年を費やした緑さんの母は原田病[注5]という眼の病気を患っていることが判明しました。この病気はストレスからくることもあると知った緑さんは、「ドナー検査が原因で母が病気になったのでは？」と後悔したことを語っています。このように緑さんと母は相互に気遣っていたのです。

その後も情報収集を続けていた緑さん夫婦は、インターネット検索で Y 病院の血液型不適合移植の情報を見つけました。夫が電話で問い合わせると「成功率は 30%台」と低かったため断念しています。夫の両親は高齢でドナー不適応であり、夫は一人っ子できょうだいもおらず、子どももいませんでした。そうなると必然的に配偶者である緑さん以外にドナーになれる人はいなかったのです。その後、最終的に緑さんが「私でよかったら…」とドナーの意思表示をしています。緑さんがドナーを決断した決定的な要因は、「手術をしないと夫は死ぬと分かっているのに何でドナーにならなかったのかと後悔する」、ようするに救命可能な移植治療の情報を知り得たからには後悔したくなかったのです。幸いなことに緑さんはドナーとして、血液型以外の条件は全てクリアしていました。

4　インフォームド・コンセント

こうしてドナーが決まったうえで夫婦そろって Y 病院を受診しました。Y 病院のンフォームド・コンセントの概要は対人援助マガジン第 36 号 294 頁を参照してください。さらに具体的な内容は対人援助マガジン 37 号 254～255 頁を参照してください。ここでは手術前に何度もインフォームド・コンセントを受けた緑さん夫婦の移植前の決意とその時の心情について見ていきます。

緑さんは自分たち夫婦の意思を次のように伝えています。それは、移植外科の「先生が患者さんを診たら手術をすればいいかどうか経験上分かると思う…だけど大学病院だからあえて事例数を増やすための手術はやめてほしい」ということだったのです。緑さんは医師にたいして「すごい生意気な失礼なことを言ったと思う」と語っていますが、私はむしろ患者として勇気ある行動だと思います。ほとんどの患者はこれから先、お世話になる医師に気兼ねして何も言えずにいることが多いのです。このような緊迫した場面であっても自分の思いを言語化して医師に明確に伝えておくことはとても重要です。

それを受けて移植外科の医師は次のように説明しています。「われわれは、負け試合はいくら強く言われても引き受けません。あなたの場合は、病歴が複雑で状態が非常に悪いた

[注5] 眼球のぶどう膜・皮膚・内耳など色素細胞がある 組織に炎症を起こす全身性の病気です。

め、治るのに普通の人の 1.5 倍の時間がかかります。その点を含んでおいてください」と。この説明を受けた緑さん夫婦は、「手術をして頂けるということは（治る）見込みがあるという回答だ」と受け止めました。この心情は第三者として十分理解できます。

このような成人の血液型不適合移植は、当時はまだ事例数も少なく一般的でなかったため、夫が入院していた地元病院の医師は「このような情報を全く知らず驚いていた」と緑さんは語っています。

5　血液型不適合移植の決断

日本で 1989 年にはじまった生体肝移植は、現在でも近親家族がドナーになっている事例がほとんどです。その理由はドナーの死亡あるいは合併症などで万が一の事態を考えるとその責任が負えないという家族規範[注6]が働いているためだと思います［一宮 2016］。限られた家族員のなかからドナー候補者を選ぶとなると、緑さんのように血液型不適合移植しか選択肢がない場合もありえるということです。

5.1　移植の成否が不明確――期待と不安

肝臓は人体で最も大きな臓器です。そのため肝臓の一般外科手術だけでも大きな手術となります。それが移植手術となるとドナーとレシピエントの 2 人が同時に手術室に入り、さらに大掛かりな手術となります。緑さんがドナー手術を受けた年代は、成人の血液型不適合移植術が一般的ではなく成功率も低かった年代でした。

Y 病院の移植外科医の手術手技や知見は世界でもトップクラスのレベルです。移植外科の医師はインフォームド・コンセントで、緑さん夫婦に負け試合は引き受けないと説明した一方で、夫の病歴が複雑で状態が悪いため、回復するには時間がかかるとも説明しています。緑さん夫婦にとっては、血液型が異なっても移植で助かる？という期待感と、夫の病状が悪いうえに血液型不適合移植が成功するのか？という不安感が読み取れます。この時期の夫の心情はエッセイに次のように記述されています。

> 夫：「私にとっては一か八かの大博打でした。しかし、同じ死ぬなら、私も含めみんなが納得する方法を選びたい、これで死んでも誰も何も言わないだろうと思いました。『迷ったら前へ』ということばを思い出しました。」

この記述から命を懸けて前へ進むために移植に賭ける夫の覚悟が読み取れます。移植外科の医師には難しい事例ほど成功させたいという使命感や名誉欲もあるだろうし、緑さん夫婦は不安を抱えながらも生きながらえることに賭けて移植を決断したことがうかがわれます。

5.2　ドナーになる妻の両親に謝罪

移植前の夫は、まだ自由に動ける状態であったことから、手術前に自分ができることは

[注6] 家族規範とは、家族としての責任のほかに、家庭内の地位、収入有無などあります。また出生の順位や親等関係などの優先順位があります。詳細は対人援助マガジン 37 号 257 頁を参照してください。

すべてしておきたいという意思が読みとれます。それは夫が緑さんの両親に負い目を感じて謝罪したことでした。

緑さん:「夫は申し訳ないと（緑さんの）両親に謝った。まさかこういうことになるとは思わず、結婚してみたら、新車買ったつもりが中古車買ってしまったようになって、大事な娘さんを苦しめて両親にも辛い思いさせて、申し訳なかったと謝ってくれた。でも私にはそういうこと言わずにしてくれた。ビックリしたんです(涙)。彼はたぶん助からないと思っていたと思うから…言ってくれたんだと思う。」

緑さんも夫も、やはり死を意識して移植に臨もうとしていたことがうかがえます。このときの私はインタビュアーとして客観的な立場で聴く必要があったかもしれないのですが、この話を聴いた私は緑さんと一緒に泣きました。とても重要な語りですが、私がこれまでに経験した臨床現場では決して語られる内容ではなかったのです。そしてこのような語りはラポールが築かれていないと決して語ってくれることはないと感じました。

このような経験をした私は、臨床現場に携わっていなくても移植医療関係者の一人としてドナーやレシピエントの心情に寄り添って聴くことで、インタビュー自体がドナーのこころのケアにつながるのではないかと思えたのです。この語りにはまだ続きがあります。

緑さん:「夫の両親は、そのときの私は若いから、私にもまた違う人生があるかもしれないから、自分たちは移植を勧めない…協力はするけども、と言っていましたね。」

移植が成功するという確証がないなかで、夫の両親は妻である緑さんが負担と犠牲を担ってドナーになり、息子を助けようとしていることに感謝しつつも負い目を感じていたことがわかります。夫の両親は緑さんにこのように言わざるを得ない心境だったと思うと同時に、このような言葉かけはドナーになる緑さんにたいする心理的な負担をわずかでも緩和したい気遣いとも思えます。

5.3　手術前日に遺書を書く

人は死を意識したときに遺書を書く、あるいは何らかの覚悟や決心があるときに遺書を書くなどといわれています。緑さんにも夫の死を意識した語りがありました。

緑さん:「成功してくれたら嬉しいけど、駄目という確率のほうが大きいけど、たとえ 1%でも助かるのにそれを自分がしなかったら…一人になって…後悔するんじゃないか…。」

緑さんは移植の成否を気にかけながらも、取り返しがつかない後悔をしないように、できることは全部しておきたいという心情が読み取れます。それは夫も同様であったのです。万が一の事態を想定して自分たち両親のことも心配した緑さん夫婦は、手術前日にそれぞれがパソコンで遺書を書いて保存しています。夫のエッセイにはそのときの心情を次のように記述されています。

夫:「その遺書は今でもパソコンのなかにあり、初心を忘れそうになった時は、時々

開けて見ることがあります。今遺書を見ればよくこんなことを書いたなと思いますが、その時は必死でした。」

移植前の時間軸では、生死をわける決断をして神経が張り詰めるような生活を送ってきた緑さんは、「もうダメでも自分のやれることはやったという自己満足みたいなもんです」と達成感を語っています。

6　移植後の回復状態

こうして緑さん夫妻は戦地に赴く兵士のように命がけで移植に臨みました。ドナーは健康体であってもドナー手術後は元の身体に回復するまでの一定期間は「患者」となります。以下、ドナーとレシピエントの術後の回復状態を見ていきますが、その前に対人援助マガジン 33 号 347 頁～348 頁で紹介しました肝臓の臓器特異性について少し記述しておきます。

正常な肝臓は一部を切除しても生体の求めに応じて再生し、十分になれば再生が止まるという臓器特異性があります。したがって、その一部をとり出して人に移植すれば生着した肝臓は、数週間から数ヶ月で必要に応じて増殖再生し、その人の成長とともに発育していきます。もちろんドナーの肝臓はほぼ以前の大きさまで再生します［田中ほか 1992］。もっとわかりやすく言うと、肝臓は一部を切り取っても元に戻ることが可能なため移植ができる、ということです。

成人の肝臓の重さは体重の約 2%で 1000g から 1400g です。ドナーが提供する肝臓は、小さい小児の場合は肝臓の約 4 分の 1 にあたる左葉の外側区域を、大きい小児の移植する場合は肝臓全体の 3 分の 1 にあたる左葉を、成人に移植する場合は肝臓全体の 3 分の 2 にあたる右葉を切除して移植します。これらを押さえたうえで術後の時間軸の回復状態を見ていきます。

6.1　順調に経過したドナーの術後

通常、ドナーの入院期間は術後 2 週間です。緑さんは術後に大きなトラブルは見られず入院期間は 16 日間でした。術後のドナーは、発熱や気分不快がなければ、翌日より座る、立つことからはじめ歩行練習が可能です。抜糸は術後 1 週間くらいでおこなわれます。緑さんは抜糸した後の傷口から「グジュグジュ」した浸出液が出ていたため看護師に手当てをしてもらっています。このような状態は日にち薬で回復しますので心配はいりません。

術後の緑さんは次のような興味深いエピソードを語っています。緑さんの提供した右葉の肝臓の重さは「690g」だったそうです。緑さんは右葉を提供したことを意識しているためか「寝る時に（右側に）横向きになると内臓がゴローとない方（右側）に動くような感じがして気持ち悪い」と語っています。このような移植後のドナーの具体的な語りは初めて聴きました。なるほど切り取られた 690g の肝臓のあとに他の内臓が移動するような感覚があるということがわかりました。緑さんと同じように右葉を提供した別のドナーの語りでは、ベッドに仰向きで寝ていると左側のお腹は変わらないのに、右側のお腹は「ペッタ

ンコだった…これで肝臓をあげたんやなぁ」と実感したことを語っています。ドナーに残された左葉の肝臓はその後数ヶ月かけてドナーに必要な肝臓の重さになるまで再生されます。

術後の緑さんは「体の不調はあったと思うけど…なかなか訴えにくかった」と語っています。なぜならば緑さんは、移植治療の「メインは（レシピエントである）夫」と捉えていたことから、自分のことよりも夫の回復状態が気がかりで精神的に辛かったと思われます。

6.2　一進一退であったレシピエントの術後

レシピエントである夫は移植前から病状が悪く、さらに血液型不適合移植であり、治るのに時間がかかるとインフォームド・コンセントであらかじめ説明を受けていました。通常レシピエントは手術が終われば直接 ICU（集中治療室）に収容され 4 日～5 日間、全身状態を管理しながら移植後の肝臓がうまく働いているのかチェックします。そして病状が安定すれば一般病棟の個室に移ります。

多くの生体肝移植レシピエント体験者が語る「あんなしんどい思いは 2 度としたくない」というフレーズがあります。移植医療現場にかかわっていた私はだいたいの想像できますが、具体的にはどのような状態を意味しているでしょうか。気になっていた私は、2 回の生体肝移植を体験したあるレシピエントに直接尋ねたことがあります。その答えは次のような内容でした。「自分の体からいくつもの管が出ていて、点滴の瓶やバッグが何本もベッド周囲にぶらさがっていて、その点滴の管が何本も自分の体のまわりにあって、ベッド周囲は器械だらけで、ベッドに固定されているわけではないけれど、まるでベッドに固定されているような感覚で、自力で寝返りもできない。さらに傷の痛み、高熱、身のおき場のないようなだるさ、どこからくるのか分からないイライラ感に、点滴の管を引き抜いてしまいたい衝動にかられた」というようなことを意味していたのです。

このような状態が何日続くのか、術前の病状や術後の回復状態によって個人差がありますが、術後合併症がなくても少なくとも 1 週間前後、あるいはそれ以上です。移植後は濃厚な治療や医療的管理やケアが必要であるため、レシピエントにとっては確かに「しんどい」状態であるといえます。

緑さんの夫も同様に「体がチューブだらけでつながれており、生きる屍のよう」だと感じていたのです。夫の病状は安定せず少し体調が回復して歩けるようになったと思えたのですが、術後 4 週経過したころに血管から出血した血液が、体外に排出されず腹腔内にたまっている状態となりました。これを取り除く手術（血腫除去手術）が必要になったのです。この時の緑さん夫妻の心境はいかばかりだったでしょうか。インフォームド・コンセントで移植外科の医師に念押しされたこと、それは「治るのに普通の人の *1･5* 倍はかかる」という意味内容の一部分が、このような形で現れたとも受け取れます。

再手術後の夫はさらに苦痛をともなう状態でした。その時の状況は次のようにエッセイ

に記述されています。「(夜中に) 口から血を吐いたり、呼吸状態が悪くなって気管内挿管をされたり、1 ヶ月近く原因不明の高熱が続き、排尿障害などで 2 回ほど『もうだめかな』と思う場面もありましたが、ただ耐え忍ぶ状況だった…頭は混乱して記憶がとんでいたり、自ら気がふれたのではとも思いました…寝たきり、紙おむつ、食事が摂れない、全身のかゆみ、がまんの限界をはるかに超えてい」たのです。

生体肝移植手術だけでも「しんどい」手術なのに、術後 1 ヶ月も経たないうちに血腫除去手術を体験した夫の記述は、何よりも説得力のあるレシピエントの「しんどい思い」を反映していると言えます。また緑さんの夫が入院していた当時は、まわりのレシピエントが次々に亡くなったこともあり、夫の病状が急変すると明日は我が身？のように思えてとても不安で心細く辛かったにちがいありません。

それをも耐えぬいた夫は 4 ヶ月間の入院生活が仮退院というかたちで一段落しましたが、さらに 1 ヶ月半後に胆管狭窄といって胆汁の流れが悪くなり、その処置のため約 2 ヶ月間の入院治療を受けています。

6.3　移植後の夫から妻へ感謝の言葉

移植術後の夫が ICU に収容されていたころ、病棟に入院中の緑さんは術後数日後に点滴台を押して夫の面会に行っています。このとき夫から「ありがとう」と初めて感謝の言葉を受けたのです。ドナーとしてこれほど嬉しい言葉はないはずです。なぜならばドナーには何のメリットもない手術で自分の臓器の一部を提供するという崇高な行為は、レシピエントが生きながらえるという精神的なメリット以外に何もないからです。せめてその行為にたいしてドナーに労いや感謝の言葉をかけることが社会通念だと思います。レシピエントのその言葉によってドナーの負担と犠牲が報われると同時に、ドナーに肯定的な意味づけをもたらすことができます。この事例のようにレシピエントがドナーへ感謝の言葉をかけることは自然な行為だと思います。しかし、誰もがこのような気遣いをしているわけではありません。

ある主婦はレシピエントや家族から何度も頭をさげて肝臓提供を懇願されました。複雑な家族関係であったことから彼女は余儀なくドナーにならざるをえませんでした。このような懇願は心理的な圧力となるため倫理的には許されません。しかし当事者が言語化して語らない限り医療者にはわかりません。「NO」と言えずにドナーを承知していたことが移植後数年経過したインタビューで明らかになったのです。

このドナーは術後合併症で長期間にわたって社会復帰できず苦しんでいたのですが、その期間にレシピエントや家族からなんの言葉かけもなかったと語っています。特異な事例として、この連載のどこかの回で紹介したいと思います。

6.4　ドナーとして一番辛かったこと

時間軸を夫の再手術（血腫除去手術）が決まった時点まで戻します。再手術は緑さん夫妻にショックを与えたにちがいありません。緑さん自身はドナー手術後でありながら、こ

のときは病院に泊まり込んで夫に付添っていました。再手術前日の夜、2 人きりになったとき夫から緑さんに次のような意思表示がありました。

> 緑さん：「夫は『今度、自分に何かあったら、これ以上なにもしないでくれ』と…血液型も違うし、夫がそのまま眠るように逝っていたらそのまま逝けたのに、あえて私が移植を勧めて、またこんな辛い目にあっている。その時が一番辛かったですね…自然に反することをしたら神様から報いがくるのかなぁ…。」

再手術を受けることになった夫は、移植後に経験した身体的なしんどさに加えて、その後の経過が一進一退であったため精神的に追い詰められていたと思われます。その夫の心情のはけ口が、付添っていた緑さんに向けられたのではないでしょうか。移植前の夫はドナーになる緑さんの両親の心情を汲みとり謝罪するほどのこころのゆとりがありました。しかしこの時点の夫は、体力の回復が不十分なまま再度、開腹術を受けるという身体的、精神的苦痛から術前のようなこころのゆとりはなかったと思われます。

一方、緑さんは「元気なときの 2 人の生活」を取り戻すため、移植に消極的だった夫に「無理矢理やってもらった」という負い目があります。そのため夫に辛くあたられても言い返すことができず、反対に自分を責めて納得しようしているように見えます。緑さんにとって移植めぐって一番辛かったことは、身体的な苦痛よりもこのような精神的な苦痛だったのです。

7　様々な支援

ドナーとレシピエント、家族の 2 人が同時に手術を受ける生体肝移植術は、身体的、心理的、経済的、社会的に、患者・家族に大きな負担や不安をもたらします。そのため移植前から移植後､移植後 1 年以上から終末期の時間軸において様々な支援が必要となります。支援内容は、(1)医療的支援、(2)心理的支援、(3)人的支援、(4)経済的支援、(5)社会的支援、(6)代替療法（宗教など）があります。緑さんの事例では、(4)と(6)を除く支援の語りをえましたのでその内容を紹介します。

7.1　医療的支援――医師の高度な専門知や技術に安心感／信頼

Y 病院では､夜間の緊急時は移植外科の当直医師が泊まり込みで対応にあたります。あるとき夫は、夜中に吐血しました。当直医にすぐ連絡しても病室にくるまで少し時間がかかります。しかしこのときの病棟には「偶然にも他に重症患者がいて、その処置が終わったところだった」ため、医師たちの高い専門知や技術によって危機状態を乗りこえることができました。このような対応は緑さん夫婦に安心感や信頼をもたらしたのです。

7.2　心理的支援――労い／感謝／励まし／気遣い

移植前、移植後、移植後 1 年以上から終末期の時間軸において、医療者、近親家族、レシピエント、知人などから、労い、感謝、励まし、謝罪などの形で心理的支援がみられました。時間軸ごとに紹介します。

(1)移植前

- 地元病院の医師は、夫が何度も緊急事態を乗りこえて回復したことから Y 病院へ転院するときに次のような励ましの言葉をかけています。「あなたは生きる運を持っています…その運を…Y 病院へ持って行ってください」。この励ましに応えて夫は「必ず生きて帰る」と決意しています。
- 夫はドナー探しの時点で緑さんの両親に辛い思いをさせたことを謝罪しています。また夫の両親は、息子が助からない可能性も考えていたようで、緑さんには第 2 の人生がある可能性をふまえて、移植には「協力するけれども勧めない」と緑さんを気遣っています。

(2)移植後

- 術後の緑さんが ICU に収容されている夫に面会したとき「ありがとうと初めて言ってくれた」感謝の言葉。ここで注目すべき語りは「初めて言ってくれた」ことで、ドナーになってよかった、と肯定的な意味づけになる心理的支援になっていることです。
- 入院中の付添は、義母が「1 ヶ月間はメインになって面倒みるから、あなたはゆっくり休みなさい」とドナーを気遣っています。付添は義母と実母が交代で行っていたため、その期間の緑さんは安心して療養することができたことと、退院後は毎日、夫の面会にいくことができたのです。
- 移植後の夫は、6.2 で紹介しましたように一進一退の状態だったため、緑さんには辛い時期でした。あるとき看護師から「私がメソメソしていたら弱い方に引っ張られていくからシャキッとしなさい」と励ましの言葉を受けたそうです。その後の緑さんは「自分が諦めると夫はもっと苦しい。もらって生きなきゃというプレッシャーもあるだろし…」と、どのような時も家族として諦めない気持ちの強さが必要であることを語っています。

(3)移植後 1 年以上から終末期

- 社会復帰という光が見えてきたころ、夫はなんとも言えないこころの揺らぎをエッセイに記述しています。それは、「将来を考えると強烈な不安感にさいなまれて手が震え、体が震えて頭が混乱状態となった」時期でした。そのようなときに Y 病院で入院中に知り合ったあるレシピエントからメールを受け取っています。それは「…ヒトは決して体だけの良し悪しで生きるのではなく、失われた時間を心の中で取り戻す精神的なリハビリが必要なんだと…思いました」という内容だったのです。このメールは将来の不安感にさいなまれていた夫を励ます大きな意味づけとなったようです。その結果、夫は「失われた時間は誰も治すことも、効く薬もありません。体のリハビリも必要ですが、心のリハビリも必要であることを痛感し…少し悩みがふっきれ」たと実感しています。
- 自分の心情を言語化するのは難しいことですが、夫のモヤモヤとした心情は、メールを送信した知人が自身の経験を言語化してくれたことで、夫自身が納得できたという

ことでしょう。また、このような心情は自分だけではなく、移植を経験した他のレシピエントにもあるということを知りえたことで不安の緩和にもなったと思います。これも心理的支援です。

7.3　人的支援――安心感／負担感／閉塞感／負債感

人的支援とはもちろん文字どおり人力による支援ですが、もうひとつ大事なことが含意されています。それは人的支援をするという行為のなかに心理的支援が含まれていることです。

7.2 で紹介しましたように義母や実母が移植後の夫に付き添っています。また術後 1 ヶ月間、実家で療養した緑さんは、その後、泊まり込みで夫の付添をしています。6.2 で紹介したように夫の術後は一進一退であったため緑さんは夫の様子を毎日ハラハラ、ドキドキしながら見守っていたのです。

誰かが患者のそばに付添って見守るということは、患者と同じ時間と空間をともにするということであり、このこと自体が患者の心理的支援につながっています。また付添っている本人も患者の状態を自ら確認することができることと、患者の心理的安寧になること、異常な徴候がみられた場合には医療者に速やかな連絡が可能というメリットがあります。しかし、付添うデメリットは身体的負担感、病室という狭い空間に居続けるという閉塞感、日常生活が制約される不自由感のほかに、ドナーによってはレシピエントに辛い思いをさせている負債感などをともないます。

7.4　社会的支援

社会的支援とは、(1)事業主が就業規則にもとづき休暇、賃金、賞与、手当など職場での労働者の労働条件や服務規律などについて定めた規則に基づいて支払われる保障。(2)国と地方自治体による医療費の公的支援。(3)臓器移植医療の推進や患者および家族にたいする移植手術前、移植術後のサポート、移植にまつわる悩みの相談がおこなわれている NPO 法人や移植関係当事者間で相互の情報提供をおこなっている患者会。(4)移植体験患者の書籍。(5)Web 情報も社会的支援といえます［一宮 2016］。

緑さんの事例では、(4)の移植体験患者の書籍の語りは得なかったため割愛します。(1)の保障による休職やその後の職場復帰は 8 章の社会復帰で紹介します。(2)の国や地方自治体による医療費の公的支援による健康保険適用については後述いたします。(3)は日本移植支援協会による情報提供や相談については 2 章の移植にかんする情報収集で紹介しました。(5)の Web 情報は 2 章の移植にかんする情報収集で紹介しましたようにインターネット検索から得たことで、生体肝移植を決断する重要な意味づけがありました。以下、緑さんが移植をした当時の医療費の公的支援について紹介します。

(2)の医療費の公的支援は、12 章に資料の表「生体肝移植の保険診療の変遷」にまとめました。2004 年から生体肝移植の保険適用が拡大したため成人間の移植が飛躍的に増加しました［長谷川 2008］。しかし緑さん夫婦の移植は 2000 年代初頭ですので、その恩恵は受け

ていません。移植手術自体にかかる費用は患者の自己負担ですが、診療、検査、投薬、入院費などは特定療養費としての保険給付だったのです［須郷・川崎 2003］。

緑さんは夫が外来診療を受けたときの医療費について次のように語っています。「1 回外来にきたら保険が効いて 3 割負担で 7～8 万円。高額医療の申請をすると少し返ってくる」と。その医療費は健康保険制度や各地方自治体の条例に基づくもので、その多くは医療機関の窓口で支払った一部負担金の一部または全部が、後日、保険者または地方自治体から払い戻される間接的な助成制度でした。具体的には高額療養費制度といって医療機関や薬局の窓口で支払った額が、暦月（月の初めから終わりまで）で一定額を超えた場合に、その超えた金額を支給する制度です。それでもサラリーマンの夫にしては高額の医療費といえます。しかし 2010 年には肝移植を受けて免疫抑制剤を服用している患者には、身体障害者手帳（1 級）が交付され入院費用と外来費用が大幅に軽減されたため、患者負担は軽減されました（詳細は資料参照)。

8　社会復帰

夫は入退院を繰り返しながら長期間にわたって療養した結果、徐々に元の生活に戻れるような手応えを感じるようになりました。そして次のような取組をエッセイに記述しています。

そのころは社会復帰を想定して「1 日 3 時間歩く…電車に乗る…車の運転をする…人混みに長時間いる」などの訓練をしています。多くの困難を乗りこえて 1 年 8 ヶ月を要して社会復帰できる状態まで回復した夫でしたが、長期間休職したため「今さら雇ってもらえるのか。仕事はあるのか、今後の収入源は、生活はと、頭は混乱状態」になるほど不安だったようです。「迷ったら前へ」という信念の夫は「体力的な自信ができたところで…社長に電話をして…社長宅に訪問することになり…会社に戻れるのか…通院が続くので了解してもらえるのか…体の状態は維持できるのか」と不安感でいっぱいだったのです。しかし、そのような心配は無用でした。社長は快く迎えてくれて復職が決まったのです。そしていつものように「朝電車に乗り、途中で乗り換え、最寄りの駅で降り、会社まで 20 分ほど歩き出社…会社に着くと全社員のかたが笑顔で迎えてくれ…感無量」となりました。そして、それまでの不安感は一気に解消したのです。このような移植をめぐる経験から得た教訓を-次のように締めくくっています。「人生最後まで、決して諦めない。失った時間は、もうしかたないけれど、その失ったおかげで得たものを大切にし、次のものを得ようと思っています」と。こうして緑さん夫婦の不屈の精神がハッピーエンドの物語として記録され、記憶さることになったのです。

長期間休職していた夫は、それまでの職位からしりぞいて、給料もさがったそうですが、それでも以前と同じ会社で働ける場を提供してくれた社長の配慮は、緑さん夫婦にとって朗報だったのです。

一方、緑さんは夫の病状が不安定であった期間中は、夫が社会復帰するまで「私が何か

違う仕事に就くというのは気が引けた」と語っています。この語りから、いつ元の生活にもどれるのか、将来が見通せない夫の心情を理解する妻としての気遣いが読み取れます。そして夫が職場復帰した数ヶ月後、緑さんは以前とは異なる職場にパートタイムで働くようになりました。こうして自らドナーになったことで夫の命を救うことができた緑さんは「未亡人にならなくてよかった」と肯定的に受け止めていることがわかりました。

9　医療的フォロー体制

退院後のレシピエントは原則として免疫抑制剤を生涯にわたって内服する必要があるため定期的な外来通院が必要です。遠方の患者さんの外来通院は、地元病院と Y 病院の連携でおこなわれています。その仲介役が移植コーディネーターです。外来では血液検査やエコー検査などをおこなって、その結果をもとに免疫抑制剤を微調整します。

緑さんは外来受診する夫に同伴する理由を次のように語っています。夫は「結果を…あまり話してくれない…突然…入院するより一緒に来て病状を聞いて納得したほうがいい」とのことでした。移植前の夫は地元病院に緊急入院していましたので緑さんの心情はよくわかります。

一方、ドナーの医療的フォロー体制として Y 病院にはドナー外来があります。しかし、緑さんが移植術を受けた当時はありませんでした。会社員なら年 1 回の健康診断があるように、ドナーの健康管理は自己管理として年 1 回の健康診断を受けることをお勧めします。

10 関係性の変容――ドナーになったことは周囲に内緒

私が臨床現場にかかわっていたころ、生体肝移植は高度な医療で、複雑で、難解であるという印象をもつ患者や家族は大勢いました。そして「ドナー」という言葉自体がセンシティブな問題を内包しているため、医療関係者に「ドナーと言わないようにしてほしい」という患者もいました。

緑さんは親しい友人に臓器提供について相談したときに拒絶された経験がありました。それは「自分の体を切り開いて臓器の一部をあげる」ということを「異様」と捉えているためか「たとえ愛する夫であっても…そこまですることを理解できない人もいるんだ」と思ったことでした。以来、緑さんは職場や面接でもドナーであることを内緒にしています。

印象的なのは夫のドナーになったことを夫方親族は周知していても、妻である緑さん方親族には知らせていないことでした。その理由は「ドナーになるために嫁がせたのではない」と思う人にたいする防衛反応ではないでしょうか。事実、このような経験をしたドナーは他にもいましたので緑さんだけが特異例ではありません。

移植が成功したあるドナーは、地元の人たちや職場では「エライ」、「親孝行」、「ヒーロー」として賞賛されている人がいる一方で、緑さんのように胸の奥にしまいこんでいる人もいるのです。読者には些細なことと思われるかもしれませんが、当時者にとってはセンシティブな問題であるため周囲に内緒にせざるをえないのです。

おわりに

この事例では成人の血液型不適合移植がまだ一般的でなかったころに手術を受けています。手術前から決死の覚悟で、諦めず、かといって期待しすぎず、生き永らえるために夫婦間移植をおこないました。レシピエントが様々な困難に立ち向かうなかで、もとの日常生活を取り戻すために夫婦がともに闘った事例です。ストーリーテリングの根底に流れているのは夫婦愛、家族愛です。

移植後 10 数年以上経過した緑さん夫婦は、移植は過去のこととして 2 人とも元気に過ごしているという便りを頂いています。ドナーの意味づけは、移植後の時間軸では合併症や再手術によって辛い経験もありネガティブでしたが、それ以後はポジティブであるとともに、その時間軸がとても長いのです。このような意味づけとなった最大の要因は、ドナーの犠牲と負担の対価として、レシピエントの夫が生き永らえているからこそ、このように受け止めることができていると言えます。移植医療関係者の一人として、これからもこのような状態が続くことを願っています。

11　文　献

安藤泰至，2002，「臓器提供とはいかなる行為か？――その本当のコスト」『生命倫理』12(1): 161-167

江川裕人・上本伸二, 2007,「生体肝移植ドナーに関する適応と諸問題」『移植』42(6): 501-506.

長谷川唯，2008，「日本における移植コーディネーターの成立」立命館大学大学院先端総合学術研究科2007年度博士予備論文.

一宮茂子，2016，『移植と家族――生体肝移植ドナーのその後』岩波書店.

須郷広之・川崎誠治，2003.「生体肝移植における保険診療の問題点」『今日の移植』16(5): 492-494.

田辺稔，2009，「肝移植：内科医のための基礎知識」『今日の移植』22(2): 151-160.

田中紘一・間中大・田野龍介ほか，1992,「生体肝移植の現況」『外科診療』34(7): 895-901.

12　オンライン文献

日本移植学会，2014,「日本移植学会倫理指針」（http://www.asas.or.jp/jst/pdf/info_20120920.pdf，2020.2.20確認）.

日本移植学会，2019，「臓器移植ファクトブック 2018」（http://www.asas.or.jp/jst/pdf/factbook/factbook2018.pdf，2020.2.18 確認）.

13　資料

表：生体肝移植の保険診療の変遷

年	概　　要
1989年	日本初の生体肝移植術
1990年	最初の数例は研究費負担。その後の事例は私費扱い。約1000万円
1992年8月	生体部分肝移植が高度先進医療（特定療養費制度）として承認。高度先進医療とは、保険給付の対象とはならない医療のうち、有効性や安全性が確立されており、高度先進性は認められるものの一般に普及するまでにはいたっていない治療・技術について、この医療が一般に普及し保険適応に導入されるまでの間を対象とするもの。これにより技術料など移植手術自体にかかる費用は患者の自己負担となるものの、診療、検査、投薬、入院費などの基礎部分については特定療養費として保険給付の対象となる［須郷・川崎 2003］。
1998年4月	一定の条件をみたす医療機関に限り生体肝移植が保険適応。保険適応となる病名は年齢を問わず、胆道閉鎖症、進行性の肝内胆汁性うっ滞症（原発性胆汁性肝硬変、原発性硬化性胆管炎など）、アラジール症候群、バッドキアリ症候群、先天性代謝性肝疾患（家族性アミロイド・ポリニューロパチーを含む）、15歳以下の肝硬変症（ウィルス性、原因不明、肝がん合併を含む）、劇症肝炎である。一定の条件とは肝切除術の件数が20例以上、病床数が100床以上、肝切除術や先天性胆道閉鎖症手術が合わせて年間10例以上。移植外科の常勤医師が5名以上で、1名は臓器移植の経験者［須郷・川崎 2003］。
2004年1月	16歳以上の患者に対し、肝硬変、劇症肝炎、一部の肝癌などが公的保険適用　肝硬変に肝細胞癌を合併している場合にはミラノ基準に限られる。ミラノ基準とは肝臓外に癌の転移がなく、肝臓内の脈管に癌の侵襲がなく、癌が多発の場合3cm 径が3個以内であり、単発であれば5cm 径以内1個とする[田辺 2009]。
2010年4月	肝移植を受け、抗免疫療法を実施している患者には、身体障害者手帳（1 級）が交付。肝移植術、肝移植後の抗免疫療法とこれにともなう医療については、障害者自立支援法に基づく自立支援医療（更生医療・育成医療）の対象となり、肝移植の入院費用と肝移植後の外来費用に適用され、原則10%自己負担と自己負担の上限が低額に設定さた。一定の要件を満たす場合、地方自治体によっては、心身障害者医療費助成制度が利用可能。この場合、自己負担分にたいする助成を受けることができるが、地方自治体によって異なるので確認が必要［日本移植学会 2019］。

「盲ろう者」として自分らしく生きる

～私にとって障害・仕事・支援とは～

中　條　與　子（Nakajoh Yohko）

第 6 回

私の日常④　対人援助学マガジン

読者の方と文学を通して出会えるようなエッセイを目指して

私は聞こえにくくて、見えにくい「盲ろう者」だ。「盲ろう者」であることは、私のとても大きな部分を占めているが、すべてではない。「盲ろう者」だからできないこと、「盲ろう者」だからこそできることがあると同時に、自分だからできること、自分だからできないことがあることを感じている。そして、もちろんひとりの人間として、「やりたいこと」や「やりたくないこと」があり、それらがぐちゃぐちゃになったものと、日々向き合っているのが私の毎日である。つまり、「盲ろう」として自分らしく生きるということを、もがきながら模索しながら毎日を生きている。そのような等身大の私を、このマガジンの連載を通して、読者のみなさんにぶつけてみたい。

私は、対人援助学マガジンの執筆をはじめて一年九ヵ月の新米者だ。三か月に一度の発行なので、あっという間に次号の締切日がくる。一年を通して「盲ろう者」として自分らしく生きるとは何かを考える機会、表現する機会に恵まれている。

第3回(第36号)以降、続きが書けていない。「今」を生きながら、「過去」のことを文学にして向き合うことが、思いのほか難しい。「私の日常」シリーズを連載している。

「『盲ろう者』として自分らしく生きる」とは、題名ではあるが、私の生きることそのものである。自分に向けた文学だけではなく、誰かにひとりでも伝わる表現をしたい。気持ちだけは大きいだけで、書くことができずに、時間だけが過ぎてしまった。

単純な私は、学校に行くことに決めた。昨年10月から文学を学ぶ学校に入学した。

入学開講式で気づいたが、基本は合評形式である。盲ろう者の私は、合評に参加をして、文学を創作するために何かを感じることができるのだろうかと不安になった。この学校で学ぶという自分の直観を信じるにあまり、体験入学をしなかったツケである。入学前に知ったところで答えはない。

私はエッセイと詩のクラスに入った。合評は、指揮をとるチューターを中心に囲んで、老若男女、十数名が座る。私はチュータの横に座らせてもらう。

作者が音読して、その後に感想を数名が伝える流れだ。エッセイを書くつもりで入学したが、合評に参加するということは、作者にもなりながら、詩とエッセイの読者にもなるということである。私は詩の感想を伝えることができるのだろうかと思った。

心配ご無用だった。同じクラスの方が発表する詩とエッセイの作品は、私の知らない世界が描かれていた。

二時間の合評の時間は、私の思い描いた作品の景色が、変化する時間でもある。ひとりひとりの感想と、最後にチューターの感想を聞くと、自分では見えない、気づかない角度から作品を読むことができる。作者の意図とは違う理解の仕方かもしれないけれど、初読でつくりあげた世界がとける瞬間でもあり、とても好きだ。

クラスの人たちの、作者としての文学作品や、読者としての感想を聞くと、その人が生きてきた人生や、その人の周りの人たち、家族や友人などの話が出てくることも少なくなく、生活の息づかいを感じる。その人だからこそ、出てくるような言葉にも出会う。

私が合評に提出するエッセイは、この対人援助学マガジンに書いた内容を、もう一度さかのぼって発表している。

合評をされる機会の時は、チューターやクラスの方に断って、感想や意見をしっかり聴き取りたいと思い、私が席を少しずつ移動する。ひとりひとりの声が聞こえる距離の椅子に転々と座るのだ。作者を目の前に、感想や意見を言うことは、私なら緊張するが、難聴を理解して付き合ってくださる。感想は様々である。同じ部分に対して、感想が集まることもあるが、ひとりひとり違う感想もある。自分自身では気づくことができないような視点の言葉や、難しい深い質問をされる事もある。削除した文章を復活させようと思ったり、文章を書きなおしたくなったり、刺激を受ける。とても新鮮で、面白いのだ。

耳と目の障害についてエッセイを書いているので、わたしの障害が伝わるときでもある。

合評後は、二つのグループに分かれる。「飲み会(食事会)行き」と「電車へ直行」グループだ。私はクラスの推定平均年齢より若いか平均ぐらいなのに、翌日の仕事を考えて、後者グループになる。

部屋を出て廊下に出ると、いつも暗闇だ。学校が入る建物のルールで、電気は消灯している。エレベータまで、L字型に続くすこし長い廊下を、数人でぞろぞろ歩く。私は両手を使って、数年前に歩行訓練士から教わった、失明した後に活かせそうな技術を使って歩く。左の手の平で顔を防御して、右手に持つ杖先を廊下にすべらせる。杖で確かめるポイントは、壁と地面の境界線と、私の一歩先にスライドをさせて、廊下の進行方向と誰かにぶつからないか探る。壁と廊下の境界線がなくなった時、右に九十度に曲がる。そして、弱い光で点燈する光があれば、エレベータの前だ。

私のエッセイで、夜盲のエピソードの合評を終えた日の「廊下」では、こんな事があった。チューターが廊下の電気をさりげなくつけてくれて、私がエレベータ前に到着した頃に、電気を消してくれる。それ以降、誰となく、同じように廊下の電気の点灯と消灯をしてくれるようになった。伝わっていると感じる時で、なんだか照れくさい。

前者グループとの分岐点まで、また、後者グループの人たちとの会話で気づいたが、私自身の相手に抱くイメージの中心となるのが「作品」にあるのだ。相手との会話は、その人を知る糸口になるものだが、会話をすると、その人の奥行が見える気がする。飲み会グループに参加することができたら、クラスの人たちの色々な世界観が見えるような気がするが、時々しか実現できずにいる。

半年学んで、文章の書き方も、伝え方も相変わ

らずわからないままだ。学校で、私はなにを学びとれているかは、よくわからない。ただ、エッセイを書くということに対して、肩の力が少し抜けて、少し向き合えるようになってきた気がする。

またエッセイを書くこと以外に、新たな目標ができた。作品を読んだ感想を、クラスの人たちや、チューターの感想のように、伝えることができる人間になりたい。作品を読むには、理解力や想像力が必要だと思う。幸い本屋で並ぶ遠い作者ではなく、作者の顔を見て、作品に触れることができる。読み重ねて、ひとりひとりに出会っていきたい。他者の作品を読むことができたら、私自身のエッセイも変わっていける気がしている。

文学を書くということは、一方通行で孤独に感じていたけれど、顔が見える他者の読者になること、私の作品を他者が読者になるという体験を通じて、一方通行ではないと感じた。

目標がある。読者の方と「『盲ろう者』として自分らしく生きる」の文学を通して出会えるエッセイを書くことだ。対人援助学マガジンのこの場所をお借りして、試行錯誤しながら、積み重ねて書き続けたい。今後とも、どうぞ宜しくお願いいたします。

こころ日記「ぼちぼち」その２

脇野 千恵

代用教員としての働き

無事に小学校教員としてデビューし、しばらくは小学校で勤務することとなりました。もちろん臨時講師としてですが、小学校では、大抵は産休・育休の代用教員でした。今は人手不足を解消するための加配制度があり、年度ごとの年間講師としての立場もありますが、当時は、産休・育休の代用なので、学期途中で辞令が切れ、勤務が終了することがほとんどでした。働き方としてはとても不安定な立場でした。

教員の産休とは、産前６週間、産後８週間で、子どもの誕生日から１年間は育休として取得することができます。今は最大３年の育休が可能だそうですが。

臨時講師は、うまくいけば約１年半、出産教員の産前産後と育休の期間を継続して勤務することができました。しかし、仕事場によっては産休のみとか、育休のみの代用など、数か月間だけといった変則的な契約の時もあります。出産は、何が起こるか予測が付きません。早く生まれる場合もあれば、一方で残念な結果になることも。私たち講師は主に口約束での仮契約のようなもの。初めは年度末３月まで休むはずが、「やっぱり３学期初めの１月から復帰します」なんて言われると、私たち講師は職を失うことになります。また年度当初などは、学級数が減ったことで、１週間で解雇なんてこともありましたから。それもあくまで代用教員ですから、致し方ないですね。

スーパーティーチャーとの出会い

２年目、私はM先生の産休の代用教員として採用されました。

M先生は、結婚によって遠い他府県から

赴任してきた教員でした。知らない土地での新生活。行政が違うと、学校の様子も随分と違ってきます。教育方針や学校業務の内容も戸惑うことが多かったと思います。

私自身も、新米です。お互い知らない者同士、何か惹かれるものがあり、互いに相談相手として親しくなっていきました。

彼女が育休中は、学校の様子を伝えに行くなど、職場復帰がスムーズにできるようにと、よく訪問させてもらいました。その時には、前任県での実践についていつも熱く語ってくれたものです。特に人権や道徳の学習内容からは、刺激的な実践を学ぶことがたくさんありました。ちょっとしたカルチャーショックを受けたものです。

彼女の産休育休の代用として１年半勤務を終えた後、幸いなことに継続して同じ学校に勤務することができました。たまたまM先生と同じ学年になり、良きパートナーとして働くことになったのです。

生活科の始まり

私たちは、２年生の学年所属になりました。

当時、指導要領が変わる時期であり、教育課程の内容も大きな変革がありました。

１・２年では、社会科と理科がなくなり、新たに生活科という教科ができることになりました。現場の教員はほんとうに大変でした。

生活科が何を目的としている教科なのか？その学習でどういう子を育てるのか？といったことが、なかなか見えてこない中でのスタートでした。教育界では、生活科の研修会が目白押しで、教員は色々な教材や指導方法を得るために、研修に研修を重ね学校独自の生活科の年間計画を立てるのに翻弄されていました。振り返れば、いわば「ゆとり教育」の始まりだったのですが…。

「生きる力」とよく言いますが、そのことも含まれていたと思います。

「生活科で何をする？」というのが正直、M先生も私も疑問を感じていたことです。

社会科というのは、物づくりの過程（工場見学など）や様々な仕事調べなど、低学年ではあるけれど、社会の仕組みを学ぶ教科として欠かせないものです。社会の成り立ちを伝える大切な教科だと思っていました。

理科は、生物や植物の観察や、身の回りにある事柄を科学的な視点で考え、疑問に感じたりしたことを調べるなど、事実について向き合わすという点で、これも子どもの成長時には、とても大事な教科だと今でも思います。

余談ですが、今若い先生の中に、例えば太陽、地球、月の関係を正しく教えられないといった事例があると聞きました。雨が降る仕組みなど、知らなくても良いことかもしれませんが、私たちは感覚で身につけたことで生活ができていることが多いように思うのですが…。

いのちの学習

M先生との新しい生活科への実践が始まりました。生活科への疑問を持ちながらも、目の前の子どもたちを育てなければなりません。私たちは、今までの経験を活かし、様々な学習計画をしました。

それぞれの学校の特色を出す生活科ですが、私たちは、夏はトマト・キュウリ、冬なら大根などの作物づくりをし、収穫祭をしました。地域の人達と田んぼでの稲作にも挑戦したものです。また地域を探検し、時には昔の遊びや行事について学ぶこともありました。

今なら到底できませんが、毎日のように

近くの川へ行き、魚やザリガニと捕りをし、「ザリガニ運動会」などをしたりしました。30 年前の子どもたちは、裸足で川を走り回り、水の流れや魚の動きなど一生懸命に体ごと遊ぶことができたのですね。

当時の管理職は、随分おおらかで、
「ちゃんと連れて帰ってこいよ」
と、その程度しか声をかけられませんでした。

何より私が好きだったのは、自然の中で群れ遊ぶ子どもたちを観察することでした。魚をつかめない子を手助けする子どもなど、子ども同士で学ぶ姿を見られた忘れられない時間でした。

その生活科で実戦をしようとした学習の一つに、M先生と意気投合したのが「性教育」でした。

「命の学習」という名で、各学年ではそれなりに性教育は行われていましたが、私たちが目指す性教育は、一味違ったものでした。今までの「命の尊厳」といった神秘的な捉え方ではなく、人間の命の成り立ちを科学的に説明する学習内容です。

就学時の子どもたちが疑問に思うことは、「自分はどのようにして生まれてきたのか？」ということ。そして「どこから生まれてきたの？」といったことです。

子どもたちに「みんなの命はどうやってできたと思う？」と投げかけてみると、色々言ってくれます。

わからない、知らないと言う子もいれば、お母さんのお腹を割って出てきた、股から出てきた、コウノトリが運んできたなんていう子もいました。さすがに、橋の下で拾われたというのはなかったですが。

現在、学校教育の中での性教育が充実しているかと言えば、残念ながらむしろ後退していると感じています。それには、色々な経過や事情があるのですが。

M先生との性教育実践は、学校内でちょっとした波紋を投げかけることとなりました。

つづく

「MSW という仕事～バイステックの 7 原則から再考する～③」

「受容」について考える

高名　祐美

「受容」とは「受けとめる」こと。バイステックは『クライエントを受けとめる行為の目的は援助である』と述べている（「ケースワークの原則」バイステック著）。ソーシャルワークの実践において、クライエントを「受けとめる」ことは基本中の基本。しかし、援助経過の中で援助者自分自身の個人的価値が強くでてしまい、クライエントを受けとめることに苦痛を感じることがある。「自分自身の価値を自己覚知しておくことが大切なのです」と、日頃は講義や後輩指導の際に伝えている。

ソーシャルワーカーが援助の際に、クライエントの辛さを丸ごと受け入れていたら、自分自身が辛くなってしまう。「受けとめる」と「受け入れる」は異なる。「受けとめる」とは、どうしていくことなのだろう。そんなことを感じた事例を今回は紹介して、「受容」について考えてみたい。

Y さん、７９歳、男性。膀胱がん、多発リンパ節転移、多発肺転移。7 年前に診断を受け、治療のために何度も入退院を繰り返してきた。化学療法、放射線治療など繰り返し受けてきたが、闘病生活 7 年目にして腎瘻造設状態となり、ほぼ寝たきりの状態となった。両側腎瘻造設に加えて、十二指腸狭窄のために絶食となり胃管チューブが鼻から挿入され、肺転移による呼吸苦のため常時酸素吸入が必要な状態となった。その状況を、Y さんは「管ばっかり。おしっこの管と鼻の管と酸素。もうたくさんだ。」と表現されていた。

これまでは短期間であったが、今回は入院生活が長引いた。入院して 2 か月が経過したころ、Y さんは、主治医へ「もう家に帰りたい。治療はいらない」と訴えた。そこから私の介入が始まった。

Y さんは、私が勤務する病院の元職員だった。私が MSW として当院に就職した当時、医事課長として働いておられた。病室での初回面接でご挨拶すると、「話を聴いてくれたのですか。お世話になります。」と丁寧な口調で話される。私が部下であった Y さんの現役時代の話をすると、「そんなこともあったかな」と微笑まれたりした。少し話をしてよいか問うと、「いいですよ」と了解してくれた。

～病室（個室）での初回面接～

Y さん：家に帰りたいと自分が口にしたのを聴いてくれたのですね。でも、こうしてここ（病院）にいるのがいいのか、帰っていろいろ家でしてもらうほうがいいのか。自分には判断できないです。覚悟はしています。そこのところを妻とよく話をしてほしい。

SW：そうなんですね。では改めてお聴きします。Ｙさんは、今、家に帰りたいと思っていらっしゃいますか。
Ｙさん：はい。そうしたいです。
SW：そうしたいのですね。わかりました。では、Ｙさんのご希望がかなうように、奥様とお話しをしてみます。
Ｙさん：はい。そうしてください。
SW:Ｙさんが家に帰って療養できるように、準備を始めますね。早く家に帰りたいですよね、急いでやりますね。
Ｙさん：急がなくても。ゆっくりと。ゆっくりお願いします。
SW：ゆっくりと？しっかり準備をということでしょうか。
Ｙさん：まあ、そうだな。とにかく妻とも話をしてください。

病室は個室だった。初回面接でのＹさんの主訴は、「家に帰りたい。そのことを妻と相談してほしい。準備はゆっくりでいい」だった。腎瘻、鼻管チューブ、酸素と管が３つも入った状態での在宅療養生活に、不安があるのだろうか。介護を担ってもらう妻への遠慮があるのだろうか。数回Ｙさんは、「妻と話をしてほしい」と口にされた。

その日の午後、相談室で妻と面接した。妻は約束の時間通りに相談室へ来室され、淡々と話をされた。

SW：Ｙさんは「家に帰りたい」とおっしゃっています。その一方でご心配があるように感じます。奥様はいかがお考えですか。
妻：夫は自分の気持ちはあまり話さないほうでしたので。とくに私には。でも、今朝「家に帰りたい」と言葉にしました。
SW：奥様は、その言葉を聴かれてどう思われましたか。
妻：ここ数日ですかね、おかしなことを言うようになってきました。「お寺へ連絡してほしい」「お経の本をもってきてほしい」「お経の一文を書いた掛け軸があるのですが、それをもってきてほしい」とか。お寺の世話を熱心にしてきてまして、毎日朝 30 分はお経をあげていましたから。掛け軸はもってきませんでしたけど、お経の本をもってきたら、ベッドの足元において合掌していました。夫は、家に帰ればすぐに亡くなる、楽に死ねる、そんなふうに思っているような気がします。本音はわからないです。私は、本人の気持ちは叶えてやりたいと思います。でも。家は寒いので。ベッドをどこにどうやって置いたらいいのか。そんなことから私にはわからないのです。
SW：ご主人の思いは叶えてあげたい。そう思っていらっしゃるのですね。
妻：はい。

「夫の気持ちは尊重して、希望は叶えてやりたい、しかし在宅療養を実現するには知識もなく、なにから準備していけばよいのかわからない」というのが妻の思いだった。そこで、「できることから始めましょう」と、奥様には介護保険を申請していただいた。担当ケアマネジャーの相談をし、院内の医療者で話し合う場をもつこととした。

医療者でカンファレンスを実施。本人・妻の思いに沿って、在宅療養準備をすすめていくこととし、役割分担を行った。妻の思いは理解できたが、Ｙさん自身の気持ちに寄り添えているのかが不安だった。この

まま、自宅への退院準備をすすめてよいのかどうか。「ゆっくりと」という言葉が私の中で渦巻いていた。その意味はどういうことなのか。私はＹさんの思いを受けとめられているのだろうか。

カンファレンス直後に病室訪問。妻と話をしたこと、家で療養できるようにスタッフで話し合ったこと、主治医からも退院許可があったことをＹさんに伝えた。

Ｙさん：（表情を変えずに）もう、疲れた・・・ここでこのままお世話になろうと思う。妻に無理をさせるわけにはいかない。自分には兄弟もいないし、妻の親戚にお世話になるわけにもいかないし。家に帰るのは無理だなと自分が思った。

えっ？家に帰りたいのではなかったの？この前は「ゆっくりとすすめてほしい」だったのに、と私は驚いた。驚きは抑えつつ、一息ついてからＹさんの言葉をそのまま繰り返して伝えた。

SW：家に帰るのは無理だと思った・・・
Ｙさん：そう思う。楽になる方法はないかと思う。鼻を 10 秒ほどつまんでもらえば、きっとそれで終わるのだろうけれど。そんなことをお願いしても無理なのだろうな。注射でもしてもらって楽になりたい。それも無理だろうな。君にはそんなことを頼めないのだろう？

がんばって、がんばってここまできたけれど。ここまでだった・・・　先が見えてしまったからな。自分のからだが全身を蝕まれていることがわかったから。

迷惑かける、妻に。もっと前に、気づいていればよかったけれど。もう限界だな。

Ｙさんは、静かに語った。初回面接では聴かれなかった悲観的な言葉が多く、私はその言葉ひとつひとつを聴くことしかできなかった。「楽になりたい。」「早く楽にしてほしい。」と訴えるＹさん。それだけ今がつらいのだろうと想像できても、共感ができない。きっと私は困った表情をしていたのだろう。Ｙさんは最後に「ごめんな。君に無理なことを言ってしまって。」と、昔の上司らしく私に言葉を掛けてくれた。

一方妻は、自分のペースで夫を家に迎え入れる準備を進めていた。本人・妻の希望で、担当ケアマネジャーとなった私は、自宅を訪問してベッド搬入などの準備をともにおこなった。妻からは「おかげさまで準備は順調にすすんでいます。」との言葉があった。しかし、私はＹさんの悲観的な言葉が気になっていた。在宅療養の準備を進めていくことは、Ｙさんの希望に沿っているのだろうか。自問自答を繰り返していた。そしてＹさんの病室を訪れた。

SW：お加減はいかがですか。
Ｙさん：つらい。もうおしまいにしたい。早く、早くおしまいにしたい。
SW：つらいのですね。早くおしまいにしたいのは、入院生活ですか？今、奥様と一緒に家で療養できるように、準備を相談していますよ。
Ｙさん：こんな、管が 3 本も入っているものが家にいけるのか。そんな人はいないだろう。もし、行けたとしても、長くはいられないだろう・・・

SW：管が入っている状態で、家にいる方はいますよ。Ｙさんも家に帰れます。先生、看護師が家にお伺いします、もちろん私も行きます。
Ｙさん：そんな手数をかけるのか。
SW：手数ではないですよ。でも、そんなふうに思うのですね。

「つらい。早くおしまいにしたい」と訴えられる。この言葉を受けとめて、私はどう援助につなげればいいのだろう・・・　先が見つからない。ケアマネとして未来の夢を一緒に描けない。たとえ短期間であっても、「家に帰れてよかった」を実現したいと頭の中で一生懸命考える。そして、こう問いかけた。

SW：家に帰ったら、そしてからだがつらくなかったら、どんなことをやりたいですか？
Ｙさん：やりたいこと？なにもない。なにもできない。
SW：なにもできませんか？昔好きだった歌を聴いたりするのはどうでしょう？「憧れのハワイ航路」、課長さんの 18 番でしたよね。
Ｙさん：もう歌えない。声がでない・・・

「今」に着目することをやめ、Y さんの「過去」「これまで」を聴くことを試みた。

SW：課長さんだったころの思い出、どんなことが思い浮かびますか。
Ｙさん：そうだな、運動会とか楽しかったな。みんなで行った海水浴も。裸の付き合いもしたからな。そんなこともあったな。こんな病気になるなんて思いもしなかった。どうして自分がこんなつらい思いをしなければならないのか。

Y さんの言葉を「受けとめる」ことがつらくなった。私のその感情が Y さんに伝わったのだろう。今度も Y さんが「ごめんな。こんなこと言って」と言葉にされた。

そして準備が整い、退院の日を迎えた。私はケアマネとして、病棟看護師、訪問看護師と一緒に退院に付き添った。家についた Y さんは、準備したベッドに横たわった。「Y さん家に着きました。今の気分はいかがですか？」と、インタビュー風に私が問いかけると、指で丸をつくり笑顔で「ぐー（Good!)」と答えてくれた。
その言葉と私に向けてくれた笑顔がとても嬉しかった。

援助者である自分にも感情がある。自分の感情を意識し、さらにその感情の出し方をコントロールすること。これが「統制された情緒的関与」である。バイステックの 7 原則は、その順番にも意味があるといわれる。７つの原則は、「個別化」「意図的な感情表出（クライエントの感情表出を大切にする)」「統制された情緒的関与（自分の感情を自覚して吟味する)」そして「受容」と続く。
Y さんとの面接を振り返る中で、この原則の順番に意味があることを実感することができた。元上司だった Y さんは、患者でありながらも、上司であったころのまなざしで私を見つめてくれたりもした。「楽になりたい」と自分の思いを吐き出した Y さん。「受けとめる」ことの意味、援助者としての自分自身の感情表現も重要であることを改めて考えさせてくれた。

原 田　希

京都の美大を卒業後、服地や下着、家庭用品の商品企画の仕事をしていました。
会社の近くで開催された北海道農業青年との交流会。参加費無料、おみやげつきにつられて参加し、たまたま隣に座った縁で、家族で酪農を営む青年（夫）に出会いました。
大阪での仕事も楽しく順調、結婚願望なし、北海道や農業に憧れていたわけでもなく、動物好きでもない。幼少期からアレルギー持ちでホコリや、牧草の花粉もだめ。全く自分には向いていない仕事だとはじめから思っていましたが、寒さの厳しい冬を選んで半年間、牧場暮らしを体験させてもらったのち、夫と両親の人柄が良かったしナァ。それだけで結婚しました。学校を卒業して13年間、実家暮らしのパラサイトOLで自分の好きな仕事を自由にやらせてもらい、商品を買ってくれる人のために、とは考えたことはあっても、目の前のこの人のために、とは考えたこともない人生。乳牛200頭を両親と夫、三人で休みなく面倒をみているのを目の当たりにし、向いてないなりにも手伝ってみるか、と新しい価値観が芽生えたのでした。デザインの仕事はどこでもできるしネ、と。

夫と出会ってすぐの頃、牛乳は余剰生産気味でした。買い取ってもらえる乳量が決められて、オーバーしたものは廃棄、乳価も下がり、北海道の酪農家はみんな困っていました。
わが町、標茶町も牛乳の消費促進を訴えかけることになり、牛乳消費促進キャラクターを作ったら？なんて役場の女性と話していたら、じゃあ、お願いします！と言われて、「牛乳を食べよう！」というキャッチコピーとともにミルクックさんを描きました。役場だよりにちょこっと載るだけのミルクックさんでしたが、もう15年ほど皆さんに可愛がっていただき、牛乳の余剰問題が解決してからは、ゆるキャラブームが到来。着ぐるみも作ってもらえ、地元のおいしい牛乳、しべちゃ牛乳のパッケージにもなって、町おこしに参加しています。

このことがきっかけで、どこからともなく販売促進のシールやチラシや名刺のデザイン、ご当地マップ、会社のロゴマークなどを作ってもらえるのかな？という相談がぽつぽつ来るようになりました。聞けば、業者に頼むほど大きい内容でもないし、頼むにしてもどうしたらいいのか、気軽に相談できる所がない。都会と違い、隙間を埋める役割がまだまだ空いた状態なのでした。相手の話しを聞くうちに、私で良ければやりますよ。酪農仕事の合間にやるので時間はかかりますが。都会でのデザイン料をそのまま当てはめるのはおかしいから、物々交換ならやります。と申し出ました。

これまでに、プリンのシールと有精卵、クリスマスケーキのチラシと焼き菓子、運送会社の名刺と奥様の手作りパン、和肉の紹介文とそのお肉など、どれも心を込めて作られたものと交換していただきました。私はたまたまデザインでしたが、交換するものは、得意料理や秘伝のレシピを教えることでもいいし、家庭菜園のコツ、除雪、まき割りのような作業でもいい。自分を発揮できる事ならなんでもいい。それが嬉しく、しみじみありがたいのです。大阪では考えもしなかった物々交換。同じ町に住んでいるだけで、みんな知り合いのような田舎ならではのコミュニケーションの素晴らしさを知るところとなりました。厳しい自然と共存しながら、おのおのができること持ち寄って助け合って、なんも、なんも（なんでもないよ、という方言）と生活してきた北海道の人たち。外が寒い分も人の温かさが染みるのでした。

こう書いてくると、移住、転職、結婚生活は順調にすべりだしたかのように思えますが、そうでもありません。酪農仕事の方も熱心に取組んだ私でしたが、家族経営（上司が親）の難しさ、休日のない労働環境、家族以外の誰にも会わない生活、頼れる身内がひとりもいない孤独、農家の長男の特殊性、に悩まされることになります。大阪人ならではの愛ある毒舌とユーモアをもってのちのち語っていきますが、これらの悩みを少し軽くしてくれたのが、デザインを介してのコミュニケーションでした。まだ居場所がなかった、まわりに助けられるだけの自分にできる事があったこと、出来上がったデザインを見せたときに相手の顔がパッと明るくなる瞬間に、初めて大きく息を吸えたのです。困っている人の手助けをしたつもりでしたが、救われたのは私の方でした。

このたび連載のご依頼をいただいた時、家の仕事なので、内容が家族の話になってしまうことに迷いがありましたが、移住、転職、結婚の岐路に同じような思いでいる人の、手がかりになることがあれば、と思って日々のつれづれの記録、感じたままのことを書いていくことにします。夫も少し考えたのち、いいよ、と快諾してくれました。

筆者　　原田　希　ハラダ ノゾミ

1973年 大阪府吹田市生まれ
2006年 酪農家との結婚を機に北海道標茶町へ移住。自身も酪農家に。
2017年 北海道農業士に認定
北海道指導農業士の夫とともに、新規就農者の支援や、
女性の農業者向けの勉強会、道外からのお嫁さんの会のお世話係を担当

みちくさ言語療法―ことばの発達と障害の臨床より―

(1) 話しづらさの障害学

工藤芳幸

言語聴覚士という少数派

私は言語聴覚士（以下、ST）という仕事をしている。正確には大学で ST 養成の仕事をしながら、児童発達支援施設・放課後等デイサービスの非常勤 ST として、ことばやコミュニケーションの発達に何らかの課題がある子どもやその家族と関わっている。

ところで ST という仕事、読者の皆様はご存知だろうか。ことばやコミュニケーションや食べることに何らかの障害や困難を抱えている人を支援する仕事であり、医療職の 1 つとして位置づけられている。病院のリハビリテーション科に勤務していることが多いが、介護老人保健施設や児童発達支援センターなどの福祉領域、学校関連の教育領域でも働いている。アメリカではなりたい職業ランキングでも上位に入る職種なのだが、日本での知名度は低い。国家資格になったばかりの公認心理師は第 2 回の国家試験を終えた段階で、3 万 6,438 名の合格者を出しているが、言語聴覚士は 2019 年の第 21 回まででようやく 3 万 2,863 名。同じリハビリテーション関連職種の理学療法士（PT）が 17 万 2,285 名。ST は少数派なのだ。対象としている年齢層は子どもから高齢者まで全てだが、子どもの ST はさらに少数派である。対象としている障害は、失語・高次脳機能障害、摂食嚥下障害、運動障害性構音障害、音声障害など。発達の領域では、知的障害、自閉症スペクトラム障害、ADHD、学習障害、構音障害、吃音、脳性麻痺。それから聴覚障害と多岐にわたる。私は子どもの発達支援が専門で、高齢者分野での経験はない。

ST はスピーチセラピストとも呼ばれるため、音声や発音をきれいにするトレーナー、絵カードを見せてことばを話すリハビリをする仕事、高齢者の摂食嚥下障害などのリハビリテーションを担うといったイメージがあるように思える。どれも間違いではないが、全てではない。ST の仕事の内容についてわかりやすく説明するのは難しいが、大まかに言って、人どうしが生きていく上で重要なことばやコミュニケーションの困り事について、その解決や解消を手助けする仕事だと私は考えている。その対象や方法についてはいろいろあり、狭義の機能訓練から、コミュニケーション手段や環境の調整、本人や保護者への助言などがある。

ST の仕事のことや、ことばやコミュニケーションの障害の全貌を伝えるだけの力は私にはない。長らく自分は職人的な仕事で良いと考えてきたのだが、経験したことを

自分の中にだけ留めておくのではなく、少しでも共有することに援助的な意味があるのではないかと思うようになった。学生にはST養成というスキーマの中でそれを伝えているが、ここではそれとは違う道筋、少し広い文脈で、ことばやコミュニケーションに困難さを抱えている人たちとの関わりから得たことを私なりに咀嚼し、物語ってみようと思う。

機能性構音障害を持つ子どもたち

ことばやコミュニケーションの困難さの1つに、ことばの発音が上手くいかず、言いたいことが上手く伝わらないという状態があり、それは構音障害と呼ばれている（発音のことを医学領域では構音と呼ぶ）。構音障害（articulation disorders）とは、「話し手が属している言語社会の音韻体系（日本語だと50音）の中で、話し手の年齢からみて正常とみなされいてる語音とは異なった語音を産生し、しかもそれが習慣化している場合」とされている（岡崎, 2001）。たとえば、「カボチャ」という単語を言おうとしたときに、「タボチャ」と発音されてしまい、聞き手には上手く通じないという事態が起こる。誤り音が1つだけでもたびたび通じないことが起こるが、いくつもの音が思った通りに出せないとなると、言いたいことがほとんど伝わらない。脳血管障害などによる麻痺や口蓋裂などで起こる構音障害をそれぞれ運動障害性構音障害、器質性構音障害と呼ぶが、こうした問題がないにも関わらず構音障害が起こっている状態を機能性構音障害と呼んでいる。子どものSTをしていると、「発音が上手くいかない」という相談を受けることは非常に多く、実際に構音のみが問題となる場合もあれば、言語発達そのものの遅れなどが背景に隠れている場合もある。

子どもの構音障害の第一の特徴は、子どもは音の習得過程にあり、言語発達と深い関係があることだ。子どもは4歳頃になるとしりとり遊びなどをするようになるのが、これがことばの音（音韻）の側面に子どもが気づくようになった証拠の1つである。子どもの構音が正確に産生される背景には、頭の中にある語の音が、日本語として正しく表象されていることが必要だ。3歳頃にはおしゃべりが盛んにはなるが、まだ音韻の発達も舌の動かし方も不十分であり、この時期に上手く言えない音があるのは珍しいことではない。特に「さ行」「ら行」などは完成するのが6歳頃の音であり、3歳児が「サカナ」を「シャカナ」と言っていても心配することはない。ただし、通常の発達途上では見られない構音の誤りがあることもあり、概ね4歳を過ぎて発音が拙い、通じないということがあれば近隣のSTに相談するのが良いだろう。

「たかが発音のこと」と思われがちな面もあるが、構音障害によって発話明瞭度が低下し、コミュニケーションに支障をきたすと、言語発達にも心理社会的発達にも大きな影響を及ぼす。当事者は正しく構音しているつもりなのだが、どうしても思ったような音が出せない状況で、正しく言い直すことを指摘されたり、からかわれたりすることが続くと、友達とのやりとりが上手くいかなくなり、発話意欲の低下が起こる可能性がある。結果的に社会的な適応に問題を抱えることもある。きれいにハキハキとしゃべる、スムーズにしゃべるということに価値が置かれている社会において、そのようにしゃべれないということは疎外感や

孤独感を生むことにもつながるのである。

ST は機能性構音障害についてはある程度確立された訓練技術を有しており、数少ない「治す」ことができる言語障害とされている。ただし、知的障害や発達障害、不器用さのある子などの場合には、長期間の訓練が必要になることも多く、完全に治すことが難しい場合もある。

話しづらさがある当事者として

実は私にも「側音化構音」という機能性構音障害がある。正常構音では音の産生時に呼気が口腔の中央部から流出するが、側音化構音では呼気は口腔の側方から流出し、舌縁と臼歯とで音が産生される。「い」列の音や、子音の/s, ʃ, tʃ, dʒ/によく見られる。聴覚的には雑音が伴う耳障りな音で、「し」は「ひ」に、「ち」は「き」に、「じ」は「ぎ」に近く聞こえる。学齢期に達した子どもに見られる機能性構音障害の中では最も頻度が高い構音障害である。

私も子どもの頃は、言っていることが伝わらず、聞き返されることや、間違いを指摘されるということが非常に多かった。「か」行のうち、「き」の子音/k/が/tʃ/の音に近い歪み音（「ひずみおん」と読む）として産生されてしまう。そのときにどう対処したのかというと、「き」や「ぎ」がついている単語を言うことを回避する術を身につけた。類似の意味の別の単語を使うなど、できるだけ「き」や「ぎ」を使わないように、会話においてモニタリングをしていた。例えば、「ぎりぎり」なんてことは言えない。似たような「すれすれ」と言うとか、様々な工夫を凝らした。小学生の頃はこれでやり過ごした。こうした回避は吃音のような話しづらさを持つ子どもにも頻繁に見られる行動である。ただ、周囲との会話をためらうということはなかったと思う。努力の成果なのか、周囲の気遣いなのかわからないが、おそらく誤りを指摘され、からかわれるようなことは徐々に減ったのだろう。構音の歪みに関して最初期の記憶は、小学校に入ってからである。幼児期は自分の構音について認識した記憶がない。構音について特に意識した時期は小中学生の頃で、高校以降は部活にほとんど全てを賭けて（！）生きていたのもあって、あまり気にすることもなく日々が過ぎていた。大学を卒業して福祉施設に就職した後もむしろよくしゃべっていた方だと思うし、構音についてはそこまでの負い目ではなくなっていた。全く気にならないというわけではなかったが、主たる問題ではなかった。ただ、時には上手く通じないということがなくなったわけではなかった。

H 先生からのメール

転機は突然訪れた。最初の職場を退職して言語障害学を修めるために大学院生をしていたある日、講師の H 先生から 1 本のメールが届いた。何やら折り入って話があるという。恐る恐る H 先生のところへ出向くと、「工藤さんは側音化構音がありますよね」と切り出された。すでに大学院入試の受験勉強で構音障害というものについての知識を得ており、自分の発音のしにくさには名称があるということを知っていた。また、H 先生の講義も受けていたので一定の知識があった。何の話かと思って内心ドキドキしていたので「なんだそんなことかと思って「あ、はい」とほっとして返答したように思

う。H 先生曰く「今後 ST として仕事をする上で、構音訓練をする際に構音のモデルを出すことが必要になる。そのために側音化構音を治しておくのが良い。ただし、もう大人になっており、日常会話全てにおいて正しい音が出る（般化する）というゴールではなく、ST として構音指導をする際に、対象者の人に出して欲しい音のモデルを正確にできることが大事。そのあたりをゴールにして構音訓練をやってみませんか？」ということだった。構音訓練は H 先生がやってくださるということだったが、それだけではなかった。大学院のカリキュラムの中で、実際に機能性構音障害がある子どもが学内にある言語障害研究センターに来て、先生の指導の下で院生が構音訓練を実施するという授業があった。その授業で私も他の院生から訓練を受けるのはどうかというアイデアを提案してくれたのだ。構音訓練を受けることは私自身の学びにもなるし、クラスメイトも大人の機能性構音障害の訓練を経験することができる。また、対象者（私）から直接フィードバックも得られるというメリットがある。こうした説明だったように思う。私は二つ返事で受諾した。

クラスメイトから構音訓練を受ける

実技の授業でセラピスト役として子どもの構音訓練をさせてもらった時には、相当緊張した。準備して臨んだとしても初学者。実際にどの音が歪んでいてどの音が正しいのか、聞き分ける耳ができていない。つまり「評価」ができない。だから目標にしている音を強化するということが上手くできない。横に H 先生がついて、「ここ」とか「これ」とか影のように強化すべきポイントを教えてくれて、大汗をかいて何とか構音訓練したのが初めての体験だった。

そんなわけで自分がクライエントとなる回は気楽だった。10 人ほどのクラスメイトに囲まれ、セラピスト役の院生仲間がプログラムを立案して、私が大汗かいたように（否、他の院生はもっと上手だったような気がするが）構音訓練をしてくれた。練習用のノートも作成した。私が使うかも知れない単語を選択し、訓練経過を記述し、課題も作ってくれた。この授業ではまず構音検査を実施し、事前にプログラムを立て、それを H 先生に見てもらって訓練内容を検討するのだが、クラスメイトが私の訓練について考え、話しているというのがなんとも不思議な状況だと思った。嫌な気分ではない。こういうふうに自分のことを見る、見られるというのが初めてのことだったのだ。この時、私は初めて音の言いづらさについてオープンに、しかも詳細に話すことになった。カンファレンスでは私も含めてのディスカッションが行われた。もうだいぶ前のことなので、どんなことが話し合われていたのか詳細は忘れてしまったが、私の言いにくさについて配慮されて問われないわけでもなく、理不尽に誤りを直すように指摘されるわけでもなく、正当に扱ってもらえたという気がしたのは確かである。

この時の訓練+H 先生と空き時間で約束して実施してもらった訓練で私の側音化構音が完全に治ったわけではない（つまり日常会話で無意識に話していても誤り音にならない状態になったわけではない）が、この時から自分の話しづらさへの捉え方が変化し、問題の大部分が解消したのかも知れないと今になって思う（期せずしてリフレクティングを行っていたのだ）。少なくとも構

音訓練を受けたおかげで意識的に自分の構音をコントロールすることがある程度は可能になり、ST として構音訓練を実施するハードルを下げてくれたのである。

そのままを受け止める

構音訓練場面において、子ども本人から話しづらさについての訴えを聞くことは、それほど多くはない。多くは親からの要望によって状態を評価した上で構音訓練を開始する。しかし、当の本人の思いを無視して進めることはできない。ことばにできないことであっても構音訓練にどのように取り組む過程での行動から心の動きを窺うことができる。きっと皆気づいていると感じていてもそのことを言い出せないことや、もしそのことを話してしまったら、怒られる、バカにされる、きちんと話すように要求される…などの様々な不安、そして、ちゃんと話さないと認めてもらえないという存在の不安を抱えている場合がある。話しづらさを抱えている子どもへの構音訓練は、構音を治すということだけではなく、その子どものありのままの姿を認め、逆説的だがそのままの構音であっても良いという承認から始まるように思う。子どもの構音訓練とは、ただのトレーニングではない。専門職として訓練技術を高めることに異論はない。しかし、それと同じレベルで子どもをコミュニケーションの主体として認め、心の動きを想像し、話しづらさを正当に扱うことが極めて大事な援助なのである。

小さな傷は残されている

今でも私はそんなにきれいな構音で話すことが簡単ではない。疲労度が高い時には舌は私のコントロールから離れてしまうこともしばしばである。そして今も子どもに構音訓練を実施する前にはモデルを出す練習もしておく。現場で毎日のように構音訓練をやっていた時期は、こちらも毎日モデルを出しているので舌のコントロールも比較的なめらかなのだが、近年は大学での仕事が多くを占めていて若干舌がさび付いている感がある。正常構音モデルの練習は能動的な行為なので心理的負担はない。周囲からまるで当たり前のことのようにきれいに話すことさえ要求されなければ、特に障害として立ち現れることはない。だが、それを匂わされたときに、オープンに話せるはずのことであっても過去に受けた傷が身体をこわばらせる。たかが構音、されど構音である。そのことで長い間他者との関係を築くことにハードルを感じる人もあることは知っておいて良いことだと思う。

H 先生へ

今回この話を書こうと思ったのは、構音訓練を実施してくれて、その技術を教えてくれた H 先生への思いがある。実は H 先生は数年前に 50 歳の若さでこの世を去った。養成校の教員となった後、私もまた学生に構音訓練を実施してきたのだが、それは大学院生の時の経験があったからだ。H 先生には心から感謝しているが、そのことをきちんと伝えられていなかった気がする。この場を借りて御礼申し上げたい。

引用文献：岡崎恵子（2001）「構音障害」西村辨作編『ことばの障害入門』大修館書店

マガジン創刊 10 周年記念企画

「対人援助学マガジン　執筆者と読者の会」

年末に行われた「対人援助学マガジン　執筆者と読者の会」
どのような会であったのか、参加者の声をお届けします。

①執筆者・読者の集いに寄せて（岡崎正明）

年の瀬迫る 2019 年 12 月 28 日の午後。

私は床の間と仏壇のある、いかにも「昭和のお茶の間」といった風情の居間にいた。達筆な字が書かれた掛け軸。大黒様の置物。古い家族写真。そのどれも懐かしい。石油ファンヒーターが全力で稼働しているおかげで室内は暖かいが、障子一枚隔てた廊下は吐く息も白いほど冷え切っている。その廊下の窓越しに見える外には、畑と山と、古い家屋・蔵がいくつかあるだけで、コンビニもビルもない。そして目を室内にむけると、私の前には 70～30 代くらいの男女が複数。２つ並んだ４人掛けのコタツにそれぞれ足を入れ、買ってきたお土産を食べながらお茶をすすっていた…。

ここまで読んで、私の年越しの帰省話と思った人がいてもおかしくない。しかし何を隠そう、これが対人援助マガジン 10 周年記念の執筆者・読者の集い（１泊２日）のまぎれもない 1 コマである。数時間前、人で溢れかえる京都駅で新幹線を降りたとき、こんな景色の中に自分が飛び込むことになるとは、誰が予測できただろう。

集まったのはもちろん親戚ではない。集いし者の共通点は①なんらかの人の援助に関わっている②マガジンで連載しているという、その 2 点だけ。あとは出身地も仕事も、抱えるバックグラウンドもバラバラ。そんな個性豊かな面々が、降り立った初めての土地。なのにまるで里帰りした雰囲気のこの部屋で、こうしてコタツを囲んでいる不思議。さすが人や家族の支援を考える学会だ(笑)

そんなわけでどうしてもタイミングとロケーションが里帰りで集まった親族一同にしか思えなかったため、「マガジン一族」という設定で参加者を勝手にご紹介させてもらおう（あくまで個人の親愛の情からくる悪ふざけであり、根拠も悪意もございませんので、笑って受け流してください）。

まずは団編集長。一番にこの場に馴染んでいた存在感は、まさに皆の帰りを待ち受けていた一族の長。饒舌に家族や社会を語る姿は、一族の中心ここにあり！であった(笑)

次に河岸先生。本当に北海道から来たの？と思うほど現地に詳しく、その包容力も相まって、まるで故郷で子どもらを温かく迎い入れる母のように思え(笑)

そのそばでニコニコしながら、相手の話をしっかりと受け止めてくれる坂口さんは、優しい叔母のようなたたずまい。

編集担当の千葉さん・大谷さんのお 2 人は、今回の企画や宿の手配などこまごまと動いてくださり、その実直かつ気配りの精神は、実家を継いだ優しい長男と、その兄から頼りにされる賢い次男坊という印象。

対して落ち着いた雰囲気の中にも、キラリと光る面白さをみせる杉江さんは、都会に出て活躍する従弟くんといった風貌で。

最後に真打のごとく登場した中村先生の話は、刺激と知恵と独創性に満ちていて。どこの一族にも 1 人はいて欲しい、知恵袋で芸術家肌で、ちょっと変わり者の？伯父さんのようだった(笑)

そして忘れちゃいけない。初対面でも堂々と、かつ気持ちよさそうにコタツで眠ていた小池さんは、当然みんなから猫扱いされてました(笑)

そんな多士済々と１泊２日。大いに語り、大いに笑った。ただ楽しいだけでなく、ただ勉強になるだけでなく。仕事への哲学や、社会へのアプローチの仕方、家族との歩み方など、多様なようでどこか通底するところのある話の数々。業務の研修や、現場での実践で得られるものとはまた違った質の学び。もっと自由でいいんだ！この枠だけにおさまる必要なんてないんだ！と気づかされることばかりで、目からウロコが落ちまくりだった。

ここまで読んでちょっと興味を持った方は、ぜひぜひ合宿参加者の連載を読んでみることをオススメする。畑違いと思っていた実践に、意外とあなたの人生を揺さぶるようなヒントが隠されているかも。

最後に築２５０年という宿の前で記念撮影をして無事解散。「また１０年後に～」なんて話もあったが、１０年とはいわず、オリンピックペースくらいでやってもいいのでは？と個人的には思う。まあこればかりは編集部の長男・次男さんが考えてくださることを期待しつつ…。

②マガジン創刊 10 周年記念　執筆者・読者の集いに寄せて（杉江　太朗）

短信でも触れたが、年末にマキノに泊まった。おそらく、マキノと聞いて、なぜカタカナなのかと思った方もいるかもしれないが、正式名称が滋賀県高島市マキノ町なのである。そして、これは、1 人で行ったわけではない。家族と行ったわけでもない。なんと、対人援助学マガジンの執筆者の方々と泊まったのである。

始めて出会う方もいた。名前だけは知っている方もいた。お互いの家族同士が知り合いだが、私たちはお互いに知らないという方もいた。大学院のときにお世話になった先生もいた。大学院の先輩もいた。研修でお世話になった方もいた。それぞれの方に共通するのは、対人援助学を生業とし、対人援助学マガジンに連載をしているということである。そんなメンバーで集まるという機会に巡り合えたことに感謝である。

当日は、集合時間に集まり、とりあえず、お茶とお菓子を頂きながら語る。そして、博物館を兼ねる宿泊場所を見学する。その後ご飯を食べ、近くの入浴施設に行き、そしてまた語る。みんなで川の字になって寝て、そして翌日、朝ご飯を食べて、解散。

そこで語られる話は、型にはまった話ではなく、それぞれの領域で、対人援助に誠実に向き合ったからこそ語られるものであった。その語りを聞きながら、心の中では、自分の過去を振り返った。そして、自分の心の中にある、信念のようなものを再認識した。

対人援助において、人との繋がりは必要である。繋がるためには、余地（余白部分）がある方が良い。余地がない状態で繋がっても脆さが残るだけである。そうした対人援助の余地は、目には見えないものであるが、まずは、自分以外の人に興味を持つことから生まれるのではないかと思う。そうした意味で、参加者の方の話は本当に面白かった。

岡崎さんいわく、私は従弟らしい。そうか。従弟か。ジェノグラムが書けそうだ。またこのような余地を感じられる時間が欲しいものである。しかし、余地だけではいけないことも重々承知している。余地（余白）だけだと白紙である。それではいけない。日常の援助に信念を持ち、連続性を確保しながら携わっていこう。余地を効果的に活かすために。

③合宿に参加して（坂口伊都）

12 月 28 日から一泊というスケジュールで対人援助学マガジン 10 周年創刊記念の合宿が開催され、9 名が参加しました。この年の瀬に滋賀にある、茅葺屋根の博物館でご飯をいただき、昭和にタイムスリップしたような感覚になる母屋にお泊りでした。母屋には炬燵が 2 つ並び、田舎のおばあちゃんの家という佇まい。それでなくても緩い集まりなのに、ますますのほほん気分になって、皆で正月休みにおばあちゃんの家に帰省した気分を堪能しました。年末にお正月を済ませてしまったような感覚です。

その中で面白かったのは、やはり「生き方論」でした。いろいろな立場、年齢の人が集まって、どの人も現状維持を望む人が見当たらず、常にどう生きていこうか向き合おうとしている人ばかり。酸いも甘いも噛み分けている諸先輩方の背中を見て、自ら変革しようと後輩が続く。先輩が自分たちに恩を返すな、恩恵は後輩に渡していけという姿勢が前に前に進める力になっているように感じます。着目点の違いに驚き、そんな発想もあるのかと納得し、私も何かを見つけたいと刺激され、一人ではできないことだなと改めて感じました。

次の合宿は、いつかなぁ。編集者の皆さま、いつもありがとうございます。次回があること期待していています。その時はもちろん、お手伝いしますよ。

④「対人援助学マガジン　執筆者と読者の集い」記録係からの報告　（大谷多加志）

昨年末に開催された「対人援助学マガジン執筆者と読者の集い」。とても面白く、刺激的な時間であったと言うほかないのですが、そのエッセンスを少しでもお伝えできればと、一応の記録係を承っていた立場からまとめてみることにしました。ただ、話を聞くのに夢中で記録は途切れまくっていましたので、断片的な記録と記憶を、記録者なりの理解と解釈でつなぎ合わせたものであることをご承知おきください。

マガジンが成り立つ背景

今回の企画はマガジン 40 号発行を機に企画されました。年間 4 号の発行ですので、10 年間継続されたことになります。Web 発行のフリーマガジンが 10 年間継続された背景が、執筆者の集いでも話題に挙がりました。

長年続いた雑誌の廃刊も珍しくない時代です。情報が売れなくなったという現在、マガジンはどのような仕組みで継続してきたのでしょうか。ご存知ない方がおられるかもしれないので一応説明しますと、現在の執筆者は 50 名超ですが、執筆者に対する「原稿料」は発生していません。つまり、執筆者は無償で原稿を書いています。執筆するためには対人援助学会の会員になる必要がありますので、何ならお金を払いながら連載を続けているのです。

また、マガジンの掲載は対人援助学会の Web ページ内ですので、発行にかかる費用は基本的にはゼロです（厳密にはサーバーの維持管理費などはあるはずですが、新規発行に伴う支出は極小です）。Web マガジンであるがゆえに、ページ数の増減にも特に支障がありません。過去に 40 ページ超の原稿が連載の 1 回分として掲載されたことがありましたが、編集部として驚きはしても問題にはなりません。このことには、社会インフラとしてインターネット環境が整備されたことの貢献が大きいと言えます。

通常、雑誌は販売売上や広告料に依存して発行が続けられています。そのため、売り上げが落ちたり、広告が取り下げられたりすると、発行の継続が難しくなり、どれだけ内容が優れていたとしても、廃刊の憂き目に遭うことになります。

対人援助学マガジンは、学会員以外でも閲覧フリーですので、販売売上はありません。また広告もありません。先に述べたように、原稿料さえありません。つまり、「お金」から解放された雑誌です。お金から解放されているがゆえに、売上や広告主の意向などの外的要因によって、発行や連載の継続が左右されることがないのです。すべて、執筆者の意思ひとつです。このことは、学会の定期刊行物としての対人援助学マガジンに大きな特色を生んでいます。

通常、さまざまな学会誌にはそれぞれの扱う学問領域があり、掲載される原稿や論文などは学会関係者の審査を経て掲載されます。つまり、執筆者側が掲載されたいと願うのであれば、その学会の“閉じた”流儀に執筆者が合わせていく必要があります。そのように

して学会の「権威」を醸成しているところもありますが、一方で多様性や発展性を犠牲にしているとも言えます。単純に、あまり面白くありません。執筆者が面白いと思っていることを書く。マガジンのもっとも根本的な魅力です。

このように書いてみると、読者の方にはひとつ疑問が生じるかもしれません。確かにマガジンはお金や権威から解放されていますが、逆に言えば執筆者の方にとっては金銭的なメリットもなければ、執筆していることが箔づけになったりもしません。
なぜ書くのでしょうか？なぜ書き続けるのでしょうか？

マガジンに執筆する意味

編集員として関わってきた中で感じていますが、マガジンに執筆する動機は執筆者によってさまざまです。最初から書く回数や期間を設定して連載する方もおられますし、期限を定めず日々の活動を連載にし続ける方も、活動の変化とともに連載のテーマを変えながら執筆を続ける方もおられます。
今回の「執筆者と読者の集い」の参加者のうち、4 名は創刊号から執筆しており、途中からの執筆は 5 名です。私自身は第 10 号から執筆＋編集を始めましたので、後者にあたります。後者について、多くの場合ひとつの共通点があります。もともと「読者」であったということです。逆説的に言えば、今マガジンを読んでくださっている皆さんは、執筆者の有力な候補と言えるかもしれません。

ある執筆者は、執筆するのは「余地」のためであると言います。対人援助の仕事は、「人」と関わる仕事であるがゆえ、状況や事情によっては援助者の都合はさておいて動かざるを得ない場面もあります。法律や制度によって動き方が規定されることもあります。援助職のバーンアウトはずっと以前から言われていることではありますが、“そんなこと、どこの職域でも同じだ”という理屈により、まともに扱われているようには見えません。任用されたばかりの新人や他の職域から異動でやってきた人が、専門職として現場に配属されているという現状もあります。そのような、ある種の閉塞感もある状況の中、仕事を続けていくために必要なものが「余地」です。そこには、いくつかの要素があるように思いました。援助者が今体験していることを、言語化し整理する「昇華」や「外在化」という側面。今だからこそ言える言葉で残しておく「記録」という側面。書くために資料を整えたり、調べものをすることを通しての「学び」の側面。援助職の日常で言えば、それぞれ「カンファレンス」、「ケース記録」、「研修」にあたるかもしれません。援助職として仕事を続けていく上で、自分を擦り減らす一方にならないために必要な要素が、執筆活動の中に含まれているのかもしれません。

執筆者と読者

ブログであれば閲覧者数、SNS であればフォロワー数や「いいね！」の数から、当該の記事がどのくらいの人に読まれているのかがわかります。またコメント機能があれば、

読者からの感想や意見も容易に集められます。ただ、対人援助学マガジンにはその機能がありません。つまり、執筆者は自分が書いたものを誰が読んでいるのか、どのように感じているのかを知ることがほとんどありません。たまに、思いがけない機会に、初対面の方から『マガジン、読んでます！』と言われたりすることがありますが、基本的には稀なことです。

「いいね！」など、反響がわかりやすく可視化されることには利点もありますが、一方でそれが執筆者に対して有形無形の影響を与えることもあり得ます。もっとたくさんの反響があることを書こうとか、感想や意見も取り入れて「受け入れられる（ウケる）」ことを書こうとか思ってしまうのは、致し方ないことのように思います。しかし、団編集長は、これを「弱い」と言い切ります。その時々のブームに乗ってもてはやされた（ウケた）ものが、ある日を境に、潮が引いたように見向きもされなくなることなど、世の中にはあふれています。そのような流れに応じて自分の行いを変えることは、『誰かの人生のネタになること』であり、それは弱さであり貧しさであると。

自分が書きたいものを書き続けること。それがマガジンという場を通して、誰かに届き、誰かに影響を与えています。それは執筆者には認識されません。しかし、それでよいのです。マガジンが持つ機能の一つが、アーカイブです。10 年前の原稿が、今もバックナンバーとして閲覧できます。一つの原稿が、執筆された時点で持っていた意味と、今現在持つ意味とは、おそらく異なっているでしょう。そんな時間を超えた「意味」こそが重要であり、短期的な成果である「いいね！」や、即時的なリアクションに左右されていては、そのような「時代の資料」になることはできないでしょう。10 年前のファッション誌を取っておいたり、読み返してみようと思わないことと同様です。

誤解のないようにと思いますが、リアクションが不要だと言っているのではありません。執筆者に出会われたら、ぜひ「読者です」と言ってあげて下さい。一人にでも届いているとわかれば、結構な励みになります。

マガジンの新展開

最後に、10 年を超えてこれからマガジンはどのように展開していくのか。話題にのぼったことは、まだまだアイデアの断片や芽とでもいうようなものですが、簡単にまとめてみようと思います。

この 10 年間で、社会も大きく変わりました。広告料はネット広告がテレビを上回りましたし、インターネットの閲覧も PC からスマホが主流になってきています。

スマホの利用においては、さまざまなサイトやアプリが、人々の「可処分時間」を奪い合う状況になってきていると言われています。そんな中で一つの案として提示したのが、マガジンの音声メディア化です。

スマホ普及により押され気味のテレビ業界ですが、一方のラジオ業界は規模こそ小さいものの、依然として一定の視聴者を維持しています。この違いは、ラジオが音声メディアで

あることから生じています。つまり、耳だけ傾けていれば利用できる（ながら利用と言ったりします）ため、スマホと可処分時間を奪い合うことがないのです。相変わらずラジオは、車の運転中に聞いたり、料理や勉強をしながら聞いたりと、「ながら利用」が継続されています。マガジンについても、音声化することで「ながら利用」を可能にしてみたら、どうなるでしょうか。新しい展開があるかもしれません。
また、これまで掲載してきた PDF ファイルの原稿は、視覚障害者の方が使う音声読み上げソフトに必ずしも対応していません。音声化することで、アクセシビリティをより高めることにもつながるかもしれません。「Voice of Magazine」構想（中村先生の命名です）、できれば早期に、利用しやすい形で実現できればと考えています。
　他にも、執筆者×執筆者の企画（これは、往復書簡型連載などで一部試みていますが）、執筆者×読者という展開、執筆者別の連載ベスト 5 など、さまざまなアイデアが活発に交わされました。いつの日か、皆さんにお披露目されるかもしれません。

　以上、多分に個人的な理解や見解も含んでしまっていますが、「記録係から見た執筆者と読者の集い」の一部を報告できたと思います。いつの日か、再び集いの機会があった時は、ぜひ参加を検討してみてください。

⑤　「対人援助学マガジン 10 周年執筆者の会に参加して」（河岸由里子）

年の瀬、大掃除も料理もうっちゃって、のんびり滋賀県北部の高島市に出かけた。前日に北海道から京都入り。翌日京都から湖西線にのって 1 時間ちょっと。マキノという無人駅で降りる。初めて来た土地。バス停に行ってみるが誰もいないしバスもいない。駅に戻って、観光案内所でお茶を飲んでいたおばちゃんに声を掛け、バスの時刻表を貰い、説明を受ける。白谷という場所まで行けばすぐわかるとのこと。ならばとバスに乗って白谷を目指す。途中メタセコイア並木を通り、一本道をひたすら進む。スキー場を目指してと言われたが、こんなところにスキー場があるのか？冬の今、山々に雪は見当たらない。（今年が珍しいということを後で知る。）

バスに揺れること 15 分。目指すバス停に。見ると「茅葺の里」との小さな看板が一つ。但し矢印の類はついていないので、勘で進む。緩やかな上り坂を登っていくと、二股に道が分かれてしまった。さてどっちに行ったものか？マップで確認しようと道端でスマホをいじっていると、下からジープタイプの車がきて、おじさんが声を掛けてくれた。「茅葺の里に行くんでしょう?この先ですから。」と二股の片方の道を上って行った。その後を追って上っていくとすぐに茅葺の大きな民家が見えてきた。

梅と鶯が似合いそうな古民家。先ほどのおじさんが、古民家の隣の家に案内し「こっちで休んでいてください。」という。その家は昭和の香りがプンプンする二階建ての家。

広い土間の玄関から上がると、底冷えがする。昔の家はこんなものだ。家に上がって、さてどこにいればよいのかと居間の様な所にいたが寒いので、家の中を探検。直ぐ奥の襖を開けてみた。すると炬燵が二つと灯油ヒーターが一つ。勝手にスイッチを入れさせてもらい、炬燵に入って待っていると車の音や人の声が聞こえる。誰か到着したようだと玄関の方に出ていくと、千葉さんたちの姿が。家の中から手を振る。まるで自分の家に招いているかのように。ちなみに玄関開けっ放し。

ここからは、到着したみんなで炬燵二つに入り込み、お菓子をつまみながら参加者の紹介やら対人援助マガジン関連のお話やらあれこれしゃべる。家族親族の集まりのような気安さで、対マガ団家のおしゃべりは尽きない。茅葺の古民家に泊まるのかと思っていたが、泊まるのはこの昭和な家で、食事だけ古民家との事。有形文化財・築 250 年もの家でご飯を食べること自体経験のないことだ。夕飯の時刻になってみんなで移動。ここで遅れて到着された中村先生も合流。そしてまたしゃべる、食べる、飲む、笑う。何と健康的なことか！話題は色々。職場の話、家族の話、社会の話、新しい企画の

話等々。夕飯後若い皆さんは近くの温泉へ。高齢者の二人は炬燵で団先生のスマートウォッチの操作に頭を悩ませる。みんなが帰ってきてからは炬燵に収まり、おしゃべり再開。タイムスリップしたような時間が過ぎていく。

　故郷に里帰りのような一泊二日の旅。1 年の疲れも取れた。この執筆者の会を計画してくださった千葉さん、大谷さん、そして参加した皆さん、楽しく、ほっこりする時間をありがとう。

⑥団士郎

年末に地元琵琶湖の北、メタセコイヤ並木道を更に奥に入り込んだ、文化財のような古民家での合宿。私好みの馴染みのある時間な気もするが、いやいや、なかなかこういうまとまった時間が取れることないなぁと思う時間でもあった。

暖かくした古い日本家屋のホームこたつに座って、何をするわけでもなく集まった９人でだべっている。そこに介入してくる、「説明が下手で・・・」というのが枕詞のオーナーの「白谷荘」の解説したがり具合がアクセント。ここは由緒正しい場らしく、皇室の誰ぞがやってきている写真もあるが、お忍び訪問なのでＳＮＳとかでの拡散はご遠慮下さいとか。なんか分からないけど、いろいろ面白いフックがあちこちにある。

すぐ近所に温泉施設があって、みんな出かけたが、私は面倒なのと寒そうなので、こたつでだらだらだべっていた。こういう自由さはまことに結構なモノで、観光地でもないのでどこかを見に行かねばならないノルマ感もない。

向かいの土蔵には古くからの教科書が保存されていたようで、その資料を整理に何とか大学が入っているとか。確かに私が子どもの頃、あるいはその前の教科書が大量に保存。昨年、東北で、津波被災で水没した個人の土蔵に保管されてきた資料、古文書をレスキューしている活動を見たが、こういう動きがあちこちにあるのだろう。ぶらつくとこんな出来事にいろいろ遭遇するのが面白いところだ。

何の話をしていたのかは、例によってまったく記憶にございません。ただただ楽しく時を過ごし、翌朝は朝食後、一息ついて現地拡散。2020 年に第二回目があるかどうかは分かりませんが、あるとしたらやはりこの年末最終週末でしょうか？

猫の多頭飼育に対する支援の在り方について

私は不思議だ。不思議に思うことがある。不思議だと思いすぎて、不思議の定義がわからなくなった。調べてみると、【「不思議」とは、そうであることの原因がよくわからずなぜだろうと考えさせられること。】だそうだ。うん、その通りだ。今回はですます調では書けないくらい自分の中で、もやもやしている。でも、マガジンの締め切りは明日だし、世の中が不思議な流れになってしまっている要因を考えてみたい。理路整然となっていない部分はご容赦願いたい。何を不思議に思っているのか、それは今回の見出しに書いている通り、「猫の多頭飼育に対する支援の在り方について」だ。このマガジンでも何度か書いてきているが、私はノラ猫も飼い猫の多頭飼育も基本は保護ではなく、ＴＮＲに重点を置くべきだと考えている。それは頭数が多すぎるからだ。

一昨年の名古屋で多頭飼育崩壊ケースが動物虐待で起訴され、猫は保健所に保護された。それに対し大阪の松井府知事から名古屋の河村市長に「猫に寛大な処置を」との旨のメールをしたとして、河村市長が対象の猫を殺処分しない旨を発表し、多くの賞賛を集めた。だがその背景では、保健所の収容頭数がオーバー、告発されるのを恐れたり、殺されないならと安心したりした多頭飼育者の飼育放棄が相次ぎ、名古屋市の猫の殺処分数が**倍増**した。という一件が記憶に新しい。

だが未だに多頭飼育となると世間では「保護＝レスキュー」ばかり目立っている。SNS やニュースで流れてくるのは、劣悪な飼育環境の写真とレスキューの様子ばかりだ。ボランティアさん単独でかかわっている場合、保護しか手段がないことがあるのは理解できる。だが、ひどいものでは「官民協働で多頭飼育崩壊現場から猫をボランティア団体がレスキューしました」というものまである。保健所（有償の仕事）と、福祉局や環境局（有償の仕事）と、福祉職（有償の仕事）と猫ボランティア（無償のボランティア）が協働して、ボランティアに全頭押し付けるの？？？？と顎が外れるかと思うような記事もあった。保健所、福祉局、

福祉職、報道関係者の方にとっては、ボランティアに保護してもらって一件落着の「終わり」。「保護してもらう段取りつけるの大変だったー」かもしれないが、猫を引き取ったボランティアにとって保護は「始まり」である。何も終わってはいない。これを官民協働の画期的な取り組みというので私は不思議でしょうがない。さらに恐ろしいのはそういった記事のシェアや賞賛コメントがすごいこと。まって、世の中その方向で進んでいくの？と一人で冷や汗をかいた。

ノラ猫問題で社会が痛感した「蛇口を閉める」必要性

いったん落ち着いて、考えてみてもらいたい。未だに猫の年間殺処分数が３万頭を超える日本において、この「殺処分」という問題に「保護」では太刀打ちできないと日本社会は通関しているはずである。いくら保健所に収容される猫をボランティアが保護しても、その発生源の蛇口を閉めない限り永遠に問題はなくならないどころか、保護譲渡で対応できるペースを大きく上回ってノラ猫は繁殖するし、無責任な飼い主は捨てるので、問題は悪化していく。だから蛇口を閉める対策としてのＴＮＲ活動が広がってきていると理解している。TNR は不妊手術したのちに捕獲場所に戻すので、保護に比べてボランティアの負担が少ないため、沢山の現場に対応できる。そうすることによって、生まれる子猫の数が激減するので、保護対象の猫の頭数が減り、保健所の引取り数が減り、殺処分も減っていく。猫と殺処分の頭数が多すぎる現状においては、予防活動に重点を置き、保護すべきかどうか、命を天秤にかけざるを得ない状態がある。という共通理解がある程度猫界隈には広がっていると感じていた。

だから、多頭飼育問題に関しても、猫の保護ではなく飼い主宅にＴＮＲして、飼い主の生活環境を改善していく方向に流れていくものだと思っていた。だが、今の世の中の空気は、政策まで多頭飼育は「保護」の方向に流れていきそうな気配を感じて、私は危惧している。

そこで、保護が推し進められる要因を考えてみた。

要因① 劣悪なケースがほとんどだと思っている

ショッキングであればあるほど、SNS のシェアは多くなり、メディアでも取り上げられるようになる。その弊害として、多頭飼育崩壊ケースはどれも目を覆いたくなるほど劣悪で、飼い主はどうしようもなく罰しなければいけない存在だという印象がはびこっている。
では、私が関わっている多頭飼育ケースの様子を一部見てもらいたい。

① 生活保護、猫 30 匹。

② 生活保護、猫 77 匹。

③ 自己破産手続き中、猫 16 匹。

どう思っただろうか。この写真はどれも初回訪問時に撮影したものなので、まだ支援が入る前の状態である。家はボロボロだし、猫は沢山いる。でも、ニュースや SNS で目にした多頭飼育崩壊写真にくらべるとインパクトが少ないように感じるのではないだろうか。とはいえ、環境は悪い。③のお家は頭数こそ少ないがお世話が行き届かず、畳は猫おしっこでヒタヒタになり腐っていた。窓も割れ、かなりの悪臭であった。

写真左から、室内なのに眼球が腐っている子、ガリガリの子、ミルクを飲む力が無くて弱りきっている子猫、自分自身もガリガリなのに 5 匹の子猫にお乳を飲ます母猫。初めて訪問した時は、保護しない方針が大きくゆらいだ。保護するキャパのない自分の不甲斐なさ

に泣けた。でも、猫のレスキューではなく、猫を含めた飼い主さんの家族の支援をする自分の方針を信じて、全頭の不妊手術と室内の清掃の手伝いをした。全頭の不妊手術が終わってから１年半経った③のお家の様子がこちらだ。

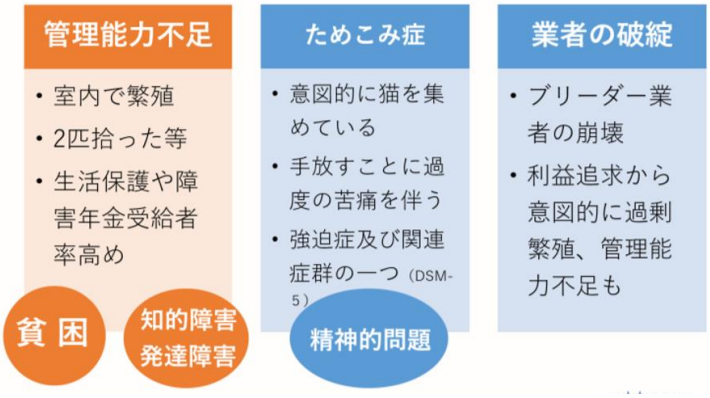
このケースで「保護」をする決断をしていたら、そこから新しい多頭飼育ケースの相談はストップせざるを得なかっただろう。保護しなかったからこそ、このケースの後も新たに３件の多頭飼育ケースに関わることができた。しかも飼い主さんの頑張りが実り、私が保護するよりも、結果的に広くて快適なシェルターを猫たちは手に入れたと感じる。今ではみんなまるまる太っていて可愛い。

言いたかったことをおさらいすると、「**思っているより劣悪じゃないケースの方が多いし、飼い主さんに頑張れる力がある場合も多い。ということを忘れないでほしい。**」だ。

要因② SNS 映えのせいで多頭飼育崩壊に至る背景の分類がごちゃごちゃ

下記は、人もねこも一緒に支援プロジェクトで使用している多頭飼育の背景分類である。

●多頭飼育ケースの背景３分類



多頭飼育の大半を占めるのが、一番左の「管理能力不足」である。意図的に猫を集めているわけではなく、２匹くらいから室内で繁殖し、意図せず増えてしまっている。貧困との関係が深く、軽度の知的や発達障害を飼い主さんが抱えていることも多い。

件数としては少ないが非常に劣悪な環境になっていることが多いため**一番 SNS で目立つ**

のは図中央の「ためこみ症」のケースだ。意図的に猫を集めていて、一時的でも手放すことに過度の苦痛を伴う。精神疾患との関連が強く、猫ボランティアが陥る可能性もある。「ためこみ症（Hoarding Disorder）」というのは、「DSM-5　精神疾患の診断・統計マニュアル」の中に記載される「脅迫症及び関連症群」の章に出てくる診断名である。ここには“猫”という記載はないが、物を過剰に集め、管理しきれず、明らかに生活環境を圧迫しているが手放すことができない症状を指す。これをもじってアニマルホーダーと呼ばれたりもしているが、猫を沢山所有している人すべてが「ためこみ症（Hoarding Disorder）」ではない。**「集めている」「手放せない（不妊手術の一時的な切り離しも困難）」「管理ができていない」**の３つの特徴が含まれているかどうかが分かれ目である。ためこみ症以外の精神疾患を併発していることも多い。ためこみ症の場合は、飼い主主体で改善するのは難しく、保護せざる負えない可能性が最も高い。警察や行政、精神科医にもかかわってもらい強制的にでも介入する必要が出てくるだろう。

ブリーダーやペットショップなど業者の破綻も多頭飼育崩壊としてニュースになることがあるが、これは経営能力不足であり、質が異なる。

ボランティアも保健所もキャパは限られている。その空きがなければ明日の命が保証されない子のために使われてほしい。保護せざるをえないケースと保護しなくてもなんとかなるケースの見極めが重要だ。

要因③ 多頭飼育崩壊はレアケースだと思っている？

猫が室内で大量に増えて劣悪な環境になってしまうケースはレアだと思っているのかもしれない。件数が少ないから、保護でも対応できる。そう感じているのかもしれない。

ではここで、昨年某市で、動物愛護担当課から生活保護担当のケースワーカーさんに対して実施されたアンケート調査の結果を紹介したい。某市では、生活保護受給世帯数は３万世帯弱、うち 2.8%にあたる 800 強世帯が猫を飼育しているとケースワーカーさんが認識している（実際はもっといる可能性大）。

Q1	対象CW数	357
	アンケートに回答したCW数	328
	回答率	91.9%
Q2	総ケース数	29,481
	平均ケース数	90.4
Q3	猫を飼育するケース数	826
	全ケースに占める猫飼育ケースの割合	2.8%
Q4	避妊去勢を確認する	23
	避妊去勢を確認しない	288
	避妊去勢を確認の有無不明	17
	避妊去勢を確認する職員の割合	7.4%
Q5	猫を飼育するケース数	826
	飼育頭数分布（1頭）	534
	（2～4頭）	219
	（5～9頭）	44
	（10頭以上）	12
	（不明）	17

この結果から最小で見積もっても、不妊手術費の捻出が難しい生活保護世帯に飼育されている猫が 1,312 匹いることになる。同市で私が関わっているケースも 10 頭以上の括りに入るが当初 77 匹いた。昨年別のボランティア団体さんが同市の別多頭飼育ケースに関わり、そこには 100 匹弱居たそうだ。そこから考えて 10 頭以上と書いてある 12 世帯がそれぞれ 100 頭近くいたとしたら、それだけで 1,200 頭の保護対象猫が居ることになる。そして、現在進行形で室内で増え続けてしまっている家も少なくないだろう。また、これはたった１

つの市の生活保護受給世帯のみに限定したアンケート調査である。同市内で生活保護は受給していなくとも多頭飼育に陥ってしまっているケースだって多々あるはずだ。多頭飼育の崩壊予備軍を入れたら、ぞっとするくらいのケース数だ。この頭数に「保護」という後手後手の対応では到底太刀打ちできない。

要因④ 人間関係がめんどくさい。

そもそも論になるが、猫ボランティアは対人援助職者ではない。ごちゃごちゃと支援について書いたが、「飼い主」「担当福祉の人」「役所」などとの人間関係が面倒くさいので、猫だけ保護してそれらと縁を切りたい。とサバサバと考えるボランティアがいても当然だ。多頭飼育ケースの介入の主体が猫ボランティアに押し付けてしまうのは無理がある。多頭飼育はあくまで飼い主が抱える複数の問題要因によって生み出される表出形態の一つでしかない。猫を沢山飼っている状態が問題の本質ではなく、そういう状態に陥ってしまった飼い主さん家族の様々な問題要因に福祉職主体で向き合う必要がある。

要因⑤ ボランティアに保護しか手段がないと思わせる勢力がいる。

飼い主さんに福祉の担当者がいるとしたら、猫の多頭飼育はやっかいだろう。できれば、切り離して支援しやすい対象になってもらいたい。そのため、猫ボランティアに対して、「大家から猫を手放さないなら立ち退けと言われている」と今すぐ猫をどうにかしないと猫も人も路頭に迷ってしまうかのように切羽詰まって説明してくる。かれこれ5年前から言われているのに…。人を強制的に退去させるというのは実際すごく難しいことです。あるいは「保健所に相談するしかない。」と言う。これはボランティアにとって脅しに近い言葉だ。ただ、冷静になって考えてみてほしい。保健所に相談してもすぐに引取りにはならない。腹が立ちすぎてお腹が居たくなるような劣悪なブリーダーや虐待まがいの多頭飼育者を告発した時のニュースには『これまでに保健所が３年にわたり１０回指導に行っていたが改善がみられなかった。』みたいな文面がセットになっていませんか？

要因⑥　救いだすことの美化

保護についての考え方を赤裸々に書くと、半数のボランティアさんには嫌われそうな気がするが、もう書いてしまおうと思う。猫を保護する時、いつも悩む。保護された猫は「ラッキーボーイ」なのか「拉致被害者」なのか。人にとって「保護」であっても、保護した後にQOLの高い生活環境を提供できないのであれば、それは猫にとって「拉致監禁」でしかない。交通事故や意地悪な人に虐待される危険がある外で暮らすよりは、一生ケージ暮らしだとしてもシェルターに保護された方が幸せだという人も多い。人間の子ど

もで考えると、いじめや事故、変質者に会う危険があるから学校にも公園にも行かせずに家の中で通信教育だけ受けていればいいと考える人は少ないはずだ。動物園しかり、刺激や行動の自由がほとんどない、というのもまた精神的虐待の１つである。食べ物と水のみで人は生きるものではない。それは猫も同じだと思う。

現場から直接救いだすことだけが「保護」ではなく、現場の環境の改善をして間接的に「保護」することだってできる。と思う。

『二流のカウンセラーはクライアントに「先生のおかげで治りました！」と依存させ、一流のカウンターは「自分の力で立ち直った」と自立させる』と心理学の授業で習ったことがある。善意の第三者がリセットボタンを押すように、ほとんどの猫を保護して、飼い主さんだけで面倒がみられる２頭くらいを残してあげることは対人援助なのだろうか。少しずつ死んでいく命と向き合いながら、苦労してカーペットを敷いたり、動物病院に連れて行ったりして、少しずつ自分で環境を改善しているんだ、自分で改善できるんだと実感してもらうことにも意味があるんじゃないかと思う。

救い出すことだけが保護ではない。リセットしてあげることだけが支援ではない。

多頭飼育に関する偏ったイメージを払拭しなければならない。

予防的取り組み

くどいようだが、私たちにできることは限られている。今全力をあげてすべきことは、超ヘビーな多頭飼育崩壊ケースにどう対処するかではなく、保護せざる負えない状況にまだ陥っていないけれど、このままいけば陥ってしまう可能性がある家庭（リスク・ポピュレーシ）を全力で減らしていくことだ。予防についての考え方、多頭飼育に対する予防的取り組みの構想は､第 37 号の対人援助学マガジンで詳しく書いたのでぜひ読んでみてもらいたい。私の弱みは居住地がコロコロ変わってしまうことだ。構想に書いている予防プログラムはその地域に根を張るボランティアと動物行政と福祉機関の連携があれば、すぐにでも始められる。始めるうえでも委任状や動物病院との覚書など、テンプレートは既にある。やってみたい人がいたら、メールください。テンプレート全部差し上げます。

筆者

小池英梨子

仕事：ねこから目線。～猫専門のお手伝い屋さん～

活動：NPO 法人 FLC 安心とつながりのコミュニティづくりネットワーク「人もねこも一緒に支援プロジェクト」　プロジェクト代表

活動；大学ねこ連盟 U-Cats 事務局

お問合せ：e.kosame12@gmail.com

編集後記

編集長（ダン　シロウ）

「誰も読んでないのでは？」と先日ある人に言われました。読者が何人あるかをカウントしたりしないので不明です。しかし読んで下さっている方があるのは、いろんな出来事で確認できます。

講演会やWS会場で声をかけていただきますし、連載をきっかけに新たな仕事の繋がりが生まれたと執筆者から聞くこともあります。本誌連載が単行本になったのも数冊、講演依頼が来たり、NPOが活性化したり。

アクセス何件突破とか、何部増刷とか、そういう尺度ではない広がりを目指してきました。経済高度成長期に「大きいことは良いことだ！」と言っていたような価値観を払拭できないまま、右肩上がりの経済モデルに毒された意識からの脱却を心がけてきました。

多く売れるものが良いものだ！なんてわかりやすさの持つ軽率さにはウンザリでした。だからといって、趣味のミニコミのような自己満足物を作っているつもりもありません。そもそも、そういう対比的発想自体が古くさいと思うのです。

読んで貰いたい人に、まだ今から遭遇するであろう人たちに向けて、最新のモノを整えて静かに待っている、それが対人援助学マガジンです。だからバックナンバー10年分も常備です。イノベーション（技術革新）はそのために起きたのだと考えるのが適切だと思います。

古い考え方の人を置き去りにして、新しい物好きでマーケットを作って集まろうなんて発想でもありません。そんなことをしている業界がちらつきますが、それこそ古くさい下克上。そんなことをしてきたのでもありません。

いよいよ次号から11年目に突入です。新たな書き手も、読み手も更に広く求めたいと思います。どうぞよろしくお願いします。

編集員（チバ　アキオ）

人生の編集を始めた。私の父が勤めていたのは転勤のある会社。そのため、私は秋田生まれであるが、子ども時代から学生時代まで関西で過ごし、自動的に関西で就職した。転勤が終わった父母は関西を離れ、そこで原家族は解散となった。その後、実家のある秋田に父母はいき、私は京都で過ごしてきた。京都には仕事があり、その仕事に夢中だったからである。障害をもつ友人たちと小学校、中学校で過ごし、キャンプリーダー、スイミングインストラクターで子どもたちの成長に驚き、仕事として障害者福祉の現場から始まった。上司に恵まれ、職場に恵まれ、同僚に恵まれ、スタッフに恵まれ、勉強仲間に恵まれ、ここまで来た。仕事しながら、院まで行かせてもらった。

人生80年、いや100年といわれる今。私はその真ん中あたり、様々広がった人生を一度区切ってみようと思った。段落である。まだまだ仕事がしたい。これまでの経験をベースに様々な仕事にチャレンジしてみたい。そう思った。そういう自分にも驚いた。

ルーツの秋田にも恩返しをしよう！これが今の私の至った一つのプラン。そして、自然と涙が出た。私しかできないことで、これまで全くしていなかったことが秋田にある。東京への一極集中、人口減少に対して、自分ができることをする。新たな挑戦である。この挑戦は自動的に、マガジンに報告していくことになるだろう。

編集員（オオタニ　タカシ）

２月中旬以降、世の中は新型コロナウィルスに翻弄され、３月に入ってからは、公立学校の一斉休校、イベントや集会の中止・自粛が相次ぎ、ウィルスの感染拡大が抑え込める見通しも持てない中、混乱の度合いは日々増していくばかりのように感じます。

今回の新型ウィルスは、まだ医学的な知見も乏しければ、感染拡大の状況についても確かな情報が少なく、世の中に不安が広がるのは無理のないことだと思います。世の中に広がる不安が、さらに人の心理や行動を抑制し、人々が活動自粛に向かうのも自明の

ことです。過剰にはならず、適切に心配し、必要な対応をとり、日々の生活を紡いでいければと思います。

このような状況の中、対人援助学マガジン 40 号を、いつも通りお届けできることをとてもうれしく思います。執筆者の皆さんから届く原稿を無事の便りのように感じ、また書かれている内容が時勢には流されない強さを持っていることにも、とても励まされました。コロナの騒動が終わっても、私たちの生活は続くのです。不安とも適切に向き合いながら、これから先も 1 日 1 日を積み重ねていきたいと思います。

■ご意見・ご感想■

マガジンに対するご意見ご感想は

danufufu@osk.3web.ne.jp

マガジン編集部

604-0933 京都市中京区山本町４３８

ランブラス二条御幸町４０２　仕事場 D・A・N

対人援助学マガジン

通巻40号

第10巻　第4号

２０２０年０３月１５日発行

http://humanservices.jp/

第41号は2020年06月15日
発刊の予定です。
原稿締切2020年05月25日！

執筆者募集

10 年目を迎えたマガジン。新たな書き手を求めています。新たなジャンルからの、書き手の登場に期待します。

自身の生活スケジュールに本誌「連載」を持ち、継続的に、自分の専門分野の今の記録を発信したいという方からのエントリーを待っています。

連載誌です。必要な回数を、書いていただけるよう設定します。ご希望の方、編集長まで執筆企画をお知らせ下さい。

執筆資格は学会員であること。非会員で書いていただく事になった方には、対人援助学会への入会をお願いします。

対人援助学会事務局

540-0021
大阪市中央区大手通2-4-1
リファレンス内
TEL&fAX学会専用　06-6910-0103

表紙の言葉

ちょっと気持ちの悪い表紙。「老人と海」と言えば、ヘミングウェイだった。大海原に小舟でたった一人、カジキとの激闘の末、勝利はするが、魚体は血のにおいに誘われたサメに食いちぎられて、成果は持ち帰れない話だったと思うが、読んだのは五〇年近くも前だろう。ひょっとしたら、読んでいないかも。映画を観たのだったか？誰が主演？

ここでは最近の老人である。ジム老人が、普段のプールから海に来た設定だ。私はジムで見かける筋肉老人がグロテスクで気持ち悪く、利用するのを止めた。やたら裸になりたがり、我が物顔でジムの若いスタッフに横柄な態度を取る年寄りが男女を問わず大嫌いなので、年間会費だけ払って一回で行かなくなった。

最近運動不足かもしれない。これをきっかけに、再チャレンジしてみるかなぁと思っていたら、新型コロナ騒ぎ。年寄りは家で大人しくしていろと言うことか。

（２０２０／０３／１５）